中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用分析
―作文コーパスをデータとして―

熊本大学大学院社会文化科学研究科

2017 年度　博士学位論文

人間・社会科学専攻

フィールドリサーチ領域

155－G9103

王　辰寧

目次

第１章　序論 **1**
1.1　問題提起 1
1.2　本研究の目的と方法 2
1.3　本論文の構成 3

第２章　先行研究のまとめと本研究の立場 **5**
2.1　日本語のヴォイスに関する先行研究 5
2.1.1　ヴォイスとは 5
2.1.2　ヴォイスの分類 7
2.2　日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究 10
2.2.1　ヴォイスの習得・誤用に関する先行研究 10
2.2.1.1　ヴォイスの習得に関する先行研究 10
2.2.1.2　ヴォイスの誤用に関する先行研究 11
2.2.2　習得・誤用研究の方法およびデータ 12
2.3　本研究の立場と課題 13

第３章　中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査 **15**
3.1　調査方法 15
3.1.1　使用したコーパス 15
3.1.2　調査手順 20
3.1.2.1　「誤用」の範囲と分類 20
3.1.2.2　誤用例の抽出と整理 21
3.2　調査結果 23

第４章　受身文における誤用の分析 **25**
4.1　受身文とその誤用 25
4.1.1　受身文に関する先行研究 25
4.1.1.1　受身文の意味分類 25
4.1.1.2　受身文における格の交替 27
4.1.2　受身文の誤用に関する先行研究 28
4.1.2.1　受身文における「（ラ）レル」の誤用 28
4.1.2.2　受身文における格助詞の誤用 34
4.1.2.3　先行研究で残された課題 36
4.1.3　本研究における受身文の扱い 36
4.1.3.1　本研究における受身文の意味分類 36
4.1.3.2　本研究で扱う受身文の格 38
4.2　述部の誤用 38
4.2.1　過剰 41
4.2.1.1　正用が他動詞文の場合 42

4.2.1.2　正用が自動詞文の場合 47
4.2.2　欠如 52
4.2.2.1　誤用が「他動詞文」の場合 53
4.2.2.2　誤用が「自動詞文」の場合 62
4.2.3　混同 62
4.2.4　その他 65
4.2.5　受身文における「述部の誤用」のまとめ 67
4.3　格助詞の誤用 69
4.3.1　「ヲ→Y」型誤用 71
4.3.2　「ニ→Y」型誤用 72
4.3.3　受身文における「格助詞の誤用」のまとめ 74
4.4　格助詞の誤用＋述部の誤用 75
4.4.1　「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用 75
4.4.2　「ニ→Y」型誤用＋述部の誤用 77
4.4.3　受身文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」のまとめ 78
4.5　受身文における誤用の分析のまとめ 79

第５章　使役文における誤用の分析 83

5.1　使役文とその誤用 83
5.1.1　使役文に関する先行研究 83
5.1.1.1　使役文の意味分類 83
5.1.1.2　使役文における格の交替 85
5.1.2　使役文の誤用に関する先行研究 86
5.1.2.1　使役文における「(サ) セル」の誤用 87
5.1.2.2　使役文における格助詞の誤用 92
5.1.2.3　先行研究で残された課題 93
5.1.3　本研究における使役文の扱い 94
5.1.3.1　本研究における使役文の意味分類 94
5.1.3.2　本研究で扱う使役文の格 95
5.2　述部の誤用 96
5.2.1　欠如 97
5.2.1.1　「因果関係」の誤用 1：漢語サ変動詞の誤用 98
5.2.1.2　「因果関係」の誤用 2：再帰性を表す使役文の誤用 101
5.2.1.3　その他の誤用 103
5.2.2　過剰 104
5.2.2.1　「因果関係」の誤用 1：事態把握に応じた構文選択の誤用 104
5.2.2.2　「因果関係」の誤用 2：心理系の動詞の誤用 106
5.2.2.3　「因果関係」の誤用 3：再帰性を表す使役文の誤用 108
5.2.2.4　その他の誤用 108
5.2.3　混同 109
5.2.4　使役文における「述部の誤用」のまとめ 113
5.3　格助詞の誤用 116
5.3.1　「ヲ→Y」型誤用 118
5.3.2　「ニ→Y」型誤用 119

5.3.3　使役文における「格助詞の誤用」のまとめ..... 120
5.4　格助詞の誤用＋述部の誤用..... 121
5.4.1　「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用..... 121
5.4.2　「ニ→Y」型誤用＋述部の誤用..... 122
5.4.3　使役文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」のまとめ..... 122
5.5　使役文における誤用の分析のまとめ..... 124

第６章　可能構文における誤用の分析..... 127

6.1　可能構文とその誤用..... 127
6.1.1　可能構文に関する先行研究..... 127
6.1.1.1　「可能構文」を構成する形式..... 127
6.1.1.2　可能構文の意味分類..... 128
6.1.1.3　可能構文における格の交替..... 129
6.1.2　可能構文の誤用に関する先行研究..... 130
6.1.2.1　可能構文における可能形式の誤用..... 130
6.1.2.2　可能構文における格助詞の誤用..... 134
6.1.2.3　先行研究で残された課題..... 134
6.1.3　本研究における可能構文の扱い..... 135
6.1.3.1　本研究で扱う可能構文を構成する形式..... 135
6.1.3.2　本研究における可能構文の意味分類..... 136
6.1.3.3　本研究で扱う可能構文の格..... 137
6.2　述部の誤用..... 137
6.2.1　過剰..... 139
6.2.1.1　可能構文の成立条件を満たしていない場合..... 140
6.2.1.2　可能構文の成立条件を満たしている場合..... 142
6.2.1.3　成立条件に関わらず見られる誤用..... 143
6.2.2　欠如..... 145
6.2.2.1　母語の負の転移による誤用..... 146
6.2.2.2　認識のモダリティに関わる誤用..... 152
6.2.2.3　特定の文法表現との組み合わせにおける誤用..... 153
6.2.2.4　その他の誤用..... 154
6.2.3　混同..... 154
6.2.3.1　ヴォイスの間の混同..... 155
6.2.3.2　可能形式間の混同..... 157
6.2.4　その他..... 159
6.2.5　可能構文における「述部の誤用」のまとめ..... 162
6.3　格助詞の誤用..... 166
6.3.1　「ヲ→Y」型誤用..... 168
6.3.2　「ニ→Y」型誤用..... 169
6.3.3　可能構文における「格助詞の誤用」のまとめ..... 170
6.4　格助詞の誤用＋述部の誤用..... 171
6.4.1　「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用..... 172
6.4.2　「ニ→Y」型誤用＋述部の誤用..... 172
6.4.3　可能構文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」のまとめ..... 173

6.5　可能構文における誤用の分析のまとめ..... 174

第７章　ヴォイス諸表現における誤用の分析..... 179

7.1　誤用の共通性と個別性..... 179
7.1.1　「述部の誤用」の共通性と個別性..... 180
7.1.1.1　誤用のパターンにおける共通性と個別性..... 180
7.1.1.2　意味から見た誤用例の分布における共通性と個別性..... 182
7.1.1.3　誤用の原因における共通性と個別性..... 182
7.1.2　「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の共通性と個別性. 185
7.1.2.1　誤用のパターンにおける共通性と個別性..... 185
7.1.2.2　誤用の原因における共通性と個別性..... 187
7.2　誤用に対する対応（日本語教育への示唆）..... 188

第８章　結論と今後の課題..... 191

8.1　本研究の結論..... 191
8.2　今後の課題..... 198

言語資料..... 200
参考文献..... 200
既発表論文、口頭発表との関係..... 203

第１章　序論

本章では、本研究の全体像を概略的に示す。

まず、問題の所在と研究の背景を取り上げ（1.1 節）、次に本研究の目的および方法（1.2 節）、本論文の構成（1.3 節）について説明する。

1.1　問題提起

受身・使役・可能のような表現を含む「ヴォイス」（voice）は、日本語文法において重要な位置を占める現象である。ヴォイスの諸表現は通常、日本語教育において、初級レベルの後半に扱われ始める文法項目である。本研究は、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用を分析するものである。

次の例は、本研究で用いる学習者の作文を集めたコーパスの誤用例である。（括弧内に誤用例の文体を示す。コーパスやデータの詳細については第 3 章で述べる。）

（１） この話を聞いて、陳さんだけじゃなく、みんなも〈感動された→感動した〉。（作文）

（２）2010 年度のノーベル科学賞の結果〈を→が〉10 月の初めから次々と発表されていた。（感想文）

（３）この本は完成の後、遣唐使〈に→によって〉日本に〈持ち帰った→持ち帰られた〉。（卒論）

例（１）のように、受身の助動詞「（ラ）レル」を使用する必要がない文で「（ラ）レル」を使用していたり、例（２）のように、「（ラ）レル」にあわせた格助詞の選択ができていなかったり、あるいは、例（３）のように、助動詞と格助詞の選択の両方を間違っていたりするなど、受身文を実際に使用する際に、日本語学習者は様々なタイプの誤用を起こしている。このことは、受身文だけではなく、使役文や可能構文などの他のヴォイス表現でも同様である。

日本語におけるヴォイスをめぐっては長い研究史があるが、言語習得の立場からヴォイスを扱った研究、特に、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用に関する研究は未だ十分に行われているとは言いがたい。従来のヴォイスの習得・誤用研究では、質問紙調査（馮（1999）、封（2005）など）か、作文などの産出データ（顧・徐（1980）、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997、2010）、王忻（2008）、望月（2009）、曹（2011）など）を利用しているが、後者の場合、データの規模がそれほど大きくないため、ヴォイスのどの構文のどこにどのような誤用がどれくらい起こっているのか、また、その原因は何なの

かという問題を部分的に扱っている研究が多く、総合的な誤用研究があまり現れていない。
本研究では、大規模な作文コーパスデータを体系的に調査・分析し、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の全体像を示すことを目指す。本研究により、ヴォイスの諸表現のどこが学習者にとって難しいポイントであるかが明らかにできれば、それを判断材料として、ヴォイスに関して「何をどう教えるか」という日本語教育場面で直面する問題への応用も期待できると考えられる。

1.2　本研究の目的と方法

受身文、使役文、可能構文のようなヴォイス表現では、助動詞の付加などの動詞の形態的な変化と格の交替が常に起こるため、前節であげた例（１）、（２）、（３）のような動詞の形態的なタイプのみの誤用、格助詞のみの誤用、その両方の誤用が起こりうる。
また、動詞の形態的なタイプの誤用では、助動詞などを使うべきところで使用していないケース（不使用）や、助動詞などを使う必要がないのに使用してしまうケース（過剰な使用）といったように、様々なパターンの誤用が予測される。それと同様に、格助詞の使用にも様々なパターンの誤用が起こりうる。さらに、これらの多種多様な誤用はどのような原因によって引き起こされているかも、明らかにすべき問題である。
本研究では、学習者の作文コーパス（于康（2015)『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5）を用いて、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの諸表現（受身文、使役文、可能構文）における誤用を調査・分析し、以下の３点を明らかにすることを目的とする。

１）受身文、使役文、可能構文における動詞の形態的なタイプの誤用（助動詞などの誤用）と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用はどれくらい起こるのか。
２）具体的にどのようなパターンで誤用が起こるのか。
３）誤用の原因は何か。

本研究で用いるコーパスデータでは、それぞれの誤用例に、誤用例を検索しやすくするために、誤用の種類や文法カテゴリー等の付加的情報を示したタグが付けられている。タグには、「研究タグ」(「受身」、「格助詞」などのような文法カテゴリー、「不使用」、「過剰使用」のような誤用の種類)、「誤用タグ」(学習者の誤用表現)、「正用タグ」(添削後の正しい表現）の三種類がある。本研究では、これらのタグ情報を利用して、コーパスから対象とする現象を網羅的に収集し、調査・分析を行う。

1.3　本論文の構成

本論文は、次の図 1－1 に示すように、序論→総論→各論→総論→結論という構成となっている。

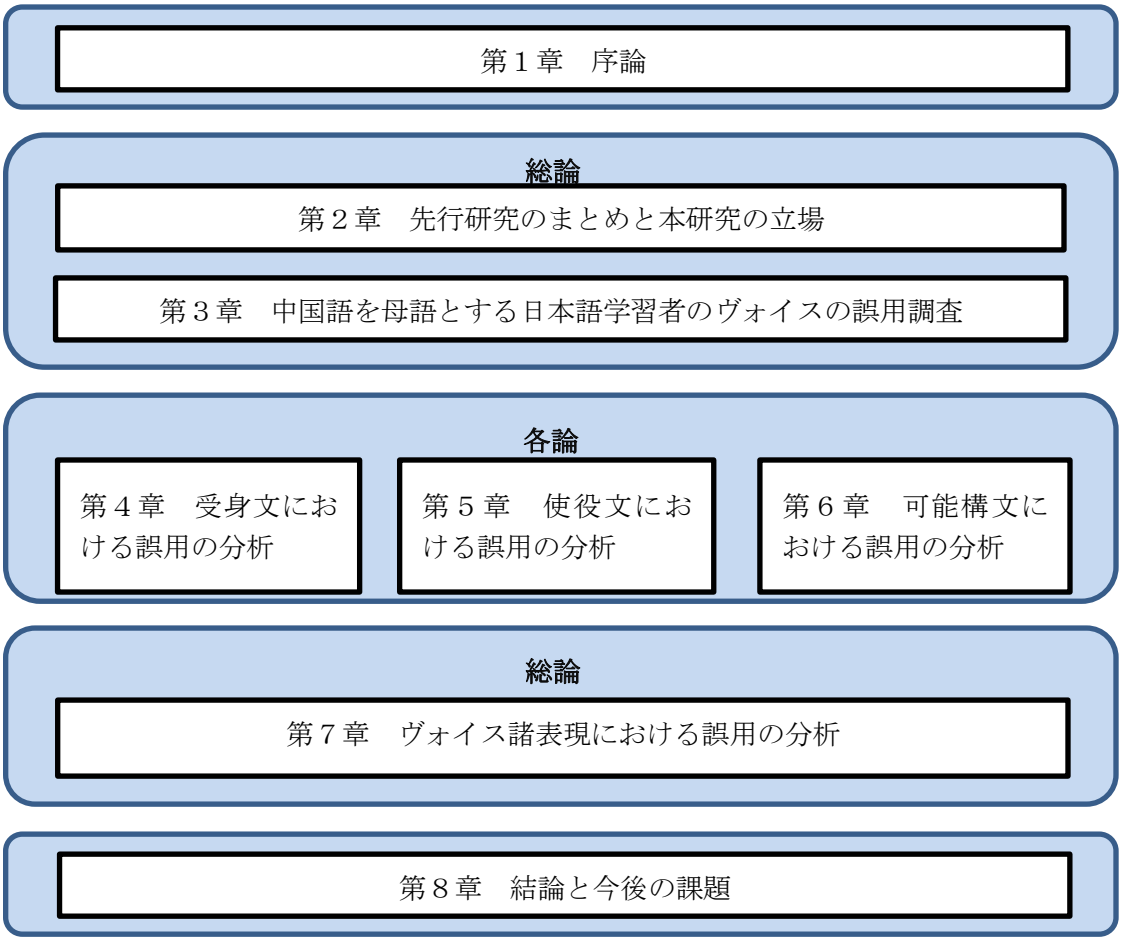

図 1－1.　本論文の構成

以下、第２章以降の各章の内容について簡単に述べる。

まず、第１章「序論」では、ここまでのとおり、本研究の全体像を説明した。

次に、第２章から第３章までは、総論として、具体的な分析の導入を行う。

第２章「先行研究のまとめと本研究の立場」では、先行研究を概観し、本研究の立場と課題を提示する。具体的には、まず日本語のヴォイスに関する先行研究を概観し、日本語のヴォイスの定義や分類をまとめたうえで、本研究で扱うヴォイス表現を提示する。また、日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究を概観し、先行研究で残された課題を示す。以上により、本研究の分析の範囲および中心となる課題を明確化する。

第３章「中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査」では、本研究で行った、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査について述べる。具体的には、まず、従来の学習者コーパスとの比較を行いながら、本研究で使用するコーパスの基本情

報を示す。次に、このコーパスのうち、本研究で使用する受身文、使役文などのデータの情報をまとめる。また、調査を行う手順を説明し、基本的な集計結果を示す。

次に、第４章から第６章までは各論として、受身文、使役文、可能構文について、それぞれの構文における誤用の詳しい分析を行う。

第４章「受身文における誤用の分析」では、受身文における誤用の分析を行う。具体的には、まず受身文の意味分類、格の交替、その誤用に関する先行研究を概観する。そのうえで、本研究における受身文の分類と扱う現象の範囲を提示する。次に、第３章で示した誤用の種類に基づき、受身文における誤用について、誤用の数、パターン、原因などの分析を行う。

第５章「使役文における誤用の分析」と第６章「可能構文における誤用の分析」では、それぞれ、使役文における誤用の分析と可能構文における誤用の分析を行う。第４章と同じ手順で、誤用の数、パターン、原因などの分析を行う。

第７章は、前章までの、それぞれの構文における誤用分析を踏まえた総論として、ヴォイス諸表現における誤用の異同について検討し、日本語教育への示唆を提言する。

第７章「ヴォイス諸表現における誤用の分析」では、受身文、使役文、可能構文のそれぞれの構文における誤用の分析を踏まえて、これらの構文における誤用のパターン、誤用の原因などの共通性と個別性を検討する。また、これらの分析を通じて、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用への対応に貢献できる点を示す。

最後に、第８章では、本研究の結論を提示し、今後の課題について述べる。

第２章　先行研究のまとめと本研究の立場

本章では、日本語のヴォイスに関する先行研究と日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究を概観し、本研究の立場と課題を提示する。

まず、日本語のヴォイスの定義と分類をまとめ、本研究で扱うヴォイス表現を提示する（2.1 節）。次に、日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究を概観し、方法論などの面から、残された課題を示す（2.2 節）。最後に、以上を踏まえ、本研究の分析の範囲および中心となる課題を示す（2.3 節）。

2.1　日本語のヴォイスに関する先行研究

本節では、日本語のヴォイスに関する先行研究を概観し、日本語文法研究におけるヴォイスの定義や分類をまとめる。これにより、ヴォイスの特徴とその範囲を明確化し、本研究で扱うヴォイス表現を提示する。

2.1.1　ヴォイスとは

本研究で具体的に扱う現象は「ヴォイス」（voice）である。「ヴォイス」は、本来ギリシャ語やラテン語の古典文法に由来し、英文法用語としても紹介された概念である（寺村 1982）。日本語文法研究においては、大槻（1891［1956］）が、「voice」を「口氣」と訳し、「能相」（ハタラキカケ）と「所相」（ウケミ）との二種類に分けている。また、「voice」の訳語として、「態」という用語も用いられている。例えば、金井（1901）では、すでに「動詞の態」という用語が出現している。現代日本語文法の研究でも広く用いられている用語である。

従来の日本語のヴォイスに関する研究では、様々な定義が示されているが、以下では、動詞と格の両方に言及している定義として、仁田（1981）、寺村（1982）、村木（1991）、早津（2000）、日本語記述文法研究会（2009）を取り上げる。

①仁田（1981）

仁田（1981）は、「態」（ヴォイス）について次のように述べている。

（1）「態」とは、動詞の形態的な範疇であるとともに、動詞の表す動作や作用の成立に関与する関与者のどれを中心にして、その動作や作用の実現を把握・表現するか、といったことにかかわるものである。（仁田 1981:110）

また、「態」における格の関わりに関しては、次のように指摘している。

（2）動作や作用には、その実現に必要な関与者が決まっている。それが「格」である。態とは、そういった動作や作用の語彙的意味によって決まってくる関与者間の相互関係の図式を、何を中心として把握・表現するか、それがいかなるありかたを取る実現であるかといった、動作図式、作用図式の把握の仕方にかかわるものである。したがって、態は、格と、格を表示する格助詞にかかわる現象である。（同:110）

②寺村（1982）

寺村（1982）では、「態」（ヴォイス）を次のように説明している。

（3）「補語の格と相関関係にある述語の形態の体系」と規定する。（寺村 1982:208）

このように、格の変更と述語動詞の形を結びつけた定義となっている。

③村木（1991）

村木（1991）は、「ヴォイス」を次のように定義している。

（4）二つの文のあいだにおける、動詞の語形と、事象に関与するものごとの統語論的なかたちと意味論的な役割との相関関係の体系。（村木 1991:174）

このうち、「動詞の語形」は動詞の形態、「統語論的なかたち」は主格・主語、斜格、「意味論的な役割」は主体、客体を指す。形態論、統語論、意味論の三つを結びつける定義となっている。

④早津（2000）

早津（2000）は、「ヴォイス」について、次のように説明している。

（5）日本語においてヴォイスとは、事態の叙述に際して、動詞の表す動作や感情の主体・対象・相手・何らかの関係者といった「事態要素」を、文のどのような「文要素」（主語・補語・修飾語など）としてとらえるかにかかわる文法的なカテゴリーだ。（早津 2000:18）

また、「文法的というのは、主語の選択やそれに伴う補語のありようにかかわるという点で構文論的でもあり、動詞の語形態および各補語の格のとり方にかかわるという点で形態論的でもあるということで、日本語のヴォイスにとってどちらの側面も大切である」（同:18）のように、ヴォイスにおける動詞と格関係の重要性を指摘している。

⑤日本語記述文法研究会（2009）

日本語記述文法研究会（2009）は、「ヴォイス」を次のように定義している。

（６）ヴォイスとは、事態の成立に関わる人や物を表す名詞が、どのような形態的なタイプの動詞とともに、どのような格によって表現されるかに関わる文法カテゴリーである。（日本語記述文法研究会 2009:207）

以上のように、日本語のヴォイスは、動詞に関わる文法カテゴリーであるが、どのような資格を持つ関与者の立場から事態を捉えるかに関わりがあるため、それぞれの関与者の役割を表示する格助詞とも相関関係を持つ。例えば、林（2009:8）も、「ヴォイスというのは、動作や作用をどの関与者から捉えるかという把握の仕方に関わるものであり、把握の仕方により、動詞の形態的変化及び格を表示する格助詞も変わってくる」と指摘している。

以上を踏まえ、本研究では、「ヴォイスの誤用」を、動詞の形態的なタイプに関わる誤用と格助詞の誤用の両面から捉えることとする。

2.1.2　ヴォイスの分類

日本語のヴォイスにおける動詞の形態的変化をどこまで含めるか、いわゆる日本語におけるヴォイスにどのような現象を含めるかには諸説がある。以下では、前節で見た仁田（1981）、寺村（1982）、村木（1991）、早津（2000）、日本語記述文法研究会（2009）におけるヴォイスの分類を踏まえ、本研究で扱うヴォイスの範囲を示す。

①仁田（1981）の分類

仁田（1981）では、「態」（ヴォイス）を次のように分類している。

A. 態の体系の基本：能動態と受動態の対立
B. 狭義の態：能動態、受動態、使役態
C. 一般的な捉え方：能動態、受動態、使役態、可能態、自発態

このように、「能動態」（例：「次郎が子供をなぐる」）を意味上も形態上も態全体の基本的なものとし、「能動態」と「受動態」との対立（例：「次郎が子供をなぐる→子供が次郎になぐられた」）を態の体系の基本とする。また、狭義の態を「使役態」（例：「太郎は次郎を郵便局へ行かせた」）までに限定する。さらに、一般的な日本語の態の捉え方として、可能態（例：「私は朝早く起きられる」）と自発態（例：「故郷のことが思い出される」）が含まれている。

②寺村（1982）の分類

寺村（1982）は、「態」（ヴォイス）を「文法的な態」と「語彙的な態」に分けていて、「格の移動と対応する動詞の形の中に予見可能的に出没する形態素が抽出できるとき、それは「文法的な態」の一つの下位類と認めることになるが、予見不可能な、つまり辞書に個別的に記すことが必要なような形態的対応であれば、それは「語彙的な態」の形ということになる」（同:208）のように説明している。

具体的な分類は次のようになる。

A. 文法的「態」：受動態、可能態、自発態、使役態
B. 語彙的「態」：（同一語根からわかれた）自動詞・他動詞の対立

B の動詞の自他の対立は、「うつる―うつす」のような、形態的に対をなす自動詞と他動詞のことを指す。これが「語彙的な態」として位置付けられている。

③村木（1991）の分類

村木（1991）は、「ヴォイス」を「変形関係」と「派生関係」という二つのタイプに分けている。同じ事象を異なる視点から述べ、関与者が原則として二つ以上存在するのが「変形関係」である。それに対して、ある事象（基本になる文）に新たな関与者が加わって、その関与者の視点からその事象を表現し、文の関与者に数の制限がないのが「派生関係」である。

具体的な分類は次のようになる。

A. 変形関係：直接受動文、相互文、授受文
B. 派生関係：使役文、間接受動文、再帰動詞、可能文、自発文

A の「授受文」は「先生が生徒をほめてやる／先生が生徒をほめてくれる／生徒が先生にほめてもらう」のような授受補助動詞からなる文であり、「相互文」は、「結婚する」、「たたかう」などのような動詞と「なぐりあう」などのような合成語からなる。また、B の「再帰動詞」とは、「（肩を）すくめる」、「（首を）かしげる」などのような他動詞である。

④早津（2000）の分類

早津（2000）は、「ヴォイス」を「ヴォイスの規定に沿うもの」と「ヴォイス的ともいえる性質のみとめられる現象」に分けている。「ヴォイスの規定に沿うもの」とは、前節で述べた早津（2000）のヴォイスの定義に従う、つまり、意味的にも、構文的にも、形態的にもヴォイスの規定に沿うものであり、「ヴォイス的ともいえる性質のみとめられる現象」とは、ヴォイスの定義に当てはまらないが、ヴォイス的な性質を持ち、広い意味でヴォイスの現象と見ることもできるものである。

具体的には、次のように分類している。

A. ヴォイスの規定に沿うもの：能動態、受動態、使役態
B. ヴォイス的ともいえる性質のみとめられる現象：可能文、自発文、動詞の自他、「してやる（してくれる）」、「してもらう」、相互態など

⑤日本語記述文法研究会（2009）の分類

日本語記述文法研究会（2009）は、「ヴォイス」を「中心的なヴォイス表現」と「ヴォイスの関連構文」に分け、次のように分類している。

A. 中心的なヴォイス表現：能動文、受身文、使役文
B. ヴォイスの関連構文：可能構文、自発構文、相互構文、再帰構文

ここまで見てきた先行研究から分かるように、「ヴォイス」の中心には、能動文、受身文、使役文があり、ヴォイス表現の周辺には、可能構文、自発構文、相互構文、再帰構文のような関連構文があると言える。

以上の分類を表で示すと、次の〈表 2－1〉のようになる。「○」は当該の先行研究にヴォイスとしての分類があることを示すのに対し、「―」は分類がないことを、「☆」は語彙的なヴォイスとして分類があることを示す。

〈表 2－1〉先行研究におけるヴォイスの分類

分類	仁田(1981)	寺村（1982）	村木(1991)	早津（2000）	日本語記述文法研究会（2009）
受身(受動)	○	○	○	○	○
使役	○	○	○	○	○
可能	○	○	○	○	○
自発	○	○	○	○	○
再帰	―	―	☆	―	☆
相互	―	―	○	○	○
授受	―	―	○	○	―
自他	―	☆	―	☆	―
その他	―	―	―	○	―

〈表 2－1〉から、より広くヴォイスを捉えると、受身・使役・可能・自発・再帰・相互・授受・動詞の自他のような表現が含まれることが分かる。このうち、受身、使役、可能、自発が共通して扱われており、特に受身と使役は、「狭義の態」（仁田 1981）、「ヴォイスの規定に沿うもの」（早津 2000）、「中心的なヴォイス表現」（日本語記述文法研究会 2009）のように、代表的なヴォイス表現として扱われている。

一方、可能と自発に関しては、「ヴォイス的ともいえる性質のみとめられる現象」（早津 2000）や「ヴォイスの関連構文」（日本語記述文法研究会 2009）のように、相対的にやや周辺的に位置づけられている場合がある。これは、「読める」、「泣ける」のような動詞の位置づけ（動詞の可能／自発形と考えるか、ただの自動詞と考えるか）や、格の交替の任意性（たとえば、可能表現では格の交替を起こさない場合がある）と関わりがあると考えられる。

これらの分類を踏まえ、また、実際に入手できるコーパスデータの状況も考慮して、本研究で扱う「ヴォイス」は、受身文、使役文、可能構文[1]とする。

[1] 可能を表す文として、助動詞だけではなく、「ことができる」のような表現からなるものも扱うため、「可能文」ではなく、日本語記述文法研究会編（2009）の分類を参考にして、「可能構文」と呼ぶ。

2.2　日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究

次に、本節では、日本語のヴォイスの習得・誤用に関する先行研究を概観し、研究の方法や扱われているデータの面から、先行研究で残されている課題を明らかにする。

2.2.1　ヴォイスの習得・誤用に関する先行研究

まず、日本語のヴォイスの習得に関する研究、誤用に関する研究の順に概観する。習得に関する研究は、日本語学習者のヴォイスの習得状況、習得順序や、習得に関わるヴォイス表現の特徴といった問題を扱ったものであり、誤用に関する研究は、学習者のヴォイス表現の誤りを分析したものである。

ここでは、複数のヴォイス表現を対象とした比較的に総合的な視点で行われている研究だけを簡単にまとめる。それぞれの研究の詳細、および個別のヴォイス表現を対象としている先行研究については、受身文、使役文、可能構文の誤用分析の章（第4章～第6章）で紹介する。

2.2.1.1　ヴォイスの習得に関する先行研究

ここでは、日本語のヴォイスの習得に関する先行研究として、田中（1999）と馮（1999）を取り上げる。

まず、学習者のヴォイスの習得状況、習得順序を扱った研究である田中（1999）は、KYコーパスを用い、英語、韓国語、中国語を母語とする日本語学習者（レベル：初級～超級）を対象として、ヴォイス関係の文法カテゴリー（受身・使役・可能・自発・受益）の習得状況を考察し、OPI（Oral Proficiency Interviews）によるレベル判定とヴォイスの習得状況の関係も検討している。その結果、母語に関わらず、可能、受益、直接受身は学習者によって多く使用されており、正用者数もほぼ同じであること、一方、間接受身、使役、自発の使用は少なかったことが明らかにされている。また、ヴォイスの習得順序は、可能、受益、直接受身、間接受身という順番であり、さらに、ヴォイスの使用と学習者のレベルにはある程度の相関関係が見られるとされる。

次に、ヴォイス表現の習得で必要な知識を扱う研究として、馮（1999）は、中国語母語話者の日本語の受動文（受身文）、使役文、授受文の習得を困難にする要因を、母語の干渉（負の転移）という視点から、質問紙調査を通して探っている。日本語の受動文と使役文の学習は、「受身／使役マーカー学習」（受身：「に」「から」「で」「によって」、使役：「に」と「を」のうち、どれが特定の受動文／使役文に適切であるかの学習）と「構文文法学習」（どのような文法構造を持つ受動文／使役文が自然であるかの学習）に分けられ、受動文も、使役文もマーカーの学習エラーは学習年数（学習歴）と共に減少していくが、構文文法の学習エラーは学習年数と共に減少しないことが明らかになっている。また、日本語と中国語の相違点が、中国語を母語とする日本語学習者の受動文と使役文の問題点となっており、受身／使役構文文法の学習エラーの減少しにくい原因の一つが母語の干渉にあることが指摘されている。

このように、学習者のヴォイス表現では、それぞれの構文ごとに異なった習得プロセスがあり、誤用が起こる箇所や誤用を起こす原因も複数あることが分かる。このような問題

を分析する誤用研究については次に紹介していく。

2.2.1.2　ヴォイスの誤用に関する先行研究

日本語学習者のヴォイスの誤用に関する先行研究として、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997、2010）、王忻（2008）、望月（2009）を取り上げる。

佐治（1992）は、外国人日本語学習者の間違えやすい表現を分析している。中国語を母語とする日本語学習者のヴォイス（可能態、受身態、使役態、自発態）の誤用の分析では、主に『中国人の日本語作文に見られる誤用例集』、その他の作文、翻訳などのような書き言葉データを用い、「感動する」、「感心する」、「感じる」などのような心理の動きを表す動詞の受身形、使役形、自発形の誤用が多く見られるという結果が得られている。誤用の原因としては、主に日本語への不十分な理解を挙げている。

猪崎（1994）は、作文指導を通して明らかになった日本語学習者（中国語、タイ語、英語、インドネシア語、フィリピン語話者など）のヴォイス（可能態、受身態、使役態、自発態）、およびアスペクト、ムードの習得困難点や習得過程について分析している。中国語話者３名の半年間の作文の分析では、受身態と可能態は比較的に多く使用されているが、使役態の使用がかなり少ないうえ、主に誤用となっていることが示されている。また、受身・使役・可能・自発の誤用のパターンには「過剰使用」（使用の必要がないのに使用しているケース）と「欠」（使用すべきなのに使用していないケース）があり、受身・使役の「過剰使用」や「欠」は、主語の省略や動詞と助詞の組み合わせの問題に関係していることが指摘されている。

市川（1997）は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者（アメリカ、フランス、中国、韓国、タイなど）の作文、会話などにおける誤用を分析しており、ヴォイスの誤用分析の節では、受身文、使役文、可能文・「ことができる」が扱われている。ここで示されている受身文、使役文、可能構文の誤用例では、共通して、「誤形成」（述語動詞の形態の誤り）、「混同」（ヴォイス形式と自他動詞の混同）、「その他」（助詞の誤用）のパターンの誤用が見られる。そのうち、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、「混同」（ヴォイス形式と自他動詞の混同）、すなわち、自動詞か他動詞の代わりに、ヴォイス形式にしなくてもいいところで使ってしまう誤用が多いことが分かる。また、「その他」（助詞の誤用）では、受身文における「×が→○を」（「×」は誤用、「○」は正用）パターン、使役文における「×に→○を」パターン、可能文における「×を→○が」パターンの誤用が見られる。

市川（2010）は、市川（1997）より誤用例を広く収集し（『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース　Ver.2』CD-ROM 版など）、外国人日本語学習者の誤用を分析している。受身文、使役文、可能構文の誤用例で共通して見られる誤用のパターンとして、「誤形成」、「混同」、「その他」に加え、「脱落」（ヴォイス形式を使用しなければいけないのに使用していない）のパターンも示されている。中国語を母語とする日本語学習者の誤用の傾向は、市川（1997）と同じ結果となっている。

王忻（2008）は、中国人日本語学習者（日本語を専攻とする大学３、４年生、日本語専修学校上級コースの学生）の作文における誤用を分析した研究であり、ヴォイスの誤用分析の節では、使役、受身、自発、やりもらいが扱われている。ヴォイスの誤用は、「過剰」（ヴォイス形式を使う必要がないのに使ってしまうケース）、「不足」（ヴォイス形式を使うべきなのに使わないケース）、「文の部分間の関係の混乱」（文の主語あるいは補語などの間の表現で混乱しているケース）、「混同」（ヴォイスの間での混同）という四つのケースにまとめ

られている。誤用の原因としては、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の負の転移や日本語のルールに関わる要因が挙げられている。また、可能表現の誤用では、可能形式の過剰使用が多く見られること、中国語の可能は日本語の可能より範囲が広いという母語の干渉が考えられることを示している。

望月（2009）は、中国語を母語とする日本語学習者（在日留学生、上級レベル以上）による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス（動詞の自他、使役、受身、可能）の誤用分析を行っている。受身・使役・可能の誤用のパターンは「脱落」と「付加」であり、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉が誤用の原因となることが指摘されている。

以上のような従来の研究から、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の実態をまとめると、以下のようになる。

a. 誤用のパターン：主に「ヴォイス形式を使用する必要がないのに使用している」ケースと「ヴォイス形式を使用すべきなのに使用していない」ケースが見られる。

b. 格助詞の誤用：ヴォイス表現における格助詞の誤用が指摘されているが、議論の中心にはなっていない。

c. 誤用の原因　：学習者の誤用は母語（中国語）と日本語との相違点で生じる母語の負の転移か、目標言語である日本語の構造そのものの理解が不十分であることによって起こるとされている。

このように、従来の研究では、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の実態はある程度明らかになっている。

しかし、助動詞などの動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞の誤用の両面から、ヴォイスの誤用を捉えた研究は少なく、特に、ヴォイス表現における格助詞の誤用についての議論は少ない。また、ヴォイス表現における誤用の起こり方を検討するために、ヴォイス表現の意味と誤用との関係についても詳しく見ていく必要がある。さらに、ヴォイス表現の誤用のパターンや原因は多種多様であると予測されるため、より多くの誤用例から、誤用のパターンを再整理し、今までの研究で詳しく議論されていない母語の負の転移のパターンおよび日本語の未習得の部分の特定をする必要がある。加えて、個々の構文の分析だけでなく、ヴォイス表現に広く見られる誤用の共通性の分析もまだ不十分だと考えられる。

2.2.2　習得・誤用研究の方法およびデータ

従来の日本語のヴォイスの習得・誤用に関する研究では、研究方法として、馮（1999）のように質問紙調査を利用するか、田中（1999）、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997）、王忻（2008）、望月（2009）のように作文などの産出データを利用している。後者で使用されているデータは、研究者自らが収集したものからコーパスへと変遷している。これらのデータは、学習者の中間言語を反映していると考えられるが、データの規模がそれほど大きくないため、ヴォイスのどの構文のどこにどのような誤用がどれくらい起こっているのか、また、その原因は何なのかという問題を部分的に扱う研究が多く、それらの問題を一貫して扱った総合的な研究があまり現れていない。

本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを含むコーパスを用いることで、これらの問題を体系的に調査・分析し、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の全体像を示すことを目標とする。

2.3　本研究の立場と課題

まず、2.1 節でも言及したように、本研究で扱う「ヴォイス」は次の範囲とする。

①受身文（「(ラ) レル」）
②使役文（「(サ) セル」）
③可能構文（「(ラ) レル」[2]・可能動詞・「ことができる」）

①の受身文と②の使役文に関しては、「(ラ) レル」、「(サ) セル」のような助動詞からなる文を対象とする。一方、③の可能構文に関しては、可能の助動詞「(ラ) レル」だけでなく、可能動詞、「動詞＋ことができる」のような表現からなるものも対象とする。「可能動詞」は、山口・秋本（2001:162）が「五段活用動詞（四段活用動詞）が下一段活用に転じて、本来の動作内容のほかに可能の意味を含み持つようになった動詞」とする狭義の「可能動詞」のほか、「わかる」、「見える」、「聞こえる」のような「語彙的な可能動詞」を含むものとする。さらに、「できる」や、「利用できる」のようなサ変動詞の例も含める（本研究における可能構文における可能形式の具体的な扱い方は 6.1.3.1 節で示す)。

次に、本研究では、これらの構文における動詞の形態的なタイプ（助動詞など）だけでなく、格助詞の誤用も調査・分析する。

一般的に、格助詞には、意味的な性質が強い「意味格」と、文法的な性質が強い「文法格」があるとされる（日本語記述文法研究会 2009:7)。特に、「ヲ」と一部の「ニ」は、文法格として文法関係を表す機能を強く持ち、ヴォイスに関係する諸表現において、格の交替に関わる格助詞である。受身文や使役文、可能構文では、これらの格の選択における学習者の誤用が生じうる。本研究では、これらの構文における格助詞の誤用について、「ヲ」「ニ」の誤用を中心に調査・分析する。

以上を踏まえ、本研究の具体的な課題を次のように設定する。

本研究では、于康(2015)『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5 に見られる、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における助動詞などの動詞の形態的なタイプの誤用と、格助詞の「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）[3]を調査・分析し、以下の３点を明らかにすることを目的とする。

１）受身文、使役文、可能構文における動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞「ヲ」「ニ」の誤用はどれくらい起こるのか。

---

[2] 「食べれる」のようないわゆる「ら抜きことば」もここに含める。
[3] 実際に入手できるコーパスデータの状況も考慮して、本研究では格助詞「ヲ」「ニ」の誤用のうち、「ヲ→Y」型誤用と「ニ→Y」型誤用を扱う。「ヲ」「ニ」を使うべきところで他の助詞を使用したケースの誤用の分析は、今後の課題とする。

２） 具体的にどのようなパターンで誤用が起こるのか。
３） 誤用の原因は何か。

受身文、使役文、可能構文のようなヴォイス表現では、動詞の形態的な変化と、格の交替が連動して起こるため、さまざまなタイプの誤用が起こることが予測される。まず、どのヴォイス表現の文のどの箇所で、どれくらいの誤用が起こるのかを調査し（課題１）、それらがどのようなパターンとして整理できるのかを検討する（課題２）、また、これらの誤用を引き起こす原因を明らかにする（課題３）。

さらに、以上を踏まえ、それぞれのヴォイス表現の誤用の共通性・個別性についても検討する必要がある。本研究では、以上の問題を体系的に調査・分析し、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文のようなヴォイス表現で起こる誤用の全体像を示すことを目指す。

このような検討により、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの諸表現における習得困難点を明らかにすることができる。これは、今後の日本語教育に直接貢献できるものと考えられる。

第３章　中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査

本章では、本研究において実施した、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査の方法と結果について述べる。

まず、従来の学習者コーパスと比較しながら、本研究で用いるコーパスの基本情報を紹介し、本研究で使うデータの情報をまとめたうえで、調査の手順を説明する（3.1 節）。次に、集計した調査結果を示す（3.2 節）。

3.1　調査方法

本節では、本研究で行った誤用調査の方法について述べる。まず、従来の学習者コーパスと比較しながら、本研究で使用したコーパスの基本情報を示す（3.1.1 節）。次に、本研究で使用した受身文、使役文などの誤用データの情報をまとめる（3.1.1 節）。最後に、調査手順を説明する（3.1.2 節）。

3.1.1　使用したコーパス

本研究で用いた学習者の誤用のデータは、関西学院大学の于康教授を中心とする研究グループによって 2014 年から構築されている、『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス』である。本研究では、于康（2015）『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5 のデータを用いた。

このコーパスは、中国の 40 校の大学から収集した、日本語を専攻とする、学習歴が 3 ヶ月～10 年に渡る日本語学習者の作文データであり、すべて日本語教育に携わっている日本語母語話者によって、添削、正誤タグおよび研究タグが付与されている。文体は、感想文、卒業論文、修士論文など多岐にわたり、テーマも言語学から文学、文化、経済など、幅広い。データの総量としては、ファイル数：2,155、文字数：3,664,073、タグ数：54,828 となっている[4]。

[4] 「ファイル数」は作文単位で計算されており、作文 1 篇が 1 ファイルとして数えられている。「文字数」は、元々の作文に書かれた文字のみの数値（「、」「。」などのような句読点も含む）であり、タグの記述部分を含まない。「タグ数」は誤用箇所ごとに計算されており、<>で 1 箇所と数えられている。

コーパスにおける誤用例は、文を単位としてレコードに区切られている。各レコードには、誤用ごとにタグが付けられている。タグには、「研究タグ」(「可能」、「名詞」などのような文法カテゴリー、「過剰使用」、「不使用」のような誤用の種類[5])、「誤用タグ」(学習者の誤用表現)、「正用タグ」(添削後の正しい表現)の三種類がある。例えば、下記のような例で見る。

（1）〈名詞／名詞的修飾／食べ物→食べた〉あと、私たちは〈過剰使用／可能／遊べました→遊びました〉。（作文）

研究タグ　研究タグ　誤用タグ　正用タグ　研究タグ　研究タグ　誤用タグ　正用タグ

この例は、（2）のような学習者の作文が、日本語母語話者によって（3）のように添削されていることになる。

（2） 食べ物あと、私たちは遊べました。(誤用)
（3） 食べたあと、私たちは遊びました。(正用)

このとき、例えば（2）の誤用「遊べました」は（3）の「遊びました」が正用（文法的に適切な表現）であり、可能動詞「遊べる」が動詞「遊ぶ」に訂正されているため、研究タグでは「可能」を表す表現の「過剰使用」と判定されている。

本研究では、上記のようなコーパスの研究タグ情報を利用し、分析対象とする現象を収集する。さらに、誤用タグと正用タグが付けられた表現の特徴（パターン)、誤用の原因を分析する。

次に、于康 (2015)『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5 を、これまでに構築されてきた主な日本語学習者コーパス（書き言葉）と比較すると、次の〈表 3－1〉のようになる。

[5] 「過剰使用」、「不使用」のような誤用の種類を示す研究タグは付与されていない場合もある。

〈表 3−1〉日本語学習者コーパスの概観

コーパス名称	年代	作成者	規模	学習者の母語	レベル・学習歴	データの種類	公開／非公開	添削	情報の出典
誤用パターン別上級日本語学習者作文コーパス	2008	東京外国語大学	50 人分の作文	中国語	上級～超上級	作文（8 種類の課題、評価コメントシート）	非公開	あり	望月（2009）
日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース	2009	国立国語研究所	作文 1754 篇（日本語母語話者の作文も含む）	中国、韓国、アメリカなど 21 ヶ国の母語話者	1 ヶ月～5 年	作文（10 種類の課題）	公開	一部あり	国立国語研究所（2009）
日本語学習者言語コーパス	2009	東京外国語大学	作文 1756 篇	中国、ドイツなど 6 ヶ国の母語話者	1～7.5 年	作文（28 種類の課題）	公開	なし	東京外国語大学（2009）
寺村誤用例集データベース	2011	国立国語研究所	誤用例数 6302 件	中国、韓国、マレーシア、メキシコなど 24 ヶ国の母語話者	初級～上級	パターン作文、短文作文、自由作文など	公開	一部あり	寺村秀夫（1990）
LARP at SCU 学習者言語コーパス	2011	台湾東呉大学	作文 959 篇	中国語	半年～3 年半	作文（33 種類の課題）	非公開、要申し込み	学習者による自己修正あり	台湾東呉大学外語学院日本語文学系（2011）
日本語学習者作文コーパス	2013	筑波大学李在鎬を代表とする研究グループ	作文 304 篇	中国語、韓国語	初級～上級	作文（2 種類の課題）	公開	あり	「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」科研グループ（2013）
YNU 書き言葉コーパス	2014	横浜国立大学	作文 1080 篇（日本語母語話者の作文も含む）	中国語、韓国語	8 ヶ月～20 年	作文（12 種類の課題）	公開	なし	金澤（2014）
『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5	2015	関西学院大学于康を代表とする研究グループ	ファイル数: 2,155、文字数: 3,664,073	中国語	3 ヶ月～10 年	感想文、卒業論文、修士論文など多種多様（テーマも言語学から文学、文化、経済など、幅広い）	非公開、要申し込み	あり	

〈表 3－1〉に示した従来の学習者コーパスの基本情報を本研究の研究課題から見ると、①データの規模がそれほど大きくない、②中国語を母語とする日本語学習者のみを対象とするコーパスが少ない、③データは課題付きの作文に限られる、④すべての誤用データが添削されているコーパスが少ない、といった点が指摘できる。

それに対して、本研究で用いるコーパスは、中国語母語話者のみを対象とするもので、データの規模も比較的に大きい。また、幅広い学習者の多様な書き言葉データが扱われている。さらに、すべての誤用データに対して、添削およびタグ付けが行われているため、ヴォイスの誤用に限定した検索や分析がしやすいと考えられる。

以上のことから、本研究で用いるコーパスは、従来の学習者コーパスと比べて、中国語を母語とする日本語学習者の誤用研究において、より適切なデータであると考えられる。

なお、本研究に用いるコーパスデータの利用は、現在非公開のため、データの配布を担当している「日本語誤用と日本語教育学会」（旧称：日本語誤用と日本語教育研究会）の事務局にタグを指定して申請することによって、すべてのデータから指定のタグが付けられている部分だけ、タグ入りのデータを入手できる仕組みになっている。入手するデータの様式は、例えば、次の例（４）のようなものである。それぞれの誤用例に出身校、学習歴、文体、ファイル番号などの情報も付されているが、ここではコーパスに添付されているデータの使用に関わる注意事項を考慮したため、省略した。

（４） 経典は日本に〈テンス・アスペクト／伝わった→伝わる〉〈名詞／あと→と〉、日本の雕版印刷業の発展を〈使役／促進した→促進させた〉。 （卒論）

（４）は使役の誤用例として入手した例であるが、「使役」のタグが付与された誤用箇所だけでなく、「テンス・アスペクト」、「名詞」の誤用にもタグが付与された形でデータが提供されている。

また、一文に指定のタグが付けられている誤用が 2 箇所以上ある場合、検索結果では複数の例文として出力される。例えば、次の例（５）は「使役」の誤用が 2 箇所あるため、「〈満足し→満足させ〉」が 1 つの誤用例で、「〈充実する→充実させる〉」が 1 つの誤用例というように、２つの誤用例として扱われている。

（５） たくさんの暇がある主婦たちはこれらの手軽で簡単な仕事の中で自分を〈動詞／使役／満足し→満足させ〉、余暇を〈不使用／使役／充実する→充実させる〉。 （卒論）

本研究において、検索の申請を行い、入手したデータは、次の〈表 3－2〉の通りである。

〈表 3－2〉入手したデータ

タグ	誤用例数
「受身」	1,362 例
「使役」	300 例
「可能」	765 例
「ヲ→Y」	1,738 例
「ニ→Y」	2,068 例
合計：	6,233 例

これらのデータを学習者の学習歴別、文体別情報に分類すると、次の〈表 3－3〉、〈表 3－4〉のようになる。

〈表 3－3〉入手したデータの学習歴別分布

学習歴	ファイル数		誤用例数
3 ヶ月～半年	203	13.10%	456
1 年以上 2 年未満	532	34.32%	1,443
2 年以上 3 年未満	303	19.55%	1,066
3 年以上 4 年未満	141	9.10%	1,493
4 年	165	10.65%	634
5 年	1	0.06%	2
6 年以上 7 年未満	61	3.94%	780
7 年	9	0.58%	12
8 年	0	0.00%	0
9 年	4	0.26%	9
10 年	8	0.52%	14
その他（8 級試験[6]）	123	7.94%	324
合計:	1,550	100%	6,233

〈表 3－4〉入手したデータの文体別分布

文体	ファイル数		誤用例数
作文	971	62.65%	2,718
感想文	182	11.74%	545
卒論	78	5.03%	1,349
修論	58	3.74%	771
手紙	50	3.23%	113
自己紹介	31	2.00%	61
スピーチ	31	2.00%	210
報告書	11	0.71%	27
レポート	9	0.58%	108
メール	6	0.39%	7
その他（8 級試験）	123	7.94%	324
合計:	1,550	100%	6,233

〈表 3－3〉、〈表 3－4〉のように、入手した「受身」、「使役」、「可能」、「ヲ→Y」型誤用、「ニ→Y」型誤用のデータは、幅広い学習歴と、多種多様な文体に分布している。以下では、これらの誤用例を調査するために整理を行った方法を述べる。

[6]「8 級試験」とは、中国国内で行われる、日本語を専攻とする大学生向けの日本語能力試験である。一般的には学部 4 年生の前期の終わりに受験する。したがって、大学に入学してから日本語を学び始めた学生の場合、学習歴は 3 年半と予測されるが、大学入学前から日本語を学んでいた場合は学習歴は 3 年半以上になる。このコーパスでは、この試験の解答用紙の作文データが収集されており、学習歴は明記されていない。

3.1.2　調査手順

次に、本研究における「誤用」の範囲と分類を定め、誤用例の抽出と整理の流れを説明する。

3.1.2.1 「誤用」の範囲と分類

本研究では、まずコーパスから「受身」、「使役」、「可能」、「ヲ→Ｙ」型誤用、「ニ→Ｙ」型誤用のデータを誤用例としてすべて収集した。ただし、重複やタグ付与のミスなどの例を除外した。また、受身文、使役文、可能構文における格助詞の誤用として、「ヲ→Ｙ」型誤用、「ニ→Ｙ」型誤用のうち、文末表現が受身・使役・可能表現の例文だけを分析対象とした。

このような例をパターン化した結果、これらのヴォイス諸構文における誤用は、次のⅠ、Ⅱ、Ⅲのように分類できる。

Ⅰ．述部の誤用
Ⅱ．格助詞の誤用
Ⅲ．格助詞の誤用＋述部の誤用

それぞれの例を最小限のタグを付けた形で示すと、次の例（６）、（７）、（８）のようになる。

（６）　日本人は心身を〈不使用／使役／リラックスして→リラックスさせて〉お風呂に入る。（卒論）
（７）　流行語は、ほとんどウェブメイトと ACG についての人たち（ゲームプレーヤー、アニメファンなど）〈格助詞／ニ→ニヨッテ[7]〉作られた。（卒論）
（８）　今は春じゃありませんか、どうして雪〈格助詞／ヲ→ガ〉〈可能／見える→見られる〉のか。（作文）

「Ⅰ.述部の誤用」は、例（６）のような、述部のみが間違っている例である。（６）では述部の「リラックスする」が使役形の「リラックスさせる」に訂正されているが、格助詞「ヲ」に問題はない。

一方、「Ⅱ．格助詞の誤用」は、例（７）のような、格助詞のみが間違っている例である。（７）では格助詞「ニ」が「ニヨッテ」に訂正されているが、述部の受身の助動詞「(ラ)レル」に問題はない。

また、「Ⅲ．格助詞の誤用＋述部の誤用」は、ⅠとⅡが複合した形の誤用であり、例（８）のように、格助詞だけではなく述部も間違っている例である。（８）では格助詞「ヲ」が「ガ」に訂正されていると同時に、述部の可能形式「見える」が「見られる」に訂正されている。

なお、受身文、使役文、可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用は、それぞれの構文で起こっている誤用をすべて扱うため、ヴォイスに関わる誤用（例 7、8）とヴォイスに関わらない誤用（例えば、受身文における場所を表す意味格としてのニ格とデ格の混用）の両方を含んでいる。このように、本研究では、ヴォイス関連・非関連の誤用を分類し、そ

[7] 格助詞の誤用タグと正用タグはカタカナで表記している（以下でも同様）。

れぞれどれくらい起こっているかの比率を明らかにしたうえで分析を進める。ヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用に関しては、誤用が起こる原因まで分析していく。

3.1.2.2　誤用例の抽出と整理

本研究では、前節で述べたように、データの配布を担当している「日本語誤用と日本語教育学会」の事務局にタグを指定して申請することによって、タグが付けられている誤用例を入手し、さらに、このデータを加工することで、ヴォイスの誤用分析を目的としたデータを作成した。その抽出と整理の手順は、下記の通りである。

１）調査例の確定

コーパスのタグ情報を利用して、「受身」、「使役」、「可能」、「ヲ→Ｙ」型誤用と「ニ→Ｙ」型誤用の例を入手し、調査対象とする例を手作業で抽出した。次のような例文は、分析対象からの除外および調整を行った。

a. 除外：調査対象外の例[8]、タグ付与に問題のある例[9]、重複例[10]

b. 調整：「受身」、「使役」、「可能」の三者の間でタグ付与が混乱している例はそれぞれ確認して入れ替えた。例えば、可能の例に「受身」のタグが付与されている例も「可能」の例として扱った。

２）タグの整理

コーパスにおける誤用例では、１つの例文のすべての誤用箇所にタグが付与されている。分析の便宜上、次のように、分析に関わる誤用以外の誤用箇所のタグ（研究タグと誤用タグ）を削除し、正用タグに従って修正した。

a.「述部の誤用」の例：

例（９）（コーパスにおける用例）と（９’）(修正後の用例) のように、受身の「(ラ) レル」、使役の「(サ) セル」、可能構文における可能形式（可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」）の誤用以外のタグを削除し、正用タグに従って修正した。

---

[8] 次のような例を、調査対象外の例として除外した。

①「格助詞の誤用＋述部の誤用」の例のうち、「ヲ→Ｙ」「ニ→Ｙ」型以外の格助詞の誤用の例（例えば、「ガ→ヲ」型誤用＋述部の誤用」の例)。

②「使役」（あるいは「使役」と「授受」）のタグが付けられている「(サ) セテ｛アゲル／クレル／モラウ｝」の例。

③「知らせる」のような語彙的使役の例。

[9] 次のような例を、タグ付与に問題のある例として除外した。

①「(ラ) レル」が自発、可能とも解釈できる「受身」タグの付与例のうち、自発の例と疑われるもの。

②「(ラ) レル」が生起していない文に「受身」のタグが付与されている例と、尊敬表現の「(ラ) レル」に「受身」のタグが付与されている例。

③可能動詞以外の、例えば「酒器ができる」のような完成を表す「できる」に「可能」のタグが付与されている例。

[10] 単純な重複例以外に、受身文、使役文、可能構文の間に起こる使用混同の場合は、ダブルカウントを防ぐため、誤用タグを基準に分類した。例えば、「述部の誤用」で「(ラ) レル→（サ）セル」のように、誤用タグが受身の助動詞、正用タグが使役の助動詞になっている場合、受身文における誤用として扱い、使役文の誤用例から外した。「格助詞の誤用＋述部の誤用」でも同様の処理を行った。

（９） まず、政府の役人の業績は経済の状況によって判断されるので、多くの役人は自分が栄転〈可能／できる→する〉ために、汚染のひどい企業を〈動詞／意思・願望／引入していましょう→抱き込む〉。（作文）
研究タグ　誤用タグ　正用タグ

（９’）まず、政府の役人の業績は経済の状況によって判断されるので、多くの役人は自分が栄転〈可能／できる→する〉ために、汚染のひどい企業を抱き込む。

b.「格助詞の誤用」の例：
例（10）と（10’）のように、「ヲ」「ニ」の誤用以外のタグを削除し、正用タグに従って修正した。

（10） たとえ「味の素のおいしさで幸せを感じた」という意味でなくても、「好きな人〈格助詞／ニ→ヲ〉喜ばせたい」という暖かい気持ちを〈動詞／呼び上げ→呼びおこし〉、人に感動を与え、印象に残る。（卒論）
研究タグ　誤用タグ　正用タグ

（10’）たとえ「味の素のおいしさで幸せを感じた」という意味でなくても、「好きな人〈格助詞／ニ→ヲ〉喜ばせたい」という暖かい気持ちを呼びおこし、人に感動を与え、印象に残る。

c.「格助詞の誤用＋述部の誤用」の例：
例（11）と（11’）のように、「ヲ」「ニ」の誤用と、受身の「（ラ）レル」、使役の「（サ）セル」、可能構文における可能形式（可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」）の誤用以外のタグを削除し、正用タグに従って修正した。

（11） それから、〈副詞的修飾／いろいろ→いろいろな〉活動〈格助詞／ヲ→ガ〉開催〈不使用／受身／します→されます〉。（作文）
研究タグ　誤用タグ　正用タグ

（11’）それから、いろいろな活動〈格助詞／ヲ→ガ〉開催〈不使用／受身／します→されます〉。

さらに、例（12）と（12’）、（12”）のように、一文に誤用が 2 箇所以上ある場合、それぞれ 1 例ずつとして分析できるようにするために、1 例に 1 箇所だけを残し、それ以外の誤用箇所はタグを削除し、正用タグに従って修正した。

（12） たくさんの暇がある主婦たちはこれらの手軽で簡単な仕事の中で自分を〈動詞／使役／満足し→満足させ〉、余暇を〈不使用／使役／充実する→充実させる〉。（卒論）

（12’）たくさんの暇がある主婦たちはこれらの手軽で簡単な仕事の中で自分を〈動詞／使役／満足し→満足させ〉、余暇を充実させる。

（12”）たくさんの暇がある主婦たちはこれらの手軽で簡単な仕事の中で自分を満足させ、余暇を〈不使用／使役／充実する→充実させる〉。

３）調査・分析用例文集の作成

「受身」、「使役」、「可能」の誤用例および「ヲ→Ｙ」「ニ→Ｙ」型の誤用例のうち、「述部の誤用」に対しては、作文コーパスの各種タグに加えて、動詞の自他、誤用のパターン、意味分類などの情報を付与した。「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」に対しては、作文コーパスの各種タグに加えて、ヲ／ニの別、動詞の自他、誤用のパターンなどの情報を付与した。このような手順で、付加情報が含まれる調査・分析用の例文集を作成した。

3.2　調査結果

以上のような手順により作成した例文集を調査した結果、作文コーパスにおける中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの諸表現の誤用の全体像が明らかになった。具体的には、次の〈表 3－5〉のようになる。

〈表 3－5〉誤用の全体像

	Ⅰ.述部の誤用	Ⅱ.格助詞の誤用（「ヲ→Ｙ」型、「ニ→Ｙ」型）	Ⅲ.格助詞の誤用＋述部の誤用	合計
受身文	816	204	162	1,182
使役文	209	45	38	292
可能構文	686	113	71	870
合計	1,711	362	271	2,344

これまで述べてきた調査手順に従って収集した誤用例を整理したため、3.1.1 節の〈表 3－2〉と比べると、〈表 3－5〉の示している誤用例数に大きな変化が生じている。

例えば、受身文の場合、まず、「受身」のタグが付けられている 1,362 例から、分析対象からの除外および調整を行った結果、受身文における「述部の誤用」の例文数が 816 例に減少している。また、「ヲ→Ｙ」のタグが付けられている 1,738 例と「ニ→Ｙ」のタグが付けられている 2,068 例から受身文に現れた誤用を抽出した結果、受身文における「格助詞の誤用」の例文数は 204 例になっている。さらに、「格助詞の誤用＋述部の誤用」に関しては、調査対象となる受身文における格助詞「ヲ」「ニ」と述部の両方の誤用が「受身」、「ヲ→Ｙ」と「ニ→Ｙ」型誤用に含まれているため、ダブルカウントを防ぐために両者の重複例を除外した結果、162 例になった。使役文と可能構文における誤用例も以上と同じような手順で抽出・整理したため、誤用例数に変化が生じている。

〈表 3－5〉を横に見ると、受身文では、「述部の誤用」が 1,182 例中 816 例（69.04%）あるのに対し、「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」はそれぞれ 204 例（17.26%）、162 例（13.71%）あり、比較的に少ない。使役文と可能構文においても、同じような傾向が見られ、「述部の誤用」が「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」より多い。なお、前節でも言及したように、「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」には、ヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用とそうではない誤用があるため、ヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用例数は、〈表 3－5〉に示している数字よりも少なくなる。この点に関しては第 4 章～第 6 章で詳しく検討する。

次に、〈表 3－5〉を縦に見ると、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のどれも、受身文における誤用例が一番多く、その次が可能構文、使役文の順になっている。このような、受身文、使役文、可能構文における誤用の共通性については第 7 章で詳しく説明する。

以下では、受身文（第 4 章）、使役文（第 5 章）、可能構文（第 6 章）の順に、具体例を見ながら、誤用を分析していく。

第４章　受身文における誤用の分析

本章では、受身文における誤用の分析を行う。

まず受身文の意味分類および格の交替、受身文の誤用に関する先行研究を概観し、本研究における受身文の分類と扱う現象の範囲を提示する（4.1 節）。

次に、第３章で示した誤用の分類に基づき、受身文における誤用を「述部の誤用」（4.2 節）、「格助詞の誤用」（4.3 節）、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（4.4 節）に分け、それぞれにおいて誤用の数、パターン、原因などの分析を行う。

4.1　受身文とその誤用

本節では、まず、受身文の意味分類、格の交替に関する先行研究（4.1.1 節）と、受身文の誤用に関する先行研究（4.1.2 節）を概観する。次に、それらを踏まえ、本研究における受身文の意味分類と本研究で扱う受身文の格を提示する（4.1.3 節）。

4.1.1　受身文に関する先行研究

本項では、受身文の意味分類、格の交替に関する先行研究を概観する。

4.1.1.1　受身文の意味分類

日本語記述文法研究会(2009:210)によると、「受身文」とは、「動詞の語幹に「-(r)are-ru」という接辞を付加することによって、働きかけや作用、関係のあり方を受ける存在をガ格名詞として表現するものである」とされる。

受身文が表している意味に関しては、今までさまざまな研究がなされてきた。ここでは、益岡（1987）と影山（2006）の分類を取り上げる。

まず、益岡（1987）は、次の〈表 4－1〉のような分類を行っている。

〈表 4－1〉益岡（1987）における受身文の意味分類

分類		昇格・降格を動機づけているもの	意味	例文
昇格受動文（ニ格受動文）	受影受動文	受影性の前景化	或る存在が或る出来事の結果として心理的或いは物理的影響を被る。	●太郎が友人にばかにされた。 ●太郎が友人に妻をばかにされた。 ●その寺は翌年信長に焼き払われた。
	属性叙述受動文	属性叙述の明示化	或る対象が或る属性を有している。	●この雑誌は、10 代の若者によく読まれている。
降格受動文（非ニ格受動文）		動作主の背景化	※明示されていない。	●その寺は、9 世紀前半に建てられた。

このように、益岡（1987）は、受動文（受身文）を「昇格受動文」（ニ格受動文）と「降格受動文」（非ニ格受動文）に分けている。また、「昇格受動文」は「受影受動文」と「属性叙述受動文」に分けられている。

このうち、「受影受動文」は、「太郎が友人にばかにされた」、「太郎が友人に妻をばかにされた」のように、ガ格名詞（太郎）が有情物の場合、「太郎」は「友人にばかにされた」、「友人に妻をばかにされた」という出来事の結果として、前者は直接的、後者は間接的な心理的影響を被ることを明示的に表している。また、「その寺は翌年信長に焼き払われた」のように、ガ格名詞（その寺）が非情物の場合、「その寺」は「翌年信長に焼き払われた」という出来事の結果として、物理的影響を受けることを明示的に表している。

「属性叙述受動文」は、「この雑誌は、10 代の若者によく読まれている」のように、主題の「この雑誌」という非情物について、「10 代の若者によく読まれている」（人気がある）のような、有意義な属性を含意していることを明示的に表している（同:183-193）。

さらに、「降格受動文」は、「その寺は、9 世紀前半に建てられた」のように、寺を建てる動作主が表面に現れていないが、その存在が含意されている。「その寺は、9 世紀前半に A によって建てられた」のように、「によって」で動作主を表現してもいいが、西洋語の影響によって発達してきたものとされている。

次に、影山（2006）は、ニ受身文を次の〈表 4－2〉のように分類している。

〈表 4－2〉影山（2006）におけるニ受身文の意味分類

主語	分類	例文
有情物（人間名詞）	行為受影受身	●子供が犬に噛まれた。
	出来事受影受身	●私は雨に降られた。
非情物（無生物名詞）	状態変化受身	●隣の家が突風に屋根を吹き飛ばされた。
	所有変化受身	●金メダルが優勝者に贈られた。
	性質変化受身	●山頂は新雪に覆われた。
	状態性受身	●DHA は青魚に多く含まれている。

このように、影山（2006）は、主語の有生性によりニ受身文を分類している。

まず、有情物（人間名詞）を主語に取るニ格受身文を「行為受影受身文」と「出来事受

影受身文」とに分けている。「行為受影受身文」は、「子供が犬に噛まれた」のように、主語の「子供」が「犬」という動作主の「噛む」という行為を直接的に被ることを表している。これに対して、「出来事受影受身文」は、「私は雨に降られた」のように、主語の「私」が「降る」と直接的に関わらず、「雨が降る」という出来事全体を一方的に被っていることを表している。

また、非情物（無生物名詞）を主語に取るニ格受身文を「状態変化受身」、「所有変化受身」、「性質変化受身」、「状態性受身」に分けている。

「状態変化受身」は、「隣の家が突風に屋根を吹き飛ばされた」のように、「吹き飛ばす」が表す出来事によって主語の「隣の家」の状態が変わることを表している。「所有変化受身」は、「金メダルが優勝者に贈られた」のように、所有の移転を表している。なお、「優勝者は金メダルを贈られた」のように受け手を主語にすることで、主語の「優勝者」の変化（金メダルが象徴する経歴が優勝者に付与される）を表すことができる。「性質変化受身」は、「山頂は新雪に覆われた」のように、主語の「山頂」は、ニ格（あるいはデ格）名詞句「新雪」が表す指示対象と物理的に一体になって、「山頂」の新しい状態を作り出していることを表しており、「状態変化受身」と同じく変化と結果を含意している。「状態性受身」は「DHAは青魚に多く含まれている」のように、主語の「DHA」の恒常的な状態を表している。このように、「状態変化受身」、「所有変化受身」、「性質変化受身」は変化を表すのに対し、「状態性受身」は非変化を表している。

本研究では、受身文における誤用の起こり方を検討するために、受身文の分類を行うが（4.1.3 節）、基本的には、益岡（1987）の受身文の意味分類法を参考にし、さらに、非情物を主語に取るニ格受身文に関しては、主に影山（2006）の分類で補うこととする。

4.1.1.2　受身文における格の交替

日本語記述文法研究会（2009）は、受身文を「直接受身文」、「間接受身文」、「持ち主の受身文」に分け、それぞれの受身文における格の交替を詳しく説明している。なお、学習者の誤用の実態を考慮するため、ここでは、「直接受身文」、「間接受身文」の主な格パターンを取り上げ、「私は友人に肩をたたかれた」のような「持ち主の受身文」における格の交替は省略する。

Ⅰ．直接受身文

日本語記述文法研究会（2009:218）によると、「直接受身文」とは、「対応する能動文において、ヲ格名詞やニ格名詞などの補語として表される名詞を主語とし、能動文の主語（能動主体）を主語以外で表現する受身文である」とされる。典型的な意味特徴として、主語が動作主の行為によって直接的に心理的／物理的影響を受けることを表している。

また、日本語記述文法研究会（2009:220）では、「基本的な直接受身文は、主語を「が」、対応する能動文で主語だった名詞（能動主体）を「に」で表す文型をとる」、また、「能動主体は「によって」「から」「で」などで表すこともある」と指摘している。例えば、次のような例が挙げられる。

（1）	a. 友達が	弟を	たたいた。	（同:220）
	b. 弟が	友達に	たたかれて、（以下略）。	（同上）
（2）	a. 兄夫婦が	故郷の実家を	建て替えた。	（同上）
	b. 故郷の実家が	兄夫婦によって	建て替えられた。	（同上）

（3）	a. 先生が	私を	ほめた。	（同上）
	b. 私が	先生から	ほめられた（以下略）。	（同上）
（4）	a. 新緑が	山を	覆っている。	（同上）
	b. 山が	新緑で	覆われている（以下略）。	（同上）

このように、能動文の主語であるガ格名詞（「友達」、「兄夫婦」、「先生」、「新緑」）が受身文では降格し、「ガ，ニ」のようなニ格受身文、「ガ，ニヨッテ」、「ガ，カラ」、「ガ，デ」のような非ニ格受身文になる。

Ⅱ．間接受身文

日本語記述文法研究会（2009:236）によると、「間接受身文」とは、「対応する能動文の表す事態には直接的に関わっていない人物を主語とし、話し手がその人物と事態を主観的に関係づけ、事態から何らかの影響を被っていることを表現する受身文である」とされる。

典型的な意味特徴として、主語が出来事による心理的影響／物理的影響を一方的に被ることを表している。4.1.1.1 節で述べた「受影受動文」の一部と「出来事受影受身」はこれに相当する。

また、日本語記述文法研究会（2009:237）では、「間接受身文は、対応する能動文に含まれていない名詞を主語として「が」で表し、能動文で主語だった名詞（能動主体）を「に」で表す文型を取る」と指摘している。例えば、次のような例が挙げられる。

（5） a. ライバル社の鈴木記者が特ネタを書いた。（同:239）
b. 私はライバル社の鈴木記者に特ネタを書かれた。（同上）

このように、能動文に含まれていないガ格名詞（「私」）が増え、また、能動文の主語であるガ格名詞（「鈴木記者」）が受身文ではニ格に降格し、能動文のヲ格名詞はそのままの格で表されることで、「ガ，ニ，ヲ」のようなニ格受身文になる。

4.1.2　受身文の誤用に関する先行研究

受身文の誤用に関する先行研究として、顧・徐（1980）、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997、2010）、馮（1999）、王忻（2008）、米・米（2009）、望月（2009）、曹（2011）を取り上げ、受身文における「（ラ）レル」の誤用と格助詞の誤用に分けて紹介していく。

4.1.2.1　受身文における「（ラ）レル」の誤用

まず、受身文における「（ラ）レル」の誤用に関する先行研究の内容をまとめる。

①顧・徐（1980）

顧・徐（1980）は、中国における日本語科の低年次学生の作文、翻訳、会話における受身文の誤用例を分析している。

その結果、受身文における「（ラ）レル」の誤用には、例（6）～（8）のような「受身を使うべきでないところに受身が使われている」ケースと、例（9）のような「受身を使

うべきところなのに、受身が使われていない」ケース、例（10）のような自他動詞の混同（他動詞の受身を使うべきところで自動詞の受身が使われているケース）があるとされる。

（６）幸せな生活は私たち一家に送られている。
（７）社説が指摘されたように……
（８）姉は九つの時、よその人に要られて行った。
（９）そのころ、ひどく絞り上げて、一家のものは生きて行けなくなった。
（10）店に果物が沢山並ばれている。

誤用の原因として、まず、日本語への不十分な理解を指摘している。例えば、（６）は主語が非情物で、動作の主体が特定の個人である場合は受身文にならないことへ不十分な理解による誤用、（７）は敬語との思い違いによる誤用、（９）は受身を使わないと正反対の意味になるのを意識していないことによる誤用で、(10) は自動詞の受身は存在するもののごく限られていることへの理解不足による誤用とされる。
また、（８）のような、中国語と日本語との対応を知らないための、母語の干渉による誤用も指摘している。

②佐治（1992）

佐治（1992）は、『中国人の日本語作文に見られる誤用例集』、その他の作文、翻訳などのデータを用いて、受身表現における「れる・られる」（「（ラ）レル」）の誤用例を分析している。その結果、例（11）のような、「感動する」という心理の動きを表す動詞の受身形の誤用が多くあるとされる。

（11）私はこの事に感動された。

誤用の原因として、「感動する」という自動詞の受身形は間接受身になり、迷惑な意味を生じることへの不十分な理解が挙げられている。
また、心理の動きを表す動詞以外の動詞に関するもののうち、例（12）のように、顧・徐（1980）と似たような、自他動詞の混同で受身文を作ってしまった誤用があると指摘している。

（12）村の人びとは、広場に集まられてから、(以下略)。

この誤用の原因は、顧・徐（1980）と同じように、日本語への不十分な理解と解釈している。

③猪崎（1994）

猪崎（1994）は、中国語話者３名の半年間の作文を分析した結果、受身態（受身文）は比較的に多く使用されているが、受身態の誤用のパターンには例（13）のような「過剰使用」（使用の必要がないのに使用しているケース）と例（14）のような「欠」（使用すべきなのに使用していないケース）、例（15）のような授受表現を使用すべきところで受身態を使用してしまう誤用があると指摘している。

（13）その記者は、（中略）電気製品は、ふつうの家庭の必要に足りると言われている。

（14）文字を記録することが生み出してからだ。
（15）友達のお母さんはいつも彼を連れていろいろなおもしろい所へ行ったので、私も一緒に連れて行かれました。

（13）、（14）のような受身態の「過剰使用」や「欠」は、動詞と助詞の組み合わせの問題に関係していることが指摘されている。

④市川（1997）

市川（1997）は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者（アメリカ、フランス、中国、韓国、タイなど）の作文、会話などにおける誤用を分析している。

受身文の「（ラ）レル」の誤用例としては、「誤形成」（述語動詞の形態の誤り）、「混同」（受身形と自他動詞や使役形の混同）、「その他」（「迷惑受身」の誤用）のパターンの誤用があるとされる（同:162-165）。

また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、受身形と自他動詞の混同、すなわち、例（16）のような、自動詞か他動詞の代わりに、受身形にしなくてもいいところで受身形を使ってしまう誤用が多いことが分かる。

（16）田中様の明るい態度に大変感心された。

これは、受身形、自動詞、他動詞の三者の関係が、中国語を母語とする日本語学習者にとって難しいことを表しているとされる。

⑤市川（2010）

市川（2010）は、市川（1997）より誤用例を増やし（『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース　Ver.2』CD-ROM 版など）、外国人日本語学習者の誤用を分析している。

受身文の誤用のパターンは、「誤形成」、「混同」、「その他」に加え、「脱落」（受身形を使用しなければいけないのに使用していない）、「付加」（受身形を使用してはいけないところに使用している）のパターンもあるとしている。また、「混同」のパターンでは、受身と可能、「いただく」の混同も挙げられている（同:49-51）。さらに、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は、「混同」（受身形と自他動詞の混同）以外に、例（17）のような「脱落」、すなわち、受身形を使用しなければいけないのに使用していない誤用が多いことが分かる。

（17）交通事故の多発に対して交通安全の宣伝計画が実施している。

このような誤用は、文の中の主・述関係をうまく把握できないことを表していると指摘している。

⑥馮（1999）

馮（1999）は、日本語の受動文（受身文）の「構文文法学習」（どのような文法構造を持つ受動文が自然であるかの学習）について、質問紙調査（選択課題）を通して、中国語母語話者の日本語受身文の習得を困難にする要因について探っている。

その結果、受身構文文法の学習エラーは学習年数と共に減少しないことが明らかになっている。日本語では「映画の主人公に感動した」のような能動表現が自然であるのに対し、

中国語では、「映画の主人公に感動された」のような受動表現が自然であるというような、日本語と中国語の相違点が、中国語を母語とする日本語学習者の受動文の問題点となっており、受身構文文法の学習エラーの減少しにくい原因の一つが母語の干渉にあることが指摘されている。

⑦王忻（2008）

王忻（2008）は、中国人日本語学習者（日本語を専攻とする大学 3、4 年生、日本語専修学校上級コースの学生）の作文における誤用を分析した研究であり、受身の誤用は、ヴォイス（使役、受身、自発、やりもらい）の誤用分析の節で扱われている。

ヴォイスの誤用は、「過剰」（ヴォイス形式を使う必要がないのに使ってしまうケース）、「不足」（ヴォイス形式を使うべきなのに使わないケース）、「文の部分間の関係の混乱」（文の主語あるいは補語などの間の表現で混乱しているケース）、「混同」（ヴォイスの間での混同）という四つのケースにまとめられている（同:126）。受身の誤用は、すべてのケースに見られており、「（ラ）レル」の誤用に関わるのは、「過剰」、「不足」、「混同」のケースであり、「（ラ）レル」の「不足」が一番目立つ。

また、「（ラ）レル」の「過剰」の誤用の原因として、中国語で受身マーカーと組み合わせられる動詞と対応する日本語動詞は自動詞でも許されるというような、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉が挙げられている。

「（ラ）レル」の「不足」の誤用の原因としても、母語の干渉が挙げられている。例えば、例（18）のような誤用は、日本語において受身を使ったほうが自然であるが、中国語では受身のマーカーを使っても使わなくても意味が変わらないというような、両言語の相違点により生じているとしている。

（18）崇明島は工業地区として<u>開発しない</u>（以下略）

それに対して、「混同」の誤用は母語の影響を受けにくく、日本語への不十分な理解により生じると指摘している。

⑧米・米（2009）

米・米（2009）は、日中両言語の受身文の共通点と相違点を考察し、その結果を基に母語干渉により犯しやすい間違いを中心に作る調査（中級学習者 80 人を対象とするアンケート調査）を通して、中国語を母語とする学習者が受身文を学習する際に陥りやすい誤用の原因を明らかにしている。

その結果、日本語と中国語に相違点が見られるところでは、正解率が低く、誤用が起こりやすいとされる。

⑨望月（2009）

望月（2009）は、中国語を母語とする日本語学習者（在日留学生、上級レベル以上）による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス（動詞の自他、使役、受身、可能）の誤用分析を行っている。

そのうち、受身の誤用に関しては、受動形式の脱落（使うべきなのに使わない）による誤用が顕著であると指摘している。

誤用の原因は、中国語では、“黄老师 的 书 已经 <u>出版</u> 了”（黄先生の本はすでに<u>出版さ</u>

huánglǎoshī de shū yǐ jīng chū bǎn le

れた）のような「意味上の受身文」が許されるというような、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉にあるとされる。これは先の王忻（2008）の「（ラ）レル」の「不足」の誤用の原因の指摘と類似している。

⑩曹（2011）

曹（2011）は、中上級の「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース」を用い、日本語母語話者の受身形の使用実態との比較を通して、中国語母語話者の受身形の使用実態と、誤用および使用の回避の原因を明らかにしている。

誤用に関する分析結果として、まず、中国語母語話者の受身形の使用量が少ないと指摘している。また、受身の「（ラ）レル」の誤用のパターンは、例（19）のような誤形成、例（20）～（22）のような自他動詞との混同、例（23）のような使役受身文との混同であるとしている。

（19）第一、たばこをことが個人の自由と権利で、他人と関係がないと言わられる。
（20）煙は空気中に広がられて（以下略）。
（21）（前略）子供が元気に育てられる。
（22）このことは楚国の百姓に知られて、（以下略）。
（23）学校に退学されましたとよく聞きました。

誤用の原因として、まず、日本語への不十分な理解を指摘している。例えば、（19）は受身形の単純ミスによる誤用、（20）は受身形を持たない自動詞に受身形を付加したことによる誤用、（21）は有対自動詞とその自他対応のある他動詞の受身形との混同による誤用、（23）は間接受身と使役受身との混同による誤用とされる。また、例（22）のような誤用は、母語からの影響による可能性があることも指摘している。

以上の先行研究の内容をまとめると、次の〈表 4－3〉のようになる。

〈表 4−3〉先行研究における受身文の「（ラ）レル」の誤用

先行研究	学習レベル	誤用のパターン	誤用の原因
①顧・徐（1980）	（低年次）	● 使うべきでないところに使われているケース ● 使うべきところなのに使われていないケース ● 自他動詞の混同	●日本語への不十分な理解（主語が非情物で、動作の主体が特定の個人である場合は受身文にならないことへの不十分な理解など） ●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
②佐治（1992）	不明	●心理の動きを表す動詞の受身形の誤用 ●心理の動きを表す動詞以外の動詞の受身形の誤用（自他動詞の混同など）	●日本語への不十分な理解（自動詞の受身形は間接受身になることが分からないなど）
③猪崎（1994）	不明	●過剰使用 ●欠 ●授受表現を使用すべきところに受身態を使用している	●日本語への不十分な理解（動詞と助詞の組み合わせの問題に関係している）
④市川（1997）	初級・中級前半程度	●誤形成 ●混同 ●その他	●日本語への不十分な理解（受身形・自動詞・他動詞の三者の関係が分からない）
⑤市川（2010）	初級・中級前半程度	●誤形成 ●混同 ●その他 ●脱落 ●付加	●日本語への不十分な理解（受身形・自動詞・他動詞の三者の関係が分からない、文の中の主・述関係をうまく把握できない）
⑥馮（1999）	初級〜上級	※明示されていない	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
⑦王忻（2008）	大学 3、4年生	●過剰 ●不足 ●混同	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点） ●日本語への不十分な理解
⑧米・米（2009）	中級	※明示されていない	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
⑨望月（2009）	上級レベル以上	●脱落	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
⑩曹（2011）	中上級	●誤形成 ●自他動詞との混同 ●使役受身文との混同	●日本語への不十分な理解（受身形の単純ミスなど） ●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）

このように、さまざまなレベルの中国語を母語とする日本語学習者は、さまざまなパターンの誤用を起こしている。それぞれの研究において用語が違っているが、受身形を使う

べきなのに使わないケースと、受身形にしなくてもいいところで受身形を使ってしまうケースが共通して指摘されている。

また、誤用の原因も多種多様であるが、受身文における「(ラ) レル」の誤用は主に、日本語への不十分な理解と学習者の母語（中国語）の負の転移により生じていると考えられる。

4.1.2.2　受身文における格助詞の誤用

次に、上記の先行研究のうち、受身文における格助詞の誤用に関して言及している内容をまとめる。

顧・徐（1980）では、受身文における格助詞の誤用として、次のような誤用例を挙げている。

(24) 昨日街から学校に帰る途中、大雨から降られた。
(25) ゆうべ食卓に置いておいた肉が猫に食われた。

このように、例（24）は「から」と「に」の混用であり、例（25）は「迷惑の受身」における格助詞の間違いである。これらの誤用の原因として、いつ「から」を使うべきかを理解していない、「迷惑の受身」を正しく意識することができないといった点を指摘している。

市川（1997）は、受身文における助詞の誤用として、「を」「に」「が」の誤りを挙げている（同:164-165)。また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、次の例（26)、(27）のような、「×が→○を」、「×に→○によって」の誤用が見られる。

(26) 政治改革をやると言った手前、何かの実績を見せないと、不信が（→を）持たれます。
(27) モナリザはダビンチに（→によって）かかれた。

誤用の原因としては、受身文における主語関係の混乱、何かを作り出す意味を持つ動詞には「によって」が求められること（同:165）が指摘されている。市川（2010）でも、同じ結果を示している。

馮（1999）は、中国人日本語学習者の受動文（受身文）における動作主マーカー（「に」「から」「で」「によって」）の学習について、選択課題を用いた検証により、動作主マーカーの学習のエラーが学習年数と共に減少していくことを指摘している。挙げられている例文から、どのような例でマーカー間の選択の混同が起こるのか、ある程度推測できるが、実際に学習者がどのような誤用例を産出するのかは分からない。

王忻（2008）は、「文の部分間の関係の混乱」というパターンで、受身文における格助詞の誤用として、原因を表すニ格の誤用と、例（28）のような「もちぬしのうけみ」における誤用を挙げている。

(28) わたしの（は）髪は（を）母に切られました。

誤用の原因としては、動作主は原因を表すときに、ニ格を使うべきことを理解していないこと、「もちぬしのうけみ」は中国語に対応しにくいことを指摘している。

曹（2011）は、受身文における格助詞の誤用として、次の例（29）～（31）のような、「を」「が」「に」「で」の誤りを挙げている。

（29）数年前、ドイツではあのたばこを吸う試合を（→が）行われた。
（30）新年は一年中の一番重要なお祭りで中国人に「春節」という美しい名前を呼びられて（→で呼ばれて）、（以下略）。
（31）冬に大雪が降ったら、屋の上や、町や、樹木や、みんな雪を（→に）覆われます。

このような誤用の原因については詳しく分析されておらず、「複雑な構造を持つ受身形における単純ミス」のようにまとめているにとどまる。

以上で挙げている内容をまとめると、次の〈表 4－4〉のようになる（格助詞の誤用について言及していない研究は、誤用のパターン、誤用の原因を「―」で表記する）。

〈表 4－4〉受身文における格助詞の誤用

先行研究	学習レベル	誤用のパターン	誤用の原因
①顧・徐（1980）	（低年次）	●「から」と「に」の混用 ●「迷惑の受身」における格助詞の間違い	●いつ「から」を使うべきかを理解していない、「迷惑の受身」を正しく意識することができない
②佐治（1992）	不明	―	―
③猪崎（1994）	不明	―	―
④市川（1997）	初級・中級前半程度	●「が→を」 ●「に→によって」	●受身文における主語関係の混乱、何かを作り出す意味を持つ動詞には「によって」が求められることが分からない
⑤市川（2010）	初級・中級前半程度	同上（④）	同上（④）
⑥馮（1999）	初級～上級	※明示されていない	※明示されていない
⑦王忻（2008）	大学 3、4 年生	●文の部分間の関係の混乱	●動作主は原因を表すときに、ニ格を使うべきことを理解していない、「もちぬしのうけみ」は中国語に対応しにくい
⑧米・米（2009）	中級	―	―
⑨望月（2009）	上級レベル以上	―	―
⑩曹（2011）	中上級	●「を→が」 ●「を→で」 ●「を→に」	※詳しく分析されていない

以上のように、受身文における格助詞の誤用も、ある程度は提示されているが、誤用のパターン、原因などについての議論は不十分だと考えられる。

4.1.2.3　先行研究で残された課題

以上のような従来の研究を見ると、まず、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の「(ラ) レル」の誤用は、誤用のパターンとして、特に、受身形を使うべきなのに使わない誤用と、受身形にしなくてもいいところで受身形を使ってしまう誤用が目立つことが分かる。

また、これらの誤用は、日本語への不十分な理解、つまり、目標言語である日本語の構造そのものの理解ができていない（例えば、受身形、自動詞、他動詞の三者の関係がよく分からない）ことと、学習者の母語（中国語）と日本語の異なる点で生じる母語の負の転移によって起こるとされていることも分かる。

これに対して、受身文における格助詞の誤用も指摘されているが、扱われている例文数が少なく、誤用のパターン、原因などについての議論も未だ不十分だと考えられる。

このように、従来の研究においても、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用の実態はある程度明らかになっているが、誤用のパターンと原因のどちらかに言及したものが多く、両者を詳しく対応させて分析した研究がまだ少ない。また、第２章で見たとおり、ヴォイスは述語と格助詞が連動する現象であるが、受身文における「(ラ) レル」の誤用と格助詞の誤用の両面から誤用を捉える研究があまり現れていない。特に、受身文における格助詞の誤用についての議論は未だ少ない。したがって、より多くの誤用例から、受身文における誤用のパターンの再整理を「(ラ) レル」、格助詞の両面から行い、今までの研究で詳しく論じられていない母語の負の転移のパターンおよび日本語の受身文の未習得の部分の特定をする必要がある。

そこで、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用を体系的に分析することで、誤用のパターンの再確認や誤用の原因のより詳しい分析をするとともに、受身文の意味と誤用（「(ラ) レル」の誤用、いわゆる「述部の誤用」）との関係についても見ていく。

4.1.3　本研究における受身文の扱い

本項では、本研究における受身文の意味分類と、本研究で扱う受身文の格を提示する。

4.1.3.1　本研究における受身文の意味分類

本研究では、受身文における誤用の起こり方を検討するために、従来の受身文の意味分類を踏まえて、まず受身文の分類を行う。

基本的には、4.1.1.1 節で紹介した益岡（1987）の受身文の意味分類法を参考にし、さらに、非情物を主語に取るニ格受身文に関しては、主に影山（2006）の分類で補うこととする。

具体的には、次の〈表4－5〉のような受身文の意味分類を設定した。表中の例文は、北京日本学研究センター（2003)『中日対訳コーパス第一版（CD-R1)』の実例をもとに筆者が

作成したものである。すべて日本語母語話者による添削済みである。

〈表 4－5〉受身文の意味分類

受身文の意味分類	例文
①不利益・被害（直接物理･心理的受影）	●彼女はその男に殴られた。 ●僕は子供のとき、よく親父に叱られていた。
②受益・恩恵（直接物理･心理的受影）	●わたしはお父さんに育てられました。 ●お母さんにほめられた。 ●先生の講義を聴き、魅了される。
③単純動作描写（直接物理･心理的受影）	●暗闇の中を彼にかかえられて歩いた。 ●花子は､太郎から言われたように､十時に､駅の改札口に行った。
④迷惑（間接物理･心理的受影）	●雨に降られた。 ●おれを御覧よ。母親には死なれるし、子供もいない。
⑤所有の変化	●私の手にお金が渡された。 ●私は究竟頂の鍵を渡された。
⑥創作・創造	●この地理書はイタリア人の耶蘇会士によって書かれた。 ●一五八五年に、この塔が建てられた。 ●家族はお互いに相手が不可侵の場をもっている、という認識が形成された。
⑦状態変化	●人参がみんなに踏みつぶされてしまった。 ●山は赤松に覆われた。 ●日本の実情にそわなかった改革は変更された。
⑧状態・属性描写	●日本語は漢字と仮名で構成されている。 ●本国において、海外の仕事というものがほとんど理解されていない。 ●中国の現代詩・当代詩は世界の人々に読まれている。
⑨その他	●今年九月に北京で開催されたシンポジウムも盛況をきわめた。 ●疑問とした箇所が明快に説明された。

〈表 4－5〉のうち､①～④は主語（被動作主）が有情物の受身文である。これは､4.1.1.1 節で紹介した益岡（1987）の「受影受動文」（〈表 4－1〉参照）の一部に相当し、有情物主語の心理的受影に加え、「殴られた」などのような物理的受影を表す受身文も含む。また、④は 4.1.1.2 節で紹介した間接受身文に相当する。

⑤は影山（2006）の「所有変化受身」に相当する。「お金」のような移動物を主語とする文と、「私」のような受け手を主語とする文の両方を含むため、主語（被動作主）は非情物でも有情物でも成り立つ。

⑥～⑨は主語（被動作主）が非情物の受身文である。⑥は、益岡（1987）の「降格受動文」に相当する。「地理書」､「塔」のような具体物の創作・創造だけでなく、「認識」などのような抽象物も含め、「創作・創造」を広く捉える。

⑦は、影山（2006）の「状態変化受身」､「性質変化受身」（〈表 4－2〉参照）と益岡（1987）の「受影受動文」の一部（非情物主語の物理的受影）とに相当する。「人参」､「山」のよう

な具体物と「改革」のような抽象物の状態変化を表す受身文を含む。

⑧は、影山（2006）の「状態性受身」と益岡（1987）の「属性叙述受動文」に相当する。変化のない、特定のものや抽象物の状態、あるいは、不特定多数の事象を表す。

⑨は、益岡（1987）と影山（2006）のどちらの分類でもカバーされていない受身文であり、主に、特定の動作に関わるが、動作主に関心がない場合が多い。

これらのうち、①～④、⑥は受身文の典型的な意味用法と言える。特に①「不利益・被害」、②「受益・恩恵」、④「迷惑」、⑥「創作・創造」といった意味用法は、日本語教育でもよく取りあげられている。

以下ではこの意味分類に従い、受身文における助動詞「(ラ) レル」の誤用（「述部の誤用」）の分析を進める（4.2 節）。

4.1.3.2　本研究で扱う受身文の格

4.1.1.2 節でも述べたように、日本語の受身文は、「ガ，ニ」構文、「ガ，ニヨッテ」構文、「ガ，カラ」構文、「ガ，デ」構文、「ガ，ニ，ヲ」構文のような文型をとる。そのため、学習者の使用例では、「ガ」、「ニ」、「ヲ」、「ニヨッテ」、「カラ」、「デ」といった格の誤用が起こりうると考えられる。特に、どのような場合に「ニ」を使うべきか、どのような場合に「ニヨッテ」、「カラ」、「デ」のどれを使うべきか、あるいは、どのような場合にヲ格を残留してはいけないか、どのような場合にヲ格の残留は許されるか、といったような判断の困難により生じる誤用が予測される。

このため、本研究では、受身文において格の交替に関わる格助詞のうち、「ヲ」「ニ」の誤用を中心に調査・分析する。また、実際に入手できるコーパスデータの状況も考慮して、中でも特に、「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）に焦点を当て、調査・分析を行う（4.3 節、4.4 節）。

4.2　述部の誤用

以下では、具体的な誤用の分析を行っていく。

本節では、受身文における「述部の誤用」（「(ラ) レル」の誤用）の分析を行う。

まず、「述部の誤用」のパターンについて、4.1.2.1 節で概観した先行研究から、学習者の「(ラ) レル」の誤用はさまざまがパターンがあり、特に、「(ラ) レル」を使うべきなのに使わないケースと、「(ラ) レル」を使わなくてもいいところで使ってしまうケースで誤用を起こしていることを見た。また、王忻（2008）では、ヴォイスの誤用を、「不足」、「過剰」、「混同」、「文の部分間の関係の混乱」という四つのケースにまとめており、述部の誤用に関わるのは「過剰」、「不足」、「混同」の三パターンで指摘されている。

本研究で扱うデータでも、王忻（2008）の分類は、受身文、使役文、可能構文の誤用の整理や分析に適用できることが確認できたため、本研究では、主にこの分類を参考にしながら、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」のパターンを「欠如」、「過剰」、「混同」にまとめることにする。さらに、受身文における「述部の誤用」（「(ラ) レル」の誤用）には、「欠如」、「過剰」、「混同」のほかに、顧・徐（1980）の自他動詞の混同、市川（1997、2010）の「誤形成」に類似したものも見られたため、これを「その他」としてま

とめる。

また、このうち、「混同」に関しては、コーパスのタグ情報から得られるヴォイスの混同の範囲、すなわち、「受身」と「使役」、「可能」、「授受」、「使役受身」の各構文との混同を扱うこととする。「格助詞の誤用＋述部の誤用」も同様である。

受身文における「述部の誤用」（「（ラ）レル」の誤用）の具体的な分類は、次の〈表 4－6〉のようになる。

〈表 4－6〉受身文の誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン		定義	誤用例[11]
欠如		受身の「（ラ）レル」を使用すべきなのに使用していない。	子供は生まれた時から両親に〈育てた→育てられた〉ほうがいいです。（作文）
過剰		受身の「（ラ）レル」を使用する必要がないのに使用している。	その人のやさしさに〈感動された→感動した〉私は「世の中、やはりいい人が多いな」と思った。（8 級試験）
混同		受身の「（ラ）レル」と他のヴォイスとを混同している。	女性にとって、家庭と仕事を両立〈される→させる〉のは難しい。（感想文）
その他	元の動詞の誤り	受身文は作れているが、動詞の選択を間違えている。	漢字が中国から日本に〈伝われる→伝えられる〉前「おに」の発音は既に日本の人々に使用されていた。（卒論）
	述部の形態の誤り	述部で使われている元の動詞に問題はないが、受身の「（ラ）レル」の形態を間違えている。	北京の大気汚染問題は世界で注目〈しられた→されている〉。（作文）
	品詞の誤り	動詞ではない語で受身文を作っている。	多くの地方に旅行して、見聞を書いたり自分の人生を〈豊れる→豊かにする〉。（8 級試験）

上記の四つのパターンのうち、「欠如」、「過剰」、「混同」は、受身の助動詞「（ラ）レル」の有無や、他のヴォイスとの混同に関わる誤用であり、助動詞「（ラ）レル」に加えて元の動詞が訂正されている場合も含む。「その他」は、受身文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。

これらのパターン別の誤用例の分布は、次の〈表 4－7〉の通りである。

[11] 「（ラ）レル」の誤用箇所に付与されている研究タグは省略した。また、括弧内に誤用例の文体を示す。

〈表 4－7〉誤用例の分類：受身文の誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン	誤用例数	
欠如	379	46.45%
過剰	381	46.69%
混同	48	5.88%
その他	8	0.98%
合計：	816	100%

〈表 4－7〉から、受身文における「述部の誤用」の四つのパターンの分布は、「過剰」、「欠如」、「混同」、「その他」という順になっていることが分かる。

さらに、4.1.3.1 節の〈表 4－5〉に示した受身文の意味分類と、被動作主・動作主の有生性の別に誤用例の分布を、例数の多い順に示すと、次の〈表 4－8〉の通りである。

〈表 4－8〉誤用例の分類：受身文の意味（「述部の誤用」）

受身文の意味分類	被動作主	動作主	誤用例数		
⑧状態・属性描写	非情	非情	24	279	34.19%
	非情	有情	255		
⑨その他	非情	非情	18	228	27.94%
	非情	有情	210		
⑦状態変化	非情	非情	17	81	9.93%
	非情	有情	64		
③単純動作描写	有情	有情	64	73	8.95%
	有情	非情	9		
⑥創作・創造	非情	有情	59	66	8.09%
	非情	非情	7		
②受益・恩恵	有情	有情	23	49	6.00%
	有情	非情	26		
①不利益・被害	有情	有情	22	35	4.29%
	有情	非情	13		
⑤所有の変化	非情	有情	4	4	0.49%
④迷惑	有情	有情	1	1	0.12%
		合計：	816		100%

以上の〈表 4－7〉と〈表 4－8〉から見ると、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「述部の誤用」は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすいと言える。また、「不利益・被害」、「受益・恩恵」といった典型的な意味用法よりも、「状態・属性描写」を表す非情物主語の受身文の割合が高いことが分かる。

以下では、受身文における「述部の誤用」について、誤用例数の多い順に、「過剰」、「欠如」、「混同」、「その他」の誤用の具体的な実態とその原因を考察していく。

4.2.1　過剰

まず、受身文における「(ラ) レル」の「過剰」のパターンの誤用について、例数の多い順に受身文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 4－9〉のようになる。

〈表 4－9〉「(ラ) レル」の「過剰」の誤用の意味分類別分布

受身文の意味分類	被動作主（対象）	動作主（能動主体）	誤用例数		
⑨その他	非情	非情	14	110	28.87%
	非情	有情	96		
⑧状態・属性描写	非情	非情	10	109	28.61%
	非情	有情	99		
⑦状態変化	非情	非情	13	49	12.86%
	非情	有情	36		
③単純動作描写	有情	有情	43	49	12.86%
	有情	非情	6		
②受益・恩恵	有情	有情	11	31	8.14%
	有情	非情	20		
⑥創作・創造	非情	有情	17	19	4.99%
	非情	非情	2		
①不利益・被害	有情	有情	3	9	2.36%
	有情	非情	6		
⑤所有の変化	非情	有情	4	4	1.05%
④迷惑	有情	有情	1	1	0.26%
		合計：	381		100%

〈表 4－9〉から、受身文における「(ラ) レル」の「過剰」の誤用は、「その他」、「状態・属性描写」の意味を表す非情物主語の受身文に最も多く見られることが分かる。

「創作・創造」のような典型的な意味用法に関しては、特定の動詞を使う場合が多いが、「その他」、「状態・属性描写」のような非典型的な意味用法に関しては、さまざまな意味タイプに属する動詞が用いられると考えられる。このため、より詳しい分析のためにはそれぞれの文の表している意味だけではなく、動詞のレベルまでそれぞれの意味用法を持つ文の内容を分析する必要がある。

4.1.2.1 節で紹介した先行研究においても、自他動詞の混同や、受身文、自動詞、他動詞の三者の関係をうまく把握できていないことにより生じる誤用が指摘されていた。ここでも、以下、動詞の項構造と意味タイプの両面から、動詞のレベルの分析を行っていく。

まず、構造の側面、いわゆる動詞の自他から誤用の分析を進めていく。

「(ラ) レル」の「過剰」の誤用に対して、訂正された後の正用として示されている動詞を自他の区別から分類すると、〈表 4－10〉のようになる。

〈表 4－10〉「（ラ）レル」の「過剰」の正用の分布

正用	例数	
他動詞文	197	51.71%
自動詞文	173	45.41%
その他	11	2.89%
合計：	381	100%

〈表 4－10〉のように、「（ラ）レル」の「過剰」は主に他動詞文や自動詞文に訂正されている。このため、以下では、正用が他動詞文の場合と自動詞文の場合の順に、誤用例を挙げながら、受身文における「（ラ）レル」の「過剰」を考察していく。

4.2.1.1　正用が他動詞文の場合

まず、受身文における「（ラ）レル」の「過剰」の正用が他動詞文であるパターン、すなわち、本来は他動詞文を使うのが適切であるのに、不要な「（ラ）レル」を加えてしまっている誤用を見る。このパターンの誤用として、次のような例が挙げられる。

（32）8 級試験（0069）／φ／過剰[12]：
父は「性格によって、人生が違う」といつも私に〈言われる→言う〉。
（33）作文（0058）／学習歴 2 年半／過剰：
それ以外に、チベット族の人々も私に深い印象を与え〈られ→〇[13]〉た。
（34）作文（0057）／学習歴 1 年半／過剰：
日本人は心をこめてすばらしいアニメを〈作られる→作っている〉。
（35）修論（0052）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
青木京子までの研究では、部分的に一、二の作品を取り上げ、〈考察され→考察し〉ただけで、その女性像は明らかに浮かび上がってきたとは言えなかった。
（36）作文（025）／学習歴 1 年半／過剰：
今さら、人々は公害問題を重要視〈される→する〉ようになった。
（37）作文（0057）／学習歴 1 年半／過剰：
物語と背景から、非常に不思議な忍者の世界を〈作られる→作っている〉。
（38）感想文（0164）／学習歴 4 年／過剰：
スピードや量を重視〈される→する〉生活の中で、じっくり物事を考え、書いていく心を失っている。

例（32）～（38）のうち、例（32）～（36）では、下線で示したように、「（ラ）レル」の過剰使用により生じる「受身文」の動作主（正用の能動文における能動主体）が出現している。一方、例（37）、（38）には、動作主が出現していない。

このような動作主の出現状況にかかわらず、すべての誤用例に共通している問題点は、（32）～（38）のように、構文上は能動文であるのに、「（ラ）レル」を使っている点である。つまり、名詞側は能動文の格表示（例えば「ガ，ヲ」）となっているのに対して、動詞側に受身の「（ラ）レル」が付加されているため、「（ラ）レル」が「過剰」と判定されてい

[12] 例文には、「文体（ファイル番号）／学習歴／誤用のパターン」の形で情報を付した。情報が欠落している場合は、「φ」で示している。また、誤用箇所の研究タグは省略している。
[13] タグ中の「〇」は左側の誤用タグが不要であることを表す。

る。これらの学習者の誤用では、文のタイプと「(ラ) レル」の有無という動詞の形態的タイプとがねじれていると分析できる。

なお、このような誤用は、4.1.2.1 節で見た猪崎 (1994)、曹 (2011) にも指摘があるが、猪崎 (1994) では、「過剰使用」、「欠」というパターンとして扱われており、動詞と助詞の組み合わせの問題に関係しているという分析にとどまっており詳しく論じられていない。曹 (2011) では、「他動詞との混同」というパターンとして扱われ、「視点の不統一による、文全体のねじれ」という分析にとどまっており、詳しく議論されていない。

次に、誤用が見られた具体的な動詞の意味タイプを見る。これは、学習者の誤用が、どのような意味タイプの他動詞で起こるか、どのような意味タイプの自動詞で起こるのかを確認するためである。

志波 (2015:15-25) で挙げられている動詞の分類を参考にし、誤用例における動詞の意味タイプを分類した (以下でも同様)。意味タイプの上位 5 位までをリストの形で示すと、次の〈表 4－11〉のようになる。

〈表 4－11〉誤用例における動詞のタイプ（正用が他動詞の場合）

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	非漢語サ変動詞	例数	漢語サ変動詞	例数	非漢語サ変動詞	漢語サ変動詞	合計
言語活動	言う	15	指摘する	9	28	15	43
	呼ぶ	4	回答する	1			
	教わる	3	記載する	1			
	述べる	2	教育する	1			
	表す	1	説明する	1			
	描き出す	1	表記する	1			
	書く	1	論述する	1			
	訳す	1					
授受	与える	6	盗作する	1	13	1	14
	受ける	5					
	奪う	1					
	賜わる	1					
生産	作る	5	設計する	3	9	5	14
	書く	3	偽装する	1			
	生み出す	1	執筆する	1			
思考	思い出す	5	観察する	1	7	7	14
	思う	1	感知する	1			
	調べる	1	強調する	1			
			考察する	1			
			推計する	1			
			認識する	1			
			分類する	1			
感情評価的態度	癒す	1	尊敬する	2	4	5	9
	信じる	1	謳歌する	1			
	好く	1	重視する	1			
	誇る	1	重要視する	1			
その他					86	17	103
				合計：	147	50	197

〈表 4－11〉で示したように、意味タイプで言えば、「言語活動」、「授受」、「生産」、「思考」、「感情評価的態度」を表す動詞に学習者の「過剰」の誤用例が多い。

まず、最も多い「言語活動」の動詞に生じた誤用例は、「言う」、「指摘する」などに多く見られるが、著名な人物に対する敬意を表すための、尊敬の「（ラ）レル」との混用の可能性がある[14]。次の例（39）のように、人物名（作家など）が入っている例は計 10 例ある。

[14] 4.1.2.1 節で見た顧・徐（1980）において、「受身を使うべきでないところに受身が使われている」とされるケースの、「社説が指摘されたように（以下略）」のような誤用例には人物名が入っていないが、性質が類似している誤用だと考えられる。

(39)　修論（0048）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
守屋は「配慮表現」の中で聞き手の負担を和らげる配慮についてのべ〈られ→〇〉ている。

これ以外の「言語活動」の誤用例での「(ラ) レル」の過剰使用には、項と項の間の意味関係が関わっていると考えられる。金（2012）は、次のような、言語活動を伴う事柄を表す動詞の、有情物主語の受身文の例を挙げている。

(40)　私はお母さんに（牛乳をとってきて）と言われた。

例（40）のように、主語に立っている人（「私」）は、「述語動詞によって表現される動作が向かっていく相手または対象で、全体の事柄を能動文で表す場合、ニ格またはヲ格をとって文の中に登場しうるという点で、すでに構文的な関わりを持っているといえる」と指摘している（同:56)。

学習者の誤用例（32）の場合、正用と誤用の対応関係を示すと、次の（41）のようになる。

(41)　a. 正用：父は　私に　「性格によって、人生が違う」と　いつも言う。
　　b. 誤用：父は　私に　「性格によって、人生が違う」と　いつも言われる。

このように、誤用例（41b）では、本来の「発話者」である「父」（(41a）における能動主体、受身文においてニ格を取る動作主）が「発話の対象」（(41a）における動作の受け手、受身文においてガ格を取る被動作主）として描かれている。すなわち、正用の能動文（41a）で間接目的語に立つ「発話の対象」である「私」が受身文の主語に繰り上げられていない。これは、「発話の対象」と「発話者」との関係をうまく把握できないことによって、「(ラ) レル」を「過剰」に使用している例だと捉えることができる。

「授受」の例（33）についても同様に考えられる。正用と誤用の対応関係を示すと、次の（42）のようになる。

(42)　a. 正用：チベット族の人々が　私に　深い印象を　与える。
　　b. 誤用：チベット族の人々が　私に　深い印象を　与えられる。

（42b）では、「与え手」である「チベット族の人々」（(42a）における能動主体、受身文においてニ格を取る動作主）と「受け取り手」である「私」（(42a）における動作の受け手、受身文においてガ格を取る被動作主）が逆になっている。正用の能動文（42a）で間接目的語に立つ「受け取り手」である「私」が、受身文の主語となる必要がある。これは「受け取り手」と「与え手」との関係をうまく把握できないことによって生じている誤用と考えられる。

このように、「言語活動」と「授受」の動詞は、能動文でも受身文でも「ガ，ニ，ト／ヲ」文型を取る 3 項動詞であるが、能動文のニ格名詞句が受身文でガ格主語にならない誤用が多く見られる。このような誤用の原因として、3 項動詞のニ格名詞句相当の名詞句が主語となる受身文が学習者の母語である中国語に存在しないことが関係する可能性もある。例えば、誤用例数が一番多い「言う」について、『中日対訳コーパス第一版』に収録されてい

る例[15]を示す。

(43) Wǒmen gǎnjǐn shǎn zài yìbiāner dōu yǒudiǎner liǎnhóng níbīn dī dī de shuō zhè jǐ wèi
我们 赶紧 闪 在 一边儿，都 有点儿 脸红 。倪斌 低低 地 **说**：“这 几位
shì dìqū de míngjué zài xiǎo dìfāng yǒu tā men zhèyàng de gōng fu mán bù róng yì
是 地区 的 名角 。在 小 地方，有 她们 这 样 的 功 夫，蛮 不 容 易
de dà jiā jiù yòu huí guò tóu qù kàn míngjué
的。”大家 就 又 回 过 头 去 看 名 角。／ぼくらは赤い顔をしてこそこそとかたわらに避けたが、倪斌に、「あの人たちは地区でも有名な女優さんだ。ここではあの人たちの芝居なんてめったに見られないんだぜ」と**言われ**、慌てて彼女たちを振り返った。

『棋王／チャンピオン（棋王）』

このように、中国語では、“倪斌（対我们）说～”のような「能動主体（発話者）ガ 対象（発話の対象）ニ～ト言う」という能動文の構造を取り、日本語の「ぼくらは倪斌に～と言われる」のような「被動作主（発話の対象）ガ 動作主（発話者）ニ～ト言われる」という受身文の構造が存在しない。つまり、中国語には、例（43）の日本語のような複数の文の接続構造で主語の統一をするための受身文がない[16]。そのため、学習者が日本語を産出する際、能動文を受身文にしようとするが、「発話の対象」を被動作主にし、主語に繰り上げる意識がない可能性がある。このように、先の（32）のような誤用には、母語の負の転移によって生じた可能性も考えうる。

一方、(34) ～ (38) のような「生産」、「思考」、「感情評価的態度」の動詞が用いられている誤用例と、その他の意味タイプを持つ動詞の誤用例では、結果目的語のヲ格名詞句(「アニメを」、「作品を」、「公害問題を」、「忍者の世界を」、「スピードや量を」) が文中に表れている例が多い。このような誤用と正用の対応は次の（44）のようになる。

(44)	a. 誤用：日本人<u>は</u>	すばらしいアニメ<u>を</u>	作られる。
	b. 正用：日本人<u>は</u>	すばらしいアニメ<u>を</u>	作る。
	c. 正用：日本人<u>によって</u>	すばらしいアニメ<u>が</u>	作られる。

（44a）のような誤用に対して、(44b) のように格体制はそのままで動詞側を能動形にするか、(44c) のように「(ラ) レル」はそのままで受身文の格体制を訂正するか（「ガ，ヲ」を「ニ／ニヨッテ，ガ」に直す）すれば、どちらでも文として成り立つが、添削者はおそらく前後の文脈を考慮したうえで、(44b) のように、受身の助動詞「(ラ) レル」が過剰であるという訂正を行っている。このような誤用は、直接受身文で格の交替が必須であることへの理解が不十分であることにより生じていると考えられる。同質の誤用は受身文における格助詞の誤用でも見られるが、詳しい分析は 4.3 節で行う[17]。

---

15 北京日本学研究センター（2003）『中日対訳コーパス第一版』に収録されている中国語の小説などの例を用いる。中国語原文／日本語訳文の形で示す。後の節の使役文、可能構文における母語の負の転移による誤用の分析で示す例も同様である。

16 中島（2007:74）では、「日本語は文の結合上、前件を受身文にすることによって前件の主語と後件の主語の同一性が保たれる。」と指摘している。また、中国語では事実をそのまま描写するため、前件と後件が違う主語を取る他動詞能動文となる、と指摘している。

17 本項で分析した誤用例に関して、学習者には受身文として使用している意識がない、つまり、受身形と能動形を混同している可能性もあるが、この可能性の分析、ならびに誤用が見られたこれらの他動詞が受身文に比較的に使われやすい理由の分析は、正用例との照会が必要なため、今後の課題としたい。

4.2.1.2　正用が自動詞文の場合

次に、正用が自動詞文であるパターン、すなわち、本来は自動詞文を使うのが適切であるのに、不要な「(ラ) レル」を加えてしまっている誤用を見る。このパターンには、次の3種類の誤用が見られる。

１）他動詞の受身文と自動詞文の選択に関わる誤用
２）自動詞から直接受身文を作る誤用
３）母語の負の転移による誤用

１）と２）は学習言語への理解の不十分さから生じていると考えられる誤用で、３）は母語の負の転移が疑われる誤用である。
以下、それぞれ検討していく。

１）他動詞の受身文と自動詞文の選択に関わる誤用

日本語記述文法研究会（2009:235）によると、「直接受身文の重要な特徴の１つは、対応する能動文の主語を背景化する働きである。(中略) したがって、直接受身文と能動文を比べると、直接受身文では文中に表現される名詞の数が１つ減り、結果的に自動詞文と似た文型をとる場合がある」とされる。例えば、次のような例が挙げられる。

(45) 他動詞文：　大企業が駅前に大きなビルを建てた。　(同:235)
(46) 直接受身文：　駅前に大きなビルが建てられた。　(同上)
(47) 自動詞文：　駅前に大きなビルが建った。　(同:236)

このように、他動詞文に比べて項が１つ少ないという点で、例（46）のような他動詞の直接受身文と例（47）のような自動詞文は形が類似している。しかし、両者は、特定する必要がない動作主「大企業」が背景化されているか（直接受身文)、動作主がもともと描写されておらず「ビル」の出現を表しているか（自動詞文）という点で異なっている。
実際の学習者の誤用例でも、次の例（48）のような、他動詞の直接受身文と自動詞文の選択で迷っていると考えられる例(計37例)が見られる。なお、4.1.2.1節で見た曹(2011)の「自動詞との混同」というパターンの誤用の一部（誤用例：子供が元気に育てられるようにお祈りする）はこのタイプに相当すると考えられる。

(48)　作文（12）／学習歴２年半／過剰：
集団の特徴は集団に溶け込むことに日本人の性格が〈表されている→表れている〉。

例（48）は、非情物（「日本人の性格」）の表出を、非情物主語の状態として描写する直接受身文によって表そうとした誤用であり、誤用の結果、あたかも動作主の存在が含意されているように見えてしまっている。しかし、(48) のような文では、動詞に関わる項が非情物である主語（「日本人の性格」）しかなく、自動詞文を使うのが妥当だと判断されている。このように、直接受身文と自動詞文のそれぞれの役割やニュアンスの違いが理解できていないことで、両者の混用が起こっていると考えられる。

２）自動詞から直接受身文を作る誤用

正用が自動詞文の場合には、自動詞から直接受身文を作る誤用も目立つ。

(49)　修論（0074）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
現在になって、温泉は、日本全国に〈普及され→普及し〉たばかりでなく、その量の多さと多様化で世界においても非常に有名になった。

(50)　作文（0074）／学習歴 1 年半／過剰：
19 世紀後半、江戸幕藩体制が〈崩壊され→崩壊し〉、中央集権統一の国家を建設して、日本で資本主義が形成されました。

(51)　修論（0091）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
現在でも弁天岩、高山岩などの巨石信仰は民間で〈伝われ→伝わっ〉ている。

例（49）～（51）は、非情物の動き・変化を、非情物主語の状態変化などを描写する直接受身文で表そうとした誤用である。このような誤用が見られた具体的な動詞を、意味タイプの上位 3 位までリストの形で示すと、〈表 4－12〉のようになる。

〈表 4－12〉誤用例における動詞のタイプ（正用が自動詞の場合）

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	非漢語サ変動詞	例数	漢語サ変動詞	例数	非漢語サ変動詞	漢語サ変動詞	合計
出現			定着する	9	0	27	27
			普及する	9			
			派生する	6			
			完成する	1			
			実現する	1			
			成立する	1			
変化	替わる	1	拡張する	4	6	12	18
	代わる	1	加速する	1			
	変わる	1	希薄化する	1			
	倒れる	1	多様化する	1			
	なる	1	破壊する	1			
	伸びる	1	発展する	1			
			復活する	1			
			崩壊する	1			
			融合する	1			
言語活動	伝わる	8			8	0	8
その他					36	13	49
				合計：	50	52	102

〈表 4－12〉のように、誤用が見られた動詞は、対応する他動詞がある有対自動詞（例:伝える／伝わる）と、形態上自他の区別が分かりにくい漢語サ変動詞に集中している。このため、自動詞を他動詞として使う、いわゆる自他の混同が生じている可能性が考えられる。

このような誤用は、特に非情物主語を取る文に集中している。例えば、(49) では自動詞（「普及する」）で非情物（「温泉」）を描写すべきところを、「普及する」を他動詞として捉え、その「他動詞」から、非情物主語の状態変化を描写する直接受身文を誤って作ってしまっている。つまり、このような例は、動詞の自他の混同を起点とし、自動詞で表現できる内容を、他動詞と捉えた自動詞から作った受身文によって表現しようとすることによって生じたと考えられる。

３）母語の負の転移による誤用

次に、以下のような誤用例は、ここまで検討した学習言語への理解の不十分さという要因だけではなく、母語の負の転移という要因も考えうる例である。

(52)　作文（0049）／学習歴 1 年半／過剰：
私は〈感動された→感動した〉。

(53)　作文（002）／学習歴 1 年半／過剰：
大部分の人は、ゴミを気ままに捨てて、廃気と汚れ〈られ→○〉た水を処理せず排出して、それに草花と森を自分の意思で破壊する。

(54)　作文（019）／学習歴 1 年半／過剰：
現在、社会的経済や科学技術の発展がますます向上〈されている→する〉とともに、いろいろな公害問題が生じています。

(55)　修論（0079）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
地は〈水没された→水没していた〉からである。

例（52）～（55）の「感動する」、「水没する」などの例では、自動詞をそのまま使うべきところで、「（ラ）レル」を「過剰」に使い、「自動詞＋（ラ）レル」の形になっている。このタイプの誤用の原因は、学習者の母語である中国語において、これらの動詞の受身形が認められていることにあると考えられる。このような誤用が疑われる具体的な動詞をリストの形で示すと、次の〈表 4－13〉のようになる。

〈表 4－13〉母語の負の転移による誤用例における動詞のタイプ

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	非漢語サ変動詞	例数	漢語サ変動詞	例数	非漢語サ変動詞	漢語サ変動詞	合計
心理的態度	苦しむ	1	感動する	22	1	24	25
			感心する	1			
			心配する	1			
変化	汚れる	2	向上する	1	4	1	5
	育つ	1					
	絶える	1					
位置変化			水没する	1	0	1	1
				合計：	5	26	31

〈表 4－13〉から、まず、漢語サ変動詞の誤用が多いと言える。特に「感動する」の誤用が多く見られる。22 例中 18 例の文体が「作文」となっており、学習者の感想や感情を表現する作文で頻出する語とも考えられる。

次に、動詞のタイプからは、これらの動詞に意味的な共通性を見出すことができる。第一に、「感動する／感心する」のような人の心理を表す動詞、第二に、「汚れる／向上する」のような物や事態の状態変化、あるいは「水没する」のような物の位置変化を表す動詞である。これらの動詞を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、以下の例（56）～（59）を示す。

Lǎorén shēnshēn bèi gǎndòng le
(56) 老人 深 深 被 感 动 了。／じいさんは心から感動した。

『青春之歌／青春の歌』

Xiǎogūniang xiǎo bízi xiǎo yǎn zhǎng de tǐng xiù qì liǎn bèi mǒ zāng le tóu fà shàng guà
(57) 小姑 娘 小 鼻子 小 眼 长 得 挺 秀气，脸 被 抹 脏 了，头发 上 挂

zhe suì huánghāo
着 碎 黄 蒿。／女の子の小さな目と鼻はとても可愛らしく整っているが、顔は涙と土で汚れ、髪にはヨモギのくずがついていた。

『插队的故事／遥かなる大地』

Chéngxiāng rénmín wénhuà shēnghuó jìn yí bù fēngfù shēnghuó zhìliàng dédào tí gāo zhèng
(58) 城 乡 人民 文化 生 活 进 一 步 丰富，生 活 质 量 得到 提高，正

zài xiàng xiǎokāng mùbiāo qiánjìn
在 向 小 康 目标 前进。／都市・農村人民の文化面の生活はより豊かなものとなり、生活も質的に向上し、目下、まずまずの生活水準という目標に向かって前進している。

『人大报告 96／全人大報告(96)』

Dāng fù qīn hé mǔqīn liǎng gè rén yìqǐ qián qù chákàn shí fāxiàn nà lǐ dōu bèi shuǐ yān
(59) 当 父亲 和 母亲 两 个 人 一起 前 去 查看 时，发现 那里 都 被 水 淹

le
了。／ところが、父と母が二人で墓を調べにいってみると、すっかり水没していることがわかった。

このように、中国語の例では、“(被) 感动”、“(被) 抹脏”、“(得到) 提高”、“(被) 淹”のように、いずれも「(中国語の受身のマーカー[18]) ＋自他動詞」の構造をとる構文になっている。一方、これに対応する日本語の構文では、「感動する」、「汚れる」、「向上する」、「水没する」のように、自動詞が使われている[19]。

例えば、“感动”は自動詞文を取ることもできるが、「把 (bǎ) ＋目的語＋動詞」の形を取る構文において、状態変化を引き起こす動作主が“把 (bǎ) ”に続く目的語 (動作の受け手) に対して働きかけるような意味的な他動詞だと考えることもできる (日本語の「感動させる」のような自動詞の他動詞化という意味に対応する)。例えば、次の (60) のようになる。

(60)	a.	B			感动了。
	b.	A	把	B	感动了。(“把”構文:“A 感动了 B”と言い換えられる)
	c.	B	被	(A)	感动了。(受身文)

まず、(60a) のように項が 1 つだけある場合、“感动”は自動詞として扱われる。項が二つになると、(60b) のような「“把”構文」が考えられるが、この構文は“A　感动了 B”と言い換えられるため、この“感动”は他動詞的な用法と言える。さらにこれを受身文にすると、(60c) のような構造になる。それゆえ、中国語においては、(60c) は「被 (中国語の受身のマーカー) ＋他動詞」の構造をとる構文と言ってもよい。〈表 4－13〉に挙げているほかの動詞の多くもこのタイプに含まれる。

なお、(60a) のような自動詞文と (60c) のような受身文は、似た文型を取り、意味的にも近い。しかし、原因となる事物 (感動の理由) に関心がないため描写しない、なんらかの原因によって生じた「感動した」という結果だけを表出する場合に (60a) を用いるのに対して、原因となる事物が省略されていても、その存在が了解されていれば、(60c) を使う場合が多い。学習者はおそらくよりはっきりした因果関係を強調したいという意図を持っている。かつ、「感動する人」と「感動する理由」を項に取る受身文が日本語では作れないのに対して、中国語ではこのような構文が成立するため、(60c) のような中国語の受身文のルールをそのまま日本語に適用していると考えられる。

このように、ここで示した動詞群における「(ラ) レル」の「過剰」の誤用は、母語 (中国語) の影響で日本語の動詞の自他を混同していて、かつ、学習者の母語では受身の要素が使われるため、「(ラ) レル」を過剰に使ってしまうことで起こっている可能性が考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

---

18 中国語の受身文は、一般的には“被”でマークされる。中島 (2007:76) によると、中国語では“受”、“挨”、“得”、“带”、“招”、“惹”等の動詞を用いて受身の意を表すこともできる。

19「感動する／感動される」のような対応関係は、学習者の受身文における「(ラ) レル」の「過剰」の誤用の原因として、王忻 (2008:127-129) にも指摘が見られる。ただし、中国語において受身のマーカーと組み合わせる動詞と対応する日本語の動詞がすべて他動詞ではなく、自動詞の可能性もある、という指摘にとどまる。

4.2.2　欠如

次に、受身文における「(ラ) レル」の「欠如」のパターンの誤用について、例数の多い順に受身文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 4－14〉のようになる。

〈表 4－14〉「(ラ) レル」の「欠如」の誤用の意味分類別分布

受身文の意味分類	被動作主（対象）	動作主（能動主体）	誤用例数		
⑧状態・属性描写	非情	非情	14	167	44.06%
	非情	有情	153		
⑨その他	非情	非情	3	91	24.01%
	非情	有情	88		
⑥創作・創造	非情	有情	39	44	11.61%
	非情	非情	5		
⑦状態変化	非情	非情	3	29	7.65%
	非情	有情	26		
①不利益・被害	有情	有情	16	23	6.07%
	有情	非情	7		
③単純動作描写	有情	有情	14	14	3.69%
②受益・恩恵	有情	有情	7	11	2.90%
	有情	非情	4		
		合計：	379		100%

〈表 4－14〉から、受身文における「(ラ) レル」の「欠如」の誤用は、「状態・属性描写」の意味を表す非情物主語の受身文に最も多く見られることが分かる。

「(ラ) レル」の「欠如」の誤用に関しても、「過剰」の誤用と同じように、動詞の項構造と意味タイプの両面から動詞のレベルまで分析を行う。

まず、構造の側面、いわゆる動詞の自他から誤用の分析を進めていく。

「(ラ) レル」の「欠如」の誤用に対して、訂正された後の正用として示されている動詞を自他の区別から分類すると、〈表 4－15〉のようになる。

〈表 4－15〉「(ラ) レル」の「欠如」の正用の分布

正用	例数	
他動詞の受身	363	95.78%
自動詞の受身	16	4.22%
合計：	379	100%

〈表 4－15〉のように、「(ラ) レル」の「欠如」は、主に他動詞の受身の「欠如」となっている。以下でも他動詞の受身の「欠如」を中心に分析を進めていくが、その前に、より少ない自動詞の受身の「欠如」に簡単に触れておく。

日本語において、自動詞の受身文は、主に間接受身文の例である。しかし、学習者の誤用では自動詞の受身に訂正されている例が少なく、かつ、次の例（61）のように、間接受身文ではない。

(61)　卒論（0029）／学習歴 3 年半／欠如：
南宋のとき、藤原氏は武士階級に〈取って代わり→取って代わられ〉、武士階級の趣味に対応した。

例（61）の元の能動文は、「武士階級は藤原氏に取って代わる」のように、ニ格名詞句（「藤原氏」）を取る自動詞（「取って代わる」）の例で、ニ格名詞句「藤原氏」が直接受身文の主語になるものである。杉本（1991）では、これらのニ格名詞句は直接目的語に近いと指摘している。

学習者の誤用では、「絡む」、「影響する」、「迫る」、「触れる」などの動詞の例も見られるが、杉本（1991:238）は、このような動詞は「自動詞と言うよりも、他動詞に準じた動詞―「準他動詞」―とでも呼ぶべきものであると言えよう」と指摘している。つまり、典型的な自動詞ではなく、二項間の関係に関わり、能動と受動の変換で視点を入れ替えることができる動詞である。このように、自動詞の受身の「欠如」の例は、自動詞でありながら、典型的な自動詞ではなく、他動詞に近い動詞の例が多いことが指摘できる。

以下では、正用が他動詞の受身文の場合を中心に、誤用例を挙げながら、受身文における「(ラ) レル」の「欠如」を考察していく。

「(ラ) レル」の「欠如」の正用が他動詞の受身文の場合、すなわち、本来は他動詞の受身文を使うのが適切であるのに、「(ラ) レル」が脱落している誤用のパターンの誤用の分布は、次の〈表 4－16〉のようになる。

〈表 4－16〉「(ラ) レル」の「欠如」の誤用の分布

誤用	例数	
他動詞文	320	88.15%
自動詞文	39	10.74%
その他	4	1.10%
合計：	363	100%

このように、誤用が「他動詞文」となっている場合が圧倒的に多い。ここで、「他動詞文」のようにカギカッコ付きで示しているのは、学習者の誤用が文法的な他動詞文ではないためである。以下では、誤用が「自動詞文」の場合を含め、同じ形式で表示していく。

以下では、誤用が「他動詞文」の場合と、誤用が「自動詞文」の場合の順に、考察していく。

4.2.2.1　誤用が「他動詞文」の場合

まず、誤用が「他動詞文」の場合、すなわち、本来は他動詞の受身文を使うのが適切であるのに、他動詞をそのまま用いて、「(ラ) レル」が脱落している誤用として、次のような例が挙げられる。

(62)　卒論（0027）／学習歴 4 年／欠如：
「あなたの大切なカラダに健康と調和をもたらす」という意味はメタファーで表現〈した→された〉。

(63)　作文（0053）／学習歴 2 年／欠如：
信長は明智光秀に〈裏切りて→裏切られて〉、本能寺で死ぬ時、私は悲しかったです。

例（62）、（63）のうち、（62）では、正用の受身文の動作主（誤用の「能動文」における「表現する」の主体）が出現していないが、（63）では下線で示したように、動作主が出現している。このような動作主の出現状況から見た誤用の分布は、次の〈表 4－17〉のようになる。

〈表 4－17〉動作主の出現状況

動作主の出現	例数	
出現している	65	20.31%
出現していない	255	79.69%
合計：	320	100%

このように、正用の受身文には動作主が出現していない例が多く、全体の約 8 割を占めている。

しかし、動作主の出現状況にかかわらず、（62）、（63）のように、すべての誤用例において、構文上は受身文であるのに対し、「（ラ）レル」を使っていない。つまり、名詞側は受身文の格表示（例えば「ガ，ニ」、「ガ，ニヨッテ」、「ガ，カラ」など）となっているのに対して、動詞側で受身の「（ラ）レル」が脱落しているため、「（ラ）レル」が「欠如」と判定されている。このように、4.2.1 節で分析した「（ラ）レル」の「過剰」の誤用と共通して、学習者の「欠如」の誤用では、文のタイプと「（ラ）レル」の有無という動詞の形態的タイプとがねじれていると考えられる。

以下では、１）動作主が出現していない場合と、２）動作主が出現している場合に分けて分析していく。

１）動作主が出現していない場合

動作主が出現していない場合には、次のような例が挙げられる。

（64） 作文（0075）／学習歴 1 年半／欠如：
料理のそばには中国語で「ありがとう、中国」と〈書いた→書かれていた〉。

（65） 作文（0243）／学習歴 1 年／欠如：
ボランティアに参加しなさいと〈言う→言われました〉。

（66） 感想文（0145）／学習歴 4 年／欠如：
親戚関係や家族関係がもう希薄になったということが説明〈しました→されました〉。

（67） 卒論（0007）／学習歴 3 年半／欠如：
そのため、日本人の集団意識が〈形成している→形成されている〉。

（68） 作文（0076）／学習歴 2 年半／欠如：
この公園は私が大学に入る時に〈作った→作られた〉。

（69） 修論（0085）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
よく〈知っている→知られている〉ように、鯨というのは、海中に生きる巨大な動物で、川や、湖にはその姿を見る可能性がゼロではないであろう。

（70） 卒論（0088）／学習歴 3 年半／欠如：
消費を中心とする国民の生活水準も徐々に〈改善し→改善され〉ている。

（71） 修論（0085）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
「龍牌会」は改めて公開され、1987 年に公開的な行事として〈行う→行われる〉よ

うになった。

例（64）～（71）は、正用の受身文の動作主（誤用の「能動文」における能動主体）が出現していないうえ、前述のように、文のタイプと「（ラ）レル」の有無がねじれており、「書かれる」、「言われる」などのように「他動詞＋（ラ）レル」を使うべきところで、「（ラ）レル」を付加せずに、他動詞をそのまま使っている。このタイプの誤用の原因として、学習者の母語である中国語の負の転移が疑われる。

このような誤用が見られた具体的な動詞の意味タイプの上位 5 位までをリストの形で示すと、次の〈表 4－18〉のようになる。

〈表 4－18〉誤用例における動詞のタイプ（他動詞の場合）

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	非漢語サ変動詞	例数	漢語サ変動詞	例数	非漢語サ変動詞	漢語サ変動詞	合計
言語活動	書く	10	説明する	7	32	27	59
	言う	5	表現する	5			
	伝える	3	公布する	2			
	述べる	4	発表する	2			
	表す	3	放送する	2			
	描く	2	記載する	1			
	訳す	2	記述する	1			
	現す	1	記する	1			
	呼び起こす	1	記録する	1			
	呼ぶ	1	指摘する	1			
			説教する	1			
			体現する	1			
			通訳する	1			
			描写する	1			
形成	生む	2	形成する	14	3	17	20
	形作る	1	制定する	1			
			完成する	1			
			展開する	1			
生産	作る	6	脚色する	1	15	1	16
	生み出す	3					
	作り出す	2					
	書く	1					
	描く	1					
	作り上げる	1					
	設ける	1					
思考	考える	2	熟知する	2	7	7	14
	意味づける	1	理解する	2			
	受け入れる	1	研究する	1			
	思い出す	1	区別する	1			
	下す	1	総括する	1			
	知る	1					
変化	整える	1	改善する	2	3	7	10
	広める	1	更新する	2			
	まとめる	1	修正する	1			
			調整する	1			
			変更する	1			
その他					92	44	136
				合計：	152	103	255

〈表 4－18〉のように、学習者の誤用例は「言語活動」、「形成」、「生産」、「思考」、「変化」を表す動詞に集中している。

まず、「言語活動」を表す動詞を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、次の例（72）～（74）を示す。

Dōngbian de huāquān shàng xiě zhe Líng kǎi tóngzhì yǒngchuí-bùxiǔ xī bian de ne
（72） 东 边 的 花 圈 上 写 着：“凌 凯 同 志 永 垂 不 朽！”西 边 的 呢，
dàoniàn Wèi shítou tóngzhì
“悼 念 魏 石头 同 志。”／東の花輪には「凌凱同志　永垂不朽」と書かれ、西のには、「悼念　魏石頭同志」とある。

『盖棺／棺を蓋いて』

Shuō wǒmen quánjiā shì tè wu shì tè wu wō zi wǒ pǎo le
（73） 说 我 们 全 家 是 特务，是 特务 窝子……我……跑 了。／スパイ一家、スパイの巣窟だと言われ..... 逃亡したのです。

『活动变人形／応報』

Zhízhèngdǎng de tè diǎn yǐ jīng zài dǎng de dì bā cì quánguó dàibiǎo dàhuì de bàogào
（74） 执 政 党 的 特 点，已经 在 党 的 第 八 次 全 国 代表 大会 的 报 告
zhōng jiǎng qīngchǔ le
中 讲 清 楚 了。／政権党の特徴については、党の第八回全国代表大会の報告ではっきり説明されている。

『邓小平文选第一卷／鄧小平文選 1』

（72）～（74）のように、中国語の例では、“写着～”、“说～”、“讲～”という、「他動詞＋賓語」の構造を取り、かつ、能動主体の明示がいらない能動文が使われている。それに対して、対応する日本語の構文では、「～と書かれる」、「～と言われる」、「～は説明される」のように、「～ト／ガ　他動詞＋（ラ）レル」の構造を取り、動作主が省略された直接受身文になっている。このように、日中両言語は、能動主体／動作主という行為者が明示されていないという点で構文上の共通点があるが、中国語では、能動主体の立場から「言語活動」の内容を捉えるのに対し、日本語では、被動作主の立場から叙述するのが自然である[20]。

このことから、先の（64）、（65）、（66）のような「言語活動」を表す動詞を用いる誤用例は、名詞側は受身文の格表示となっているが、受身の要素を使わないため、母語の感覚のまま、「（ラ）レル」を脱落してしまうことで起こると考えられる。

次に、「形成」、「生産」、「思考」、「変化」の動詞が用いられている文と、その他の意味タイプを持つ動詞の文が、中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、以下の例（75）～（79）に示す。

Zài wǒmen dǎng de lì shǐ shàng zhídào Zūn yì huì yì cái zhēnzhèng xíngchéng le yī gè
（75） 在 我 们 党 的 历史 上，直到 遵 义 会议，才 真 正 形 成 了 一个
lǐngdǎo hé xīn
领 导 核心。／わが党の歴史上、遵義会議において初めて真の中心的指導グループ

[20] 中島（2007:73-75）では、日本語の直接受身文が中国語の他動詞文と対応している例を挙げ、「他動詞能動文と直接受身文の対応は同じ事柄を２つの異なった視点から述べる関係にある」と指摘している。このように、中国語では話者の視点が能動主体に置かれるため、能動文を使う傾向があるのに対して、日本語では被動作主に視点を置くため直接受身文が好まれる。

が<u>形成された</u>。

『我的父亲邓小平／わが父・鄧小平(2)』

(76) Dāngnián lǐ yuàn yǒu dà fāngzhuān qì chū de shí zì xíng yǒng lù yǒng lù qiēgē chū de
当年 里院 有 大 方砖 <u>砌</u> 出 的 十字 形 甬路，甬路 切割 出 的
sì kuài tǔdì shàng yǒu sì zhū zhūshā hǎitáng
四 块 土地 上，有 四 株 朱砂 海棠。／内院の庭には、人が通れるよう、大きな四角い煉瓦で十字形に小径が<u>作られており</u>、それによって四つに区切られた四角の地面には、もと四本の海棠の木が植えられていた。

『钟鼓楼／鐘鼓楼』

(77) Rénrén jiē zhī Qīnghuá Dàxué réncái-bèichū xǔ duō bì yè shēng rú jīn dōu chéng le Zhōngguó
人人 皆 <u>知</u>，清 华 大学 人才 辈 出，许多 毕业 生 如今 都 成 了 中 国
dòngliángzhīcái
栋 梁 之材。／清華大学は人材を多く輩出し、その卒業生がいまの中国の中枢を担っていることは、よく<u>知られている</u>。

『中日飞鸿／日中飛鴻』

(78) Chéngxiāng rénmín shēnghuó jì xù gǎishàn
城 乡 人民 生 活 继续 <u>改 善</u>。／都市・農村の人民の生活が引き続き<u>改善された</u>。

『人大报告 96／全人大報告(96)』

(79) Zài jǔ xíng kāixué diǎn lǐ zhī qián yì xiǎoshí zài dà lǐtáng qián de chángláng shàng piějiàn
在 <u>举 行</u> 开学 典 礼 之 前 一 小时，在 大 礼堂 前 的 长 廊 上，瞥见
le tā
了 她。／入学式が<u>行われる</u>一時間前に、大講堂の前の廊下で初めて彼女を見かけた。

『关于女人／女の人について』

(75) ～ (79) のように、中国語の例では、“形成～”、“砌～”、“知～”、“改善～”、“举行～”という、「他動詞＋賓語」の構造を取り、かつ、能動主体が隠されている能動文が使われている。それに対して、対応する日本語の構文では、「～が形成される」、「～が作られる」[21]、「～は知られている」、「～が改善される」、「～が行われる」のように、「目的語 ガ 他動詞＋（ラ）レル」の構造を取る。これは、目的語の主題化で要求されている直接受身文で、動作主が不特定で省略されているか、特定でもあえて出さない例である。

このように、日中両言語は、行為者が明示されていない点で構文上の共通点があるが、中国語では、能動主体の立場から事態を捉えるのに対し、日本語では、被動作主（目的語）を主語にして叙述するのが自然である[22]。

先の (67) ～ (71) のような誤用例は、名詞側は受身文の格表示となっているが、学習者は母語では受身の要素が使われていないというルールを日本語にも適用している。母語

---

[21]「作る」のような「生産」を表す動詞の受身の「(ラ) レル」の「不足」の誤用は、王忻 (2008:133) にも指摘が見られる。このような誤用は日中両言語の相違点により生じているとされており、中国語では受身のマーカーを使っても使わなくても意味が変わらないと指摘しているが、使わない方がより自然だと考えられる。また、望月 (2009) にも王忻 (2008) と類似している指摘があり、このような中国語の構文を「意味上の受身文」と呼んでいるが、受身文より能動文として捉えるほうが妥当だと考えられる。

[22] 4.1.2.1 節で見た米・米 (2009:36) では、日本語と中国語の相違点として、「動作主がわからない時、あるいは、動作主は存在するが事柄に視点を置きたい時は、視点を置くものを主語とし動詞は他動詞の受身形を使う。中国語ではこれらに対応する表現には能動文を使う」ことを指摘している。

の感覚のまま、「(ラ) レル」を脱落してしまうことでこのような誤用が起こると考えられる。

以上のように、〈表 4－18〉で示した動詞群における「(ラ) レル」の「欠如」は、学習者の母語（中国語）では受身の要素が使われていないというルールを日本語にも適用した母語の負の転移により生じている誤用だと解釈できる。

２）動作主が出現している場合

動作主が出現している場合の「(ラ) レル」が脱落している誤用として、次のような例が挙げられる。

(80) 修論（0077）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
ほとんどの複合詞は二つの語基で〈構成する→構成されている〉。

(81) 卒論（0014）／学習歴 3 年半／欠如：
両国の相違点はどこから〈生み出す→生み出されている〉のかはまた解明されていない。

(82) 修論（0047）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
その国の民衆によって代々〈受け続がきて→受け継がれて〉きたものであること。

(83) 修論（0090）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
神信仰は第十八回の遣唐使に伴って入唐した日本の高僧円仁（慈覚大師）により日本に伝え〈〇[23]→られ〉た。

(84) 修論（0090）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
まだみんなに受け入れ〈〇→られ〉なかった。

(85) 卒論（0103）／学習歴 3 年半／欠如：
下人はその事に〈刺激して→刺激されて〉（以下略）。

(86) 作文（009）／学習歴 1 年 3 ヶ月／欠如：
子供は生まれた時から両親に〈育てた→育てられた〉ほうがいいです。

例（80）～（86）は、下線部のように、正用の受身文の動作主（誤用の「能動文」における能動主体）が出現しているにもかかわらず、文のタイプと「(ラ) レル」の有無がねじれており、「構成される」、「発売される」などのように「他動詞＋（ラ）レル」を使うべきところで、「(ラ) レル」を付加せず、他動詞をそのまま使っている。このタイプの誤用の原因として、学習者の母語である中国語の負の転移が疑われるものと、そうでないものがある。

このような誤用が見られた具体的な動詞の意味タイプの上位 6 位までをリストの形で示すと、次の〈表 4－19〉のようになる。

[23] タグ中の「〇」は正しい表現を添加することを表す。

〈表 4－19〉誤用例における動詞のタイプ（他動詞の場合）

動詞のタイプ	動詞				延べ例数		
	非漢語サ変動詞	例数	漢語サ変動詞	例数	非漢語サ変動詞	漢語サ変動詞	合計
形成	組み立てる	1	構成する	5	1	6	7
			制定する	1			
生産	生み出す	5	発売する	1	5	1	6
授受	受け継ぐ	1	紹介する	1	4	1	5
	受け取る	1					
	奪う	1					
	もらう	1					
思考	知る	3			5	0	5
	受け入れる	2					
言語活動	伝える	2	暗誦する	1	3	1	4
	言う	1					
感情評価的態度	悔やむ	1	愛する	1	2	2	4
	裏切る	1	刺激する	1			
その他					29	5	34
				合計：	49	16	65

まず、「形成」、「生産」「授受」、「言語活動」を表す動詞を含む誤用例は、母語の負の転移が疑われるため、中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、以下の例（87）～（90）に示す。

(87) Jīng tā tíyì zhōngyāng juédìng chénglì Máo Zédōng Zhōu ēn lái Wáng Jiàxiáng zǔchéng
经 他 提议， 中央 决定 成立 毛 泽 东 、 周 恩来、 王 稼 祥 <u>组成</u>

de xīnsānréntuán quánquán zhǐhuī zuòzhàn yǐ Zhōu ēn lái wéi tuánzhǎng
的 新三人团， 全权 指挥 作战 ，以 周 恩来 为 团长 。／彼の提案により、中央は毛沢東、周恩来、王稼祥で<u>構成される</u>新しい三人グループを設立し、全権を持って作戦を指揮し、周恩来をその長とした。

『毛泽东传／毛沢東伝』

(88) Gùrán zhèxiē jīngyàn réngrán shì bù chōngfèn de dànshì zhǐyào wǒmen yìrán dì pāoqì
固然 这些 经验 仍然 是 不 充分 的，但是 只要 我们 毅然 地 抛弃

qiángzhēng de shǒuduàn ér zhuóyǎn yú xuānchuán jiàoyù zǔzhī yǐngxiǎng děngděng
强 征 的 手段 ，而 着眼 于 宣传 、教育、组织、 影响 等等

dòngyuán mínzhòng de fāngshì xīn de jīngyàn jiāng búduàn dì chuàngzào chūlái dòngyuán de
动员 民众 的 方式，新 的 经验 将 不断 地 <u>创造</u> 出来，动员 的

shōuhuò yě bìrán rìyì fēngfù qǐlái
收获 也 必然 日益 丰富 起来。／もちろんこうした経験はなお不十分であるが、われわれが強制的に徴兵する手段をきっぱり放棄し、宣伝、教育、組織化、間接的な働きかけなどの民衆動員方式に着目しているかぎり、新しい経験がたえず<u>生み出され</u>、動員の成果も日ましに豊かになるにちがいない。

『邓小平文选第一卷／鄧小平文選 1』

(89) Zhōngyāng zài zuìjìn yì nián zhōng duōcì qiángdiào lǎogànbù yào bǎ xuǎnbá hé péiyǎng
中 央 在 最近 一年 中 多次 强调 ，老干部 要 把 选拔 和 培养

zhōngqīngnián gànbù zuòwéi dìyīwèi de zhuāngyán de zhízé Zhè xiàng gōngzuò zuò hǎo
中 青 年 干部，作为 第一位 的、 庄严 的 职责... 这 项 工作 做 好

le wǒmen de shìyè wánquán yǒu bǎwò jì xù xiàqu wǒmen delǎogànbù jiù zài yī cì wéi
了，我们 的 事业 完全 有 把握 <u>继续</u> 下去，我们 的老干部 就 再 一次 为

dǎng wèi rénmín zuò chū le jùdà de gòngxiàn
党 、为 人民 做 出 了 巨大 的 贡 献。／ここ一年、中央がたびたび強調してきたことだが、古参幹部は青壮年幹部の抜てきど育成を第一の、厳粛な職責としなければならない。。。この仕事が立派になしとげられるなら、われわれの事業はまちがいなく<u>受け継がれ</u>、古参幹部はまたもや党と人民に大きな貢献をしたことになる。

『邓小平文选第二卷／鄧小平文選 2』

(90) Rénmen réng zài kàn zhe dàn yìlùn qǐlái lǐbiān ér chuánlái yījù Wáng yìshēng de qí bù
人 们 仍 在 看 着，但 议论 起来。里边儿 <u>传来</u> 一句 王 一生 的 棋步，

wàibiāner de rén jiù rǎngdòng yíxià
外 边儿 的 人 就 嚷 动 一下。／人びとはまだ見ていたが、あれこれ議論しはじめた。なかから王一生の指し手が<u>伝えられる</u>たびに、外の人びとはドッとどよめいた。

『棋王／チャンピオン(棋王)』

(87) ～ (90) のように、中国語の例では、“（毛泽东，周恩来，王稼祥）组成～”、“（我们）创造～”、“(中青年干部) 继续～”、“（里边儿）传来～”という、「能動主体＋他動詞＋賓語」の構造を取る能動文が使われている。それに対して、対応する日本語の構文では、「毛沢東、周恩来、王稼祥で～が構成される」、「われわれによって～が生み出される」、「青壮年幹部によって～が受け継がれる」、「なかから～が伝えられる」のように、「動作主　デ／ニヨッテ／カラ　被動作主　ガ　他動詞＋（ラ）レル」の構造を取る。このように、日中両言語は、行為者が明示されている点で構文上の共通点があるが、中国語では、能動主体の立場から叙述するのに対し、日本語では、被動作主の立場から叙述するのが自然である。

このように、(80) ～ (83) のような誤用例は、名詞側は受身文の格表示となっているが、動詞側に受身の「(ラ) レル」が使われていない。したがって、このような誤用は、受身の要素が使われないというルールを日本語にも適用しているものと捉えられる。母語の感覚のまま、「(ラ) レル」を脱落してしまうことで起こると考えられる。

一方、例 (84) ～ (86) のような「思考」、「感情評価的態度」の動詞が用いられている文と、その他の意味タイプを持つ動詞の誤用例は母語の影響が考えにくい。このような例は、文脈から見れば、いかにも直接受身文を使うべきであるが、名詞側が「ガ，ヲ」といったように直接受身文の構文を取っているにもかかわらず、動詞側の形態が受身形になっていない（「受け入れる」、「刺激する」、「育てる」）誤用が生じている。これは、単に日本語の直接受身文の習得不足だと考えられる。

4.2.2.2　誤用が「自動詞文」の場合

次に、誤用が「自動詞文」の場合、すなわち、本来は他動詞の受身文を使うのが適切であるのに、自動詞をそのまま用いて、「(ラ) レル」が脱落している誤用として、次のような例が挙げられる。

(91)　修論（0070）／学習歴6年か6年以上／欠如：
　　梅の専門誌『梅譜』が〈書き上がった→書き上げられた〉。

例（91）のように、すべての誤用例において、格体制は受身文のものであるのに対し、「(ラ) レル」が脱落している。4.2.1.2節で検討したように、このような誤用は、直接受身文と自動詞文の混用により生じていると考えられる。

（91）では、動作主が出現していない。「創作・創造」の意味を表す受身文であるため、特定する必要がない動作主（「作者」）が背景化されているが、その存在は含意されている。それゆえ、非情物（「梅譜」）の出現を表す自動詞文のかわりに、直接受身文を使う方が自然である。

このように、日本語の直接受身文と自動詞文のそれぞれの役割やニュアンスの違いへの理解が不十分のため、両者の混用が起こっていると考えられる。

4.2.3　混同

次に、受身文における「(ラ) レル」の「混同」のパターンの誤用について、例数の多い順に受身文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表4－20〉のようになる。

〈表4－20〉「(ラ) レル」の「混同」の誤用の意味分類別分布

受身文の意味分類	被動作主（対象）	動作主（能動主体）	誤用例数		
⑨その他	非情	非情	1	25	52.08%
	非情	有情	24		
	非情	有情	26		
③単純動作描写	有情	有情	7	9	18.75%
	有情	非情	2		
②受益・恩恵	有情	有情	4	6	12.50%
	有情	非情	2		
①不利益・被害	有情	有情	3	3	6.25%
⑥創作・創造	非情	有情	2	2	4.17%
⑧状態・属性描写	非情	有情	2	2	4.17%
⑦状態変化	非情	非情	1	1	2.08%
		合計：	48		100%

〈表 4－20〉から、受身文における「(ラ) レル」の「混同」の誤用は、「その他」の意味を表す非情物主語の受身文に最も多く見られることが分かる。「混同」の誤用はここまで

見た「過剰」、「欠如」のようなヴォイスの有無に関わる誤用とは違っていて、ヴォイスの間の混同に関わる誤用であるため、動詞レベルの分析よりも、どの構文とどのように混同しているかといった点を分析する必要がある。

受身文とどの構文を混同したのかを見ると、受身と使役、受身と可能、受身と授受、受身と使役受身との混同が見られる。4.1.2.1 節で見た猪崎（1994）、王忻（2008）でもこのような混同の誤用（受身と授受、受身と使役受身の混同）を指摘しているが、誤用の原因はあまり詳しく論じられていない。

具体的な混同の分布は、次の〈表 4－21〉のようになる。

〈表 4－21〉「（ラ）レル」の「混同」

分類	例数	
受身と使役の混同 （「（ラ）レル」と「（サ）セル」）	8	16.67%
受身と可能の混同 （受身の「（ラ）レル」と可能の可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」）	24	50.00%
受身と授受の混同 （「（ラ）レル」と授受補助動詞「テ｛アゲル／クレル／モラウ｝」）	12	25.00%
受身と使役受身の混同 （「（ラ）レル」と使役受身「（サ）セラレル」）	4	8.33%
合計：	48	100%

〈表 4－21〉のように、受身文と可能構文の混同が一番多い。以下では、①受身文と使役文の混同、②受身文と可能構文の混同、③受身文と授受文の混同、④受身文と使役受身文の混同の順に、分析していく。

①受身文と使役文の混同

まず、受身文と使役文の混同として、次のような例が挙げられる。

（92） 感想文（0127）／学習歴 4 年／混同：
女性にとって、家庭と仕事を両立〈される→させる〉のは難しい。

例（92）では、「両立する」は自動詞であるため、「家庭と仕事を両立される」という受身文は、「家庭と仕事が両立していて、困っている」のような迷惑の意味を表す間接受身になってしまう。「家庭と仕事が両立する」という自動詞文も成立するが、ここでは、「女性」という働きかけをする主体が存在するため、「（サ）セル」の付加で、対応する他動詞のない自動詞を他動詞化する必要がある。

学習者はおそらく「両立する」という自動詞をそのまま使うのは不適切で、何かを付加して他動詞化しないといけないということを理解しているが、何を使ったらいいかが分からず、「（ラ）レル」を使用したのだと考えられる。つまり、助動詞「（ラ）レル」と「（サ）セル」の機能や役割を十分に理解していないことになる。

②受身文と可能構文の混同

次に、受身文と可能構文の混同として、次のような例が挙げられる。

(93)　修論（0041）／学習歴 6 年か 6 年以上／混同：
　　この二つの絵とその題詞から、いろんな情報が〈読み取られた→読み取れる〉。

例（93）では、「読み取られた」のように、受身文を使うと、主語（「情報」）が非情物で、動作主に関心がない特定の動作に関わる「その他」の意味分類に属する受身文として解釈できる。しかし、この文脈において、受身文を使うと、出来事を特定化するニュアンスになってしまい、学習者の「誰が読んでもそうなる」という一般的な状態を表す意図を十分に反映した形になっていない。それゆえ、「読み取れる」という可能動詞を使った可能構文にするべきと考えられる。

このように、学習者はこういう文脈で、受身文を使うと、ニュアンスがどうなるかを理解しておらず、意図に応じた構文の選択ができていないことにより誤用が生じていると考えられる。

③受身文と授受文の混同

また、受身文と授受文の混同として、次のような例が挙げられる。

(94)　作文（0188）／学習歴 1 年／混同：
　　先輩は私にいろいろ〈教えられた→教えてくれた〉。
(95)　修論（0065）／学習歴 6 年か 6 年以上／混同：
　　そのことの裏は琴の口によって私達に〈説明してくれた→説明された〉。

例（94）では、「教えられた」のように、学習者は受身文を使って「受益・恩恵」の意味を表したいという意図を持っていると考えられるが、与え手と受け手が逆転しており、項の交替ができていない。述語動詞までの部分「先輩はわたしにいろいろ」をそのまま維持するならば、受益や恩恵の意味を表す「テクレル」という授受補助動詞を使った授受文にする必要がある。「教える」のような三項他動詞の項と項の間の関係をうまく把握できていないことが、この誤用の原因だと考えられる。

例（95）の場合、元の能動文と受身文、授受文の対応関係を示すと、次の（96）のようになる。

(96)　a. 能動文：△琴の口が　　私達に　　そのことの裏を　説明した。
　　b. 受身文：　そのことの裏は　琴の口によって　私達に　　説明された。
　　c. 授受文：△琴の口が　　私達に　　そのことの裏を　説明してくれる。
　　d. 授受文：×そのことの裏は　琴の口によって　私達に　　説明してくれる。

このように、能動文（96a）の主語である「琴の口」はやや不自然である（△で示す）が、これを受身文にすると、(96b）のようになり、授受文（「テクレル」形）にすると、主語である「琴の口」はちょっと不自然であるが、(96c）のようになる。学習者の誤用は、(96d) のように、述部まで受身文の項構造および各項の格表示と同じであるが、なぜか「テクレル」形を使っている。誤用の結果、受身文の格表示を授受文に過剰に適用しているう

え、「誰かが琴に私達にそのことの裏を説明してもらう」という、説明する人がほかにいるようなニュアンスが読み取れてしまう。

（96d）から見ると、学習者はおそらく三項動詞「説明する」の項と項の関係を理解しているが、「テクレル」という授受補助動詞を使った授受文にするか、受身文にするかで混乱している。これは、受身文は視点を入れ替えるはたらきを持ち、格の交替も起きるが、授受文にはこういうはたらきがなく、格の交替も起きないという、それぞれの構文の役割や構造の違いに気づいていないことに起因している誤用だと考えられる。

④受身文と使役受身文の混同

さらに、受身文と使役受身文の混同として、次のような例が挙げられる。

（97）　作文（0043）／学習歴 1 年半／混同：
　　中国の学生として、すごく〈感動されて→感動させられて〉います。
（98）　スピーチ（012）／学習歴 2 年／混同：
　　日本の主婦によって〈書かされた→書かれた〉本がこんなに多かった。

例（97）では、「感動される」は 4.2.1.2 節の③でも述べたように、学習者の母語の影響を受けた「（ラ）レル」の「過剰」の誤用である。また、ここでは、一回の出来事による「感動する」の誘発とその結果の継続を表すため、使役受身形の「感動させられる」を使うべきと考えられる。

例（98）では、「書かされた」という使役受身形を使うと、「主婦によって誰かが本を書かされた」という、主婦の強い要望で誰かが本を書いたような強制のニュアンスが読み取れる。しかし、実際にこの文脈では、そういうニュアンスは想定できない。学習者は複雑な使役受身の形式を知っているが、その意味と通常の直接受身文の意味とを混同しており、使役受身文と受身文の区別がつかなかったのだと考えられる。文脈や学習者の表したい意味を考えると、「主婦」が動作主で、「創作・創造」の意味を表す受身文を使うべきである。

以上のように、「混同」の誤用は主に、日本語の文法そのものを十分に理解していないことにより生じている。具体的に言えば、学習者はヴォイス表現における助動詞の機能や役割、ヴォイス表現における視点の切り替え、それぞれの表現が表している意味などに対する理解が不十分であると考えられる。

4.2.4　その他

最後に、受身文における「（ラ）レル」の「その他」のパターンの誤用について、例数の多い順に受身文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 4－22〉のようになる。

〈表 4－22〉「（ラ）レル」の「その他」の誤用の意味分類別分布

受身文の意味分類	被動作主（対象）	動作主（能動主体）	誤用例数	
⑦状態変化	非情	有情	2	25.00%
⑨その他	非情	有情	2	25.00%
⑧状態・属性描写	非情	有情	1	12.50%
②受益・恩恵	有情	有情	1	12.50%
③単純動作描写	有情	非情	1	12.50%
⑥創作・創造	非情	有情	1	12.50%
		合計：	8	100%

〈表 4－22〉から、受身文における「（ラ）レル」の「その他」の誤用は、もともと例文数が少ないが、非情物主語の受身文により多く見られることが分かる。

また、「その他」の誤用はここまで見た「過剰」、「欠如」、「混同」のようなヴォイスの有無や混同に関わる誤用とは違い、受身文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。

具体的には、以下のような例が挙げられる。

（99） 卒論（0014）／学習歴 3 年半／その他：
漢字が中国から日本に〈伝われる→伝えられる〉前「おに」の発音は既に日本の人々に使用されていた。

（100）作文（016）／学習歴 1 年半／その他：
北京の大気汚染問題は世界で注目〈しられた→されている〉。

（101）8 級試験（0132）／φ／その他：
多くの地方に旅行して、見聞を書いたり自分の人生を〈豊れる→豊かにする〉。

例（99）は受身文は作れているが、動詞の選択を間違えている「元の動詞の誤り」（1 例）で、例（100）は述部で使われている元の動詞に問題はないが、受身の「（ラ）レル」の形態を間違えている「述部の形態の誤り」（4 例）である。また、例（101）は動詞ではない語で受身文を作っている「品詞の誤り」（3 例）である。

（99）は自動詞の受身と他動詞の受身を混同している例だと考えられ、おそらく「伝わる／伝える」のような対をなす動詞の自他を混同していることにより生じる誤用だと考えられる。4.1.2.1 節で見た顧・徐（1980）、佐治（1992）において、自他動詞の混同として扱われている例はこのタイプに相当する。

（100）は述語動詞「注目する」の形態が間違っている例で、サ変動詞の受身形は「～サレル」であるべきなのに、「～しられる」のように五段動詞とサ変動詞の受身形を混同している。これは、述語動詞の受身形の形態の不十分な習得による誤用だと考えられる。4.1.2.1 節で見た市川（1997、2010）、曹（2011）で、誤形成として扱われている例は、このタイプに相当する。

（101）は「豊かだ」のような形容動詞で受身文を作っている誤用である。これは、品詞の不十分な習得による誤用だと考えられる。

以上のように、「その他」の誤用は、日本語そのものを十分に理解していないことにより生じている。つまり、学習者は受身文における述部の動詞や助動詞「（ラ）レル」の使い方をうまく把握できていないと考えられる。

4.2.5　受身文における「述部の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「述部の誤用」（助動詞「（ラ）レル」の誤用）を分析し、以下のことを明らかにした。

まず、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがある。

次に、誤用例の数から見ると、受身文における「（ラ）レル」の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、受身文の意味分類で見た場合、非情物主語を取る「状態・属性描写」の意味を表す受身文の誤用が多い。

また、それぞれのパターンの誤用の原因を分析した結果を、まず、「過剰」の誤用についてまとめると、次の〈表 4－23〉の通りである。

〈表 4－23〉「（ラ）レル」の「過剰」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.2.1.1	「（ラ）レル」を他動詞文に過剰使用している場合	●「父は私に（言われる→言う）」のような「言語活動」などの意味を表す三項動詞の例 ●「～を（作られる→作る）」のような「生産」などの意味を表す動詞の例	●学習言語への不十分な理解
4.2.1.2	「（ラ）レル」を自動詞文に過剰使用している場合	●「～が（表されている→表れている）」のように他動詞の受身文と自動詞文の選択ができていない例 ●「～は（普及される→普及する）」のような「出現」などの意味を表し、自他の弁別が難しい動詞の例 ●「私は（感動された→感動した）」のような「心理的態度」などの意味を表す自動詞で受身文を作る例	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移

このように、受身の「（ラ）レル」の「過剰」の誤用は、様々な意味タイプを持つ自動詞・他動詞にわたって起こっており、主に学習言語への不十分な理解に起因するが、母語の負の転移に関わる誤用も存在している。

次に、「欠如」の誤用をまとめると、次の〈表 4－24〉の通りである。

〈表 4－24〉「(ラ) レル」の「欠如」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.2.2.1	「(ラ) レル」の「欠如」で他動詞文になっている場合	●動作主が出現していない、かつ「～と(書いた→書かれていた)」のような「言語活動」の意味を表す動詞の例 ●動作主が出現していない、かつ「～は(作った→作られた)」のような「生産」などの意味を表す動詞の例 ●動作主が出現していて、かつ、「～は～で(構成する→構成されている)」のような「形成」などの意味を表す動詞の例 ●動作主が出現していて、かつ、「下人は～に(刺激する→刺激される)」のような「感情評価的態度」などの意味を表す動詞の例	●母語の負の転移 ●学習言語への不十分な理解
4.2.2.2	「(ラ) レル」の「欠如」で自動詞文になっている場合	●「～が（書きあがった→書き上げられた)」のように他動詞の受身文と自動詞文の選択ができていない例	●学習言語への不十分な理解

このように、受身の「(ラ) レル」の「欠如」の誤用も、様々な意味タイプを持つ動詞の例で起こるが、母語の負の転移に関わる例が多い。

「混同」の誤用をまとめると、次の〈表 4－25〉の通りである。

〈表 4－25〉「(ラ) レル」の「混同」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.2.3	受身と使役を混同している場合	●「～を(両立される→両立させる)」のような助動詞の機能を理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	受身と可能を混同している場合	●「～が(読み取られた→読み取れる)」のような文の表している意味を間違えている例	●学習言語への不十分な理解
	受身と授受を混同している場合	●「先輩は私に(教えられた→教えてくれた)」のような視点の切り替えができていない例	●学習言語への不十分な理解
	受身と使役受身を混同している場合	●「主婦によって(書かされた→書かれた)」のような構文間の区別がつかない例	●学習言語への不十分な理解

このように、受身の「(ラ) レル」の「混同」の誤用は、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

最後に、「その他」の誤用をまとめると、次の〈表 4－26〉の通りである。

〈表 4－26〉「（ラ）レル」の「その他」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.2.4	元の動詞の誤り	●「伝わる→伝えられる」のような動詞の自他を混同している例	●学習言語への不十分な理解
	述部の形態の誤り	●「注目しられた→注目されている」のような述語動詞の形態を間違えている例	●学習言語への不十分な理解
	品詞の誤り	●「豊れる→豊かにする」のような形容動詞などで受身文を作る例	●学習言語への不十分な理解

このように、「その他」の誤用は、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。「過剰」、「欠如」、「混同」のようなヴォイスの有無や混同に関わる誤用とは違い、受身文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。

以上のように、本節では、従来の先行研究で明らかになっている誤用のパターンを踏まえ、大規模な作文データを材料として、受身文における「（ラ）レル」の誤用のパターンを再整理した。また、受身文の意味と「（ラ）レル」の誤用との関係についても見てきた。さらに、誤用のパターンを提示しただけではなく、それぞれさらに下位分類したパターンごとに詳しく分析し、誤用の原因を明らかにした（〈表 4－23〉、〈表 4－24〉、〈表 4－25〉、〈表 4－26〉）。

「過剰」、「欠如」の誤用に関しては、動詞の自他や意味タイプに注目し、典型的な誤用例を挙げながら、詳細な分析を行い、それぞれのパターンごとに誤用の原因を明らかにした。「混同」、「その他」の誤用に関しても、誤用の原因は主に学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

4.3　格助詞の誤用

本節では、受身文において格助詞「ヲ」「ニ」が関わる誤用の分析を行う。

まず、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査の結果、作文コーパスにおける受身文の「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用、いわゆる他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケースおよび、他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）のパターンは、次の〈表 4－27〉のようになる。

〈表 4－27〉誤用のパターン（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用のパターン			定義	誤用例[24]
ア.格助詞の選択や使用のミス	a.ヴォイスによる誤用		受身の「(ラ) レル」にあわせた格助詞の選択ができていない。	メディアの伝播と青少年の発展研究センターによって、「中国青少年のインターネット利用状況」について調査〈ヲ→ガ〉行われた。(修論)
	b.述部における格助詞の過剰使用		漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用。	そのため、中国語の「発」と同じ発音をしている「八」は、中国人から愛〈ヲ→〇〉されている。(卒論)
	c.動詞による誤用		元の動詞にあわせた格助詞の選択ができていない。	最近、APEC 会議が北京〈ニ→デ〉開催されました。(作文)
イ.格助詞と述部の二重の誤り	a.ヴォイスが影響した誤用＋述部の誤用	a1.ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用	受身の「(ラ) レル」にあわせた格助詞の選択ができておらず、述部の「(ラ) レル」も間違っている。	この本は完成の後、遣唐使〈ニ→ニヨッテ〉日本に〈持ち帰った→持ち帰られた〉。(卒論)
		a2.ヴォイスの誤用の添削に伴った格助詞の訂正	受身の「(ラ) レル」の選択が誤りとされ、またその添削に伴って格助詞の訂正もなされている。	学校でときどきいろいろな活動〈ヲ→ガ〉〈行います→行われます〉。(作文)
	b.述部における格助詞の過剰使用＋述部の誤用		漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用に加え、受身の「(ラ) レル」も間違っている。	郭の旧居は完全に保存〈ヲ→〇〉〈したから→されており〉、今私の故郷へ行けば、文学の匂いがする。(作文)
	c.動詞による誤用＋述部の誤用		元の動詞にあわせた格助詞の選択ができておらず、受身の「(ラ) レル」も正しく使われていない。	今、妖怪文化は既に独立した学科として日本〈ニ→デ〉〈流行され→流行し〉ている。(卒論)

〈表 4－27〉のうち、ア a、ア b、ア c は「格助詞の誤用」で、イ a、イ b、イ c は「格助詞の誤用＋述部の誤用」である。

ア c、イ c は受身文に現れてはいるものの、「APEC 会議が北京〈ニ→デ〉開催されました」のように、場所を表す意味格としてのニ格とデ格の混用であり、能動文でも起こり得るため、受身表現が直接的に関係した誤用とは考えにくい。

24 格助詞と述部の誤用箇所に付与されている研究タグは省略し、格助詞の誤用タグと正用タグはカタカナで表記している。

また、ア b、イ b も「中国人から愛<ヲ→〇>されている」のように、漢語サ変動詞の語幹「愛」を名詞と捉えることによって生じた誤用であり、直接ヴォイスが原因となった誤用かどうかが明らかではない。

さらに、イ a2 は「学校でときどきいろいろな活動<ヲ→ガ><行います→行われます>」のように、受身の「(ラ) レル」の「欠如」が誤りと判断され、かつ、添削者の助動詞「(ラ) レル」の付加に伴って格助詞「ヲ」が「ガ」に訂正されたものであるため、学習者自身の誤用とは認められない場合がある。

以上のことから、ここでは、真にヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用は、〈表 4－27〉のパターンのうち、ア a、イ a1 であると考える。以下では、これらのパターンに限定して分析を進める。

受身文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）の全体像として、作文コーパスから得られた受身文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用タグの総数としての「誤用」数と、ここでヴォイスに関わると考える誤用の数をあわせて示すと、次の〈表 4－28〉のようになる。

〈表 4－28〉誤用の全体像（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用の種類	「ヲ→Y」型	「ニ→Y」型	計
総数	223 例	143 例	366 例
ヴォイスに関わる誤用	105 例（47.09%）	33 例（23.08%）	138 例（37.70%）

ここから、「ヲ→Y」型誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用が約 5 割あるのに対し、「ニ→Y」型誤用では、約 2 割にとどまることが明らかになった。

以下では、ヴォイスに関わる誤用に焦点を当て、受身文における「ヲ」「ニ」の誤用の具体例を示し、その実態と原因を考察していく。

まずは、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用」（〈表 4－27〉の「ア a」）を分析していく。

4.3.1 「ヲ→Y」型誤用

受身文における格助詞「ヲ」の誤用（113 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンをYの表現別に示すと、次の〈表 4－29〉の通りである。

〈表 4－29〉受身文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（ア）

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ヲ→ガ（74）、ヲ→ハ（15）、ヲ→ニ（4）、ヲ→デ（2）、ヲ→トシテ（1）	96

ア a の誤用では、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用が一番多く見られる（74 例／96 例）。このような誤用は、4.1.2.2 節で見た曹（2011）でも挙げられているが、誤用の原因は詳しく論じられていない。

「ヲ→ガ」の誤用例としては、次のような例が挙げられる。

（102）修論（0045）／学習歴 6 年か 6 年以上／ア a ：
1862 年政府の命令によって、北京に「同文館」という学院〈ヲ→ガ〉設けられた。
（103）修論（0042）／学習歴 6 年か 6 年以上／ア a：
衣料品〈ヲ→ガ〉大量に生産されたことによって、背広の大衆化が実現した。

例（102）、（103）のような誤用は、特に修士論文、卒業論文で多く見られている（41 例／74 例）。論文などにおいて出来事を客観的に描写する受身文が多く用いられているためであると考えられる。

また、このような、「ヲ→ガ」の誤用はすべて直接受身文である。能動文と正用の受身文、学習者による誤用の対応関係を示すと、次の例（104）のようになる。

（104）	a. 能動文：	A ガ	B ヲ			～ スル
	b. 受身文（正用）：		B ガ	（A ニヨッテ）		～（ラ）レル
	c. 受身文（誤用）：（C ガ）		B ヲ	（A ニヨッテ）		～（ラ）レル

このように、（102）、（103）は、本来、「同文館（B）ガ設けられる」、「衣料品（B）ガ生産された」のような、「B ガ～（ラ）レル」という客観的な出来事を表す直接受身文を意図したもの（（104b））と考えられる。しかし、学習者の誤用例（104c）では、能動文の目的語（B）がヲ格のまま残ってしまっている。あえて解釈するならば、「（C ガ）同文館（B）ヲ設けられた」、「（C ガ）衣料品（B）ヲ生産された」のように、「同文館の設立」や「衣料品の生産」による影響を受けた人物（C）があたかも存在するような印象を与え、間接受身文になってしまう。

以上のような学習者の誤用は、直接受身文で格の交替が必須であるという理解が不十分なことから生じており、誤用例の構造が上のような印象を与えてしまうことを意識していないと考えられる。

なお、「ヲ→ハ」パターンの誤用は 15 例あるが、対比の「ハ」と解釈できる例（105）や、「ハ」と「ガ」のどちらにも訂正可能な例などがあり、誤用の傾向がはっきりしない。

（105）修論（0043）／学習歴 6 年か 6 年以上／ア a：
しかし、現段階において、軍隊や警察などによる暴力行使の正当性〈ヲ→ハ〉認められているが、国の管理に携わる政府機関による職権暴力の乱用は避けられない問題として目立っている。

このため、「ヲ→ガ」パターンよりも「ヲ→ハ」パターンの誤用例数が少ない理由も含め、詳しい分析は今後の課題としたい。

4.3.2 「ニ→Ｙ」型誤用

受身文における格助詞「ニ」の誤用（91 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンの誤用は、次の〈表 4－30〉の通りである。

なお、4.3 節の〈表 4－27〉からも分かるように、受身文における「ニ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が比較的低い。これはヴォイスに関わらないア c の誤用（主

に場所を表す意味格としてのニ格とで格の混用）が多く見られるためである（66 例）。

〈表 4－30〉受身文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（ア）

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ニ→ニヨッテ (6)、ニ→ガ (6)、ニ→デ (3)、ニ→カラ (3)、ニ→ニヨリ (2)、ニ→ハ (1)、ニ→ヲ (1)、ニ→○ (1)	23

ア a の誤用では、「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」といった受身文でよく使われる助詞の混用が見られる（14 例／23 例）。例えば、次のような例が挙げられる。

（106）作文（0038）／学習歴 3 年／ア a：
若者のマナーは若者の観念〈ニ→ニヨッテ〉決められる。
（107）修論（0071）／学習歴 6 年か 6 年以上／ア a：
2 年後清政府〈ニ→ニヨッテ〉閉鎖される。
（108）卒論（0026）／学習歴 3 年半／ア a：
『古事記』は太安万侶［32］、稗田阿礼［33］〈ニ→ニヨッテ〉作り出された。
（109）修論（0096）／学習歴 6 年か 6 年以上／ア a：
このような表現は動作主体 X の意図〈ニ→デ〉引き起こされるのではなく、Y その感情、感覚が自然に生じるのである。
（110）8 級試験（0029）／φ／ア a：
できれば、会社〈ニ→カラ〉送られて、日本に勉強しに行けるようになる。

例（106）～（110）のように、直接受身文において、ニ格で表せない動作主（対応する能動文の主語）にニ格を使う誤用が見られる。

まず、「ニ→ニヨッテ」の例に関して、日本語記述文法研究会（2009:221-223）は、直接受身文において、動作主はニ格で示すのが基本であるものの、ややかたい文体で、動作主が事態を引き起こした原因や動作の主体の意味を持つ場合は「ニヨッテ」が使われ（例 111、112）、動作や行為の結果、何かが生まれてくるといった意味を表す産出動詞では、動作主を明示する場合に「ニ」を用いることができず、「ニヨッテ」で表す（例 113）とされる。

（111）整備不良によって引き起こされる事故が年々増加している。（同:223）
（112）被害者の男性は少年グループによって暴行を加えられた。（同上）
（113）源氏物語は紫式部によって書かれた。（同上）

先の学習者の誤用例（106）、（107）では、「若者の観念」、「清政府」はそれぞれ事態を引き起こした原因と動作の主体の意味を持つので、「ニヨッテ」が正用となる。また、（108）のように、「作り出す」のような産出動詞（「生産」）での動作主は「ニヨッテ」でマークされる。なお、（108）のような誤用例は、4.1.2.2 節で見た市川（1997、2010）でも挙げられており、誤用の原因も何かを作り出す意味を持つ動詞には「によって」が求められることにある。

また、「ニ→デ」の例に関して、日本語記述文法研究会（2009:225）は、例（114）のように、「デ」は、原因的な意味を持つ動作主を表すことがあるとする。学習者の誤用例（109）も、動詞「引き起こす」の例であり、「動作主体 X の意図」は原因的な意味を持つため、「デ」を使うのが自然である。

（114）整備不良で引き起こされる事故が年々増加している。　（同:225）

さらに、「ニ→カラ」の例に関して、日本語記述文法研究会（2009：222）は、対応する能動文でニ格名詞がすでに含まれる場合、動作主を「ニ」で表すとニ格名詞が重複してしまうため、「ニヨッテ」や「カラ」が使われることがある（例 115）とする。

（115）卒業証書が校長から学生に手渡された。　（同:222）

学習者の誤用例（110）の「送る」は、例（115）の「手渡す」と同じくニ格名詞を取る動詞であり、「日本」が送られる先として存在するため、(110) の動作主「会社」は「カラ」によって表される（これにより、「会社」が着点という誤解が避けられる）。

以上のように、受身文における「ニ」の誤用では動作主マーカーの例が多く見られるが、直接受身文における（ニ格以外による）動作主の表し方を学習者が習得しにくく、マーカーの役割分担が理解できていないことが誤用の原因だと考えられる。

4.3.3　受身文における「格助詞の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」）を中心に分析し、以下のことを明らかにした。

まず、受身文における「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用で一番目立つ「ヲ→ガ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 4－31〉の通りである。

〈表 4－31〉受身文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.3.1	「ヲ→ガ」	●「学院(ヲ→ガ)設けられた」のような直接受身文でヲ格が残留している例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文で格の交替が必須であることへの不十分な理解）

このように、学習者は直接受身文を作るつもりであっても、結果的には間接受身文の格パターンになってしまっている。このような誤用は主に直接受身文で格の交替が必須であることを十分に理解していないという、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

次に、受身文における「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用の割合は比較的に低いが、一番目立つ「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」といった動作主マーカーの混用をまとめると、次の〈表 4－32〉の通りである。

〈表 4－32〉受身文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.3.2	「ニ→ニヨッテ」	●「マナーは観念(ニ→ニヨッテ)決められる」のような動作主が原因の意味を持つ例 ●「清政府(ニ→ニヨッテ)閉鎖される」のような動作主が動作の主体の意味を持つ例 ●「『古事記』は～(ニ→ニヨッテ)作り出された」のような産出動詞の例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文における、ニ格以外による動作主の表し方を学習者が習得しにくい）
	「ニ→デ」	●「表現は意図(ニ→デ)引き起こされる」のような動作主が原因の意味を持つ例	
	「ニ→カラ」	●「会社(ニ→カラ)送られる」のような能動文でニ格名詞が含まれる例	

このように、「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」パターンの誤用も、主に直接受身文における、ニ格以外による動作主の表し方を習得しにくいという、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

以上のように、本節では、受身文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」）をパターン化し、ヴォイスに関わる誤用を中心に分析を行った。また、Yの表現別に、徹底的にパターン化し、直接受身文における「ヲ→ガ」パターンの誤用と「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」パターンの誤用が多いことを明らかにした。さらに、学習者が直接受身文において格の変更を見落とすことと、非ニ格直接受身文の動作主のマーカーの役割分担などに注目し、誤用の原因を詳しく分析した。その結果、このような誤用の原因は主に学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

4.4　格助詞の誤用＋述部の誤用

次に、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（〈表 4－27〉の「イ a1」）を分析していく。

4.4.1 「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用

受身文における格助詞「ヲ」の誤用（110 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンは、次の〈表 4－33〉の通りである。

〈表 4－33〉受身文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ヲ→ガ（5）、ヲ→ニ（4）	9

まず、イ a1 の誤用でも、「ヲ→ガ」パターンの誤用が多く見られる（5 例／9 例）、4.3.1 節で示した例と同様の、直接受身文においてヲ格がそのまま残ってしまっている誤用例である。

（116）作文（0690）／学習歴 2 年／イ a1：
この二年間の大学生活を振り返って、大切な記憶〈ヲ→ガ〉〈呼び起こされ→よみがえり〉ました。

これも、直接受身文で格の交替が必須であるという理解が不十分なことから生じている誤用だと考えられる。また、非情物である「記憶」の表出のため、述部では他動詞の受身ではなく、自動詞文を使うべきで、受身の「（ラ）レル」が「過剰」と判定されている。
次に、「ヲ→ニ」パターンの誤用は 4 例見られ、例えば、次のような例が挙げられる。

（117）作文（0080）／学習歴 1 年半／イ a1：
ワンピースを見て、わたしはこのアニメ〈ヲ→ニ〉引き付け〈〇→られ〉てしまった。

能動文と正用の受身文、学習者の誤用の対応関係を示すと、次の（118）のようになる。

（118）a．能動文：　このアニメ　は　わたし　を　引き付ける。
b．受身文（正用）：わたし　は　このアニメ　に　引き付けられた。
c．受身文（誤用）：わたし　は　このアニメ　を　引き付ける。

学習者は「わたしはこのアニメを引き付ける」のように、動詞「引き付ける」を、「近くへ引き寄せる」という意味に誤解している可能性もあるが、他動詞の能動文を書くつもりではなく、（118a）のような能動文と対応する（118ｂ）のような直接受身文を作る意図を持っていると考えられる。しかし、（118c）のように、学習者の誤用では、（118a）の能動文の目的語のヲ格名詞「私」をガ格に交替しているが、その主語のガ格名詞「アニメ」の格の交替が間違っている。（118ｂ）のようにニ格にするべきであるが、ヲ格で表示している。
このように、学習者は直接受身文における項と項の関係の表示の仕方ができていない。そのうえ、述部の動詞（「引き付ける」）に受身の「（ラ）レル」も付加していない。誤用の結果、学習者の意図と正反対の意味になってしまっている。

4.4.2 「ニ→Ｙ」型誤用＋述部の誤用

受身文における格助詞「ニ」の誤用（52 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンは、次の〈表 4－34〉の通りである。

〈表 4－34〉受身文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ニ→ヲ（4）、ニ→カラ（2）、ニ→ニヨッテ（1）、ニ→ガ（1）、ニ→ハ（1）、ニ→○（1）	10

イ a1 の誤用では、「ニ→カラ」、「ニ→ニヨッテ」パターンの誤用が、少数であるが、観察された。

（119）卒論（0026）／学習歴 3 年半／イ a1：
この本は完成の後、遣唐使〈ニ→ニヨッテ〉日本に〈持ち帰った→持ち帰られた〉。

4.3.2 節で分析したように、例（119）では、動作主が事態を引き起こした動作の主体の意味を持つため、動作主には「ニ」ではなく、「ニヨッテ」を取るべきである。直接受身文における（ニ格以外による）動作主の表し方を学習者が習得しにくいことが誤用の原因だと考えられる。また、述部では、4.2.2 節の分析と同様の、他動詞の受身を使うべきところで他動詞文を使ってしまっている「欠如」の誤用が起こっている。これも母語の負の転移によるものと考えられる。

次に、「ニ→ヲ」パターンの誤用も 4 例観察された。

（120）感想文（0053）／学習歴 4 年／イ a1：
今の日本の若い世代は、そのドラマをみて、ドラマの中に出てきたいろんな古いもの〈ニ→ヲ〉懐かしいと〈おもわれる→おもう〉。

正用の能動文と正用の受身文、学習者の誤用の対応関係を示すと、次の（120）のようになる。

（121）a. 能動文（正用）：若い世代はドラマの中に出てきたいろんな古いものヲ懐かしいと思う。
b. 受身文（正用）：若い世代にドラマの中に出てきたいろんな古いものが懐かしいと思われている。
c. 受身文（誤用）：若い世代はドラマの中に出てきたいろんな古いものに懐かしいと思われる。

このように、受身文の正用としては、（121a）の能動文の目的語のヲ格名詞「古いもの」をガ格に、主語のガ格名詞「若い世代」をニ格に交替し、（121b）のような格パターンになるべきであるが、学習者の誤用（121c）では、直接受身における格の交替が完全に間違っている。また、文脈から見ると、（121b）のような直接受身文で状態を表すより、（121a）のような能動文で一般論を表現したほうが適切で、「（ラ）レル」が過剰だと判断されてい

る。

4.4.3　受身文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用＋述部の誤用」）を中心に分析し、以下のことを明らかにした。

まず、受身文における「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる「ヲ→ガ」、「ヲ→ニ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 4－35〉の通りである。

〈表 4－35〉受身文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.4.1	「ヲ→ガ」	●「記憶(ヲ→ガ)(呼び起こされる→よみがえる)」のような直接受身文においてヲ格が残留している、かつ述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文で格の交替が必須であることへの不十分な理解、他動詞の受身文と自動詞文の選択の誤りなど）
	「ヲ→ニ」	●「わたしはアニメ(ヲ→ニ)(引き付ける→引き付けられる)」のような項と項の関係の表示の仕方が間違っている、かつ述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文における項と項の関係の表示の仕方ができていない、助動詞が脱落しているなど）

このように、学習者が直接受身文の格パターンと述部の両方を間違えている誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

次に、受身文における「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる「ニ→ニヨッテ」、「ニ→ヲ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 4－36〉の通りである。

〈表 4－36〉受身文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
4.4.2	「ニ→ニヨッテ」	●「本は遣唐使(ニ→ニヨッテ)(持ち帰った→持ち帰られた)」のような動作主は動作の主体の意味を持つ、かつ述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文における、ニ格以外による動作主の表し方を学習者が習得しにくい） ●母語の負の転移
	「ニ→ヲ」	●「若い世代は古いもの(ニ→ヲ)懐かしいと(おもわれる→おもう)」のような格の交替が完全にできていない、かつ述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文における格の交替ができていない、文の表している意味が分からないなど）

このように、格助詞側の誤用は主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。一方、述部の誤用は母語の影響も見られる誤用であると言える。

以上のように、本節では、受身文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用＋述部の誤用」）をパターン化し、ヴォイスに関わる誤用を中心に分析を行った。従来の研究であまり注目されていなかった、受身文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」は、格助詞側と動詞側の連動で起こり、4.3 節で分析した「格助詞の誤用」と同様に、格助詞側では、ヲ格が直接受身文で残留してしまう、あるいは、非ニ格で直接受身文の動作主を表すことができていない誤用が多い。そのうえ、述部では「(ラ) レル」の「過剰」や「欠如」などが起こっている。このような誤用の原因は主に学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

4.5　受身文における誤用の分析のまとめ

以上、本章では、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「(ラ) レル」の誤用（「述部の誤用」）、格助詞「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）を分析し、以下のことを明らかにした。

Ⅰ.「述部の誤用」:

中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがある。「欠如」、「過剰」、「混同」は受身の助動詞「(ラ) レル」の有無や、他のヴォイスとの混同に関わる誤用で、「その他」は受身文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。

まず、誤用例の数から見ると、「(ラ) レル」の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、受身文の意味分類で見た場合、非情物主語を取る「状態・属性描写」の意味を表す受身文の誤用が多い。

さらに、パターン別の誤用の原因などをまとめると、次の〈表 4－37〉のようになる。

〈表 4－37〉受身文における「(ラ) レル」の誤用

誤用のパターン		典型的な誤用例	誤用の原因
過剰 (4.2.1 節)	「(ラ) レル」を他動詞文に過剰使用している場合	●「言語活動」などを表す三項動詞の例 ●「生産」などの意味を表す動詞の例	●学習言語への不十分な理解
	「(ラ) レル」を自動詞文に過剰使用している場合	●他動詞の受身文と自動詞文の選択ができていない例 ●「出現」などの意味を表し、自他の弁別が難しい動詞の例 ●「心理的態度」などの意味を表す自動詞で受身文を作る例	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移
欠如 (4.2.2 節)	「(ラ) レル」の「欠如」で他動詞文になっている場合	●動作主が出現していない、「言語活動」の意味を表す動詞の例 ●動作主が出現していない、「生産」などの意味を表す動詞の例 ●動作主が出現していて、「形成」などの意味を表す動詞の例 ●動作主が出現していて、「感情評価的態度」などの意味を表す動詞の例	●母語の負の転移 ●学習言語への不十分な理解
	「(ラ) レル」の「欠如」で自動詞文になっている場合	●他動詞の受身文と自動詞文の選択ができていない例	●学習言語への不十分な理解
混同 (4.2.3 節)	受身と使役を混同している場合	●助動詞の機能を理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	受身と可能を混同している場合	●文の表している意味を間違えている例	
	受身と授受を混同している場合	●視点の切り替えができていない例	
	受身と使役受身を混同している場合	●構文間の区別がつかない例	
その他 (4.2.4 節)	元の動詞の誤り	●動詞の自他を混同している例	●学習言語への不十分な理解
	述部の形態の誤り	●述語動詞の形態を間違えている例	
	品詞の誤り	●形容動詞などで受身文を作る例	

〈表 4－37〉のように、受身文における「述部の誤用」（「（ラ）レル」の誤用）は様々なパターンで起こっており、「過剰」と「欠如」の誤用は、学習言語への不十分な理解か母語の負の転移により生じていると考えられる。それに対して、「混同」と「その他」の誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

4.1.2.1 節で概観した先行研究において、受身文における「（ラ）レル」の誤用に関して、誤用のパターン、原因はある程度明らかになっているが（〈表 4－3〉参照）、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、受身文における「（ラ）レル」の誤用のパターンの再整理を〈表 4－37〉のような形で行い、受身文の意味と「（ラ）レル」の誤用との関係についても見た。

また、誤用の原因を大きく分けると、学習言語（日本語）への不十分な理解と、学習者の母語（中国語）の負の転移となっている。これは、先行研究と一致した結果であるが、本研究では、文や動詞の意味に注目して「（ラ）レル」の「過剰」と「欠如」の誤用を分析し、また、「混同」、「その他」のパターンも含めた誤用の原因の分析を通して、今までの研究で詳しく論じられてこなかった、学習者の日本語の受身文の「（ラ）レル」の学習困難点と母語の負の転移のパターンのより詳しい分析を行った。

Ⅱ．「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」：

中国語を母語とする日本語学習者の受身文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）のうち、「ヲ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が「ニ」より高い（4.3 節〈表 4－28〉参照）。

受身文におけるヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用の原因などをまとめると、次の〈表 4－38〉のようになる。

〈表 4－38〉受身文におけるヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用

ヲ／ニ	誤用のパターン		典型的な誤用例	誤用の原因
「ヲ」の誤用	「ヲ→Y」型誤用（4.3.1 節）	「ヲ→ガ」	●直接受身文でヲ格が残留している例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文で格の交替が必須であることへの不十分な理解）
	「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用（4.4.1 節）		●直接受身文においてヲ格が残留している、かつ述部も誤っている例	
「ニ」の誤用	「ニ→Y」型誤用（4.3.2 節）	「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」	●動作主が原因、動作の主体の意味を持つ例、産出動詞の例、能動文でニ格名詞が含まれる例	●学習言語への不十分な理解（直接受身文における、ニ格以外による動作主の表し方を学習者が習得しにくい）
	「ニ→Y」型誤用＋述部の誤用（4.4.2 節）		●上記と同じく、かつ述部も誤っている例	

〈表 4－38〉のように、学習者は、直接受身文において、格パターンだけではなく述部も誤っている複合的な誤用も生じさせている。このような「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」では、述部の誤用がある例は母語の影響が関わるものもあるが、格助詞側の誤用は主に、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

4.1.2.2 節で概観した先行研究において、受身文における格助詞の誤用はある程度提示されているが（〈表 4－4〉参照）、受身文における誤用を「（ラ）レル」の誤用と格助詞の誤用の両面から誤用を捉えていないため、「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」に分けて議論されていなかった。また、誤用のパターンや原因についての議論も不十分なものであったと考えられる。

これに対し、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、受身文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用を中心に、それらをパターン化し分析を行った。また、誤用の原因についてもより詳しい分析を行うことで、中国語を母語とする日本語学習者は、学習言語への不十分な理解によって直接受身文の格パターンをよく間違えていることが明らかになった。これは、学習者の日本語の受身文における格助詞「ヲ」「ニ」の未習得の部分をより特定することができたものと言える。

以上のように、本章では、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「（ラ）レル」の誤用、格助詞「ヲ」「ニ」の誤用のデータから、誤用の全体像、パターン、およびその原因を明らかにした。

ここで明らかにしたことは、学習者はどのような意味用法の受身文を間違えやすいか、どのようなタイプの動詞で受身文を過剰使用する、あるいは使用しないかという傾向を示すものであり、また、どのような受身文において学習者の母語を意識した指導が必要であるか、どのような受身文のどのような格の交替が学習上困難点となりうるかといった、誤用を防ぐ解決策に示唆を与えるものであると考えられる。

第５章　使役文における誤用の分析

本章では、使役文における誤用の分析を行う。

まず使役文の意味分類および格の交替、使役文の誤用に関する先行研究を概観し、本研究における使役文の分類と扱う現象の範囲を提示する（5.1 節）。

次に、第３章で示した誤用の分類に基づき、使役文における誤用を「述部の誤用」（5.2 節）、「格助詞の誤用」（5.3 節）、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（5.4 節）に分け、それぞれにおいて誤用の数、パターン、原因などの分析を行う。

5.1　使役文とその誤用

本節では、まず、使役文の意味分類、格の交替に関する先行研究（5.1.1 節）と、使役文の誤用に関する先行研究（5.1.2 節）を概観する。次に、それらを踏まえ、本研究における使役文の意味分類と本研究で扱う使役文の格を提示する（5.1.3 節）。

5.1.1　使役文に関する先行研究

本項では、使役文の意味分類、格の交替に関する先行研究を概観する。

5.1.1.1　使役文の意味分類

日本語記述文法研究会(2009:210)によると、「使役文」とは、「動詞の語幹に「-(s)ase-ru」という接辞を付加して、ある主体（使役の主体）の働きかけや影響のもとでほかの主体（動作の主体）が行う動作が成立するという形で事態を表現するものである」とされる。

通常、使役文の意味分類は、使役主体と動作主体の類型、動詞の自他などの構文上の特徴に基づいて行われてきている。例えば、森田（2002）は、強い意志的行為から弱い因果関係までの、連続的な意味の違いを認めたうえで、他動詞構文を形成する用法も加え、使役形式の表現的意味を次の〈表 5－1〉に示した 10 種類に分類している（同:195-197）。

〈表 5－1〉森田（2002）における使役文の意味分類

意味分類	例文
①因果関係（論理）	●失言が大臣を失脚させた。 ●小さな穴が堤防を決壊させた。
②結果（無作為）	●やあ、待たせたね。
③責任・手柄	●息子を戦死させてしまった。 ●子供を大学に合格させた。
④誘発（不随意）	●親を悲しませる不肖の息子。
⑤放置（たまま）	●ご飯を腐らせてしまった。
⑥放任（させておく）	●泣きたいだけ泣かせる。
⑦許容（ゆるし）	●褒美に海外旅行に行かせる。
⑧指令（しむけ）	●誘導尋問で犯人に吐かせる。
⑨使役（やらせ）	●病妻を無理に働かせる。
⑩他動性（作為）	●頭を働かせる。

この分類のうち、②～⑨は使役文の典型的な意味用法と言える。特に、⑨使役（やらせ）、⑧指令（しむけ）、⑦許容（ゆるし）、⑥放任（させておく）、④誘発（不随意）、③責任・手柄といった意味用法は、使役主体と動作主体がともに有情物の組み合わせで、日本語教育でもよく取りあげられている。

森田（2002）の分類の「①因果関係（論理）」に相当する使役文に関して、佐藤（1986）では、「因果関係の表現」を次の（１）a、b のように分けている。

（１）a.「人間の状態変化」
　　b.「現象間の関係」

佐藤（1990:103）によると、「因果関係を表現する使役文は、原因となる出来事と結果となる出来事とのふたつの出来事をむすびつけ、それをひとまとまりのものとしてさしだす」とされる。また、「因果関係」という用語を「ある出来事の発生、存続、変化、消滅を条件づけるものと条件づけられるものとの関係」という広い意味で使用する（同:107）としている。

さらに、佐藤（1990）では、佐藤（1986）の（1a、b）に相当する「物・出来事が　人（人の部分・側面）・物・出来事を　～させる」という構造を取る使役文をさらに詳しく分けている。

佐藤（1990）は、佐藤（1986）の（１a）「人間の状態変化」に相当する使役文（「物・出来事が　人（人の部分・側面）を　～させる」）を、「使役の客体」（動作主体）が人間である場合と人間の部分・側面である場合との二つに分け、それぞれを「内的な原因」と「外的な原因」によりさらに二分している。例えば、使役の客体（動作主体）が人間である場合の使役文は、次の〈表 5－2〉のようになっている。

〈表 5－2〉「人間の状態変化」を表す使役文（使役の客体が人間である場合）

使役の客体（動作主体）	要因	主語（使役主体）	例文
人間	内的な原因	人間の内部で進行する出来事、人間に属する性質、状態、動きを表す名詞	●生活において自分が孤独である、という心持ちが彼女を泣かせた。
	外的な原因	使役の客体である人間にとっては外的な出来事、外的な存在としての物を表す名詞	●両性の相剋するような家庭は彼を懲りさせた。

このように、使役の客体が人間である場合、内的な原因に基づく因果関係を表す使役文において、主語（使役主体）は通常、「心持ち」という人間の内部で進行する出来事などを表す名詞とされ、それが原因で「彼女が泣いた」ことが生じている。それに対して、外的な原因に基づく因果関係を表す使役文では、主語（使役主体）は通常、「家庭」という人間にとっては外的な存在などのような名詞となり、それが原因で人間の状態変化が生じることを表している。

佐藤（1986）の（１b）「現象間の関係」に相当する使役文（「物・出来事が　物・出来事を　～させる」）は、「不況がつづけば、大企業は当然採用停止と操業短縮の手段にでる。これは労働者の賃金格差を増大させる」（佐藤 1990:145）のようなものであり、「採用停止と操業短縮の手段」という原因で「労働者の賃金格差」の変化が生じているというような、非情物の間に因果関係があることも指摘されている。

また、森田（2002）の分類の「⑩他動性（作為）」に相当する用法に関して、日本語記述文法研究会（2009:267-269）は、このような対応する他動詞をもたない自動詞から作る使役文を「他動的使役文」と呼び、次のような例が挙げている。

（２）　鈴木は足をすべらせて、転んだ。　（同:268）
（３）　その役者は晩年になってついに才能を開花させた。　（同上）
（４）　首相は、思い切った政策で、経済を安定させた。　（同:269）

このように、（２）は主語かつ使役主体（「鈴木」）の「滑る」という動作に伴って「転ぶ」という状況が起きることを表す。（３）は主語かつ使役主体（「役者」）の部分（「才能」）の変化を表す。（４）の「安定する」は自動詞文型しかとらないサ変動詞の例で、「安定させる」という使役形で他動詞として用いられている。

本研究では、使役文における誤用の起こり方を検討するための使役文の分類を行うが（5.1.3.1 節）、基本的には、森田（2002）の使役文の意味分類法に従い、①因果関係（論理）と⑩他動性（作為）に相当する使役文に関しては、ここまで見てきた佐藤（1986、1990）および日本語記述文法研究会（2009）の分析を参考にすることにする。

5.1.1.2　使役文における格の交替

日本語記述文法研究会（2009）は、使役文を「自動詞から作られる使役文」（同:260）と「他動詞から作られる使役文」（同）に分け、それぞれの使役文における格の交替を詳しく説明している。

Ⅰ.「自動詞から作られる使役文」

日本語記述文法研究会（2009:260）では、「対応する能動文の動詞が自動詞の場合、使役文は、2 種類の文型をとる」と指摘している。一つは使役主体が「ガ」、動作主体が「ヲ」で表される場合、もう一つは使役主体が「ガ」、動作主体が「ニ」で表される場合である。前者の「ガ，ヲ」構文の使役文は 5.1.1.1 節で述べた森田（2002）の「⑨使役」、「④誘発」などの意味を表しているのに対して、後者の「ガ，ニ」構文の使役文は「⑥放任」などの意味を表している。

まず、使役主体が「ガ」、動作主体が「ヲ」で表される場合、次のような例が挙げられる。

（5）	a.		生徒が	帰った。	（同:260）
	b.	先生が	生徒を	帰らせた。	（同上）
（6）	a.		みんなが	びっくりした。	（同:270）
	b.	大きな声を出して	みんなを	びっくりさせた	（同上）

次に、使役主体が「ガ」、動作主体が「ニ」で表される場合、次のような例が挙げられる。

（7）	a.		学生が	勝手にしゃべった。	（同:260）
	b.	先生は、	学生に	勝手にしゃべらせた	（同上）

このように、使役文では対応する能動文に含まれていない「先生」、「私」が主語になり、能動文の主語であるガ格名詞（「生徒」、「みんな」、「学生」）がヲ格かニ格に降格し、「ガ，ヲ」、「ガ，ニ」構文になる。なお、自動詞の使役文における動作主体は、意志性を持つ場合のみニ格で表される。

Ⅱ.「他動詞から作られる使役文」

日本語記述文法研究会（2009:260）では、「対応する能動文の動詞が他動詞の場合、使役者が「が」、被使役者が「に」で表される」と指摘している。このような「ガ，ニ」構文の使役文は 5.1.1.1 節で述べた森田（2002）の「⑧指令」などの意味を表している。

例えば、次のような例が挙げられる。

（8）	a.	部下が	市場を調査した。	（同:261）
	b. 課長は	部下に	市場を調査させた。	（同上）

このように、対応する能動文に含まれていない「課長」が使役文の主語になり、能動文の主語であるガ格名詞（「部下」）が使役文ではニ格に降格し、「ガ，ニ」構文になる。

5.1.2　使役文の誤用に関する先行研究

使役文の誤用に関する先行研究として、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997、2010）、馮（1999）、赤地（2004）、王忻（2008）、望月（2009）、胡（2016）を取り上げ、使役文における「（サ）セル」の誤用と格助詞の誤用に分けて紹介していく。

5.1.2.1　使役文における「(サ) セル」の誤用

まず、使役における「(サ) セル」の誤用に関する先行研究の内容をまとめる。

①佐治（1992）

佐治（1992）は、『中国人の日本語作文に見られる誤用例集』、その他の作文、翻訳などのデータを用いて、使役表現における「せる・させる」(「(サ) セル」) の誤用例を分析している。

その結果、例（９)、(10) のような「感動する」などの心理の動きを表す動詞の使役形の誤用が多くあるとされる。

（９） A さんの事跡を感動させると共に、(以下略)
(10)　(前略)、人びとに静けさと優雅さを感じさせられている。

このような誤用の原因は、学習者は「感動させる」の対象は人間でなければならないことが分からない（例９)、使役主体と動作主体を正確に捉えることができない（例 10）といったような日本語への不十分な理解としている。

また、例（11）のような、心理の動きを表す動詞以外の動詞に関する誤用も挙げられている

(11)　自分を「日本語の門」から出らせ、一人前の日本語教師になるつもりである。

この誤用の原因として、「出らせる」のような動詞の可能形の使役形は存在しないことを理解していないという日本語への不十分な理解を指摘している。

②猪崎（1994）

猪崎（1994）は、中国語話者 3 名の半年間の作文を分析した結果、使役態の使用は比較的に少なく、使用されていても誤用が多いとしている。

使役態の誤用のパターンには例（12）のような「過剰使用」(使用の必要がないのに使用しているケース）と「欠」(使用すべきなのに使用していないケース）があると指摘している。

(12)　私が日本人だけさす理由は、私がちょうど日本で前に述べた光景を見て、感想をもたせたにすぎない。

例（12）のような使役態の「過剰使用」は、「助詞との不整合」(動詞と助詞の組み合わせ）の問題に関係していることが指摘されている。

③市川（1997）

市川（1997）は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者（アメリカ、フランス、中国、韓国、タイなど）の作文、会話などにおける誤用を分析している。

使役文の「(サ) セル」の誤用例としては、「誤形成」(述語動詞の形態の誤り)、「混同」(使役形と自他動詞や授受、使役＋授受の混同）があるとされる（同:154-161)。

また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用

は特に、例（13）のような使役と自他動詞の混同、すなわち、他動詞か自動詞の代わりに、使役形にしなくてもいいところで使役形を使ってしまう誤用が多いことが分かる。

（13）　もう一つ深く感じさせたのは一日の中で、よく耳にする「すみません」など（以下略）。

このような誤用は、使役形、自動詞、他動詞の三者の関係が、中国語を母語とする日本語学習者にとって難しいことを表していると指摘している。

④市川（2010）

市川（2010）は、市川（1997）より誤用例を増やし（『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース　Ver.2』CD-ROM 版など）、外国人日本語学習者の誤用を分析している。

使役文の「（サ）セル」の誤用のパターンは、「誤形成」、「混同」に加え、「脱落」（使役形を使用しなければいけないのに使用していない）のパターンもあるとしている。

また、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は、市川（1997）と同じ結果を示している。

⑤馮（1999）

馮（1999）は、日本語の使役文の「構文文法学習」（どのような文法構造を持つ使役文が自然であるかの学習）を、質問紙調査（選択課題）を通して、中国語母語話者の日本語使役文の習得を困難にする要因を探っている。

その結果、使役構文文法の学習エラーは学習年数と共に減少しないことが明らかになっている。日本語では「～を成立させる」のような使役表現が自然であるのに対し、中国語では、「～を成立する」のような能動表現が自然であるというような、日本語と中国語の相違点が、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の問題点となっており、使役構文文法の学習エラーの減少しにくい原因の一つが母語の干渉にあることが指摘されている。

⑥赤地（2004）

赤地（2004）は、日中両言語の使役に関する相違点を基に、質問紙調査（選択課題）を通して、中国語を母語とする日本語学習者（学習歴:1 年、2 年）の使役表現の習得について調査している。

学習者の選択結果から推測すると、誤用は特に、例（14）のような使役形と自他動詞の混同が多いとされる。また、構文が複雑になると、例（15）のような受身や使役受身との混同もあるとされる。

（14）　日中友好関係を発展する。
（15）　その人は、テストの成績が悪い子供を、廊下に立たれた／立たされた。

学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉（例 14）、および、複雑な構文の中の語彙から使役者（使役主体）、被使役者（動作主体）を正しく捉えられない（例 15）といったような日本語への不十分な理解が主な誤用の原因と指摘している。

⑦王忻（2008）

王忻（2008）は、中国人日本語学習者（日本語を専攻とする大学3、4年生、日本語専修学校上級コースの学生）の作文における誤用を分析した研究であり、使役の誤用は、ヴォイス（使役、受身、自発、やりもらい）の誤用分析の節で扱われている。

ヴォイスの誤用は、「過剰」（ヴォイス形式を使う必要がないのに使ってしまうケース）、「不足」（ヴォイス形式を使うべきなのに使わないケース）、「文の部分間の関係の混乱」（文の主語あるいは補語などの間の表現で混乱しているケース）、「混同」（ヴォイスの間での混同）という四つのケースにまとめられている（同:126）。使役の誤用は、すべてのケースに見られている。「（サ）セル」の誤用に関わるのは、「過剰」、「不足」、「混同」のケースであり、「（サ）セル」の「不足」が一番目立つことが分かる。

また、「（サ）セル」の「過剰」の誤用の原因として、中国語では「驚く」のような心のうごきを表す動詞は能動形より使役形が使われやすいという、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉が挙げられている。

それに対して、「（サ）セル」の「不足」の誤用の原因として、「不足」の誤用の原因としては、自動詞を他動詞として使ってしまう（特に「リラックスする」のようなサ変動詞）、例（16）のような文の整合性の問題といった、日本語のルールに関わる要因が挙げられている。

（16） 毎週の七曜日母は私をつれて先生の家へ行って授業を<u>受けた</u>。

また、「混同」の誤用も母語の影響を受けにくく、日本語への不十分な理解により生じると指摘している。

⑧望月（2009）

望月（2009）は、中国語を母語とする日本語学習者（在日留学生、上級レベル以上）による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス（動詞の自他、使役、受身、可能）の誤用分析を行っている。

そのうち、使役の誤用に関しては、使役の付加（使う必要がないところで使う）による誤用が顕著であると指摘している。

誤用の原因は、中国語では、“许多(xǔ duō) 店家(diàn jiā) 占据(zhàn jù) 了(le) 道路(dào lù) 两旁(liǎngpáng) 的(de) 空地(kòng dì)，<u>使得</u>(shǐ dé) 道路(dào lù) 变得(biàn de) 很(hěn) <u>拥挤</u>(yōng jǐ)”（たくさんの店が道路の両側の空いている場所を占めて、歩行者が歩けないほど<u>混んでいました</u>）のような「原因事象を表す文＋使役標識を用いて結果事象を表す文」が許されるというような、学習者の母語と日本語の異なる点により生じる母語の干渉にあるとされる。

⑨胡（2016）

胡（2016）では、作文コーパス（LARP at SCU）を用い、中国語を母語とする日本語学習者（学習歴:半年～3年半）の使役文の用法別の使用実態を明確にしている。

分析にあたり、中国語の使役文との対応関係や、先行研究を踏まえ、使役文を「基本的」、「心理的」、「責任的」、「自動的」、「他動的」の五つの用法に分類している。それぞれの使役文として、次のような例を挙げている。

（17）母親は息子に一生懸命勉強させた。（「基本的」）
（18）子どもの小さなプレゼントが親を喜ばせるものだ。（「心理的」）
（19）私は先の戦争で息子を死なせてしまった。（「責任的」）
（20）この地方では梅は 2 月中旬に花を咲かせる。（「自動的」）
（21）作家は軽妙に筆を走らせていた。（「他動的」）
（22）バッテリを消耗させる。（「他動的」）

例（17）は「使役の基本的用法」で、（18）は「原因を主語にした使役文」の一部であり、「心理的」という用法としてまとめている。また（19）は「責任者を主語にした使役文」で、（20）は Y の動作や変化を表す「自動的」という用法の例である。さらに、（21）と（22）はやや特殊な使役文や「原因を主語にした使役文」の一部であり、「他動的」という用法としてまとめている。

胡（2016）の調査の結果、使用率と誤用率は共通して、「他動的」＞「心理的」＞「基本的」の順になっており、「筆を走らせる」、「親を喜ばせる」のような「他動的」、「心理的」の用法を持つ使役文の誤用率は学習年数が経ても高いことが指摘されている。また、「（サ）セル」の誤用のパターンには例（23）のような「不使用」、例（24）のような「過剰使用」、例（25）のような「有対動詞の非用」、例（26）のような「混同」があるとされる。

（23）　（前略）組織を成立した。
（24）　主人公はそのことを知ってたり、ET を手伝ったりして太空に戻させた。
（25）　この夢はまだ遠いですが、私は叶らず叶わせたいです。
（26）　練習の相手がなかったので、彼女はいつも私に日本語を習われました。

誤用の原因として、（23）～（26）は、日本語の動詞自他用法の未習得のような日本語への不十分な理解と、母語の干渉により生じていると指摘している。また、学習者の母語では“让（ràng）”というマーカーが受身と使役の両方に使えるため、（26）も母語の干渉に関係していると指摘している。

以上に示した先行研究の内容をまとめると、次の〈表 5－3〉のようになる。

〈表 5－3〉先行研究における使役文の「（サ）セル」の誤用

先行研究	学習レベル	誤用のパターン	誤用の原因
①佐治（1992）	不明	●心理の動きを表す動詞の受身形の誤用 ●心理の動きを表す動詞以外の動詞の受身形の誤用（使役＋可能形の使用）	●日本語への不十分な理解（「感動させる」の対象は人間でなければならないことが分からないなど）
②猪崎（1994）	不明	●過剰使用 ●欠	●日本語への不十分な理解（動詞と助詞の組み合わせの問題に関係している）
③市川（1997）	初級・中級前半程度	●誤形成 ●混同 ●その他	●日本語への不十分な理解（使役形、自動詞、他動詞の三者の関係が分からない）
④市川（2010）	初級・中級前半程度	同上（③）	同上（③）
⑤馮（1999）	初級～上級	※明示されていない	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
⑥赤地（2004）	学習歴 1 年、2 年	●使役形と自他動詞の混同 ●受身や使役受身との混同	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点） ●日本語への不十分な理解（複雑な構文の中の語彙から使役者（使役主体）、被使役者（動作主体）を正しく捉えられないなど）
⑦王忻（2008）	大学 3、4 年生	●過剰 ●不足 ●混同	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点） ●日本語への不十分な理解（自動詞を他動詞として使ってしまうなど）
⑧望月（2009）	上級レベル以上	●付加	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
⑨胡（2016）	学習歴半年～3 年半	●不使用 ●過剰使用 ●有対動詞の非用 ●混同	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点） ●日本語への不十分な理解（日本語の動詞自他用法の未習得など）

〈表 5－3〉が示しているように、中国語を母語とする日本語学習者は、それぞれの学習歴にかかわらず、多種多様なパターンの誤用を起こしている。誤用のパターンの用語はそれぞれ違っているが、使役形を使うべきなのに使わないケースと、使役形にしなくてもいいところで使役形を使ってしまうケースが共通して指摘されている。また、誤用の原因も

それぞれ違っているが、大別すると、日本語への不十分な理解と学習者の母語の負の転移にまとめられる。

5.1.2.2　使役文における格助詞の誤用

次に、上記の研究で、使役文における格助詞の誤用に関して言及している内容をまとめる。

まず、市川（1997）は、使役文における助詞の誤用として、「を」「に」の誤りを挙げている（同：156-157）。また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用では特に、例（27）のような「×に→○を」の誤用が見られる。

（27）　子供の頃はいたずらであった私は、よく親に（→を）困らせてんだ。

誤用の原因としては、動詞の自他の判断ができないことにより助詞の選択ができていないこと（同:159）が指摘されている。また、市川（2010）でも、同じ結果を示している。

馮（1999）は、中国人日本語学習者の使役文における動作主マーカー（「に」「を」）の学習について、選択課題を用いた検証により、動作主マーカーの学習のエラーが学習年数と共に減少していくことを指摘している。挙げられている例文から、どのような例でマーカー間の選択の混同が起こるのか、ある程度推測できるが、実際に学習者がどのような誤用例を産出するのかは分からない。

胡（2016）は、例（28）のような誤用例におけるニ格の誤りを挙げている。

（28）　もちろん、これは内緒で、母に喜ばせるために。

これは、日本語の「太郎が次郎に買い物に行かせた」のような使役文における被使役者（動作主体）を示す助詞「に」の過剰一般化による誤用として解釈している。

以上で挙げている内容をまとめると、次の〈表 5－4〉のようになる（格助詞の誤用について言及していない研究は、誤用のパターン、誤用の原因を「―」で表記する）。

〈表 5－4〉使役文における格助詞の誤用

先行研究	学習レベル	誤用のパターン	誤用の原因
①佐治（1992）	不明	—	—
②猪崎（1994）	不明	—	—
③市川（1997）	初級・中級前半程度	●「に→を」	●動詞の自他の判断ができないことにより助詞の選択ができていない
④市川（2010）	初級・中級前半程度	同上（③）	同上（③）
⑤馮（1999）	初級～上級	※明示されていない	※明示されていない
⑥赤地（2004）	学習歴 1 年、2 年	—	—
⑦王忻（2008）	大学 3、4 年生	—	—
⑧望月（2009）	上級レベル以上	—	—
⑨胡（2016）	学習歴半年～3 年半	●「に→を」	●典型的な使役文における被使役者（動作主体）を示す助詞「に」の過剰一般化による誤用

以上のように、使役文における格助詞の誤用について議論している先行研究は少ない。また、「に→を」パターンの誤用しか提示されておらず、原因などについての議論も不十分だと考えられる。

5.1.2.3　先行研究で残された課題

以上のような従来の研究から、まず、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の「（サ）セル」の誤用は特に、「使役形を使うべきなのに使わない」誤用と、「使役形にしなくてもいいところで使役形を使ってしまう」パターンが目立つことが分かる。

また、誤用の原因として、目標言語である日本語の構造そのものの理解ができていないという日本語への不十分な理解（例えば、使役形、自動詞、他動詞の三者の関係がよく分からない）と、学習者の母語と日本語の異なる点で生じる母語の負の転移が共通して挙げられている。

これに対して、使役文における格助詞の誤用も指摘されているが、少数である。また、「に→を」パターンの誤用しか提示されておらず、原因などについてもあまり詳しく論じられていない。

このように、従来の研究において、中国語を母語とする日本語学習者が起こす使役文の誤用の実態はある程度明らかになっているが、誤用のパターンや原因の両者を詳しく対応させて分析した研究がまだ少ない。また、使役文における「（サ）セル」の誤用と格助詞の誤用の両面から捉える研究もあまり現れていない。特に、使役文における格助詞の誤用についての議論は比較的に少ない。このため、より多くの誤用例から、使役文における「（サ）セル」の誤用と格助詞の誤用のそれぞれのパターンの再整理を行い、今までの研究で詳しく論じられていない母語の負の転移のパターンおよび日本語の使役文の未習得の部分の特

定をする必要がある。

そこで、本研究では、作文コーパスを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用を体系的に分析することで、誤用のパターンの再確認や誤用の原因のより詳しい分析をするとともに、使役文の意味と「(サ) セル」の誤用、すなわち「述部の誤用」との関係も探っていく。

5.1.3　本研究における使役文の扱い

本項では、本研究における使役文の意味分類と、本研究で扱う使役文の格を提示する。

5.1.3.1　本研究における使役文の意味分類

使役文における誤用の起こり方を検討するにあたり、従来の使役文の意味分類を踏まえて、まず使役文の分類を行う。

基本的には、5.1.1.1 節で見た森田（2002）の使役文の意味分類法に従い、「①因果関係（論理)」と「⑩他動性（作為)」に相当する使役文に関しては、佐藤（1986、1990）および日本語記述文法研究会（2009）の分析を参考にした修正を行う。

具体的には、次の〈表 5－5〉のような使役文の意味分類を設定した。表中の例文は、北京日本学研究センター（2003)『中日対訳コーパス第一版（CD-R1)』の実例をもとに筆者が作成したものであり、すべて日本語母語話者による添削済みである。

〈表 5－5〉使役文の意味分類

使役文の意味分類		例文
①強制		●部下を無理に転任させた。
②指令		●社員に宣伝用のチラシを作らせた。
③責任		●その男は彼女を妊娠させた。
④手柄		●俺が家族を食べさせているんだ。
⑤誘発		●彼は何でもいい、人を少しでも喜ばせたがった。 ●彼女は男を笑わせた。
⑥許可・許容		●今月いっぱいで会社を辞めさせてください。
⑦放任		●子供を遊びたいだけ遊ばせた。
⑧因果関係	主語の状態変化	●足を滑らせて転んだ。 ●単純に自分の好奇心を満足させたい。 ●自分を栄えさせるためには、ある程度のエゴイズムは正当だ。
	その他の参与者の状態変化	●その音楽は僕を混乱させた。 ●工業の発展と工業地帯の成立は都市化を進化させた。 ●子どもを自立させる。 ●日本は農地改革を成功させた。 ●明の太祖が科挙の制度を復活させた。 ●A 社は来年度までにこの橋を完成させる予定である。

〈表 5－5〉のうち、①～⑦は典型的な使役文の意味用法と言える。また、使役主体（ガ格名詞）と動作主体（ヲ格名詞／ニ格名詞）のどちらも有情物に限られる。それぞれ、5.1.1.1節で紹介した森田（2002）の⑨、⑧、③の「責任」、③の「手柄」、④、⑦、⑥（〈表 5－1〉参照）に相当する。なお、学習者の誤用例の実態や日本語教育で扱われる状況を考慮し、森田（2002）の「②結果（無作為）」、「⑤放置」の意味用法は、本研究の分類で扱わない。

一方、「⑧因果関係」は、使役主体、動作主体が非情物でも成り立つ使役文である。また、5.1.1.1節で紹介した日本語記述文法研究会（2009）で示されている「他動的使役文」の用法は、有情物主語（使役主体）の動作により何かの状況が起き、主語の状態変化が生じる（例２参照）、あるいは、有情物主語の働きかけで、その部分の変化で主語の状態変化が生じる（例３参照）、主語の働きかけや影響でほかのものの状態変化が生じる（例４参照）ことを表すと考えられる。これらは、佐藤（1986、1990）の「因果関係の表現」に相当すると考えられるため、佐藤（1986、1990）の「因果関係の表現」とともに、因果関係を表す使役文として扱う。したがって、本研究の「⑧因果関係」という意味用法は、佐藤（1986、1990）と日本語記述文法研究会（2009）でなされてきた「因果関係の表現」、「他動的使役文」の用法を再構成したもので、再帰性を持つかどうかにより二分している。

まず、「⑧因果関係」のうち、再帰性を持つ使役文を「主語の状態変化」としてまとめた。これは、日本語記述文法研究会（2009）の主語（使役主体）の動作に伴う状態変化、主語の部分の変化による状態変化を表す「他動的使役文」に相当する[25]。主語（使役主体）は、「足」、「好奇心」の持ち主である人間、「私」のような人間（「自分」の持ち主としてとらえてもよい）で、動作主体は「足」、「自分の好奇心」のような人間の部分・内部・側面、「自分」のような使役主体自身（人間の側面という使役主体に所有されている部分としてとらえてもよい）のことである。このような使役文は、主語（使役主体）による働きかけや影響が、動作主体（使役主体に所有されている部分か使役主体自身）を通して主語（使役主体）自身に及ぶという意味を表している。

それに対して、使役主体の働きかけや影響により、主語以外の参与者の状態変化が起きるものを、再帰性を持たない使役文と見なす。これは、佐藤（1986、1990）の外的な原因により生じる「人間の状態変化」を表す使役文（〈表5－2〉参照）と、「現象間の関係」を表す使役文、日本語記述文法研究会（2009）の自動詞文型しかとらないサ変動詞からなる「他動的使役文」に相当する。

以下ではこの意味分類に従い、使役文における「述部の誤用」（「（サ）セル」の誤用）の分析を進める（5.2 節）。

5.1.3.2　本研究で扱う使役文の格

5.1.1.2 節で述べたように、日本語の使役文には、「ガ，ヲ」構文、「ガ，ニ」構文の 2 種類の文型をとる。そのため、学習者の使用例では、「ヲ」、「ニ」のような動作主体を表す格の誤用が起こりうると考えられる。具体的には、どのような場合に「ヲ」で動作主体を表現し、どのような場合に「ニ」で動作主体を表現するか、といったような判断の困難により生じる誤用が予測される。

それゆえ、本研究では、使役文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用を中心に調査・分析する。また、実際に入手できるコーパスデータの状況も考慮して、「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使

[25] 佐藤（1986、1990）の内的な原因により生じる「人間の状態変化」を表す使役文（〈表 5－2〉参照）は、主語（使役主体）の持ち主の状態変化として考えられるが、学習者の誤用例も考慮し、分類から外す。

うべきところで「ニ」を使用したケース）に焦点を当て、調査・分析を行う（5.3 節、5.4 節）。

5.2　述部の誤用

本節では、使役文における「述部の誤用」（「(サ) セル」の誤用）の分析を行う。

まず、第４章の受身文の分析と同様に、使役文における「述部の誤用」（「(サ) セル」の誤用）を「欠如」、「過剰」、「混同」という三つのパターンから見ていく。このうち、「混同」に関しては、コーパスのタグ情報から得られるヴォイスの混同の範囲、すなわち、「使役」と「受身」、「可能」、「授受」、「使役受身」との混同を扱う。「格助詞の誤用＋述部の誤用」も同様である。

使役文における「述部の誤用」（「(サ) セル」の誤用）の具体的な分類は、次の〈表 5－6〉のようになる。

〈表 5－6〉使役文の誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン	定義	誤用例[26]
欠如	使役の「(サ) セル」を使用すべきなのに使用していない。	資格の獲得で自分を〈充実し→充実させ〉ている。（卒論）
過剰	使役の「(サ) セル」を使用する必要がないのに使用している。	連用形の後ろにつなげている、語気を〈緩和させる→緩和する〉。（卒論）
混同	使役の「(サ) セル」と他のヴォイスとを混同している。	多分、それは善意を持っている返事であるが、相手に誤解〈させる→される〉可能性は高い。（作文）

上記の三つのパターンは、使役の助動詞「(サ) セル」の有無や、他のヴォイスとの混同に関わる誤用であり、助動詞「(サ) セル」に加えて元の動詞が修正されている場合も含む。これらのパターン別の誤用例の分布は、次の〈表 5－7〉の通りである。

〈表 5－7〉誤用例の分類：使役文の誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン	誤用例数	
欠如	96	45.93%
過剰	79	37.80%
混同	34	16.27%
合計：	209	100%

〈表 5－7〉から、使役文における「述部の誤用」の三つのパターンは、「欠如」、「過剰」、「混同」という順に多いことが分かる。

さらに、5.1.3.1 節の〈表 5－5〉に示した使役文の意味分類に基づいて、誤用例の分布を例数の多い順に見ると、次の〈表 5－8〉の通りである。

[26] 述部の誤用箇所に付与されている研究タグは省略した。また、括弧内に誤用例の文体を示す。

〈表 5－8〉誤用例の分類：使役文の意味（「述部の誤用」）

使役文の意味分類	誤用例数	
⑧因果関係	170	81.34%
⑤誘発	9	4.31%
④手柄	8	3.83%
⑥許可・許容	8	3.83%
①強制	6	2.87%
②指令	6	2.87%
③責任	2	0.96%
⑦放任	0	0.00%
合計：	209	100%

以上の〈表 5－7〉と〈表 5－8〉から見ると、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「述部の誤用」は、「欠如」、「過剰」のパターンで起こりやすく、また、「因果関係」を表す使役文の割合がかなり高いことが分かる。

以下では、使役文における「述部の誤用」について、誤用例数の多い「欠如」、「過剰」、「混同」の順に、誤用の具体的な実態とその原因を考察していく。

5.2.1　欠如

まず、使役文における「(サ) セル」の「欠如」のパターンの誤用について、例数の多い順に使役文の意味分類別の分布を示すと、〈表 5－9〉のようになる。

〈表 5－9〉「(サ) セル」の「欠如」の誤用の意味分類別分布

使役文の意味分類		誤用例数	
⑧因果関係	主語の状態変化	21	85.42%
	その他の参与者の状態変化	61	
②指令		4	4.17%
⑥許可・許容		3	3.13%
①強制		2	2.10%
④手柄		2	2.10%
⑤誘発		2	2.10%
③責任		1	1.04%
合計：		96	100%

〈表 5－9〉から、使役文における「(サ) セル」の「欠如」の誤用は、「⑧因果関係」の意味を表す使役文に最も多く見られることが分かる。以下では、「因果関係」の使役文における「(サ) セル」の「欠如」の誤用、その他の意味用法における「(サ) セル」の「欠如」の誤用の順に、具体例を挙げながら考察していく。

5.2.1.1 「因果関係」の誤用 1：漢語サ変動詞の誤用

まず、「因果関係」の使役文には、以下のような漢語サ変動詞の誤用例が目立つ。

(29) 卒論（0088）／学習歴 3 年半／欠如：
再就職の主婦の行列の中で、仕事を通じて、自分の人生の価値を実現し、生活を〈充実したい→充実させたい〉と思う主婦が多くなった。

(30) 卒論（0088）／学習歴 3 年半／欠如：
たくさんの暇がある主婦たちはこれらの手軽で簡単な仕事の中で自分を＜満足し→満足させ＞、余暇を充実させる。

(31) 作文（046）／学習歴 1 年半／欠如：
人間は経済を発展〈する→させる〉ために、手段を選ばず自然から得をとりたい。

(32) 卒論（0083）／学習歴 3 年半／欠如：
また世界的に見ても就業意欲が高いとされる高齢者層の雇用を＜促進し→促進させ＞、高齢者を生産年齢に組み入れる必要があるだろう。

(33) 卒論（0003）／学習歴 3 年半／欠如：
矛盾を〈減少し→減少させ〉、交流を順調に進めるためには、両国は互いに相手の文化をよく理解し、尊重すること。

(34) 作文（027）／学習歴 1 年 3 ヶ月／欠如：
元気かどうかに関わらず、徹夜までして、計画を完成〈し→させ〉なければなりません。

例（29）～（34）のように、使役主体の働きかけや影響のもとで、主語（使役主体）もしくはその他の参与者に状態変化が起こる事態を描写する文では、「充実する」、「満足する」、「発展する」、「促進する」、「完成する」などのような漢語サ変動詞の誤用が多数見られた（82 例のうち、延べ例数 48 例）。これらの例では、「漢語＋サセル」の形を使うべきところで、「（サ）セル」が「欠如」し、「漢語＋スル」の形になっている。

このタイプの誤用の原因は、学習者の母語である中国語において、同形同義、もしくは類似した形で同義の動詞が存在することにあると考えられる。誤用が見られた具体的な漢語サ変動詞と、それに対応する中国語の動詞をリストの形で示すと、次の〈表 5－10〉のようになる。

〈表 5－10〉誤用例における漢語サ変動詞の日中対照

誤用例における漢語サ変動詞			対応する中国語[27]	同形同義	類形同義	意味タイプ
動詞	自他	誤用例数				
充実する	自	6	充实（chōngshí）	○		心理
満足する	自	5	满足（mǎnzú）	○		心理
発展する	自	5	发展（fāzhǎn）	○		変化の成り行き
促進する	他	3	促进（cùjìn）	○		変化の成り行き
逆転する	自他	2	逆转（nìzhuǎn） 扭转（niǔzhuǎn）	○	○	変化の成り行き
減少する	自他	2	减少（jiǎnshǎo）	○		変化の成り行き
増加する	自他	2	增加（zēngjiā）	○		変化の成り行き
低下する	自	2	降低（jiàngdī）		○	変化の成り行き
感動する	自	2	感动（gǎndòng）	○		心理
完成する	自他	2	完成（wánchéng） 建成（jiànchéng）	○	○	出現
向上する	自	1	提高（tígāo）		○	変化の成り行き
上昇する	自	1	上升（shàngshēng）	○		変化の成り行き
昇格する	自他	1	提升（tíshēng）		○	変化の成り行き
増大する	自他	1	增加（zēngjiā）		○	変化の成り行き
発達する	自	1	发达（fādá） 发展（fāzhǎn）	○	○	変化の成り行き
普及する	自	1	普及（pǔjí） 推广（tuīguǎng）	○	○	変化の成り行き
形成する	他	1	形成（xíngchéng）	○		出現
実現する	自他	1	实现（shíxiàn）	○		出現
成立する	自	1	成立（chénglì）	○		出現
登場する	自	1	登场（dēngchǎng） 登上（dēngshàng）	○	○	出現
一致する	自	1	一致（yīzhì）	○		二項間の関係
対照する	他	1	对照（duìzhào）	○		二項間の関係
対比する	他	1	对比（duìbǐ） 对照（duìzhào）	○	○	二項間の関係
調和する	自	1	调和（tiáohé）	○		二項間の関係
適応する	自	1	适应（shìyìng）	○		二項間の関係
命中する	自	1	命中（mìngzhòng）	○		二項間の関係
融合する	自	1	融合（rónghé）	○		二項間の関係

〈表 5－10〉から、まず、中国語と同形同義の漢語サ変動詞の誤用が多いと言える。次に、動詞の自他から言うと、日本語では「充実する」、「満足する」、「発展する」、「向上する」、「成立する」、「普及する」のような自動詞が多いが、中国語では“充实”、“满足”、“发

[27] 北京日本学研究センター（2003）『中日対訳コーパス第一版』に収録されている中国と日本の小説、政論、伝記などの本文とその訳文を確認してまとめた。

展”、“提高”、“成立”、“普及”のような自他同形の動詞が対応している場合が多い[28]。また、「増加する」、「形成する」のような自他両用動詞、他動詞に対応する中国語の動詞も、自他同形の動詞である。なお、中国語で対応する動詞のうち、“对照”、“对比”は他動詞である。

さらに、「意味タイプ」の欄に示したように、これらの動詞には、意味的な共通性を見出すことができる。第一に、「充実する／満足する」のような人の「心理」を表す動詞、第二に、「発展する／促進する」のような物や事態の「変化の成り行き」を表す動詞、第三に、「完成する／形成する」のような人や物の「出現」を表す動詞、第四に、「一致する／対照する」のような相手や着点の項を要求し、人や物といった「二項間の関係」を表す動詞である。

これらの動詞を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、以下の例（35）～（38）を示す。

(35) Cóng qiūshōu qǐyì dào Jǐnggāngshān dòuzhēng zài dào kāipì Gànnán hé Mǐnxī gémìng
从 秋收 起义 到 井冈山 斗争，再 到 开辟 赣南 和 闽西 革命
gēnjùdì bùguǎn júshì zěnyàng xiǎnè tā cóng bù fàngsōng duì zhōuwéi huánjìng de
根据地，不管 局势 怎样 险恶，他 从 不 放松 对 周围 环境 的
xiànzhuàng hé láiyuán jìnxíng zhōumì de diàochá yánjiū nǔlì ànzhào búduàn biànhuàzhe de
现状 和 来源 进行 周密 的 调查 研究，努力 按照 不断 变化着 的
shí jì qíngkuàng lái juédìng xíngdòng fāngzhēn bìngqiě shífēn zhùyì tōngguò shíjiàn de jiǎnyàn
实际 情况 来 决定 行动 方针，并且 十分 注意 通过 实践 的 检验
lái xiūzhèng huò chōngshí yuányǒu de xiǎng fǎ
来 修 正 或 充 实 原 有 的 想 法。／秋収蜂起から井岡山の闘争、そして江西省南部・福建省西部革命根拠地の創設にいたるまで、情勢がどんなに険悪であろうとも、彼はこれまで周囲の環境の現状と由来について周密な調査研究を行うことをゆるがせにしたことはなかったし、たえず変化する実際情況にもとづいて行動方針を決定するよう努め、しかも実践の検証によって当初の考え方を修正もしくは充実させることにも十分な注意を払ってきた。

『毛泽东传／毛沢東伝』

(36) Dì-sān kào wǒmen zì jǐ de liǎng zhī shǒu zì lì -gēngshēng fā zhǎn shēngchǎn dà jiā gòng
第三 靠 我们 自己 的 两 只 手，自力 更 生，发 展 生 产，大家 共
tóng kè fú kùnnán
同 克服 困 难。／第三は、我々自身の両手に頼り、自力更生して、生産を発展させ、みんなで一緒に困難を乗り越えること、である。

『毛泽东传／毛沢東伝』

(37) Wǒ xiǎng jiěshì jiǎnfà de hǎochù nà dāngrán shì yǒu hěn duō de pìrú hé yú wèishēng
我 想 解释 剪发 的 好处，那 当然 是 有 很 多 的，譬如 合 于 卫生，
jiéshěng shíjiān biànyú gōngzuò yǐ jí jiǎnshǎo shèhuì shàng qíshìshì nǚ zǐ de xīn lǐ
节省 时间，便于 工 作，以及 减 少 社会 上 歧 视 女子 的 心理。／わたし断髪の長所を説明したいの。それはもちろんたくさんあるでしょうけど、たとえば衛生的なこと、時間の節約、仕事に便利なこと、また社会での女性偏見の心理を減少させること。

『家／家』

(38) Tóngshí wánchéng le dàliàng de dǎng-zhōngyāng hé Běifāng Jú jiāobàn de gōngzuò
同 时，完 成 了 大 量 的 党 中 央 和 北 方 局 交 办 的 工 作。／同時に、党中央と北方局が与えた大量の仕事を完成させた。

『我的父亲邓小平／わが父・鄧小平(2)』

[28] 中島（2007:28）では、「中国語では自他同形であるのに、日本語では自動詞だけで、対応する他動詞のないものがある」と指摘している。

以上のように、中国語の例では、“充实（想法）”、“发展（生产）”、“减少（歧视女子的心理）”、“完成（工作）”のように、いずれも「他動詞（＋賓語）」の構造をとる構文になっている。これに対応する日本語の構文は、「（考え方を）充実させる」、「（生産を）発展させる」、「（女性偏見の心理を）減少させる」、「（仕事を）完成させる」のような、「（目的語＋ヲ＋）自動詞／自他両用動詞-（サ）セル」の形である[29]。このような日本語の使役文における「（サ）セル」は、自動詞に対応する他動詞がないか、自他両用動詞または他動詞であってもその他動性を強化する場合に用いられるものであり、典型的な使役のような「強制」、「許可・許容」といった意味を持たない。

ここで示した動詞群における「（サ）セル」の「欠如」の誤用は、母語の影響で動詞の自他を混同している場合があり、かつ、学習者の母語（中国語）では元々使役の要素が使われず、意味的にも「使役」のニュアンスを感じにくい「（サ）セル」の用法であるため、母語の感覚のまま、動詞のみを使ってしまうことで起こると考えられる[30]。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

5.2.1.2 「因果関係」の誤用 2：再帰性を表す使役文の誤用

「因果関係」の使役文において「（サ）セル」の「欠如」を起こしやすいと考えられる第二のパターンは、「動詞＋（サ）セル」が再帰性を持つ場合である。

日本語記述文法研究会（2009:295）によると、一般的な再帰構文は、「能動主体による働きかけが、対象を通して主体自身に向けられる他動詞構文で、自動詞文に近い意味をもつ」とされる。再帰構文を構成する動詞には、働きかけが常に主体に向けられる再帰的他動詞（例 39）と、ヲ格名詞の意味によって再帰的な用法を持つことがある動詞（例 40）がある。例えば、下記のような例である（例文は『中日対訳コーパス第一版』に収録されている日本語の小説による）。

（39） 彼は紺がすりの着物を着ながしにし、<u>**鳥打帽子をかぶっていた**</u>。 『友情』
（40） 私は<u>**手を振り**</u>、駈け上った。 『野火』

本研究の「因果関係」の使役文においては、〈表 5－9〉で「主語の状態変化」としてまとめた例（21 例）がこれに該当する。これらの使役文は、使役主体による動作主体（使役主体自身かその部分）への働きかけや影響が、動作主体を通して使役主体自身に及ぶという意味を表している。具体的な誤用例は、次の例（41）～（44）の通りである。

（41） 卒論（0093）／学習歴 3 年半／欠如：
踊り子は「私」の肩に触るほど顔をよせて真剣な表情をしながら、<u>目</u>をきらきら〈かがやいて→かがやかせて〉、一心に「私」の額を見つめ、またたき一つもしなかった。
（42） 卒論（0079）／学習歴 3 年半／欠如：

---

[29] 「発展／発展させる」のような「他動詞／自動詞-（サ）セル」という対応関係は、学習者の自動詞構文と他動詞構文における誤用の原因の一部として、王忻（2008:149）にも指摘が見られる。なお、5.1.2.1 節で見た赤地（2004）、望月（2009）、胡（2016）でもこのような対応関係を指摘しているが、挙げている誤用例が限られており、動詞レベルまでの詳しい分析はなされていない。

[30] 中島（2007:29）によると、「中：他動詞／日：自動詞-（サ）セル」という対応関係は、中国語の他動詞に対応するために、日本語では対応する他動詞を持たない自動詞の使役形を取らないといけないとされる。

日本人は心身を〈リラックスして→リラックスさせて〉お風呂に入る。

(43) 自己紹介（0088）／学習歴 1 年半／欠如：
部活に積極的に参加し、意気投合する友達を作り、大学の生活を〈充実したい→充実させたい〉です。

(44) 卒論（0035）／学習歴 4 年／欠如：
資格の獲得で自分を〈充実し→充実させ〉ている。

以上の例の動作主体（被使役者）は、「身体部位」もしくは「人間の内部・側面」を表す名詞であり、使役主体に所有されているか使役主体自身という関係にある。これらの名詞に続く動詞は再帰的他動詞ではないが、ヲ格名詞の意味によって、「動詞＋（サ）セル」の形で、再帰的な用法を持つと言える。具体的には、次の〈表 5－11〉のようになる。

〈表 5－11〉再帰性を持つ「主語の状態変化」を表す使役文の構成要素

動作主体（被使役者）		再帰的な用法を持つ動詞		
		動詞	自他	誤用例数
身体部位	目	かがやく	自	1
人間の内部・側面	自分（2 例）、自分自身、生活（2 例）、余暇	充実する	自	6
	虚栄心、空想、自分、欲望	満足する	自	4
	心身	リラックスする	自	1
	縁	調和する	自	1
	心	落ち着く	自	1
	日本語のレベル	向上する	自	1
	各自の特性	発達する	自	1
	個人的な興味	発展する→充実する	自→自	1
	自分	成熟する→成長する	自→自	1
	精神の境界	昇格する	自他	1
	主張	伸ばす→発展する	他→自	1
	ストレス	解除する→発散する	他→自他	1
			合計：	21

〈表 5－11〉の動詞のうち、「充実する」、「満足する」などの漢語サ変動詞の誤用は、5.2.1.1 節で述べた母語の負の転移の可能性もありうる。しかし、それ以外の動詞である和語動詞「かがやく」や外来語サ変動詞「リラックスする」[31]などとの共通性として、上で指摘した再帰性を表す文の構成要素という点を挙げることができる。また、これらの動詞の多くは対となる他動詞を持たない点で共通している。

[31] 「リラックスする（させる）」の誤用は王忻（2008:132-135）にも指摘があるが、サ変動詞の自動詞を他動詞として使う誤用であるという分析にとどまっている。

ここで、一般的な再帰構文、再帰性を表す使役文の正用と誤用の構文的特徴を示すと、次の（45）のようになる。

（45） a．一般的な再帰構文：　　目的語＋ヲ＋他動詞
b．再帰性を表す使役文（正用）：　　目的語＋ヲ＋自／自他両用動詞-（サ）セル
c．再帰性を表す使役文（誤用）：　　目的語＋ヲ＋自／他／自他両用動詞- φ

このように、本来は自動詞もしくは自他両用動詞に「(サ）セル」を加えて再帰的な意味を表すべきところを、学習者は自動詞と他動詞を混同して、自動詞を他動詞として用いる、あるいは自他両用動詞を他動詞のまま用いる[32]、あるいは誤った他動詞をそのまま用いることで、「(サ）セル」の「欠如」が生じたと考えることができる。

5.2.1.3　その他の誤用

学習者による「(サ）セル」の「欠如」の誤用として、ここまで述べた漢語サ変動詞、再帰性を表す使役文に見られるもの以外に、次のような例が見られる。

（46） 卒論（0080）／学習歴 3 年半／欠如：
（28）の文は学生達が先生の家に遊びに来るときの電話であり、電話をもらった先生がせかされているような感じになり、「彼らを長い時間待たせてしまったのだろうか」と〈思っている→思わせる〉意味となる。
（47） 作文（0041）／学習歴 1 年半／欠如：
そして、司会者は急に、前のお客さんを後ろの三行に移動させまして、後ろの椅子に〈すわりました→すわらせました〉。
（48） 卒論（0085）／学習歴 3 年半／欠如：
他の女性と気ままに付き合っても、彼女を一貫して内室に閉じ込め、節操をかたく〈守り→守らせ〉、好色者に乗じるべきチャンスを許さない。
（49） 修論（0043）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
例えば、金属製のペンチで親指をはさむ、火で焼かれた鉄線で腕をやけど〈する→させる〉。

以上の誤用例には、典型的な「指令」（例 47）、「強制」（例 48）、「責任」（例 49）のような意味を持つ使役文のほか、「因果関係」（その他の参与者の状態変化）を表す使役文（例 46）もある。これらの共通点は、複数の述語を含む複文であり、文全体の構造が複雑であるという点である。5.1.2.1 節で見た王忻（2008）の「文の整合性の問題」はこのタイプに相当すると考えられる。

（46）では、「(28）の文」の働きかけ作用によって「先生」の「思う」という動作が引き起こされるが、間に「せかされる」という受身文が入るからか、「先生が」に対応した「思う」が述語として用いられており、「(サ）セル」が「欠如」している。(47）では、使役主体である「司会者」が動作主体「前のお客さん」に働きかけ、「移動する」という動作を引き起こしたところまでは使役文で描けているが、同じ働きかけ作用によって「すわる」という動作には「(サ）セル」を使っておらず、「欠如」を起こしている。

[32] 自他両用の漢語サ変動詞の再帰構文で「(サ）セル」が必要とされることは、山田（2014）に指摘がある。

さらに、(48)、(49) では、「男」、「刑を施す人」は、「閉じ込める」、「はさむ」の動作主でありかつ使役主体として、動作主体（「彼女」、「刑を受ける人」）に働きかけ、「節操を守る」、「腕をやけどする」という動作を引き起こすが、学習者はそのような文の描く事態と形式の整合性をうまく把握できておらず、使役主体としての働きかけが見落とされている。「守る」、「やけどする」をそのまま使うことで、使役主体である「男」、「刑を施す人」自身が「節操を守る」、「腕をやけどする」の動作を行ったように読み取れてしまう。

以上のように、学習者は、複文において、前後の事態の働きかけ関係の整合性をうまく把握できない場合、「(サ) セル」の「欠如」というパターンの誤用を引き起こしやすいと言える。

5.2.2 過剰

次に、使役文における「(サ) セル」の「過剰」のパターンの誤用について、例数の多い順に使役文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 5－12〉のようになる。

〈表 5－12〉「(サ) セル」の「過剰」の誤用の意味分類別分布

使役文の意味分類		誤用例数	
⑧因果関係	主語の状態変化	5	89.87%
	その他の参与者の状態変化	66	
⑤誘発		3	3.80%
④手柄		3	3.80%
⑥許可・許容		2	2.53%
	合計：	79	100%

〈表 5－12〉から、使役文における「(サ) セル」の「過剰」の誤用は、「欠如」と同じく、「因果関係」の意味を表す使役文に最も多く見られることが分かる。以下では、「因果関係」の使役文における「(サ) セル」の「過剰」の誤用、その他の意味用法における「(サ) セル」の「過剰」の誤用の順に、具体例を挙げながら考察していく。

5.2.2.1 「因果関係」の誤用 1：事態把握に応じた構文選択の誤用

ここまで見てきた通り、使役文は「因果関係」を表すことができるが、因果関係を持つ事態はすべて使役文で表すわけではない。学習者はこのようなことを理解していないため、以下の 2 種類の誤用を起こしていると考えられる。

１）他動性の強化の「過剰」
２）自動詞文における「(サ) セル」の「過剰」

以下、それぞれ検討していく。

１）他動性の強化の「過剰」

まず、5.2.1.1 節で言及したように、日本語では、自他両用動詞または他動詞の他動性を強化する際に「(サ) セル」が用いられる場合があるが、以下のような誤用例では、「(サ) セル」の付加が過剰であると判断されている（計 28 例)。

(50) 感想文（0167）／学習歴 4 年／過剰：
積極的財政政策としては、不況の時に、政府が能動的に財政支出を〈増やさせ→増やし〉たり、家庭や企業の負担を減らしたりする財政政策です。

(51) 卒論（0096）／学習歴 3 年半／過剰：
固有の神道は現実的な伝統の思想を重視して、神仏相習、仏学を学ぶ人は現実を更に〈重視させる→重視する〉。

例（50）では、学習者の意図は、主語「政府」の「増やす」という動作による働きかけで、目的語「財政支出」が増えるという因果関係を持つ事態を表すことであると考えられる。このような事態を表すには他動詞文で十分である一方、学習者は、わざわざ「因果関係」の意味用法の使役文を用いて、誰かの働きかけで、「政府」が「財政支出」を増やしたような二重の因果関係を作り上げてしまっている。

また、例（51）では、学習者の意図は、「仏学を学べば、人は現実を重視する」という因果関係を持つ事態を表すことだと考えられる。「仏学を学ぶ人」という連体修飾節を含む他動詞文でこの意図は達成されるが、学習者は、「因果関係」の意味用法の使役文を用いて、「使役主体」の働きかけや影響で、「仏学を学ぶ人」が「現実」を重視するような二重の因果関係を作り上げてしまっている。

このように、学習者は、事態の因果関係を把握しているが、それに応じた構文の選択で、使役文を間違えて用いることで、本来の意図とずれている複雑な因果関係を持つ事態になることに気づいていない。これは、学習者が自分の表したい因果関係に対して、使役文という手段が必要であるかどうかの判断ができていないことにより生じていると考えられる。

このような不適切な判断は、単なる学習者の不注意とも考えられるが、(50)、(51) のような他動性の強化の過剰使用は、自他両用動詞または他動詞の他動性を強化する際に「(サ) セル」が用いられるというルールの過剰な適用だと考えられる。

２）自動詞文における「(サ) セル」の「過剰」

次に、普通の自動詞文で「(サ) セル」を過剰使用している例（計 18 例）として、次のような例が挙げられる。

(52) 卒論（0085）／学習歴 3 年半／過剰：
特に「三綱五常」、「三従四徳」などを含む儒教文化と倫理道徳は、すでに広く〈普及させ→普及し〉、等級制度為の手段として、統治者に採用された。

(53) レポート（0009）／学習歴 3 年半／過剰：
中国語も日本語も、相手を呼ぶ時、「視点」という特性が影響〈させる→している〉。

例（52）～（53）では、学習者の意図は、「儒教文化と倫理道徳は普及する」、「特性が影響する」のような何らかの原因によって生じた結果という因果関係を持つ事態を表したい

というものであると考えられる。このような事態を表すには、原因が描写されていない、結果としての事態を表す自動詞文で十分である。しかし、学習者は、わざわざ使役文を用いて、「使役主体」の働きかけや影響で、「儒教文化と倫理道徳は普及する」、「特性が影響する」のような二重の因果関係を作り上げてしまっている。

このように、学習者は、事態の因果関係を把握しているが、それに応じた構文の選択ができておらず、使役文を間違えて用いることで、本来の意図とずれた複雑な因果関係になることに気づいていない。これは、学習者が自分の意図に対して、使役文を使うことが妥当であるかどうかの判断ができていないことにより生じていると考えられる。

このような不適切な判断は、単なる学習者の不注意の可能性も疑われるが、(52)～(53)のような自動詞文における「(サ) セル」の過剰使用は、自動詞に対応する他動詞がない際に「(サ) セル」が用いられるというルールの過剰な適用だと考えられる。

5.2.2.2 「因果関係」の誤用 2：心理系の動詞の誤用

次に、「因果関係」の使役文には、「感動する」、「感じる」、「悩む」といったような人の心理を表す動詞に「(サ) セル」を過剰使用している誤用が見られる。これは、ここまで検討した学習言語への理解の不十分さという要因だけではなく、母語の負の転移という要因も考えうる例である。

具体的には、以下のような例が挙げられる。

(54) 作文（0049）／学習歴 1 年半／過剰：
私が最も〈感動させた→感動した〉ことは、彼がいつも親切なことだ。
(55) 作文（023）／学習歴 1 年 3 ヶ月／過剰：
そんな表現はほんとうにがっかり〈させ→し〉ます。
(56) 作文（0026）／学習歴 1 年半／過剰：
そんな言葉を聞いたら、少し悲しいと〈感じさせる→感じる〉。

例（54）～（56）のように、「感動する」、「がっかりする」、「感じる」などのような人の心理を表す動詞の誤用が多数見られた（66 例のうち、延べ例数 20 例）。これらの例では、「(サ) セル」を使う必要がないところで、「(サ) セル」を付加し、使役主体の働きかけや影響のもとで、その他の参与者に状態変化が起こる事態を描写する使役文を過剰使用している。このような誤用は、5.1.2.1 節で見た王忻（2008:130）にも指摘が見られ、「中国語では、心のうごきを表す動詞は能動形よりむしろ使役形のほうが使いやすい」という日中両言語の相違点により生じているとされる。(なお、動詞の自他や日中両言語における具体的な構文のパターンについては言及されていない。)

このタイプの誤用の原因は、王忻（2008）の指摘の通り、学習者の母語である中国語の負の転移が関わると考えられる。誤用が見られた具体的な動詞のリストは、次の〈表 5－13〉のようになる。

〈表 5－13〉誤用例における心理系の動詞

サ変動詞	自他	誤用例数	非サ変動詞	自他	誤用例数
感動する	自	9	感じる	自他	5
感心する	自	1	悩む	自	1
がっかりする	自	1			
リラックスする	自	1			
（感じが）する	自他	2			
			合計：	20	

〈表 5－13〉から、まず、サ変動詞の誤用が多いと言える。次に、動詞の自他から言うと、自動詞か自他動詞となっている。これらの心理を表す動詞を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、以下の例（57）～（59）を示す。

Yǒu yī cì kànqiú lìng wǒ tè bié gǎndòng
(57) 有 一次 看球 令 我 特别 感 动。／あるとき、サッカー試合を見にいって非常に**感動した**ことがあった。

『我的父亲邓小平／わが父・鄧小平(1)』

Jiānghuá de liǎnkǒng hūrán chōuchù qǐ lái hǎoxiàng měi tǔ yī gè zì dōu shǐ tā gǎndào
(58) 江 华 的 脸 孔 忽然 抽 搐 起来，好 像 每 吐 一 个 字 都 使 他 感 到 jí dà de tòngkǔ
极大 的 痛 苦。／江華の頬が急にけいれんした。ひとこと、ひとこと吐きだすたびに、このうえない苦痛を**感じている**ようだ。

『青春之歌／青春の歌』

Zhè yǒudiǎn ràng wǒ shīwàng
(59) 这 有 点 让 我 失 望。／このニュースにはいささか**がっかりした**。

『插队的故事／遥かなる大地』

以上のように、中国語の例では、“～（令）我感动”、“～（使）他感到”、“～（让）我失望”のように、いずれも「使役主体＋（使役マーカー）＋動作主体＋自動詞」の構造をとる使役文になっている。一方、これに対応する日本語の構文では、「感動する」、「がっかりする」、「感じる」のような、自動詞、自他動詞がそのまま使われている。

なお、このような中国語の構文を、“有一次看球，我特别感动”のように句読点を入れて分割すると、普通の自動詞文でも成り立つ。しかし、（57）～（59）のように、「感情の誘発者」（使役主体）が名詞の主語であるかどうかにかかわらず、「感情の経験者」（動作主体）と一文中にそろっており、「因果関係」を明らかにしたい場合には、使役文を使ったほうが自然である[33]。

それに対して、日本語では、次の（60a）のように、「感情の誘発者」（「このニュース」）と「感情の経験者」（「私」）がそろっており、「感情の誘発者」が名詞で主語になる場合のみ、使役文は成立するが、それに対応して、ほとんどの場合（60b）のような、「感情の誘発者」を主語としない自動詞文が存在する。

---

[33] “感动”のような中国語の自他両用動詞の場合、「感情の誘発者」が名詞化されている場合、自動詞で使役文を作るほかに、“球赛 把 我 感动 了”のように、4.2.1.2 節の３）で述べた“把”構文という他動詞的な用法も成り立つ。

(60)　a. このニュースは私をがっかりさせた。
　　b. 私はこのニュースにがっかりした。

(57)～(59) では、「感情の誘発者」が名詞化されていないため、使役文は成立しない。
このように、ここで示した心理系の動詞における「(サ) セル」の「過剰」の誤用は、学習者の母語では使役の要素が使われるため、母語の感覚のまま、「(サ) セル」を過剰に使ってしまうことで起こると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

5.2.2.3 「因果関係」の誤用 3：再帰性を表す使役文の誤用

「因果関係」の使役文において「(サ) セル」の「過剰」を起こしやすいと考えられる第三のパターンは、再帰性を表す使役文の過剰使用である。〈表 5－12〉で「主語の状態変化」としてまとめた例（5 例）がこの類で、具体的な誤用例は、次の通りである。

(61)　自己紹介（0092）／学習歴 1 年／過剰：
　　大学における学習に加えて、社会の活動にも参加して、自分の能力を〈上がさせろう→上げよう〉と考えます。
(62)　作文（0691）／学習歴 2 年／過剰：
　　私は日本に対して興味が〈深めらせ→深まり〉ました。

5.2.1.2 節で述べたように、再帰性を持つ使役文の構成要素として、再帰的な用法を持つ動詞は、ヲ格名詞の意味によって、「動詞＋（サ）セル」の形で再帰的な用法を持つ。そのうえ、基本的には、対となす他動詞の持たない自動詞が多い。つまり、再帰的な意味を持つ構文は一般的に他動詞からなるため、対応する他動詞がないとき、「自動詞＋（サ）セル」のような使役形で代用する場合が多い。
例（61）、(62) では、「能力」、「興味」は、「人間の内部・側面」を表す名詞であり、これらの名詞に続く動詞は、再帰的な用法を持つと言えるが、(61) では、対となす他動詞「上げる」を持つため、「能力を上げる」という他動詞文で再帰的な意味を表したほうが妥当であると考えられる。また（62）では、「興味を深める」という他動詞文で再帰的な意味を表してもいいが、ここでは、添削者が、名詞側の格表示を維持し、述部を自動詞に訂正している。
このような誤用の原因として、有対自動詞、あるいは有対自動詞の対となす他動詞に「(サ) セル」を付加しなくても、対となす他動詞で再帰性を表すことができることを学習者が理解していないことが考えられ、動詞の自他を混同している可能性も疑われる。

5.2.2.4　その他の誤用

学習者による「(サ) セル」の「過剰」の誤用として、ここまで述べた事態把握に応じた構文選択の誤用、心理系動詞の誤用、再帰性を表す使役文に見られるもの以外に、次のような例が見られる。

(63)　卒論（0097）／学習歴 3 年半／過剰：
　　相手に不快な感じを〈させない→与えない〉。

(64)　作文（017）／学習歴 1 年 3 ヶ月／過剰：
職場でも家庭でも女性が苦労しているからこそ、男性より就職しやすく<させる→する>べきであろう。

以上の誤用例は、典型的な「誘発」（例 63）、「手柄」（例 64）のような意味を持つ使役文の過剰使用である。

まず、(63) のような誤用は、次の（65）のような対応関係を十分に理解していないため生じていると考えられる。

(65)　a. A は不快な感じがする。
b. A は（B に）不快な感じをさせる。

（65a）は、「感情の誘発者」である A が主語となり、かつ、「感情の経験者」である B が現れない(通常話し手本人であると理解される)主観表現である。このような表現を(65b)のような使役文にすると、B は「話し手本人である私」／「不特定多数の経験者」のような特定する必要がない主体ではないといけない。一方、(63) のような誤用では、「相手」を特定しており、やや不自然だと考えられる。このような誤用は、(65) のような対応関係を十分に理解していないため生じていると考えられるが、「B はいやな思いをする／A は B にいやな思いをさせる」という表現との区別ができていない可能性もありうる。

次に、(64) では、「女性」は「就職する」の動作主であるが、学習者はそのような文の描く事態と形式の整合性をうまく把握できておらず、「就職させる」を用い、誰かが「女性」に働きかけ、「女性」が動作を行ったように読み取れてしまう。このような誤用は、5.2.2.1 節で述べた事態把握に応じた構文選択の誤用と類似している。

以上のように、学習者は、特定な対応関係を十分に理解していない場合、あるいは、文の描く事態と形式の整合性をうまく把握できない場合、「(サ) セル」の「過剰」というパターンの誤用を引き起こすと考えられる。

5.2.3　混同

次に、使役文における「(サ) セル」の「混同」のパターンの誤用について、例数の多い順に使役文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 5－14〉のようになる。

〈表 5－14〉「(サ) セル」の「混同」の誤用の意味分類別分布

使役文の意味分類		誤用例数	
⑧因果関係	主語の状態変化	1	50.00%
	その他の参与者の状態変化	16	
⑤誘発		4	11.76%
①強制		4	11.76%
④手柄		3	8.82%
⑥許可・許容		3	8.82%
②指令		2	5.88%
③責任		1	2.94%
合計：		34	100%

〈表 5－14〉から、使役文における「(サ) セル」の「混同」の誤用も、「因果関係」の意味を表す使役文に最も多く見られることが分かる。「混同」の誤用はここまで分析した「欠如」、「過剰」のようなヴォイスの有無に関わる誤用とは異なり、ヴォイスの間の混同による誤用であるため、意味分類レベルの分析よりも、どの構文とどのように混同しているかといった点を分析する必要がある。

学習者が使役文とどの構文を混同したのかを見ると、「使役と受身」、「使役と可能」、「使役と授受」、「使役と使役受身」との混同が見られる。5.1.2.1 節で見た赤地（2004）、王忻（2008）でもこれらのうち、使役と受身、使役と使役受身の混同による誤用を指摘しているが、誤用の原因はあまり詳しく論じられていない。

具体的な混同の分布は、次の〈表 5－15〉のようになる。

〈表 5－15〉「(サ) セル」の「混同」

分類	例数	
使役と受身の混同 （「(サ) セル」と「(ラ) レル」）	15	44.12%
使役と可能の混同 （「(サ) セル」と可能の可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」）	6	17.65%
使役と授受の混同 （「(サ) セル」と授受補助動詞「テ｛アゲル／クレル／モラウ｝」）	4	11.76%
使役と使役受身の混同 （「(サ) セル」と使役受身「(サ) セラレル」）	9	26.47%
合計:	34	100%

〈表 5－15〉のように、使役文と受身文の混同が一番多い。以下では、①使役文と受身文の混同、②使役文と可能構文の混同、③使役文と授受文の混同、④使役文と使役受身文の混同の順に、分析していく。

①使役文と受身文の混同

まず、使役文と受身文の混同として、次のような例が挙げられる。

（66）作文（0148）／学習歴 1 年／混同：
先週の日曜日、私は商学院で会社の人に面接〈させました→されました〉。
（67）作文（0052）／学習歴 1 年半／混同：
ニローはいつか他人に大切に〈させる→される〉ように、夢を持って、ずっと一生懸命努力しています。

例（66）、（67）では、「（サ）セル」を使うと、「会社の人に面接をむりやりやらせた」、「ニローは他人に命じて、自分を大切にさせる」というニュアンスが読み取れてしまう。しかし、学習者は、学習者自身の視点で、単に面接を受けたこと、あるいは、「ニロー」の視点で、他人がニローを大切にすることを表す意図を持っていると考えられる。このような視点で事態を描くのであれば、「（ラ）レル」を付加し、受身文にする必要がある。

学習者は、動詞「面接する」、「（大切に）する」をそのまま使うのは不適切で、何かを付加しないといけないということを理解しているが、どの助動詞を使ったらいいかを十分に理解していない可能性がある。つまり、助動詞「（サ）セル」「（ラ）レル」のそれぞれの機能や役割の違いを習得できていないため、このような誤用を起こしていると考えられる。

②使役文と可能構文の混同

次に、使役文と可能構文の混同として、次のような例が挙げられる。

（68） 卒論（0083）／学習歴 3 年半／混同：
今回の卒業論文は、王琳先生のおかげで、無事に〈完成させました→完成できました〉。
（69） 卒論（0077）／学習歴 3 年半／混同：
人間（特に機械技術を持つ人）は自然を破壊し、人の心の中で〈満足させない→満足できない〉欲求を追求する一方である。

例（68）は、学習者の意図としては、「先生がいなかったら、論文を完成することができなかった」「先生のおかげで、やりたいことができた」という「先生の関与、先生の貢献」を表したいのだと考えられる。しかし、「完成させる」という「因果関係」を表す使役文を用いると、他動性が強化され、「自分で全部やった」という主体性を強調するようになってしまうため、「先生のおかげで」という句とは矛盾する。「先生の関与によって、論文を完成することの実現が可能になった」という内容を表す場合、強い他動性を感じない可能構文を使ったほうが妥当である。

例（69）では、「満足させない」という使役形の否定形になっているが、使役主体（「人間」）は現れているものの、動作主体が現れていないため、誰の欲求を満足させないのかが明らかではない。それゆえ、「何をしても満足することがない」という学習者の意図を表すには、可能構文が妥当だと判断されている。

このように、これらの例は、特定の文脈で使役文が不適切であったり、あるいは使役文の項と項の働きかけ関係が分からなくなったりしている誤用である。誤用の原因として、

学習者はこのような文脈において、使役文が生じさせるニュアンスが適切かどうかの判断ができていないことが考えられる。

③使役文と授受文の混同

さらに、使役文と授受文の混同として、次のような例が挙げられる。

（70） 卒論（0025）／学習歴 3 年半／混同：
席をとれていた青年 A に席を〈譲れてもらって→譲らせてしまい〉迷惑をかけてしまった。

「A に席を譲らせる」という使役文と、「A に席を譲ってもらう」という授受補助動詞「テモラウ」を使った授受文とは、「A が席を譲る」という結果を含意している点で共通している。しかし、何に焦点を当てるかによって違いがでる。

後者の「テモラウ」文は、受益者の側面に焦点を当てるため、例（70）で「テモラウ」を用いると、「席を譲ってもらってうれしかった」という、受益者に利益があるようなニュアンスが生じる。一方で、後ろの文脈は「迷惑をかけてしまった」であるため、ニュアンスが一貫しない。（70）では、「私」が「席を譲る」ことを引き起こしたことを表現すべきであるため、不本意にも迷惑の原因となった自分を提示するような、原因に焦点を当てる使役文を使わないといけない。

このように、学習者は文脈上のニュアンスを正しく理解できておらず、かつ、使役文と「テモラウ」という授受補助動詞を使った授受文のそれぞれの焦点の違いを習得できていないため、このような誤用を起こしていると考えられる。

④使役文と使役受身文の混同

最後に、使役文と使役受身文の混同として、次のような例が挙げられる。

（71） 作文（0061）／学習歴 1 年半／混同：
しかし、日本人の地震を友達とする態度は〈感動させる→感動させられる〉ことではないか。

（72） 作文（0071）／学習歴 1 年半／混同：
工藤新一はその毒薬を〈飲ませた→飲まされた〉あと、体が地小さくなります。

例（71）では、学習者の意図として、「日本人の態度に、（私を含めた）みんなが感動した」というニュアンスを表したいのだと考えられるが、誤用例のように、動作主体が現れていない「因果関係」を表す使役文を用いると、誰が感動するかが分からなくなり、「特に私が感動しているわけではない」ようなニュアンスを読み取れてしまう。

例（72）では、学習者の意図として、「誰かの強制で工藤新一が薬を飲んだ」というニュアンスを表したいのだと考えられるが、誤用例のように、使役主体と動作主体がそろっていない「強制」を表す使役文を用いると、「工藤新一」が「飲ませた」の主語（使役主体）、「飲む」の主語（動作主体）のどちらであるかが分かりにくくなる。

また、（71）、（72）の「感動する」／「薬を飲む」のような事態はいずれも「私」、「工藤新一」という動作主体が引き起こしたことではなく、さらに、「感動しよう」、「飲もう」と

いう意図性もないため、「何らかの原因によって、そのような感情や思考が引き起こされた」（日本語記述文法研究会 2009:250）という誘発の意味と、「被使役者（動作の主体）が自分の意志に反して、使役者によって事態の実現を強制される」（同:250）という強制の意味を表す使役受身文を使った方が妥当であると判断されている。(71)、(72) はそれぞれの典型例だと言える。

このように、学習者は、使役文を用いるとどのようなニュアンスが生じるのかどうなるかが分かっていないと考えられる。また、学習者は「誘発」、「強制」という使役受身文の意味特徴を理解したうえで（71）、(72）のような文脈で使えていない。学習者は上記のような使役受身文の特徴に自分の表したいニュアンスが合致していることに気付かず、誤用を起こしていると考えられる。

以上のように、「(サ）セル」の「混同」の誤用は主に、日本語の文法そのものを十分に理解していないことにより生じている。具体的に言えば、学習者は、使役の「(サ）セル」と受身の「(ラ）レル」、授受の「テモラウ」とのそれぞれの役割や焦点の違いを習得できていない。あるいは、文脈において、使役文の適切さの判断ができていない、また、可能構文や使役受身文が自分の表したい意図に合致していることが分かっていないといった原因が考えられる。

5.2.4　使役文における「述部の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「述部の誤用」（助動詞「(サ）セル」の誤用）を分析し、以下のことを明らかにした。

まず、中国語を母語とする日本語学習者の受身文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」という三つのパターンがある。

次に、誤用例の数から見ると、使役文における「(サ）セル」の誤用は、「欠如」、「過剰」のパターンで起こりやすい。また、使役文の意味分類から見ると、「因果関係」の意味を表す使役文の誤用が多い。

また、それぞれのパターンの誤用の原因を分析した結果を、まず、「欠如」の誤用についてまとめると、次の〈表 5－16〉の通りである。

〈表 5－16〉「(サ) セル」の「欠如」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.2.1.1	漢語サ変動詞の誤用	●「人間は経済を（発展する→発展させる)」、「計画を（完成する→完成させる)」、「雇用を（促進する→促進させる)」のような、自動詞に対応する他動詞がないか、自他両用動詞・他動詞の他動性を強化する場合に用いられる「因果関係」を表す使役文のかわりに、動詞をそのまま用いている例	●母語の負の転移
5.2.1.2	再帰性を表す使役文の誤用	●「目を（輝く→輝かせる)」、「大学の生活を（充実する→充実させる)」のような自動詞に「(サ) セル」を加え、再帰性を持つ「因果関係」の「主語の状態変化」を表すべきところで、自動詞を他動詞として混同しそのまま用いている例、あるいは他動詞をそのまま用いている例	●学習言語への不十分な理解
5.2.1.3	その他の誤用	●「司会者はお客さんを(中略)移動させまして、後ろの椅子に(すわりました→すわらせました)」、「他の女性と付き合っても、彼女を(中略)閉じ込め、節操をかたく(守る→守らせる)」のような複数の述語を含む複文において、前後の事態の働きかけ関係の整合性が難しい例	●学習言語への不十分な理解

このように、使役の「(サ) セル」の「欠如」の誤用は、漢語サ変動詞や再帰性を持つ構文、および複文に多く起こっている。誤用の原因として、母語の負の転移と学習言語への不十分な理解が考えられる。

次に、「（サ）セル」の「過剰」の誤用をまとめると、次の〈表 5－17〉の通りである。

〈表 5－17〉「(サ) セル」の「過剰」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.2.2.1	事態把握に応じた構文選択の誤用	●「政府が支出を（増やさせる→増やす)」、「倫理道徳が（普及させる→普及する)」のような、「因果関係」を把握しているが、それに合った構文の選択ができていない例	●学習言語への不十分な理解
5.2.2.2	心理系の動詞の誤用	●「私が（感動させた→感動した）ことは～」のような人の心理を表す動詞の例	●母語の負の転移
5.2.2.3	再帰性を表す使役文の誤用	●「自分の能力を（上がさせる→上げる)」のような、有対自動詞に「(サ) セル」を付加して再帰性を持つ「因果関係」の「主語の状態変化」を表す例	●学習言語への不十分な理解
5.2.2.4	その他の誤用	●「相手に不快な感じを（させない→与えない)」のような特定の対応関係を理解していない例	●学習言語への不十分な理解

このように、使役の「(サ) セル」の「過剰」の誤用は、「因果関係」を持つ事態を表す文、心理系動詞や再帰性を持つ構文などで起こっており、学習言語への不十分な理解に関わる例が多い。

さらに、「混同」の誤用をまとめると、次の〈表 5－18〉の通りである。

〈表 5－18〉「(サ) セル」の「混同」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.2.3	使役と受身を混同している場合	●「相手に(誤解させる→誤解される)」のような、「(サ)セル」と「(ラ)レル」のそれぞれの機能や役割の違いを理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	使役と可能を混同している場合	●「論文は、先生のおかげで、(完成させました→完成できました)」のような、文脈において使役文が不適切な例	●学習言語への不十分な理解
	使役と授受を混同している場合	●「青年に席を（譲れてもらう→譲らせてしまう)」のような、それぞれの構文の焦点の違いを理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	使役と使役受身を混同している場合	●「工藤新一はその毒薬を（飲ませた→飲まされた)」のような、使役受身文の意味特徴が当てはまる文脈で使えていない例	●学習言語への不十分な理解

このように、使役の「(サ) セル」の「混同」の誤用も、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

以上のように、本節では、従来の先行研究で明らかになっている誤用のパターンを踏まえ、大規模な作文コーパスをデータとして、使役文における「(サ) セル」の誤用のパターンを再整理した。また、使役文の意味用法と「(サ) セル」の誤用との関係についても見てきた。さらに、誤用のパターンの提示だけではなく、それぞれさらに下位分類したパターンごとに詳しく分析し、誤用の原因を明らかにした(〈表 5－16〉、〈表 5－17〉、〈表 5－18〉)。

「欠如」、「過剰」の誤用に関しては、使役文の意味用法に注目し、典型的な誤用例を挙げながら、詳細な分析を行い、誤用の原因を明らかにした。また、母語の負の転移が関わる誤用や、今までの研究であまり注目されていない再帰性を表す使役文に関しては、動詞レベルまで詳しい分析を行った。「混同」の誤用に関しても、誤用の原因は主に学習言語(日本語) への不十分な理解にあることが明らかになった。

5.3　格助詞の誤用

本節では、使役文において格助詞「ヲ」「ニ」が関わる誤用の分析を行う。

まず、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用を調査した結果、作文コーパスにおける使役文の「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」(「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用、いわゆる他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケースおよび、他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース) のパターンは、次の〈表 5－19〉のようになる。

〈表 5－19〉誤用のパターン（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用のパターン			定義	誤用例[34]
ア．格助詞の選択や使用のミス	a. ヴォイスによる誤用		使役の「(サ) セル」にあわせた格助詞の選択ができていない。	できるだけ、自分<ニ→ヲ>充実させます。（8 級試験）
	b. 述部における格助詞の過剰使用		漢語サ変動詞、和語動詞における格助詞の過剰使用。	いったいどのような変化が起こったのかを人々に深く考え<ヲ→〇>させました。(感想文)
	c. 動詞による誤用		元の動詞にあわせた格助詞の選択ができていない。	断るときははっきり言わないで、相手に自分<ニ→デ>考えさせています。（作文）
イ．格助詞と述部の二重の誤り	a. ヴォイスが影響した誤用＋述部の誤用	a1. ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用	使役の「(サ) セル」にあわせた格助詞の選択ができておらず、述部の「(サ) セル」も間違っている。	このことも日本語<ニ→ヲ><充実する→充実させていく>要因となる。（卒論）
		a2. ヴォイスの誤用の添削に伴った格助詞の訂正	使役の「(サ) セル」の選択が誤りとされ、またその添削に伴って格助詞の訂正もなされている。	バブル経済の崩壊によって、日本女性の就業率<ヲ→ガ><向上させる→向上した>ので、（以下略）（卒論）
	b. 述部における格助詞の過剰使用＋述部の誤用		漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用に加え、使役の「(サ) セル」も間違っている。	「不好意思，这里是禁烟区」はタバコを吸っている人に注意<ヲ→〇><させる→する>場合に用いる。（レポート）
	c. 動詞による誤用＋述部の誤用		元の動詞にあわせた格助詞の選択ができておらず、使役の「(サ) セル」も正しく使われていない。	家事時間の短縮、生活リズムの変化、家計支出の増大、生活意識の転化などが主婦を家<ヲ→カラ><踏み出させ→出し>、（以下略）（卒論）

〈表 5－19〉のうち、ア a、ア b、ア c は「格助詞の誤用」で、イ a、イ b、イ c は「格助詞の誤用＋述部の誤用」である。

まず、ア c、イ c は使役文に現れているが、「相手に自分<ニ→デ>考えさせています」のように、主体を表す意味格としてのニ格とデ格の混用であり、能動文でも起こる可能性が

34 格助詞と述部の誤用箇所に付与されている研究タグは省略し、格助詞の誤用タグと正用タグはカタカナで表記している。

あるため、使役表現が直接的に関係した誤用とは考えにくい。

また、ア b、イ b も「人々に深く考え<ヲ→〇>させました」のように、和語動詞の連用形「考え」などを名詞として捉えてしまったことによって生じた誤用であり、直接ヴォイスが原因となった誤用かどうかが明らかではない。

さらに、イ a2 は「バブル経済の崩壊によって、日本女性の就業率<ヲ→ガ><向上させる→向上した>ので、(以下略)」のように、使役の「(サ) セル」の「過剰」が誤りと判断され、かつ、添削者の助動詞「(サ) セル」の付加に伴って格助詞「ヲ」が「ガ」に訂正されたものであるため、学習者自身の誤用とは認められない場合がある。

以上により、ここでは、真にヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用は、〈表 5－19〉のパターンのうち、ア a、イ a1 であると考える。以下では、これらのパターンに限定して分析を進める。

使役文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）の全体像として、作文コーパスから得られた使役文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用タグの総数としての「誤用」数と、ここでヴォイスに関わると考える誤用の数をあわせて示すと、次の〈表 5－20〉のようになる。

〈表 5－20〉誤用の全体像（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用の種類	「ヲ→Y」型	「ニ→Y」型	計
総数	32 例	51 例	83 例
ヴォイスに関わる誤用	13 例（40.63%）	30 例（58.82%）	43 例（51.81%）

ここから、「ヲ→Y」型誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用が約 4 割であるのに対し、「ニ→Y」型誤用では、約 6 割あることが明らかになった。

以下では、ヴォイスに関わる誤用に焦点を当て、使役文における「ヲ」「ニ」の誤用の具体例を示し、その実態と原因を考察していく。

まずは、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用」（〈表 5－19〉の「ア a」）を分析していく。

5.3.1 「ヲ→Y」型誤用

使役文における格助詞「ヲ」の誤用（13 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンをYの表現別に示すと、次の〈表 5－21〉の通りである。

〈表 5－21〉使役文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（ア）

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ヲ→ニ（6）、ヲ→ハ（1）	7

ア a の誤用では、特に「ヲ→ニ」パターンの誤用が目立つ（6 例／7 例）。「ヲ→ニ」の誤用例としては、次のような例が挙げられる。

(73) 卒論（0001）／学習歴 3 年半／ア a：
「草食男子」の真の役割を明らかにし、人々<ヲ→ニ>その正体をより深く理解さ

せることにする。

例（73）のように、「ヲ→ニ」パターンの誤用では、学習者の誤用の結果、二重ヲ格が生じる場合が見られる（5 例／6 例）。しかも、二つの「ヲ」が近い位置で連続して使われる傾向が見られる。例えば、（73）では、「理解する」が取るヲ格名詞には問題がない一方で、「理解させる」という他動詞の使役では、動作主体である「人々」をニ格で表さなければならないことが把握されていないと考えられる。このような他動詞の動作主体マーカーのルールが十分に理解されていないことが、誤用の原因だと考えられる。

なお、学習者がなぜ二重ヲ格に気付かないのかの理由は不明である。他動詞の使役文以外の環境でも調査を要するため、具体的な検討は今後の課題になる。

5.3.2 「ニ→Y」型誤用

使役文における格助詞「ニ」の誤用（32 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンの誤用は、次の〈表 5－22〉の通りである。

〈表 5－22〉使役文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（ア）

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ニ→ヲ（26）、ニ→ノ（1）	27

ア a の誤用では、特に「ニ→ヲ」のパターンが多く見られる（26 例／27 例）。例えば、次のような例が挙げられる。このような「ニ→ヲ」パターンの誤用は、5.1.2.2 節で見た市川（1997、2010）、胡（2016）でも指摘されている。

（74） 作文（0048）／学習歴 1 年半／ア a：
私にとって、音楽は大事な存在だからこそ、この映画は私〈ニ→ヲ〉感動させた。

例（74）では、「感動する」のような意志によらない状態変化を表す自動詞を含んでいる。学習者の「ニ→ヲ」パターンの誤用例を見ると、感情・心理的な状態変化を表す自動詞の使役文で、「感情の経験者」（動作主体）にニ格を使う誤用が多い（15 例／26 例）。具体的に使われている動詞は、次の〈表 5－23〉の通りである。

〈表 5－23〉使役文の「ニ」の誤用例における自動詞

動詞	誤用例数
感動する	8
感心する	2
失望する	2
満足する	1
怒る	1
喜ぶ	1
合計：	15

自動詞の使役文における動作主体は、意志性を持つ場合のみニ格で表される。一方、上

のような自動詞の使役文では、意志性のない経験者である動作主体は、ヲ格で表さなくてはならない。学習者がこのことを理解していないことが誤用の原因だと考えられる。

なお、このような誤用の原因として、5.1.2.2 節で見た市川（1997、2010）、胡（2016）で指摘している動詞の自他の判断や、典型的な使役文における被使役者（動作主体）を示す「ニ」の過剰一般化にも関わりがあると考えられる。

5.3.3　使役文における「格助詞の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」）を中心に分析し、以下のことを明らかにした。

まず、使役文における「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用で一番目立つ「ヲ→ニ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 5－24〉の通りである。

〈表 5－24〉使役文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.3.1	「ヲ→ニ」	●「人々(ヲ→ニ)正体を理解させる」のような、二重ヲ格が生じている例	●学習言語への不十分な理解（他動詞の使役文における動作主体マーカーのルールが十分に理解されていない）

このように、学習者の誤用の結果、二重ヲ格が生じている。このような誤用は主に他動詞の動作主体マーカーのルールが十分に理解されていないという、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

次に、使役文における「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用で一番目立つ「ニ→ヲ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 5－25〉の通りである。

〈表 5－25〉使役文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.3.2	「ニ→ヲ」	●「この映画は私(ニ→ヲ)感動させた」のような、ニ格で意志性のない感情・心理的な状態変化の経験者である動作主体を表す例	●学習言語への不十分な理解（自動詞の使役文では、意志性のない経験者である動作主体は、ヲ格で表さなくてはならないことを理解していない）

このように、「ニ→ヲ」パターンの誤用も、主に自動詞の使役文では、意志性のない感情・

心理的な状態変化の経験者である動作主体は、ヲ格で表さなくてはならないことを理解していないという、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

以上のように、本節では、使役文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」）をパターン化し、ヴォイスに関わる誤用を中心に分析を行った。また、Yの表現別にパターン化し、使役文における「ヲ→ニ」パターンの誤用と「ニ→ヲ」パターンの誤用が多いことを明らかにした。さらに、自動詞の使役文と、今までの研究であまり触れていない他動詞の使役文における動作主体の格の表示の仕方に注目し、誤用の原因を詳しく分析した。その結果、このような誤用の原因は主に学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

5.4　格助詞の誤用＋述部の誤用

次に、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（〈表 5－19〉の「イ a1」）を分析していく。

5.4.1 「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用

使役文における格助詞「ヲ」の誤用（19 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンは、次の〈表 5－26〉の通りである。

〈表 5－26〉使役文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ヲ→ニ（4）、ヲ→ガ（1）、ヲ→ハ（1）	6

まず、イ a1 の誤用でも、「ヲ→ニ」パターンの誤用が多く見られる（4 例／6 例）。これは、次のような、5.3.1 節で示した例と同様の、二重ヲ格が生じている誤用例である。

（75）　8 級試験（0032）／φ／ イ a1：
そして、自分の努力によって、両親〈ヲ→ニ〉楽しい生活を〈過ぎさせて→送ってもらって〉、親孝行な人になりたい。

例（75）は、「過ぎる／過ごす」という動詞の自他の混同が起きており、自動詞「過ぎる」を他動詞として用い、「過ぎさせる」という「他動詞の使役」で、動作主体「両親」をヲ格で表している。動詞の自他の混同と、他動詞使役文における動作主体マーカーのルールが十分に理解されていないことがこのような誤用の原因だと考えられる。

また、述部の誤用には、5.2.3 節で分析した、使役文と授受文の混同も絡んでいる。（75）では、使役文を使うと、「自分」が「両親が楽しい生活を過ごす」ことを引き起こしたというニュアンスになり、強い他動性を帯びる。しかし、（75）では、受益者である「自分」（書き手）の側面に焦点を当て、「楽しい生活を送ってもらって、親孝行な人になりたい」という、受益者に利益があるようなニュアンスを表し、他動性を下げるべきであるため、「テモ

ラウ文」を使った方が妥当であると判断されている。このように、(75) のような学習者の述部の誤用は、使役文と授受文のそれぞれの焦点の違いを習得できていないことにより生じていると考えられる。

5.4.2 「ニ→Ｙ」型誤用＋述部の誤用

使役文における格助詞「ニ」の誤用（19 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンは、次の〈表 5－27〉の通りである。

〈表 5－27〉使役文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ニ→ヲ（3）	3

イ a1 の誤用では、「ニ→ヲ」パターンの誤用が、少数であるが、観察された。

（76） 卒論（0023）／学習歴 3 年半／イ a1：
このことも日本語<ニ→ヲ><充実する→充実させていく>要因となる。

5.3.2 節で分析したように、例（76）では、心理的な状態変化をする対象が意志性を持たない場合であるため、「ニ」ではなく、「ヲ」を取るべきである。自動詞の使役文では、意志性のない感情・心理的な状態変化の経験者である動作主体は、ヲ格で表さなくてはならないことを理解していないことが誤用の原因だと考えられる。

また、述部では、5.2.1 節の分析と同様の、自動詞の使役形を使うべきところで自動詞がそのまま使われているこの「欠如」の誤用は、母語の負の転移によるものと考えられる。

5.4.3 使役文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用＋述部の誤用」）を中心に分析し、以下のことを明らかにした。

まず、使役文における「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる「ヲ→ニ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 5－28〉の通りである。

〈表 5－28〉使役文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.4.1	「ヲ→ニ」	●「両親（ヲ→ニ）楽しい生活を（過ぎさせる→送ってもらう）」のような、二重ヲ格が生じており、かつ、述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（動詞の自他の混同、他動詞の使役文における動作主体マーカーのルールが十分に理解されていない、使役文と授受文の混同など）

このように、学習者が使役文の格パターンと述部の両方を間違えている誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

次に、使役文における「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる「ニ→ヲ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 5－29〉の通りである。

〈表 5－29〉使役文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
5.4.2	「ニ→ヲ」	●「このことも日本語（ニ→ヲ）（充実する→充実させていく）」のような、ニ格で意志性のない感情・心理的な状態変化の経験者である動作主体を表し、かつ、述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（自動詞の使役文では、意志性のない経験者である動作主体は、ヲ格で表さなくてはならないことを理解していない） ●母語の負の転移

このように、格助詞側の誤用は主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。一方、述部の誤用は母語の影響も見られる誤用であると言える。

以上のように、本節では、使役文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用＋述部の誤用」）をパターン化し、ヴォイスに関わる誤用を中心に分析を行った。従来の研究であまり注目されていなかった、使役文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」は、格助詞側と動詞側の連動で起こり、5.3 節で分析した「格助詞の誤用」と同様に、格助詞側では、二重ヲ格が生じている誤用や、自動詞の使役においてニ格で意志性のない感情・心理的な状態変化の経験者である動作主体を表す誤用が多い。そのうえ、述部では「（サ）セル」の「混同」や「欠如」などが起こっている。このような誤用の原因は主に学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

5.5　使役文における誤用の分析のまとめ

以上、本章では、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「(サ) セル」の誤用（「述部の誤用」)、格助詞「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）を分析し、以下のことを明らかにした。

Ⅰ.「述部の誤用」:

中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」という三つのパターンがある。

また、誤用例の数から見ると、使役文における「(サ) セル」の誤用は、「欠如」、「過剰」のパターンで起こりやすい。また、使役文の意味分類から見ると、「因果関係」の意味を表す使役文の誤用が多い。

さらに、パターン別の誤用の原因などをまとめると、次の〈表 5－30〉のようになる。

〈表 5－30〉使役文における「(サ) セル」の誤用

誤用のパターン		典型的な誤用例	誤用の原因
欠如 (5.2.1 節)	漢語サ変動詞の誤用	●自動詞に対応する他動詞がないか、自他両用動詞・他動詞の他動性を強化するために「(サ) セル」を付加すべき例	●母語の負の転移
	再帰性を表す使役文の誤用	●動詞に「(サ) セル」を加え、再帰性を持つ使役文を使うべき例	●学習言語への不十分な理解
	その他の誤用	●複数の述語を含む複文の例	●学習言語への不十分な理解
過剰 (5.2.2 節)	事態把握に応じた構文選択の誤用	●事態を把握しているが、構文の選択ができていない例	●学習言語への不十分な理解
	心理系の動詞の誤用	●人の心理を表す動詞の例	●母語の負の転移
	再帰性を表す使役文の誤用	●有対自動詞に「(サ) セル」を付加してしまう例	●学習言語への不十分な理解
	その他の誤用	●特定の対応関係が分からない例	●学習言語への不十分な理解
混同 (5.2.3 節)	使役と受身を混同している場合	●「(サ) セル」と「(ラ) レル」のそれぞれの機能や役割の違いを理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	使役と可能を混同している場合	●文脈において、使役文が適切ではない例	
	使役と授受を混同している場合	●それぞれの構文の焦点の違いを理解していない例	
	使役と使役受身を混同している場合	●使役受身文の意味特徴を理解して使えていない例	

〈表 5－30〉のように、使役文における「述部の誤用」（「(サ) セル」の誤用）は様々なパターンで起こっており、「欠如」と「過剰」の誤用は、学習言語への不十分な理解か母語の負の転移により生じていると考えられる。それに対して、「混同」の誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

5.1.2.1 節で概観した先行研究では、使役文における「(サ) セル」の誤用のパターン、原因がある程度明らかになっているが（〈表 5－3〉参照)、本研究では、大規模作文コーパスをデータとして、使役文における「(サ) セル」の誤用のパターンの再整理を〈表 5－30〉のように行い、使役文の意味と「(サ) セル」の誤用との関係についても見た。

また、誤用の原因は、学習言語（日本語）への不十分な理解と、学習者の母語（中国語）の負の転移であった。この両者が見られたという点では先行研究と一致するが、本研究では、使役文の意味分類に注目し、かつ、動詞のレベルまで「(サ) セル」の「欠如」と「過剰」の誤用を分析した。また、「混同」のパターンも誤用の原因まで分析した。これらを通して、今までの研究で詳しく論じられていない、学習者の日本語の使役文の「(サ) セル」の未習得の部分と母語の負の転移のパターンの特定とより詳しい分析を行った。

Ⅱ．「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」:

中国語を母語とする日本語学習者の使役文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）のうち、「ニ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が「ヲ」より高い（5.3 節〈表 5－20〉参照)。

また、使役文におけるヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用の原因などをまとめると、次の〈表 5－31〉のようになる。

〈表 5－31〉使役文におけるヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用

<table>
<tr><th>ヲ／ニ</th><th colspan="2">誤用のパターン</th><th>典型的な誤用例</th><th>誤用の原因</th></tr>
<tr><td rowspan="2">「ヲ」の誤用</td><td>「ヲ→Y」型誤用
（5.3.1 節）</td><td rowspan="2">「ヲ→ニ」</td><td>●二重ヲ格が生じている例</td><td rowspan="2">●学習言語への不十分な理解（他動詞の使役文における動作主体マーカーのルールが十分に理解されていない）</td></tr>
<tr><td>「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用
（5.4.1 節）</td><td>●二重ヲ格が生じており、かつ述部も誤っている例</td></tr>
<tr><td rowspan="2">「ニ」の誤用</td><td>「ニ→Y」型誤用
（5.3.2 節）</td><td rowspan="2">「ニ→ヲ」</td><td>●ニ格で意志性のない感情・心理的な状態変化の経験者である動作主体を表している例</td><td rowspan="2">●学習言語への不十分な理解（自動詞の使役文では、意志性のない経験者である動作主体は、ヲ格で表さなくてはならないことを理解していない）</td></tr>
<tr><td>「ニ→Y」型誤用＋述部の誤用
（5.4.2 節）</td><td>●ニ格で意志性のない感情・心理的な状態変化の経験者である動作主体を表し、かつ、述部も誤っている例</td></tr>
</table>

〈表 5－31〉のように、学習者は、使役文において、格パターンだけではなく述部も誤

っている複合的な誤用も生じさせている。このような「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」では、述部の誤用がある例は母語の影響が関わるものもあるが、格助詞側の誤用は主に、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

5.1.2.2 節で概観した先行研究において、使役文における格助詞の誤用は、「ニ→ヲ」パターンしか提示されていない（〈表 5－4〉参照）。また、使役文における「(サ) セル」の誤用と格助詞の誤用の両面から誤用を捉えていないため、「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」に分けて議論されていなかった。

本研究では、大規模な作文コーパスをデータとして、使役文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用を中心に、それらをパターン化し分析を行った。また、誤用の原因もより詳しく分析した結果、中国語を母語とする日本語学習者は学習言語への不十分な理解により使役文の格パターン、特に動作主体の格表示をよく間違えていることが明らかになった。これは、学習者の日本語の使役文における格助詞「ヲ」「ニ」の未習得の部分をより特定することができたものと言える。

以上のように、本章では、中国語を母語とする日本語学習者の使役文における「(サ) セル」の誤用、格助詞「ヲ」、「ニ」の誤用のデータから、誤用の全体像、パターンやその原因を明らかにした。ここで明らかにしたことは、学習者はどのような意味用法の使役文をどのようなパターンで間違えやすいか、どのような動詞の使役文を使用しないか、あるいは過剰に使用しているのか、また、どのような意味を表している使役文に学習者の母語を意識する指導が必要であるか、さらに、どのような使役文のどの部分の格の交替が習得しにくいかといった誤用を防ぐ解決策に示唆を与えるものであると考えられる。

第６章　可能構文における誤用の分析

本章では、可能構文における誤用の分析を行う。

まず可能構文を構成する形式、可能構文の意味分類および格の交替、可能構文の誤用に関する先行研究を概観し、本研究における可能構文の分類と扱う現象の範囲を提示する（6.1 節）。

次に、第３章で示した誤用の分類に基づき、可能構文における誤用を「述部の誤用」(6.2 節)、「格助詞の誤用」(6.3 節)、「格助詞の誤用＋述部の誤用」(6.4 節）に分け、それぞれにおいて誤用の数、パターン、原因などの分析を行う。

6.1　可能構文とその誤用

本節では、まず、可能構文を構成する形式、可能構文の意味分類、格の交替に関する先行研究（6.1.1 節）と、可能構文の誤用に関する先行研究（6.1.2 節）を概観する。次に、それらを踏まえ、本研究における可能構文の形式、意味分類と本研究で扱う可能構文の格を提示する（6.1.3 節)。

6.1.1　可能構文に関する先行研究

本項では、日本語の可能構文を構成する形式、可能構文の意味分類、格の交替に関する先行研究を概観する。

6.1.1.1 「可能構文」を構成する形式

日本語記述文法研究会（2009:211）によると、「可能構文」とは、「動詞の語幹に「-e-ru」あるいは「-rare-ru」という接辞を付加することによって、主体がある意志的な動作を行おうとするとき、それが可能か不可能かを表すものである」とされる。

このような可能構文の述語の形態（可能構文を構成する形式）には、次のようなものがあるとしている（同:278)。

１）動詞の語幹に「-e-ru」を付加する場合
　例えば、書く（kak-u）－書ける（kak-e-ru）

２）動詞の語幹に「-rare-ru」を付加する場合
例えば、食べる（tabe-ru）－食べられる（tabe-rare-ru）
（「-re-ru」を付加するラ抜き言葉は話し言葉を中心に用いられることがある）
３）スル動詞の場合
例えば、する（su-ru）－できる（deki-ru）、運転する（unten-su-ru）－運転できる（unten-deki-ru）

また、上記の１）、２）、３）のような形態的手段による形式のほかに、「ことができる」、「（し）かねる」、「（し）うる」「（し）える」のような文法的手段による形式も、そのほかの可能構文を構成する形式として挙げられている（同:281-282）。

山口・秋本（2001）では、日本語記述文法研究会（2009）の１）に相当する形式を「可能動詞」として扱い、「五段活用動詞（四段活用動詞）が下一段活用に転じて、本来の動作内容のほかに可能の意味を含み持つようになった動詞」と定義している（同:162）。これは、狭義の「可能動詞」と言える。

このような狭義の可能動詞のほか、山岡（2003）では、「できる」、「わかる」、「見える」、「聞こえる」のような動詞は、可能の意味が既に語彙的意味に組み込まれていると指摘し、「語彙的な可能動詞」として扱うことができるとしている。

これらを踏まえ、本研究では、可能構文における誤用を広く検討するため、次のような形式を「可能構文」を構成する可能形式として扱うこととする。

Ⅰ．形態的手段による可能形式
a．可能動詞（狭義）
b．語彙的な可能動詞（「わかる」、「見える」、「聞こえる」）
c．「できる」、「サ変動詞＋できる」
d．動詞未然形＋可能の助動詞「（ラ）レル」
Ⅱ．文法的手段による可能形式
e．動詞連体形＋「ことができる」

これらの、可能動詞（a～c）、可能の助動詞「（ラ）レル」（d）、「ことができる」（e）の具体的な扱い方は、後の節で示す（6.1.3.1 節）。

6.1.1.2　可能構文の意味分類

可能構文の意味に関しては、これまで多数の研究がなされてきた。例えば、日本語記述文法研究会（2009:280）によると、「可能構文の意味は、その動作を実現することが可能・不可能である条件・理由によって、大きく、能力可能と状況可能に分かれる。能力可能は能動主体の能力に理由があるものであり、状況可能は能動主体の能力以外に理由があるものである」とされる。具体的には、次のような例が挙げられる。

（１）　英語で手紙なんて書けないよ。　（同:280）
（２）　便箋が手元になくて手紙が書けない。　（同上）

例（１）は「能力可能」の例で、能動主体には「英語で手紙を書く」能力がないため、それを実現することが不可能であることを表しているとされる。一方、例（２）は「状況

可能」の例で、能動主体には動作を実現する能力があったとしても、「便箋が手元にない」という手段の欠如のような外的状況によって、「手紙を書く」動作の実現が不可能であることを表しているとされる。

また、「可能構文の意味は、その動作の実現に言及するかしないかということによって、大きく、潜在可能と実現可能に分かれる。潜在可能は、その動作を実際に行うかどうかは別にして、可能性だけを表すものであり、実現可能は動作の実現も含めて表す」とされる（同:281）。具体的には、次のような例が挙げられる。

（３）その時その手紙が書けたのに書かなかった。（同:281）
（４）昨日ようやくその手紙が書けた。（同上）

例（３）は「潜在可能」の例で、当時の状況において、「手紙を書く」動作が実現する可能性があったことだけを表しているとされる。一方、例（４）は「実現可能」の例で、「手紙を書く」動作が実現する可能性があったことと、実際にその動作が実現したことを表しているとされる。

以上のように、日本語の可能構文の意味分類としては、「能力可能／状況可能」、「潜在可能／実現可能」という二種類の分類が一般的であると言える。

しかし、これらのうち、能力可能であるか状況可能であるかは文脈から分類できるが、「潜在可能／実現可能」の分類はしにくいと考えられる。実際、渋谷（1993）は、日本語記述文法研究会（2009）の「潜在可能／実現可能」に相当する分類が区別しにくい場合について指摘している。

渋谷（1993）は、可能の意味を、ある動作が実現することを含意するかどうかによって、「実現系の可能」と「潜在系の可能」に分けている。「実現系の可能」は「動作の実現（非実現）を含意する」（同:14）意味用法であり、日本語記述文法研究会（2009）の「実現可能」に相当する。それに対して、「潜在系の可能」は「動作の実現（非実現）を含意しない」（同:14）意味用法であり、日本語記述文法研究会（2009）の「潜在可能」に相当する。

このような「実現系の可能」と「潜在系の可能」の違いとして、「実現系の可能」は動詞の動作性を維持するのに対して、「潜在系の可能」は状態的な意味を持つこと、また、過去形の場合に両者は明確な対立を示すことを指摘しているが、未来の実現に関わる「実現系の可能」と「潜在系の可能」との区別は分別しにくいとされる。

本研究では、可能構文における誤用の起こり方を検討するために、上記の日本語記述文法研究会（2009）の可能構文の二種類の意味分類に従い、可能構文の分類を行う（6.1.3節）。一方、渋谷（1993）が指摘するように、「潜在可能」と「実現可能」の区別は曖昧になる場合があるため、誤用の分類を明確に行うことは困難であると考えられる。したがって、以下では、「能力可能／状況可能」という観点では誤用例における比率まで分析するが、「潜在可能／実現可能」という観点では誤用例の比率を示さず、分析で適宜利用するのみにする。

6.1.1.3　可能構文における格の交替

日本語記述文法研究会（2009:279）は、可能構文における格の交替を詳しく説明し、基本的には、「ニ，ガ」、「ガ，ヲ」、「ガ，ガ」パターンをとり、「ニ，ヲ」パターンはとらないとしている。具体的には、次のような例が挙げられる。

（５） a. 佐藤さんが　英語を　話す。（同:279）
b. 佐藤さんに　英語が　話せる（以下略）。（同上）
c. 佐藤さんが　英語が　話せる（以下略）。（同上）
d. 佐藤さんが　英語を　話せる（以下略）。（同上）

すなわち、能動文（５a）の主語であるガ格名詞（「佐藤さん」）が可能構文ではニ格に降格し、（５b）のような「ニ，ガ」構文になるか、能動文の目的語であるヲ格名詞（「英語」）がガ格に昇格し、（５c）のような「ガ，ガ」構文になるか、あるいは、例（５d）のように、格の交替を起こさず、能動文の「ガ，ヲ」構文を維持する。なお、（５b）～（５d）はいずれも典型的な「能力可能」の例で、「佐藤さん」に「英語を話す」能力があるため、それを実現することが可能であることを表している。

また、次の（６）のような例では、「「できる」の前に対象などがくる場合には、「ガ」で表されるのが普通であり、「を」で表されることはまれである」（同:279）としている。

（６） 鈴木君は　野球が　できない。（同:279）

例（６）も典型的な「能力可能」の例で、「鈴木君」に「野球をする」能力がないため、それを実現することが不可能であることを表している。

6.1.2　可能構文の誤用に関する先行研究

可能構文の誤用に関する先行研究として、佐治（1992）、猪崎（1994）、市川（1997、2010）、封（2005）、王忻（2008）、望月（2009）を取り上げ、可能構文における可能形式（可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」）の誤用と格助詞の誤用に分けて見ていく。

6.1.2.1　可能構文における可能形式の誤用

まず、可能構文における可能形式の誤用に関する先行研究の内容をまとめる。

①佐治（1992）

佐治（1992）は、『中国人の日本語作文に見られる誤用例集』、その他の作文、翻訳などのデータを用いて、可能表現における「れる・られる」（「（ラ）レル」）の誤用例を分析している。

その結果、心理の動きを表す動詞の場合、学習者の誤用例は可能表現と自発表現のどちらに解釈すればいいのかが明確ではないとされる。

また、心理の動きを表す動詞以外の動詞の場合、例（７）のような、可能形式の間の混同（可能動詞と「ことができる」の混同）と考えられる誤用があると指摘している。

（７） 私はX先生のような立派な先生に教われて、本当に幸せに思っています。

この誤用の原因は、「教わる」の可能形「教われる」は存在しないことを学習者が理解していないという、日本語への不十分な理解とされる。

②猪崎（1994）

猪崎（1994）は、中国語話者３名の半年間の作文を分析した結果、可能態（可能構文）は３名の学習者に平均して使用されているとする。

また、可能態の誤用のパターンには、主に、例（８）のような「過剰使用」(使用の必要がないのに使用しているケース）と例（９）のような「欠」(使用すべきなのに使用していないケース）があると指摘している。

（８） 日本の文化や生活がよくわかるようになれました。
（９） みんな大学までの教育を受ける社会になるように、もっと大学を作ってほしい。

このような誤用の原因については、学習者が可能態の使用・非使用の区別を判断しにくいという解釈にとどまる。

③市川（1997）

市川（1997）は、初級・中級前半程度の外国人日本語学習者（中国、韓国、インドネシア、タイ、メキシコなど）の作文、会話などにおける誤用を分析している。

可能文・「ことができる」における可能形式の誤用例として、まず、可能文においては、「誤形成」(述語動詞の形態の誤り)、「脱落」(可能形を使うべきなのに、使っていないケース)、「付加」(可能形にしなくてもいいところで可能形を使ってしまうケース)、「混同」（可能形と自動詞の混同、可能形の間の混同）あるとされる。一方、「ことができる」においては、「脱落」(「ことができる」を使うべきなのに、使っていないケース）や「混同」(授受文との混同など）が見られるとする（同:169-173)。

また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用は特に、次の例（10)、(11）のような可能形の「脱落」と「付加」、例（12）のような可能形と自動詞の「混同」(自動詞の代わりに、可能形にしなくてもいいところで可能形を使ってしまう誤用）が見られる。

(10) 人間は食物がなくても、水だけで、７日間いきるそうです。
(11) 勉強したら、すぐわかれます。
(12) この荷物は重くて、動けない。

（11）のような誤用は、学習者が「わかる」の可能形が日本語にはないことを理解していないのに起因しているとされる。一方、(10)、(12）のような誤用の原因は詳しく論じられていない。

④市川（2010）

市川（2010）は、市川（1997）より誤用例を増やし(『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース　Ver.2』CD-ROM 版など)、外国人日本語学習者の誤用を分析している。

可能文の誤用のパターンは、市川（1997）と同じ結果を示しているが、「ことができる」の誤用のパターンは、「脱落」、「付加」、「混同」に加え、「誤形成」(述語動詞の形態の誤り)、「その他」(「ことができる」のかわりに、「～に弱い」といったような表現を間違えて使用する誤り）のパターンもあるとしている（同:75-125)。

また、中国語を母語とする日本語学習者の誤用例には、市川（1997）で示している「脱

落」、「付加」、「混同」のほかに、例（13）のような「誤形成」、すなわち、述語動詞の形態の誤りも見られる。

（13） 頭が痛くて、起きようにもあんまり起けない。

このような誤用は、「動詞のグループによる可能形の作り方が混乱している」ことにより生じていると指摘している。また、1 グループの動詞（五段動詞）か、2 グループの動詞（1 段動詞）かのような、動詞のグループ分けも十分に理解していない可能性があるとされる。

⑤封（2005）

封（2005）は中国語を母語とする日本語学習者（日本語を専攻とする大学生 37 名、学習歴 3 年間）を対象にした調査（穴埋めテスト）に基づいて、可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力を調査している。

その結果、他動詞「あける」と-u と-eru の形態的対応をなす有対自動詞「あく」、主語が有情物と無情物の両方で使われうる有対自動詞「あがる」のような動詞の可能形の過剰使用が見られ、その習得が難しいことが示されている。ここから、中国語を母語とする日本語学習者が可能表現を習得する際、可能表現の特徴を把握する必要があるとする。

⑥王忻（2008）

王忻（2008）は、中国人日本語学習者（日本語を専攻とする大学 3、4 年生、日本語専修学校上級コースの学生）の作文における誤用を分析した研究である。

可能表現の誤用は、ヴォイス（使役、受身、自発、やりもらい）の誤用分析とは別に扱われているが、次の例（14）のような可能形式の過剰使用（王忻（2008）のヴォイスの誤用のパターンの「過剰」に相当する）が多く見られ、例（15）のような欠如使用（王忻（2008）のヴォイスの誤用のパターンの「不足」に相当する）も指摘されている。

（14）ははのパートの収入だけではくらしがたてません。
（15）私はとてもあなたのちからになりません。

誤用の原因として、学習者は、（14）の「たつ」のような非意志動詞には可能形式が使えないこと、また、（15）の「なる」のような「意志動詞」（この文脈では意志性を持つと判断されている）には可能形式を使う必要があることのような規則が理解できていないことを指摘している。また、中国語の可能は日本語の可能より範囲が広いという母語の干渉が考えられることも示している。

⑦望月（2009）

望月（2009）は、中国語を母語とする日本語学習者（在日留学生、上級レベル以上）による日本語作文コーパスをデータとして、中国語との対照の視点から、ヴォイス（動詞の自他、使役、受身、可能）の誤用分析を行っている。

そのうち、可能の誤用に関しては、可能の付加（使う必要がないところで使う）による誤用が顕著であると指摘している。

中国語では、“即使 省略 了 话语，意思 还是 可以 相通”（言葉を省略しても意味が通じる）のように、動詞（“相通”）は可能、結果などの意味を内包しないため、可能の助動

詞“可以”を付加しないといけないのに対して、日本語では、「通じる」のような自動詞そのものが可能、結果の意味を含むとされる。このような日中両言語の相違点により、母語の干渉が生じて、学習者の誤用を起こしているとされる。

以上の先行研究の内容をまとめると、次の〈表 6－1〉のようになる。

〈表 6－1〉先行研究における可能構文の可能形式の誤用

先行研究	学習レベル	誤用のパターン	誤用の原因
①佐治（1992）	不明	●心理の動きを表す動詞の可能形の誤用 ●心理の動きを表す動詞以外の動詞の受身形の誤用（「（ラ）レル」を付加してはいけない動詞の誤用）	●日本語への不十分な理解（「教わる」のような動詞には可能形「教われる」は存在しないことを、学習者が理解していない）
②猪崎（1994）	不明	●過剰使用 ●欠	●日本語への不十分な理解（可能態の使用・非使用の区別を判断しにくい）
③市川（1997）	初級・中級前半程度	●誤形成 ●脱落 ●付加 ●混同	●日本語への不十分な理解（「わかる」の可能形は日本語にはないことを理解していない）
④市川（2010）	初級・中級前半程度	●誤形成 ●脱落 ●付加 ●混同 ●その他	●日本語への不十分な理解（「わかる」の可能形は日本語にはないことを理解していない、動詞のグループによる可能形の作り方が混乱している）
⑤封（2005）	学習歴 3 年	※明示されていない	●日本語への不十分な理解（可能表現の特徴を把握していない）
⑥王忻（2008）	大学 3、4 年生	●過剰使用 ●欠如使用	●日本語への不十分な理解（動詞の意志性と可能形式の使用の関係が分からない） ●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）
⑦望月（2009）	上級レベル以上	●付加	●学習者の母語の負の転移（日中両言語の相違点）

このように、中国語を母語とする日本語学習者は、学習歴に関わらず、さまざまなパターンの誤用を起こしている。誤用のパターンの用語はそれぞれ違っているが、可能形式を使うべきなのに使わないケースと、可能形式にしなくてもいいところで可能形式を使ってしまうケースの指摘が共通して見られる。

また、誤用の原因は主に、日本語への不十分な理解と、学習者の母語（中国語）の負の転移であると考えられており、前者の指摘が圧倒的に多いことが分かる。

6.1.2.2　可能構文における格助詞の誤用

上記の先行研究のうち、可能構文における格助詞の誤用に関して言及しているのは、市川（1997、2010）しかない。

市川（1997）は、可能構文における助詞の誤用として、「を」「が」「に」の誤りを挙げている（同:171-172）。また、挙げられている誤用例を詳しく見ると、中国語を母語とする日本語学習者の誤用では特に、次の例（16）のような、「×を→○が」の誤用が見られる。

（16）一生懸命勉強すれば、良い成績を（→が）取られるにちがいない。

このような誤用に関しては、「可能文で対象に「が」をとるか「を」をとるかは揺れている部分もある」（同:176）ということが指摘されているが、誤用の原因については詳しく論じられていない。

以上で挙げている内容をまとめると、次の〈表 6－2〉のようになる（格助詞の誤用について言及していない研究は、誤用のパターン、誤用の原因を「―」で表記する）。

〈表 6－2〉可能構文における格助詞の誤用

先行研究	学習レベル	誤用のパターン	誤用の原因
①佐治（1992）	不明	―	―
②猪崎（1994）	不明	―	―
③市川（1997）	初級・中級前半程度	●「を→が」	※明示されていない
④市川（2010）	初級・中級前半程度	●「を→が」（中国語を母語とする日本語学習者の誤用ではない）	※明示されていない
⑤封（2005）	学習歴 3 年	―	―
⑥王忻（2008）	大学 3、4 年生	―	―
⑦望月（2009）	上級レベル以上	―	―

以上のように、可能構文における格助詞の誤用についての議論は非常に少ない。「を→が」パターンの誤用しか提示されておらず、原因についても詳しく論じられていないと言える。

6.1.2.3　先行研究で残された課題

以上のような従来の研究を見ると、まず、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の可能形式の誤用は、誤用のパターンとして、特に、可能形式を使うべきなのに使わない誤用と、可能形式にしなくてもいいところでそれを使ってしまう誤用が目立つことが分かる。

また、このような誤用は、目標言語である日本語の構造そのものの理解ができていない（例えば、可能形式を付加してはいけない動詞の存在を知らない）という日本語への不十分な理解と、学習者の母語（中国語）と日本語の異なる点で生じる母語の負の転移によって起こるとされていることも分かる。

一方、可能構文における格助詞の誤用のパターンや原因などに関する議論は非常に少ない。

このように、従来の研究では、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用の実態はある程度明らかになっているが、誤用のパターンや原因の両者を詳しく対応させて分析した研究がまだ少ない。また、可能構文における可能形式の誤用と格助詞の誤用の両面から誤用を捉える研究があまり現れていない。特に、可能構文における格助詞の誤用についての議論はきわめて少ない。

したがって、より多くの誤用例から、可能構文における誤用のパターンの再整理を可能形式、格助詞の両面から行い、今までの研究で詳しく論じられていない母語の負の転移のパターンおよび日本語の可能構文の未習得の部分の特定をする必要がある。

そこで、本研究では、大規模な作文コーパスをデータとして、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用を体系的に分析することで、誤用のパターンの再確認や誤用の原因のより詳しい分析をするとともに、可能構文の意味と可能形式の誤用（「述部の誤用」）との関係についても見ていく。

6.1.3　本研究における可能構文の扱い

本項では、本研究で扱う可能構文を構成する形式、本研究における可能構文の意味分類と、本研究で扱う可能構文の格を提示する。

6.1.3.1　本研究で扱う可能構文を構成する形式

本研究では、先に 2.3 節および 6.1.1.1 節で触れたように、具体的には、次のような形式を可能構文における可能形式として扱うこととする。

Ⅰ．形態的手段による可能形式
　a．可能動詞（狭義）
　b．語彙的な可能動詞（「わかる」、「見える」、「聞こえる」）
　c．「できる」、「サ変動詞＋できる」
　d．動詞未然形＋可能の助動詞「（ラ）レル」
Ⅱ．文法的手段による可能形式
　e．動詞連体形＋「ことができる」

以上のように、可能動詞（a～c）、可能の助動詞「（ラ）レル」（d）、「ことができる」（e）を可能構文における可能形式として扱うこととする。

まず、可能動詞は、Ⅰの a～c のような、動詞に可能の意味を含むものとする。「a．可能動詞（狭義）」は、6.1.1.1 節で概観した日本語記述文法研究会（2009）の１）、山口・秋本（2001）の「可能動詞」に相当する。「b．語彙的な可能動詞」は、山岡（2003）で指摘

されている「わかる」、「見える」、「聞こえる」のような可能の意味が既に語彙的意味に組み込まれた「語彙的な可能動詞」を含むものとする。また、「c.「できる」、「サ変動詞＋できる」」は、日本語記述文法研究会（2009）の３）のような「できる」や、「利用できる」のようなサ変動詞の例に相当する。

次に、Ｉのｄのような助動詞「（ラ）レル」は、6.1.1.1 節で概観した日本語記述文法研究会（2009）の２）動詞の語幹に「-rare-ru」を付加するものに相当する。また、本研究では、「食べれる」のようないわゆる「ら抜きことば」もここに含める。

さらに、6.1.1.1 節で概観した日本語記述文法研究会（2009）の「ことができる」に相当する、Ⅱの「e. 動詞連体形＋「ことができる」」のような表現も学習者の誤用例に一定数現れている（〈表 6－6〉参照）ため、考察の対象とする。一方、「（し）かねる」、「（し）うる」「（し）える」のような文法的手段による可能形式は誤用例に現れなかったため、本研究では扱わない。

6.1.3.2　本研究における可能構文の意味分類

本研究では、可能構文における誤用の起こり方を検討するために、日本語記述文法研究会（2009）の可能構文の二種類の意味分類に従った分類を行う。

具体的には、次の〈表6－3〉のような可能構文の意味分類を設定した。表中の例文は、北京日本学研究センター（2003）『中日対訳コーパス第一版（CD-R1）』の実例をもとに筆者が作成したもので、すべて日本語母語話者による添削済みである。

〈表6－3〉可能構文の意味分類

可能構文の意味分類の観点	意味分類	例文
動作を実現する条件・理由	①能力可能	●花子は関西風の料理が作れる。
	②状況可能	●今日は多忙で行けない。
動作の実現への言及	③実現可能	●私も六十歳を過ぎてようやく、その意味を理解できた。
	④潜在可能	●その時あなたの電話番号も調べられたのに調べなかった。

このように、〈表 6－3〉の①～④は、それぞれ 6.1.1.2 節で概観した日本語記述文法研究会（2009）の「能力可能」（例１）、「状況可能」（例２）、「実現可能」（例４）、「潜在可能」（例３）に相当する。

まず、動作を実現する条件・理由による分類として、「①能力可能」の例は、能動主体には「関西風の料理を作る」能力があるため、それを実現することが可能であることを表している。一方、「②状況可能」の例は、能動主体には動作を実現する能力があったとしても、「多忙」という外的状況によって、「行く」という動作の実現が不可能であることを表している。

また、動作の実現への言及による分類として、「③実現可能」の例は、「理解する」という動作が実現する可能性があったことと、実際にその動作が実現したことを表している。一方、「④潜在可能」の例は、その時何かをすれば、「電話番号を調べる」動作が実現する可能性があったことだけを表している。

以下ではこの意味分類に従い、可能構文における「述部の誤用」の分析を進めるが、6.1.1.2 節で述べたように、「潜在可能」と「実現可能」との区別が曖昧になる場合がある

ため、「能力可能／状況可能」という分類は量的な分析に使用するが、「潜在可能／実現可能」という分類は分析中で適宜言及するのみにする（6.2 節）。

6.1.3.3　本研究で扱う可能構文の格

6.1.1.2 節でも述べたように、日本語の可能構文は、「ニ，ガ」構文、「ガ，ヲ」構文、「ガ，ガ」構文のような文型をとる。そのため、学習者の使用例では、「ガ」、「ニ」、「ヲ」といった格の誤用が起こりうると考えられる。特に、市川（1997:176）での指摘のように、「可能文で対象に「が」をとるか「を」をとるかは揺れている部分もある」ため、どのような場合に「ヲ」を使うべきか、どのような場合に「ガ」を使うべきかの判断が学習者にとって難しいと考えられる。また、可能構文では「ニ，ヲ」という格パターンをとれないといったことへの不十分な理解により生じる誤用も予測される。

このため、本研究では、可能構文において格の交替に関わる格助詞のうち、「ヲ」「ニ」の誤用を中心に調査・分析する。また、実際に入手できるコーパスデータの状況も考慮して、中でも特に、「ヲ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Y」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）に焦点を当て、調査・分析を行う（6.3 節、6.4 節）。

6.2　述部の誤用

本節では、可能構文における「述部の誤用」（可能動詞・「(ラ）レル」・「ことができる」の誤用）の分析を行う。

まず、第４章の受身文の分析で見たとおり、可能構文における「述部の誤用」（可能動詞・「(ラ）レル」・「ことができる」の誤用）を「欠如」、「過剰」、「混同」という三つのパターンにまとめた。また、可能構文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」のほかに、受身文における「述部の誤用」と同様の、「その他」としてまとめられる誤用も見られる。

さらに、このうち「混同」に関しては、コーパスのタグ情報から得られるヴォイスの混同の範囲、すなわち、「可能」と「受身」、「使役」、「授受」との混同を扱う。また、可能形式の間の混同も扱う。「格助詞の誤用＋述部の誤用」も同様である。

可能構文における「述部の誤用」（可能動詞・「(ラ）レル」・「ことができる」の誤用）の具体的な分類は、次の〈表 6－4〉のようになる。

〈表 6－4〉可能構文の誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン		定義	誤用例[35]
欠如		可能形式（可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」）を使用すべきなのに使用していない。	最後に、私は日本語で〈書く→書ける〉ことを嬉しく思います。（作文）
過剰		可能形式を使用する必要がないのに使用している。	私はそれを目標として、〈がんばれた→がんばってきた〉。（8 級試験）
混同		可能形式と他のヴォイスとの混同。または可能形式の間の混同。	技術が発展するにつれて、多くの問題点が〈解消できる→解消されていく〉だろう。（感想文） そのほか、老人、妊婦、子供などに席を譲る若者もよく〈見える→見られる〉。（作文）
その他	元の動詞の誤り	可能構文は作れているが、元の動詞の選択を間違えている。（同時に可能形式が訂正されている場合も含む）	そんな偉い人にならなくても、平凡で、一生努力すれば、自己の価値も〈実現できる→見出せる〉と思う。（8 級試験）
	述部の形態の誤り	述部で使われている元の動詞に問題はないが、可能形式の形態を間違えている。	心から勉強したい大学生はどんな所でも、何の時間でも、朝自習はなくても、精一杯〈努力られる→努力できる〉。（作文）
	品詞の誤り	動詞ではない語で可能形式を作っている。	中国では、「9」という数字の発音は「永久」の「久」と同じなので、「長生き」、「永遠」、「長く（〈幸せできる→幸せでいる〉）」という意味を連想することができ、めでたい数字だと見られている。（修論）

上記の四つのパターンのうち、「欠如」、「過剰」、「混同」は、可能形式の有無や混同に関わる誤用であり、可能形式に加えて元の動詞が修正されている場合も含む。「その他」は可能構文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。これらのパターン別の誤用例の分布は、〈表 6－5〉の通りである。

〈表 6－5〉誤用例の分類：可能構文の誤用のパターン（「述部の誤用」）

誤用のパターン	誤用例数	
欠如	269	39.21%
過剰	274	39.94%
混同	66	9.62%
その他	77	11.22%
合計：	686	100%

[35] 述部の誤用箇所に付与されている研究タグは省略した。また、括弧内に誤用例の文体を示す。

〈表 6－5〉から、可能構文における「述部の誤用」の四つのパターンの分布は、「過剰」、「欠如」、「その他」、「混同」という順になっていることが分かる。

また、可能形式別の誤用例の分布を例数の多い順に示すと、次の〈表 6－6〉のようになる。

〈表 6－6〉誤用例の分類：可能構文における可能形式（「述部の誤用」）

可能形式		誤用例数[36]		
可能動詞	可能動詞（狭義）	288	466	67.93%
	語彙的な可能動詞	47		
	「できる」、「サ変動詞＋できる」	131		
「(ラ) レル」		136		19.83%
「ことができる」		84		12.24%
合計：		686		100%

さらに、6.1.3.2 節の〈表 6－3〉に示した可能構文の意味分類に従い、それぞれの誤用例を「能力可能／状況可能」に分類した結果を、誤用例の多い順に示すと、次の〈表 6－7〉の通りである。

〈表 6－7〉誤用例の分類：可能構文の意味（「述部の誤用」）

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	②状況可能	654	95.34%	686 (100%)
	①能力可能	32	4.66%	

以上の〈表 6－5〉と〈表 6－6〉、〈表 6－7〉から見ると、まず、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、可能構文における「可能動詞」の誤用の割合、「状況可能」を表す可能構文の割合が高いことが分かる。

以下では、可能構文における「述部の誤用」について、可能形式の有無や混同に関わる誤用（「欠如」、「過剰」、「混同」）、可能構文における述部の形そのものが適切ではない誤用（「その他」）の順に、誤用の具体的な実態とその原因を考察していく。そのうち、前者に関しては、例数の多い順に、「過剰」、「欠如」、「混同」、「その他」の順で分析を進めていく。

6.2.1 過剰

まず、可能構文における可能形式の「過剰」のパターンの誤用について、可能構文の意味分類別の分布を例数の多い順に示すと、〈表 6－8〉のようになる。

[36] 「欠如」の誤用以外は、誤用タグを基準に分類した。

〈表 6－8〉可能形式の「過剰」の誤用の意味分類別分布

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	②状況可能	265	96.72%	274 (100%)
	①能力可能	9	3.28%	

〈表 6－8〉から、可能構文における可能形式の「過剰」の誤用は、「状況可能」の意味を表す可能構文に多く見られることが分かる。

通常、可能構文の「主語は有情物であり、動詞は意志動詞に限られる」とされる（日本語記述文法研究会（2009:278））。そこで、「過剰」のパターンの誤用例を分析するために、可能構文の成立条件として、それぞれの例における主語の有生性と動詞の意志性を確認しておく。

まず、主語が非情物の誤用例は、可能表現の成立条件を満たしていない、「非情物主語を取る構文」（ⅰ）と分類した。一方、主語が有情物の場合、動詞が意志動詞か無意志動詞かを確認した。意志動詞と無意志動詞の判別方法に関して、寺村（1982:262-263）は、〔－意志〕の動詞、～ショウ、～シロという形のとれないものは可能態をとることができないと指摘している。本稿では主にこの方法を用いて動詞の意志性を判別し[37]、動詞が無意志動詞の場合、可能表現の成立条件を満たしていない、「有情物主語の無意志動詞構文」（ⅱ）と分類した。動詞が意志動詞の場合、可能表現の成立条件を満たす、「有情物主語の意志動詞構文」（ⅲ）と分類した。

以上のような可能構文の成立条件から見た「過剰」の誤用例の実態は、次の〈表 6－9〉のようになる。

〈表 6－9〉可能形式の「過剰」の誤用例

		構文のタイプ	誤用例数	
可能構文の成立条件を満たしていない場合	ⅰ	非情物主語を取る構文	100	36.50%
	ⅱ	有情物主語の無意志動詞構文	38	13.87%
可能構文の成立条件を満たしている場合	ⅲ	有情物主語の意志動詞構文	136	49.64%
		合計：	274	100%

以下では、可能構文の成立条件を満たしていない場合、満たしている場合、その両方で見られる誤用の順に、「過剰」の誤用例を考察していく。

6.2.1.1　可能構文の成立条件を満たしていない場合

可能構文の成立条件を満たしていない場合の「過剰」の誤用（138 例）を考察する。このケースでは、自動詞・他動詞の使い方や選択に関わる誤用が目立つ（計 61 例、44.20%）。

まず、非情物主語を取る構文や有情物主語の無意志動詞構文で可能形式を使う誤用が見られる（計 29 例）。

[37] 誤用例の動詞が～ショウ、～シロという形がとれるかどうかは、小泉ほか（1989）の記述に基づいて判定した。この方法で判定できなかった動詞に関しては、日本語教育に携わっている日本語母語話者により判別してもらった。なお、意志性の判定は、句のレベルで行った。これにより、例えば、「頼りになる」の「なる」は無意志動詞、「○○大学の学生になる（ために頑張る）」の「なる」は意志動詞となる。

（17） 修論（0091）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
「燎」祭で生ずる煙が空高く〈昇れ→昇り〉、雲が雨をもたらすという考え方から、また雲の神と一緒に祭ることもある。

（18） 作文（0650）／学習歴 2 年／過剰：
親に甘えて、親の財布を〈困れる→頼る〉より、自分の手で好きなものを買えるほうが、私にとってもっとうれしい。

例（17）は、主語が「煙」という非情物であり、例（18）の「困る」は無意志動詞である。いずれも可能構文の成立条件を満たしていない。6.1.2.1 節で見た王忻（2008）の非意志動詞に可能形式を過剰使用している例は、このタイプに相当すると考えられる。

以上のような例は、非情物主語を取る構文や有情物主語の無意志動詞構文で可能形式が使えないことを学習者が理解できていない、つまり、可能構文の成立条件の習得不足が誤用の原因だと考えられる。

また、「実現可能」の過剰使用が見られる（計 13 例）。

（19） 卒論（0099）／学習歴 3 年半／過剰：
駅弁の掛け紙は時代を映す鏡であり、歴史書より詳しく、分かりやすい言葉で時代時代を〈解説できる→解説している〉。

例（19）では、学習者は可能形式を用いて、非情物主語の「実現可能」の意味を表すことを意図していると考えられる。一方、実際に成立した状態について述べているこれらの例では、動詞のシテイル形を使う方が自然であると添削者は判断している。このような誤用は、可能構文の成立条件の習得不足のほか、中国語を母語とする日本語学習者の母語の負の転移も疑われる。例えば、次のような例で考える。

Tā kě yǐ fǎnyìng chū guǎngdà qúnzhòng de kàng rì rè qíng
（20） 它 可以 反映 出 广 大 群 众 的 抗 日 热 情。／広はんな大衆の抗日の情熱を、よく反映してるしね。

『青春之歌／青春の歌』

例（20）では、非情物主語を取る文において、中国語の“（可以）反映”のような「可能の助動詞＋動詞」という構造に対して、日本語では動詞のテイル形「反映して(い)る」が対応している。日本語では、実現可能は有情物主語の意志的動作に限られるのに対して、学習者の母語（中国語）では非情物主語の実現可能も許される[38]ため、母語の感覚のまま、可能形式を過剰使用してしまうことで誤用が起こると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

さらに、有対自動詞の可能形式の過剰使用が見られる（計 19 例）。

（21） 作文（0164）／学習歴 1 年／過剰:
いろいろな薬を飲んだのに熱が〈下がれません→下がりません〉でした。

例（21）のような有対自動詞「下がる」の例は、主語が「熱」のような非情物主語であり、かつ動詞自体が可能の意味を含意しているため、可能表現が使えない。このような例

[38] 中島（2007）では、中国語の可能文において、無生名詞句が主語に立ってもその成立を妨げる条件にならないと指摘している。

は、「いろいろな薬を飲んだのに熱を下げられませんでした」のように、変化を起こそうとする意志的な行為を表す他動詞を使えば、可能構文になる。

このような誤用は、中国語を母語とする日本語学習者にしばしば見られる、母語の負の転移による、自動詞と他動詞の選択の誤りの一つと捉えることができる。例えば、次のような例で考える。

Kěshì pǎo dào xuéxiào ménkǒu què fā xiàn dà tiěmén shàng zhe yī bǎ dàsuǒ zěnme tuī
(22) 可是，跑 到 学校 门口，却 发现 大铁门 上 着 一把 大锁，怎么 推
yě tuī bù kāi
也 推 不 开。／しかし学校にたどり着くと、太い鎖で門が閉ざされ、押しても引いても開かない。

『轮椅上的梦／車椅子の上の夢』

例（22）のように、中国語では、動作（ここでは、“推”「押す」）の結果として生じる状態を表示する可能補語（“～不～”）が、他動詞だけではなく、意志的な行為者の現れることができない自動詞的な構文でも用いられる。しかし、これに対応する日本語の例では、自動詞「開く」に可能の意味がすでに含まれているため、自動詞構文が用いられている[39]。このような二言語内の違いに基づけば、例（21）のような誤用は、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こした結果であると解釈できる。

6.2.1.2　可能構文の成立条件を満たしている場合

次に、可能構文の成立条件を満たしている場合の誤用（136 例）を見る。このケースでは、まず「実現可能」の過剰使用が目立つ（計 35 例、25.74%）。

(23) 作文（0053）／学習歴 2 年／過剰：
私は日本の現代文学作家山岡庄八の作品《徳川家康》を〈読めました→読みました〉。
(24) 作文（0635）／学習歴 2 年／過剰：
でも、幸せの瞬間は忘れ〈られ→○〉ません。

可能構文の意味用法の一つである「実現可能」（6.1.1.2 節）は、特に過去形を用いて、実際に動作が実現したことを表す。例（23）、（24）は、可能構文の成立条件を満たしている文であるが、例（23）は「実現可能」と解釈されると、「ようやく読むことができた」のようなニュアンスを帯びてしまう。この文脈では特にそのようなニュアンスが感じられないため、誤用と判定されている。

非過去形の例（24）は、「幸せの瞬間」が特定の人に起こった事態であれば可能構文になりうるが、この例は一般論として述べている文脈であるため、可能形式の過剰使用だと判定されている。このように、実現可能を表現してはいけないところで可能形式を使ってしまうのは、「実現可能」の使用の可否の判断が学習者にとって難しいことから生じていると考えられる。

また、特定の文法表現との組み合わせにおいて、可能形式の過剰使用が多数見られる（計 23 例、16.91%）。

[39] 可能の意味を含む有対自動詞の「過剰」の誤用は、6.1.2.1 節で見た市川（1997、2010）、封（2005）でも指摘されているが、誤用の原因は詳しく論じられていない。

(25)　作文（040）／学習歴 1 年 3 ヶ月／過剰：
そして、李さんは家を〈買える→買う〉ため、徹夜までして仕事をしました。
(26)　感想文（0093）／学習歴 4 年／過剰：
人々は自分の好みなどによって〈選べる→選ぶ〉ことができ、また、都合が悪くなった場合はほかの選択肢もある。

例(25)のように、「ため(に)」の前で可能形式を用いる誤用が 12 例見られる。「ため(に)」の前に状態を表す表現は現れず、可能形式も使用できない。同じく目的を表す「よう(に)」の前では可能形式が使えるので、これと混同した可能性がある。また、例（26）の「可能動詞＋ことができる」のような可能形式の重複も見られる（11 例)。これは日本語母語話者でも話し言葉で起こしうる誤用である。

これらの文法表現は、可能動詞と組み合わせることができないが、学習者はその判断ができておらず、誤用と判定されている。このような誤用は、これらの文法表現の規則の習得が不十分なのか、可能動詞の習得が不十分なのかを判別することが難しい。

6.2.1.3　成立条件に関わらず見られる誤用

次は、可能構文の成立条件を満たしていない場合と満たしている場合の両方で、つまり可能構文で広く見られる誤用の分析を行う。具体的には、次のような、「かもしれない」、「にちがいない」、「だろう」が表す可能性、必然性、推量といった認識のモダリティを表そうとする文脈に可能形式が過剰に現れている誤用である (274 例中計 108 例、39.42%)。

(27)　修論（0079）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
しかし、政治関係の悪化は文化交流に悪い影響をあたえ、さらには交流を〈阻止できる→阻止する〉かもしれない。
(28)　修論（0078）／学習歴 6 年か 6 年以上／過剰：
各カテゴリーの意味構造と統語構造の相関関係を明らかにすれば、対象言語間の異同の本質部分が顕著に〈なれる→なる〉。
(29)　作文（0065）／学習歴 1 年／過剰：
今年はもっと一生懸命にならなければならないですが、きっと日本語がもっと上手になる〈ことはできます→〇〉でしょう。
(30)　作文（0081）／学習歴 1 年／過剰：
だぶん、週に 1 回電話します〈ことができます→〇〉。

先の〈表 6－8〉に示した 274 例の「過剰」の誤用のうち、例（27)、(28）のような非情物主語を取る構文での誤用が 100 例中 48 例（48.00%)、例（29）のような有情物主語の無意志動詞構文での誤用が 38 例中 17 例（44.74%)、例（30）のような有情物主語の意志動詞構文での誤用が 136 例中 43 例（31.62%）ある。

6.1.1.2 節で見た渋谷（1993）の指摘のように、可能構文では、非過去形の場合、「潜在系の可能」(「潜在可能」）と「実現系の可能」(「実現可能」）との区別がしにくくなり、判断が揺れる部分があるため、(27）～（30）のような誤用例は「実現可能」の過剰使用であるか「潜在可能」の過剰使用であるかがはっきりしない。

一方、これらの誤用例は本来、動作の実現の可能性や実現の有無とかを表しているので

はなく、話者の可能性などの判断を表すため、「動詞辞書形（＋認識のモダリティ形式）」という構造を用いるべきである。しかし、(27) ～ (30) には、動詞の言い切りの形で問題がないにもかかわらず、必要のない可能形式が現れている。これは、中国語の可能の助動詞“会”には可能形式として用いられる場合と認識のモダリティ形式として用いられる場合[40]があり、さらに、中国語の可能構文では主語の有生性と動詞の意志性に制限がない[41]という、学習者の母語である中国語の負の転移により生じていると考えられる。

例えば、次の例 (31)、(32) の中国語の助動詞“会”は、対応する日本語の文にも可能動詞が現れるケースであるが、例 (33) ～ (36) の助動詞“会”は認識のモダリティを表しており、対応する日本語の文には「～かもしれない」のような可能性の認識を表すモダリティ形式や「きっと」、「たぶん」のような蓋然性判断を表す副詞が現れているか、例 (36) のように、有標の形式が現れず、無標形式で認識的判断を表している。

(31) Wǒ huì tánqín yě huì chànggē
我 **会** **弹琴** 也 **会** **唱** **歌**……／あたし**ピアノも弾ける**し、**歌もうたえます**……
『轮椅上的梦／車椅子の上の夢』

(32) Xiàng tā men huìbào qíngkuàng nàme tā xiǎng kùnnan jiù huì hěnkuài jiějué de
向 他们 汇报 情 况，那么，她 想 困难 就 **会** 很快 **解决** 的。／かれらに情況を報告する、そうすれば、困難はすぐに**解決できる**だろうに。
『青春之歌／青春の歌』

(33) Zhè zhǒng chābié yě xǔ huì niàng chéng jiānruì de máodùn
这 种 差别，也许 **会** **酿** **成** 尖锐 的 矛盾……／こうした差異は、鋭い矛盾を**ひき起こす**<u>**かもしれない**</u>…
『钟鼓楼／鐘鼓楼』

(34) Wǒ gǎn shuō yīngxióng de mèimèi yí dìng huì shēn shòu gǎndòng shuō bú dìng yě huì lián yè gěi wǒ xiěxìn de
我 敢 说，英 雄 的 妹妹 <u>**一定**</u> **会** **深** **受** **感** **动**，说 不 定 也 会 连 夜 给 我 写信 的。／彼女も、<u>**きっと**</u>**感動して**徹夜で返事を書いてくれるぜ。
『轮椅上的梦／車椅子の上の夢』

(35) Zhèshì jīntiān gānggāng yìn chūlái de bàozhǐ tā dàgài hái búhuì zhīdào
这是 今天 刚 刚 印 出来 的 报纸，她 <u>**大概**</u> 还 **不会** **知道**……／この新聞、今刷り上がったばかりだから、<u>**たぶん**</u>まだ**知らない**と思う……
『轮椅上的梦／車椅子の上の夢』

(36) Rén de xīnlíng yě shì xūyào hū xī de bù tūn bù tǔ jīngshén jiù huì zhì xī
人 的 心灵 也 是 需要 呼吸 的。不 吞 不 吐，精 神 就 **会** **窒息**。／心だって呼吸が必要なのよ。吸いも吐きもしなかったら、精神は**窒息してしまう**。
『人啊，人／ああ、人間よ』

本研究で取り上げた可能動詞や助動詞「(ラ) レル」のような日本語の可能形式は、能力可能・状況可能／潜在可能・実現可能は表せるが、認識のモダリティ形式としては使われない。一方、中国語では、日本語の可能形式に相当する助動詞“会”が、例 (31) ～ (32) のように可能を表すだけではなく、例 (33) ～ (36) のように、認識のモダリティを表すこともでき、連続的な関係となっている。これらは、具体的には〈表 6－10〉のような対

---

40 中島 (2007) では、中国語の可能の助動詞“会”には蓋然性を表す用法がある、と指摘している。また、王其莉 (2016) でも、中国語の可能の助動詞“会”には日本語の「かもしれない」、「にちがいない」、「だろう」などのようなモダリティ形式と対応している用法があるとしている。

41 中島 (2007:137) によると、「日本語の可能文の成立条件の１つとして要求される主体の〈意志性〉は、中国語の可能文の成立条件にはならない」とされる。また、無生名詞句が主語に立ってもその成立を妨げる条件にならないと指摘している。

応関係になっている。

〈表 6－10〉日中両言語における可能および認識のモダリティを表す文法的手段

言語	文法的手段	能力可能・状況可能／潜在可能・実現可能	認識のモダリティ
中国語	“会”のような可能を表示する助動詞	○	○
日本語	可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」	○	×

このような対応関係に基づけば、学習者は、母語である中国語の助動詞“会”の用法に影響を受ける形で、日本語を産出する際、「可能形式（＋認識のモダリティ形式)」という形式を作っていると考えることができる。すなわち、「動詞辞書形（＋認識のモダリティ形式)」という形式で十分であるのに、中国語の助動詞“会”を日本語の認識のモダリティに対応させるだけではなく、動詞の部分にも対応させることで、可能形式を過剰使用していると分析できる。「可能形式（＋認識のモダリティ形式)」は日本語でも適切な場合があるが、無条件に使うと、本節で分析した「過剰」の誤用例を起こしてしまうことになる。なお、このような可能形式とモダリティが共起する構造がどのような文脈で使えるかについては、後の節で詳しく分析する（6.2.2.2 節)。

6.2.2　欠如

次に、可能構文における可能形式の「欠如」のパターンの誤用について、可能構文の意味分類別の分布を例数の多い順に示すと、〈表 6－11〉のようになる。

〈表 6－11〉可能形式の「欠如」の誤用の意味分類別分布

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	②状況可能	252	93.68%	269 (100%)
	①能力可能	17	6.32%	

〈表 6－11〉から、可能構文における可能形式の「欠如」の誤用は、「状況可能」の意味を表す可能構文に多く見られることが分かる。

可能形式の「過剰」の誤用は、可能構文の成立条件を満たしている場合と満たしていない場合の両方で見られたが、可能形式の「欠如」の誤用は、可能形式を使用すべきなのに使用していない例であるため、すべて可能構文の成立条件を満たしている。

また、可能構文における可能形式の「欠如」のパターンの誤用、すなわち、本来は可能形式を使うのが適切であるのに、可能形式を脱落している誤用には、次の４種類の誤用が見られる。

Ⅰ．母語の負の転移による誤用
Ⅱ．認識のモダリティに関わる誤用
Ⅲ．特定の文法表現との組み合わせにおける誤用

Ⅳ．その他の誤用

Ⅰは母語の負の転移が疑われる誤用で、Ⅱ、ⅢとⅣは学習言語への理解の不十分さから生じていると考えられる誤用である。
以下、それぞれ検討していく。

6.2.2.1　母語の負の転移による誤用

まず、本来は可能形式を使うのが適切であるのに、可能形式が脱落している誤用には、母語の負の転移が疑われる誤用があり（計 100 例、37.17%）、主に、次の３種類の誤用が見られる。

１）学習者の母語で結果補語が付く場合
２）連用修飾語が付く場合
３）述語動詞が「忘れる」の場合

以下では、それぞれ検討していく。

１）学習者の母語で結果補語が付く場合

母語の負の転移による誤用として、まず次のような例が挙げられる。

(37)　卒論（0006）／学習歴 3 年半／欠如：
「無仕事で不登校」の無職女青年は絶えず増加し、仕事を見つける〈○→ことができた〉人の多くも臨時職員で、ほとんど不安定な雇用状況に陥っただろう。
(38)　感想文（0151）／学習歴 4 年／欠如：
実は私はある本を買うために、わざわざ書店へ探しに行きましたが、いくつかの書店でも買いたい本を見つけ〈○→られ〉ませんでした。
(39)　作文（0083）／学習歴 1 年／欠如：
〈探さない→探せない〉ときや、失恋したとき、きっと心を痛めます。
(40)　卒論（0007）／学習歴 3 年半／欠如：
日本近現代歴史に登場した大きな震災を列挙し、それを通じて日本の地震を大体知る〈○→ことができる〉。
(41)　スピーチ（020）／学習歴 2 年／欠如：
日本と中国の教育は今ある問題はまだ解決〈しないです→できていません〉。
(42)　作文（0652）／学習歴 2 年／欠如：
おじさんの最後の言葉を〈聞かなくて→聞けなくて〉、僕は後悔した。

例（37）～（42）のように、「見つける」、「探す」、「知る」、「解決する」、「聞く」などのような動詞の誤用例が多数見られた（計 69 例）。特に、(37）～（42）のような、何かを発見することや、人の思考、知覚を表す動詞の例が多く見られる（69 例のうち、延べ例数 28 例）。これらの例では、可能形式を使う必要があるところで、可能形式が脱落している。このタイプの誤用は、学習者の母語である中国語の負の転移により生じていると考えられる。誤用が見られた具体的な動詞のリストは、次の〈表 6－12〉のようになる。

〈表 6－12〉誤用例における動詞

動詞の意味	動詞						延べ例数		
	非漢語サ変動詞	自他	例数	漢語サ変動詞	自他	例数	非サ変	サ変	合計
発見	見つける	他	7				12	0	12
	会う	自	1						
	探す	他	1						
	見当たる	自	1						
	見かける	他	1						
	見出す	他	1						
人間の思考	知る	他	2	理解する	他	4	3	7	10
	思う	他	1	解決する	自他	1			
				習得する	他	1			
				勉強する	自他	1			
人間の知覚	見る	他	3				6	0	6
	感じる	自他	2						
	聞く	他	1						
その他							34	7	41
						合計：	55	14	69

〈表 6－12〉を見ると、まず、和語動詞の誤用が多いと言える。また、動詞の自他から見ると、ほとんどが他動詞である。これらの動詞を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、次の例（43）～（47）を示す。

Kěshì zài lěngdàn de kōng qì zhōng yě xìng ér xúndào jǐ gè tóngzhì le
(43) 可是 在 冷淡 的 空气 中，也 幸而 <u>寻到</u> 几 个 同志 了。／それでも冷淡な空気のなかで、数人の同志を<u>見つけることができた</u>。

『呐喊／吶喊』

Yìzhí méiyǒu zhǎo dào zhèngshì zhíyè xiànyú kùnjìng de NíWúChéng zài yī jiǔ sì liù nián
(44) 一直 <u>没有 找 到</u> 正式 职业、陷于 困境 的 倪吾诚 在 一 九 四 六 年

chūn tū rán juédìng qù jiě fàng qū qù tóubèn gòngchǎndǎng
春 突然 决定 去 解放区，去 投奔 共产党 。／いつ迄も正式の職が<u>探せず</u>困りはてた倪吾誠は、一九四六年の春とつぜん解放区行きを決意し、共産党に投じた。

『活动变人形／応報』

Suǒ yǐ gūmǔ cái liǎojiě zì jǐ de qíngkuàng
(45) 所以 姑母 才 <u>了解</u> 自己 的 情 况 。／それでおばさんは、じぶんのようすを<u>知ることができた</u>のだ。

『青春之歌／青春の歌』

Dànshì méiyǒu jiějué wèn tí liǎng gè rén dōu shībài le
(46) 但是 <u>没有 解决</u> 问题，两 个 人 都 失败 了。／しかし、問題を<u>解決できず</u>、二人とも失敗した。

『鄧小平文選 3／邓小平文选第三卷』

Zhēn yí hàn méi tīng dào nǐ de jīngcǎi huìbào
(47) 真 遗憾，没 听 到 你 的 精彩 汇报。／ほんとに残念だわ。あなたのいい報告も聞けなかった。

『金光大道／輝ける道』

以上の中国語の例では、“寻到～”、“没有找到～”、“了解（到）～”、“没有解决（掉）～”、“没听到～”のような表現が使われている。このうち、“寻到～”は動詞に変化の結果という意味を含めており、「（没有／没＋）結果の意味を内包する動詞＋賓語」の構造になっている。そのほかはいずれも「（没有／没＋）動詞＋結果補語＋賓語」の構造をとっている。これらの中国語の構文ではいずれも可能形式が使われていない点で共通している。一方、これに対応する日本語の構文では、「見つけることができる」、「探せない」、「知ることができる」、「解決できない」、「聞けない」のように、可能形式が用いられている。

これらの結果補語を用いた中国語の例文では、望ましい結果を得るための動作の実行を表すため、これらに対応する日本語の構文では、可能形式が用いられていると考えられる。

中島（2007）は、中国語の「動詞＋結果補語」のような構造では可能形式を用いないと指摘し、〈結果性複合動詞 V1V2〉、〈没有＋結果性複合動詞 V1V2〉のようにまとめている。これらの構文は、前者が、「後項の表す変化が結果として前項の表す動作によって実現された事態」を表すのに対して、後者は「変化の結果として想定される事態が実現しなかった」ことを表すと指摘している。また、これに中国語の可能補語（“～得～”／“～不～”）を加えると、状態を示す構文になるとしている（同:143-144）。

ここから考えると、中国語の可能補語を用いる表現は、動きを表す日本語の実現可能と意味的にずれが生じる場合がある。実現可能に対応する可能補語表現の状態性は、例えば、次のような例によって確認されうる。

Wǒ yǐ jīng xiě wán gěi tā de xìn le
(48) a. 我 已经 写 完 给 他 的 信 了。／彼に送る手紙はもう書けた。

Wǒ yǐ jīng xiě de wán gěi tā de xìn
b. ＊我 已经 写 得 完 给 他 的 信。

例（48b）のように、可能補語を用いる形（“写得完”）は“已经”（「もう」）とは共起できず、可能補語を用いる表現の状態性が見て取れる。それに対して、（48 a）のように、中国語の可能補語を用いない、「動詞＋結果補語」の表現（“写完”）は“已经”（「もう」）と共起可能であり、より動作的な意味が強いと考えられる。日本語の実現可能は、（48 a）のような動作性のある「動詞＋結果補語」のほうに意味的に近いと言える。

一方、（43）～（47）のような例文では、中国語の可能の助動詞“能（néng）”を挿入することができる。これにより、「（没有／没＋）能＋動詞＋結果補語＋賓語」、「（没有／没＋）能＋結果の意味を内包する動詞＋賓語」という、動作や変化の結果として想定される事態が実現することが可能／不可能であることを表す可能構文になる。例えば、次の（49）のような“听到～”と“能听到～”の例が挙げられる。

Tīng dào nǐ de jīngcǎi huìbào hěn gāoxìng
(49) a. 听 到 你 的 精彩 汇报，很 高 兴。／あなたのいい報告を聞けて、うれしかった。

Néng tīng dào nǐ de jīngcǎi huìbào hěn gāoxìng
b. 能 听 到 你的精彩汇报，很 高兴。／あなたのいい報告を聞けて、うれしかった。

このように、動詞と結果補語の後ろ、あるいは、結果の意味を内包する動詞に賓語（目的語）が付く場合、(49a) は聞くことを望んでおり、その動作をしたため、想定される事態が実現したことを表し、(49b) は聞くことを望んでおり、その動作の実現が可能であることを表す。結果的に、どちらも「聞けた」という意味を表している。したがって、(49a) のような構造は形式上、可能の助動詞が用いられていないが、意味上 (49b) のような可能構文と類似しているため、「意味上の可能構文」と言える。学習者はおそらく、望ましい結果を得るための動作の実行を強調したいという意図を持っており、(49a) のような可能の助動詞“能（néng）”の入らない構造を日本語に適用し、先の (37) ～ (42) のような可能形式の「欠如」を起こしていると考えられる[42]。

このように、ここで示した動詞群の可能形式の「欠如」の誤用は、学習者の母語で可能構文の要素が使われていない場合があるため、母語のルールをそのまま日本語に適用し、可能形式を脱落していると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

２）連用修飾語が付く場合

次に、母語の負の転移による誤用には、次のような例も挙げられる。

(50) 卒論（0050）／学習歴 4 年／欠如：
それは中国の学習者にとって有利であるのは漢字を通してもっと容易に意味を覚え〈○→られ〉るからだ。

(51) 修論（0081）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
部下が与えられた仕事をうまく完成〈し→でき〉なかったり、時間通りに出来なかったりするのは、全部が部下のミスではない。

(52) 感想文（0166）／学習歴 4 年／欠如：
もともと文学や言語が苦手で、研究にもまったく興味を〈持たない→持てない〉。

例 (50) ～ (52) のように、「容易に」、「うまく」、「まったく」などのような連用修飾語が付く場合の誤用例が見られた（計 21 例）。これらの例では、可能形式を使う必要があるところで、可能形式が脱落している。このタイプの誤用も、学習者の母語である中国語の負の転移により生じていると考えられる。誤用例で見られた連用修飾語のリストは、次の〈表 6－13〉のようになる。

---

42 ただし、動詞と結果補語の後ろ、あるいは、結果の意味を内包する動詞の後ろに賓語（目的語）が付いていない場合は、可能の助動詞“能（néng）”の挿入で、上記のような意味の類似関係が必ずしも成立しない。例えば「听 到 了（Tīng dào le）」は「聞けた」という意味であるが、「能 听 到（Néng tīng dào），但是 没 听（dàn shì méi tīng）」は「聞けた」という類義の解釈の他に、「聞こうと思えば聞けた（が、聞かなかった）」という解釈も持つ。後者の場合、聞いたかどうかが分からなくなることで、実現可能の意味がなくなってしまう。

〈表 6－13〉誤用例における連用修飾語

連用修飾語の種類	誤用例における連用修飾語（例数）	誤用例数
（副詞＋）形容動詞の連用形	充分に（2）、簡単に（1）、（あまり）上手に（1）、長い時間に（1）、本当に（1）、（もっと）容易に（1）、（もっと）有効に（1）	8
（副詞＋）形容詞の連用形	うまく（4）、楽しく（2）、多く（1）、（もっと）早く（1）、難しく（1）	9
副詞	全然（1）、とても（1）、なかなか（1）、まったく（1）	4
	合計:	21

〈表 6－13〉を見ると、誤用例における連用修飾語には、用言の副詞用法と、副詞がある。これらの連用修飾語を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、次の例（53）～（55）を示す。

Guānchá le fǎngémìng hé gémìng liǎng fāngmiàn de xíngshì yǐhòu wǒmen jiù róngyì
(53) 观 察 了 反革命 和 革命 两 方面 的 形势 以后，我们 就 <u>容易</u>
shuōmíng dǎng de cèlüè rènwu le
<u>说明</u> 党 的 策略 任务 了。／反革命と革命の両方の情勢をみたので、われわれは党の戦術的任務を<u>容易に説明することができる</u>。

『毛泽东选集第一卷／毛沢東選集一』

Rúguǒ wǒmen zài sān jǐ nián nèi bù jiějué hǎo zhège wèn tí shínián hòu bù xiǎodé huì
(54) 如果 我们 在 三 几 年 内 <u>不 解决 好</u> 这个 问题，十年 后 不 晓得 会
chū shénme shì
出 什么 事。／もしわれわれが三、四年のうちにこの問題を<u>うまく解決できない</u>なら、十年のあとではどんな事が起こるか分かったものではない。

『邓小平文选第二卷／鄧小平文選 2』

Kěshì zài fā zhǎn xiàqu wǒ jiù háowú zì xìn le
(55) 可是 再 发 展 下去，我 就 <u>毫无 自信</u> 了。／しかし、そのまま発展していったら、おれは<u>まったく自信が持てなかった</u>。

『人啊，人／ああ、人間よ』

以上の中国語の例では、“容易说明～”、“不解决好～”、“毫无自信”のようになっている。“容易说明～”“毫无自信”は「連用修飾語＋動詞＋賓語」の構造をとり、可能形式が使われていない。また、“不解决好～”のような、日本語の連用修飾語「うまく」が中国語の結果補語“好”（形容詞）と対応する場合、「動詞＋結果補語＋賓語」の構造をとり、「１）学習者の母語で結果補語が付く場合」で分析した例と同様に、“不解决好～”のように可能形式が使われていない場合も、“不能解决好～”のように、可能の助動詞を挿入してもいい場合もある。

一方、これらに対応する日本語の構文では、「容易に説明することができる」、「うまく解決できない」、「まったく自信がもてなかった」のように、「事態の実現を可能にするいい方法があるため、事態の実現が可能である」、「やってみても事態の実現が不可能である」、「何かの事情で、事態の実現が不可能である」のような事態の実現の難易度を表しており、可能形式を要求する文脈であるため、可能形式を使わないと、文が不自然になる。

このように、連用修飾語が付く場合の可能形式の「欠如」の誤用は、学習者の母語では可能構文の要素が使われない、あるいは、使われても使われなくても成り立つ場合があるため、母語の感覚のまま、可能形式を脱落していると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

３）述語動詞が「忘れる」の場合

さらに、母語の負の転移による誤用として、次のような、述語動詞が「忘れる」である例も挙げられる（計 10 例）。

（56） 作文（0029）／学習歴 1 年半／欠如：
地震が起きた日は、当地の人々にとって、一生の忘れ〈○→られ〉ない日で、（以下略）。

（57） 作文（0085）／学習歴 2 年半／欠如：
忘れ〈○→られ〉ない家族旅行

例（56）、（57）のように、述語動詞が「忘れる」の場合、特に否定形の場合に、可能形式を脱落している誤用が見られる。これは、学習者の母語である中国語の負の転移により生じていると考えられる。「忘れる」を含む文が中国語と日本語でどのような構文を形成するのかについて、次の例（58）～（61）を示す。

Wǒ bù xǐ huan yě wàng bù liǎo
（58） 我 不 喜 欢，也 忘 不 了。／嫌いだけど、**忘れられない**。

『人啊，人／ああ、人間よ』

Gōu qǐ tā xiǎng dào xǔ duō tòng kǔ yòu nánwàng de wǎngshì
（59） 勾 起 他 想 到 许 多 痛 苦 又 难 忘 的 往 事。／二林の脳裏にかつての痛ましい**忘れられない**光景が次々とよみがえってきた。

『金光大道／輝ける道』

Wàng bú diào wǒ hǎibiān de xiǎopéngyǒu
（60） 忘 不 掉 我 海 边 的 小 朋 友。／この海辺の友を**忘れられない**。

『插队的故事／遥かなる大地』

Nà shízài shì zuì zhōngshēng nánwàng de sān gè yuè
（61） 那 实在 是 最 终 生 难 忘 的 三 个 月。／あれは一生**忘れられない**三ヵ月だ。

『金光大道／輝ける道』

以上のように、中国語の例では、“忘不了～”、“忘不掉～”、“难忘～”のように、“～不～”のような可能補語を用いても用いなくても成り立つ。可能形式を用いない“难忘～”は、日本語の文語的な表現である「忘れがたい」と対応する。

一方、これに対応する日本語の構文では、「忘れられない」のように、いずれも可能形式が使われている。例（58）～（61）のような文脈では、「忘れることは不可能である、いつまでも覚えている」というニュアンスを表すため、「忘れられない」という可能形式が要求されている。なお、「忘れない」を用いると、「努力して忘れない、忘れないようにしたいと思っている」のようなニュアンスになってしまう。

このように、述語動詞が「忘れる」の場合、特に否定形の場合、学習者の母語では可能構文の要素が使われても使われなくても成り立つため、母語の感覚のまま、可能構文の要素が使われていない規則を日本語に適用し、可能形式を脱落していると考えられる。これは、学習者の母語である中国語の規則が負の転移を起こしていると解釈できる。

以上のように、母語の負の転移が疑われる誤用には、学習者の母語で結果補語が付く場合、あるいは、連用修飾語が付く場合、述語動詞が「忘れる」の場合の誤用が見られる。いずれも、学習者の母語で可能構文の要素が使われても使われなくても成り立つ場合がある、あるいは、可能構文の要素が使われない場合があるため、母語のルールをそのまま日本語に適用し、可能形式が脱落していると考えられる。

6.2.2.2　認識のモダリティに関わる誤用

次に、本来は可能形式を使うのが適切であるのに、可能形式が脱落している誤用として、次のような、「かもしれない」、「だろう」、「はずだ」などが表す可能性、推量、必然性といった認識のモダリティが現れる文脈において可能形式が欠如している例が見られる（269例中計55例、20.45%）。

（62）　作文（001）／学習歴1年3ヶ月／欠如：
経済学の知識を身につけたら、将来はお金持ちにな〈○→れ〉るかもしれません。
（63）　8級試験（0044）／φ／欠如：
そして挑戦に対する信念があってはじめて、成功を収める〈○→ことができる〉。
（64）　作文（035）／学習歴1年／欠如：
しかしながら、子供が小さすぎると、いいところと悪いところが識別〈しない→できない〉。
（65）作文（0601）／学習歴2年／欠如：
本気に他人と付き合わなければ、心のこもった友情を〈もらわない→もらえない〉だろう。
（66）　卒論（0071）／学習歴3年半／欠如：
いろいろな努力を〈尽くす→尽くせる〉はずだ。

例（62）～（66）は非過去形であるため、「潜在可能」の「欠如」であるか、「実現可能」の「欠如」であるかの判断がしにくいが、「可能形式（＋認識のモダリティ形式）」という可能形式と認識のモダリティの共起が必要なところで、動詞の言い切りの形が使われている。また、（62）～（65）のような、「ある条件を満たせば／満たさなければ、事態の実現が可能／不可能である」という判断を表している例が多く見られる（ただし、（66）のような条件を明確に示していない例もある）。このような誤用は、学習者が可能形式と認識のモダリティの共起を求める場合を理解していないことにより生じていると考えられる。

可能構文は、命題内で動作の実現が可能か不可能かを表すのに対して、認識のモダリティは命題に対する話し手の判断を表す。両者はそれぞれ単独で用いる場合もあるし、共起する場合もある。

（62）～（66）のような文脈では、「ある条件を満たせば／満たさなければ、話し手・書き手、あるいは、視点の置かれた参与者にとって、望ましい事態の実現が可能／不可能という可能性や必然性の判断」を表す。したがって、話し手の判断を表す認識のモダリティ

形式だけではなく、可能か不可能かを表す可能形式も使う必要がある。

たとえば、(62) は、「経済学の知識を身につける」という条件を満たせば、話し手・書き手が望んでいる「お金持ちになる」ことの実現が可能である可能性がある、という判断を表すため、可能形式と認識のモダリティ形式の共起が必要であると考えられる。また、(65) は、本気で「他人と付き合う」という条件を満たさなければ、視点が置かれた参与者が望んでいる「心のこもった友情をもらう」ことの実現が不可能であるということに関する推量を表すため、可能形式と認識のモダリティ形式の共起が必要であると考えられる。このような文脈では、動作の実現を望む含意があり、動作の実現を望むことをはっきり表すために、可能形式が求められていると考えられる。すなわち、動詞の言い切りの形を用いると、「お金持ちになるかもしれない」のように、なりたいかどうかがよく分からなくなる。これら以外の例文でも、「成功を収める」((63))、「いいところ悪いところを識別する」((64))、「努力を尽くす」((66)) という、話し手・書き手、あるいは、視点の置かれた参与者が予想される事態の実現を望んでいるため、可能形式を用いた方が自然だと考えられる。

一方、「タバコを吸うと、癌になるかもしれない」のような望ましくない事態の可能性の判断を表現するには、可能形式より動詞の言い切りの形で、「タバコを吸うと、癌になる可能性がある」ことを表せば十分であると考えられる。

このように、学習者はこのような文脈において動詞の言い切りの形を用いると自分の表したい意図と合わないこと、また、このような場合に、可能形式と認識のモダリティの共起が求められていることに気が付いていないため、可能形式を使うことができていないと考えられる。

6.2.2.3　特定の文法表現との組み合わせにおける誤用

次に、本来は可能形式を使うのが適切であるのに、可能形式を脱落している誤用には、次のような、特定の文法表現「よう（に）」との組み合わせにおける誤用も挙げられる（269 例中計 15 例、5.58%）。

(67)　修論（0053）／学習歴 6 年か 6 年以上／欠如：
観客がその審判の内容をはっきり〈聞く→聞ける〉ように、ジェスチャーが要求されている。

(68)　8 級試験（0100）／φ／欠如：
社会人に〈なる→なれる〉ように頑張って、その内日本語以外の知識や技術も学びたいと思う。

例（67)、(68）のように、目的を表す「よう(に)」の前では可能形式が使えるが、学習者は動詞をそのまま使っている。同じく目的を表す「ため（に)」の前では可能形式が使用できないので、このルールと混同して可能形式が抑制された可能性がある。

これは、6.2.1.2 節で分析した（25）のような例と同質の誤用であり、学習者は、「よう(に)」、「ため（に)」のような、特定の文法表現が可能動詞と組み合わせることができるかどうかを判断できないことにより生じていると考えられる。なお、このような誤用は、これらの文法表現の規則の習得と可能動詞の習得のどれが不十分なのかを判別することが難しい。

6.2.2.4　その他の誤用

学習者による可能形式の「欠如」の誤用として、ここまで述べた母語の負の転移による誤用、認識のモダリティに関わる誤用、特定の文法表現との組み合わせにおける誤用以外に、次のような例が見られる。

（69）　作文（0082）／学習歴 2 年半／欠如：
その機会に、この町の美しさを発見する〈○→ことができた〉。
（70）　感想文（0107）／学習歴 4 年／欠如：
自分の家族が無くなったあと、二度と〈帰らない→帰れない〉という実感を味わうようになってきた。
（71）　作文（0683）／学習歴 2 年／欠如：
杭州のバスで自分の席を〈持つ→取れる〉のは私の大学時期の幸せです。

例（69）～（71）のうち、（69）と（70）は可能形式の「欠如」が訂正されている例であるが、（71）は可能形式に加えて元の動詞も修正されている例である。これらの共通点は、「状況可能」を表す可能構文における可能形式の使用の欠如が起こっているという点である。

まず、（69）は「その機会」という外的状況によって、能動主体（「私」）の「町の美しさを発見する」という動作を実現することが可能であったということを表すため、可能形式を付加して「状況可能」の可能構文を作るべきである。

また、（70）は、能動主体（「私」）には動作を実現する能力があったとしても、「家族が無くなった」という外的状況によって、「帰る」という動作の実現が不可能であることを表しているため、「状況可能」の可能構文を作るべきである。

さらに、（71）は、「バスが混んでいる／混んでいない」という外的状況の中、能動主体（「私」）が「席を取る」という動作を実現することが可能で、幸せだということを表すため、可能形式を付加して「状況可能」の可能構文を作るべきである。なお、このような誤用は「自分の席を持つ」を中国語に直訳すると、“有(yǒu) 自己(zì jǐ) 的(de) 座位(zuò wèi)”というような、中国語では自然な表現であるため、母語の負の転移による動詞の誤選択も絡んでいる可能性がある。

このように、学習者の母語に直訳しても、可能構文を使った方が自然であるため、このような可能形式の「欠如」の誤用は、日本語の可能形式の習得不足、あるいは、「状況可能」を表す可能構文の習得不足により生じていると考えられる。

6.2.3　混同

次に、可能構文における可能形式の「混同」のパターンの誤用について、例数の多い順に可能構文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 6－14〉のようになる。

〈表 6－14〉可能形式の「混同」の誤用の意味分類別分布

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	②状況可能	64	96.97%	66 (100%)
	①能力可能	2	3.03%	

〈表 6－14〉から、可能構文における可能形式の「混同」のパターンの誤用は、「状況可能」の意味を表す可能構文に多く見られることが分かる。「混同」の誤用はここまで分析した「過剰」、「欠如」のようなヴォイスの有無に関わる誤用とは異なり、ヴォイスの間の混同、可能形式の間の混同による誤用であるため、可能構文とどの構文がどのように混同しているか、どの可能形式とどの可能形式がどのように混同しているかといった点を分析する必要がある。

学習者が可能構文とどの構文を混同したのか、また、どの可能形式とどの可能形式を混同したのかを見ると、「可能と受身」、「可能と使役」、「可能と授受」、「可能動詞と助動詞「(ラ) レル」」[43]、「可能動詞と可能動詞」、「可能動詞と「ことができる」」[44]の 6 パターンが見られる。

具体的な混同の分布は、次の〈表 6－15〉のようになる。

〈表 6－15〉可能形式の「混同」

分類		例数	合計	
ヴォイスの間の混同	可能と受身の混同（可能の可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」と受身の「(ラ) レル」）	15	29	43.94%
	可能と使役の混同（可能の可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」と使役の「(サ) セル」）	7		
	可能と授受の混同（可能の可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」と授受補助動詞「テ｛アゲル／クレル／モラウ｝」）	7		
可能形式間の混同	可能動詞と助動詞「(ラ) レル」の混同	26	37	56.06%
	可能動詞と可能動詞の混同	5		
	可能動詞と「ことができる」の混同	6		
		合計:	66	100%

〈表 6－15〉のように、ヴォイスの間の混同の誤用では、可能構文と受身文の混同が最も多い。また、可能形式間の混同の誤用では、可能動詞と助動詞「(ラ) レル」の混同が最も多い。さらに、ヴォイスの間の混同よりも、可能形式間の混同の誤用例数が多い。

以下では、ヴォイスの間の混同、可能形式間の混同の順に、分析していく。

6.2.3.1 ヴォイスの間の混同

まず、ヴォイスの間の混同について、①可能構文と受身文の混同、②可能構文と使役文

43 「可能動詞→助動詞「(ラ) レル」」、「助動詞「(ラ) レル」→可能動詞」の両方を含む。
44 「可能動詞→「ことができる」」、「「ことができる」→可能動詞」の両方を含む。

の混同、③可能構文と授受文の混同の順に、分析していく。

①可能構文と受身文の混同

まず、可能構文と受身文の混同として、次のような例が挙げられる。

（72） 感想文（0097）／学習歴 4 年／混同：
将来は技術が発展するにつれて、多くの問題点が〈解消できる→解消されていく〉だろう。
（73） 8 級試験（0066）／φ／混同：
設計図には少しの間違いも〈許せない→許されない〉、人の人生はそうではない。

例（72）～（73）では、可能構文を使うか受身文を使うかで、話し手・書き手の関与が違ってくる。具体的に言えば、（72）～（73）のような例では、可能構文を用いると、「問題点を解消する人の中に、私が入っている」、「私は許すことができない」のように、話し手・書き手である一人称の「私」が関与している印象が強くなる。このように、それぞれの文脈において可能形式を用いると、「私の行為である」というニュアンスが生じるが、実際の文脈では行為者が明示されておらず、不特定多数の人と解釈されやすい受身文を用いるべきであると添削者は判断している。

このように、学習者は、それぞれの文脈において、用いた構文で含意される行為者のニュアンスをうまく理解していないため、可能構文と受身文を混同していると考えられる。

②可能構文と使役文の混同

次に、可能構文と使役文の混同として、次のような例が挙げられる。

（74） 8 級試験（0115）／φ／混同：
自分の理想のために努力することは、自分の人生を〈充実できる→充実させる〉ことになると思う。
（75） 卒論（0088）／学習歴 3 年半／混同：
大学で学んだ知識とマスターした技術を社会の中で〈応用でき→応用させ〉たい。

まず、例（74）では、学習者は「充実する」という自動詞を他動詞として使っており、「充実させることができる」の意図で可能形式を使っていると考えられるが、「理想のために努力する」ことは行為であり、可能形式を用いる「自分の人生を充実できる」は状態を表すため、前後の文脈が合わなくなる。そのため、「（サ）セル」の付加で、対応する他動詞のない自動詞を他動詞化する行為を表す表現が必要であると考えられる。このように、学習者は動詞の自他を混同しており、かつ、可能表現自体が前の文脈と合わず、不自然であることに気付いていないため、このような誤用を起こしていると考えられる。

例（75）では、学習者は、「（私が）～を応用した」という主体性を強調する意図を持っていると考えられる。しかし、可能構文を用いると、「知識と技術を応用することの実現が可能になる」ように、強い他動性を感じない。また、そもそも可能構文には願望の「～たい」が接続できない。そのため、（75）のような例では、「応用させる」という使役形を用い、他動性を強めるべきである。学習者は可能構文と使役文のそれぞれの機能や役割を十

分に理解していないため、このような誤用を起こしていると考えられる。

③可能構文と授受文の混同

さらに、可能構文と授受文の混同として、次のような例が挙げられる。

（76） 作文（0085）／学習歴 1 年半／混同：
国際婦人デーにクラスの女の子たちにプレゼントを〈贈れる→贈ってくれた〉ことは何度も日本人の優しい心を感じた。

例（76）では、可能構文を用いると、話し手・書き手である「私」がクラスの女の子にプレゼントを贈ったように見えてしまい、後の文脈と合わなくなる。しかし、学習者の意図としては、「日本人の行為により、話し手・書き手を含めた受益者であるクラスの女の子が利益を受けた」ことを表したいため、受益や恩恵を与える「日本人」を主語とする、「テクレル」という授受補助動詞を使った授受文にする必要がある。

このように、誤用の原因として、学習者は、行為者が現れていない場合に可能構文を用いると、行為者が話し手・書き手になりやすいことを理解していない、また、意図に応じた構文の選択ができていないことが考えられる。

以上のように、可能構文とほかのヴォイス表現との混同は主に、日本語の文法そのものを十分に理解していないことにより生じていると考えられる。具体的に言えば、学習者は、行為者が明示されていない場合に、表現される構文と行為者が合わないことを十分に理解できていないため、可能構文と受身文、授受文を混同している。また、可能構文と使役文の混同の誤用では、学習者は、可能形式と使役の「（サ）セル」のそれぞれの機能や役割を十分に理解できていないという原因が考えられる。

6.2.3.2　可能形式間の混同

次に、可能形式間の混同について、①可能動詞と助動詞「（ラ）レル」の混同、②可能動詞と可能動詞の混同、③可能動詞と「ことができる」の混同の順に、分析していく。

①可能動詞と助動詞「（ラ）レル」の混同

まず、可能動詞と助動詞「（ラ）レル」の混同として、次のような例が挙げられる。

（77） 作文（0031）／学習歴 3 年／混同：
そのほか、老人、妊婦、子供などに席を譲る若者もよく〈見える→見られる〉。

（78） 作文（0166）／学習歴 1 年／混同：
黄砂が飛んで来ると空が黄色くなり、太陽がよく〈見られませんでした→見えなくなります〉。

可能動詞と助動詞「（ラ）レル」の混同の誤用のうち、例（77）、（78）のような、語彙的な可能動詞「見える」と、助動詞「（ラ）レル」を用いた動詞「見る」の可能形式である「見られる」との混同が多数見られる（26 例のうち、延べ例数 24 例）。なお、このような

誤用は、6.1.2.1 節で見た市川（1997、2010）でも指摘されているが、中国語を母語とする日本語学習者の誤用ではない。

山岡（2003:24）は、「見える」は「知覚の能力属性を表す文」で用いるのに対して、「知覚以外の条件による可能性を述べる場合、述語には「見える」ではなく「見られる」が用いられる」と指摘している。例えば、次のような例である。

（79） 十分か十五分でこれくらいの光に慣れるわ。それに慣れたら少しまた先に進むのよ。そしてまたそこでもっと強い光に目を慣らすの。でないと目が**見えなくなっちゃう**の。（同:24）

（80） しかしさすがに鹿苑寺総門の前に立ったとき、私の胸はときめいた。これからこの世で一等美しいものが**見られる**のだ。（同上）

例（79）は「目」の知覚の能力属性を表す文であるため、「見える」が用いられるのに対して、例（80）は「鹿苑寺総門の前に立つことで、美しいものを見よう」という知覚以外の条件による可能性を述べる場合であるため、「見られる」が用いられる。

それゆえ、（77）のような例は、「誰でも見ることができる、よく見られる光景である」のように、行為者の知覚に関係がないため、「見える」ではなく、「見られる」を用いたほうが妥当である。一方、（78）のような例は、「自然に太陽が目に入ってこない」という行為者の知覚を表すため、「見える」を用いたほうが妥当である。

このように、学習者は、「見える」と「見られる」のそれぞれの使い方、違いを習得していないため、「混同」の誤用を起こしていると考えられる。

②可能動詞と可能動詞の混同

次に、可能動詞の間の混同として、次のような例が挙げられる。

（81） 作文（0674）／学習歴 2 年／混同：
学校にいる時、毎週両親に電話をかけました。彼らの声を〈聞こえる→聞ける〉のは一番幸福のことだと思いました。

（82） 作文（0070）／学習歴 1 年半／混同：
「誰？」という祖父の声が〈聞ける→聞こえる〉。

例（81）、（82）のように、可能動詞の間の混同は、主に語彙的な可能動詞「聞こえる」と、動詞「聞く」の可能動詞形「聞ける」との混同の誤用である。なお、このような誤用も、6.1.2.1 節で見た市川（1997、2010）で指摘されているが、中国語を母語とする日本語学習者の誤用ではない。

山岡（2003:27）は、「「聞く、聞こえる、聞ける」の三者の関係は、「見る、見える、見られる」の関係と似ている」と指摘し、次のような例を挙げている。

（83）耳をじっと澄ませると、それはひょおうひょおうという音に**聞こえた**。（同:27）

（84）彼のように学校に行けなかったものが世間には沢山ある。そういう人のために、安い金で学校の講義が**聞ける**ことは、学問開放の意味で、最も有益な仕事だと思ったからである。（同上）

このように、「聞こえる」は、例（83）のような、「耳」の知覚を表す文で用いるのに対して、「聞ける」は、例（84）のような、「お金を支払うという手段で講義を聞こう」という知覚以外の条件による可能性を述べる場合に用いると考えられる。

学習者の誤用例を見ると、例（81）では、そもそも「聞こえる」はヲ格をとらないが、ガ格に訂正しても、「聞きたい時に、電話をかけるという手段を用いて聞こう」という、知覚以外の条件による可能性を表すため、「聞ける」を用いたほうが妥当である。一方、例(82)は、「自然に祖父の声が耳に入る」という知覚を表すため、「聞こえる」を用いたほうが妥当である。

このように、学習者は、「聞こえる」と「聞ける」のそれぞれの使い方、違いを習得していないため、このような誤用を起こしていると考えられる。

③可能動詞と「ことができる」の混同

最後に、可能動詞と「ことができる」の混同として、次のような例が挙げられる。

（85）　作文（019）／学習歴 3 年／混同：
日本のドラマの中で、いつも極めてひねくれた奴を〈みえる→見ることができる〉。

可能動詞と「ことができる」の混同は、主に例（85）のような、「見える」と「見ることができる」との混同の誤用である。なお、6.1.2.1 節で見た佐治（1992）でも、可能動詞と「ことができる」の混同の例を指摘しているが、「教われる」を「教わる」の可能動詞形として使っている誤用例である。

例（85）は、語彙的な可能動詞動詞「見える」と、「ことができる」を用いた動詞「見る」の可能形式である「見ることができる」との混同の誤用である。(85）では、そもそも「見える」はヲ格をとらないが、ガ格に訂正しても、先の「①可能動詞と助動詞「（ラ）レル」の混同」の分析でも述べたように、知覚以外の条件による可能性を述べる場合に、「見える」は用いられない。そのため、(85）のような、「ドラマという手段で、いつも極めてひねくれた奴を見よう」という、知覚に関わらない文脈では、「見える」より、「見ることができる」が妥当であると考えられる。また、ここでは、主語が不特定であるため、「見られる」に訂正することができないと考えられる。

このように、学習者は「見える」が使える範囲を理解していないため、このような誤用を起こしていると考えられる。

以上のように、可能形式間の混同は主に、日本語の文法そのものを十分に理解していないことにより生じていると考えられる。具体的に言えば、学習者の「見える／見られる」・「聞こえる／聞ける」のそれぞれの使い方や違いの未習得、「見える」の可能動詞としての使用範囲の不十分な理解が考えられる。

6.2.4　その他

「その他」の誤用は、ここまで見た「過剰」、「欠如」、「混同」のようなヴォイスの有無や混同に関わる誤用とは違い、可能構文における述部の形そのものが適切ではない誤用で

ある。

可能構文における可能形式の「その他」のパターンの誤用について、例数の多い順に可能構文の意味分類別の分布を示すと、次の〈表 6－16〉のようになる。

〈表 6－16〉可能形式の「その他」の誤用の意味分類別分布

可能構文の意味分類の観点	意味分類	誤用例数		合計
動作を実現する条件・理由	②状況可能	73	94.81%	77
	①能力可能	4	5.19%	(100%)

〈表 6－16〉から、可能構文における可能形式の「その他」のパターンの誤用は、「状況可能」の意味を表す可能構文に多く見られることが分かる。

さらに、6.2 節の〈表 6－4〉に示した可能構文における可能形式の「その他」のパターンの分類に従い、誤用の分布を示すと、次の〈表 6－17〉のようになる。

〈表 6－17〉可能形式の「その他」の誤用

分類	例数	
元の動詞の誤り	43	55.84%
述部の形態の誤り	28	36.36%
品詞の誤り	6	7.79%
合計：	77	100%

〈表 6－17〉のように、「その他」の誤用では、「元の動詞の誤り」のパターンが一番多い。

以下では、①元の動詞の誤り、②述部の形態の誤り、③品詞の誤りの順に、それぞれ分析していく。

①元の動詞の誤り

まず、「元の動詞の誤り」として、次のような例が挙げられる。

(86) 作文（110）／学習歴 1 年 3 ヶ月／その他：
愛しているくせに、告白する勇気を〈出られ→出せ〉なかった。

(87) 8 級試験（0048）／φ／その他：
そんな偉い人にならなくても、平凡で、一生努力すれば、自己の価値も〈実現できる→見出せる〉と思う。

例（86）、(87）のように、「元の動詞の誤り」は、可能構文は作れているが、動詞の選択を間違えている誤用である。

まず、(86）はもともと他動詞「出す」の可能形式を使うべきところで、自動詞「出る」を他動詞として用い、助動詞を付加して可能構文を作っている誤用である。学習者が、「出る／出す」のような対をなす動詞の自他を混同していることにより生じている誤用例だと考えられる。

一方、(87）は、文脈上、「実現する」より「見出す」が適切だと判断され、訂正されている例である。このような誤用は、学習者が文脈や意図に合わせた動詞の選択ができてい

ないことにより生じていると考えられる。
　このように、学習者は、動詞の自他を混同したり、文脈や意図に合わせた動詞の選択ができていなかったりして、このような誤用を起こしていると考えられる。

②述部の形態の誤り

　次に、「述部の形態の誤り」として、次のような例が挙げられる。

（88）　作文（001）／学習歴 1 年／その他：
　　心から勉強したい大学生はどんな所でも、何の時間でも、朝自習はなくても、精一杯〈努力られる→努力できる〉。
（89）　作文（0082）／学習歴 1 年半／その他：
　　いうまでもなくほかの人は君の書いたことが〈読みられる→読める〉はずだ。

　例（88）、（89）のように、「述部の形態の誤り」は、述部で使われている元の動詞に問題はないが、可能形式の形態を間違えている誤用である。6.1.2.1 節で見た市川（2010）で「誤形成」として扱われている例は、このタイプに相当する。
　（88）は述語動詞「努力する」の形態が間違っている例で、サ変動詞の可能動詞形は「～できる」であるべきなのに、助動詞「～ラレル」という一段動詞の可能形式を使用している。
　また、（89）は述語動詞「読む」の形態が間違っている例で、五段動詞の可能形式は「読める」であるべきなのに、「～みられる」のように、「動詞連用形＋ラレル」の形式になってしまっている。
　このような動詞の可能形式の混用は、述語動詞の可能形式の形態の不十分な習得により生じていると考えられる。

③品詞の誤り

　最後に、「品詞の誤り」として、次のような例が挙げられる。

（90）　修論（0073）／学習歴 6 年か 6 年以上／その他：
　　中国では、「9」という数字の発音は「永久」の「久」と同じなので、「長生き」、「永遠」、「長く（〈幸せできる→幸せでいる〉）」という意味を連想することができ、めでたい数字だと見られている。

　例（90）のような「品詞の誤り」は、動詞ではない語で可能構文を作っている誤用である。
　（90）の「幸せだ」は形容動詞であり、可能形式を持たないが、学習者は形容動詞から可能構文を作っている。これは、品詞の不十分な習得による誤用だと考えられる。

　以上のように、「その他」の誤用は、日本語そのものを十分に理解していないことにより生じている。つまり、学習者は述部の動詞の選択ができていない、あるいは、述語動詞の可能形式の形態を十分に習得できていないことが考えられる。

6.2.5　可能構文における「述部の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」（可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」の誤用）を分析し、以下のことを明らかにした。

まず、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがある。

次に、誤用例の数から見ると、可能構文における可能形式の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、可能構文における可能形式の種類から見ると、可能動詞の誤用が多い。さらに、可能構文の意味分類で見た場合、「状況可能」の意味を表す可能構文の誤用が多い。

また、それぞれのパターンの誤用の原因を分析した結果を、まず、「過剰」の誤用についてまとめると、次の〈表 6－18〉の通りである。

〈表 6－18〉可能形式の「過剰」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.2.1.1	可能構文の成立条件を満たしていない場合	●「煙が空高く（昇れる→昇る）」のような、非情物主語を取る構文の例 ●「親の財布を（困れる→頼る）」のような、有情物主語の無意志動詞構文の例 ●「駅弁の掛け紙は時代を（解説できる→解説している）」のような、「実現可能」の過剰使用の例 ●「熱が（下がれませんでした→下がりませんでした）」のような、有対自動詞の可能形式の過剰使用の例	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移
6.2.1.2	可能構文の成立条件を満たしている場合	●「私は作家の作品を（読めました→読みました）」のような、「実現可能」の過剰使用の例 ●「李さんは家を（買える→買う）ため、以下略」、「人々は自分の好みなどによって（選べる→選ぶ）ことができる」のような、特定の文法表現との組み合わせにおける可能形式の過剰使用の例	●学習言語への不十分な理解
6.2.1.3	可能構文の成立条件を満たしていない場合と満たしている場合の両方	●「政治関係の悪化は交流を（阻止できる→阻止する）かもしれない」、「きっと日本語がもっと上手に（なることはできます→なる）でしょう」、「だぶん、週に１回（電話しますことができます→電話します）」のような、認識のモダリティを表そうとする文脈における可能形式の過剰使用の例	●母語の負の転移

このように、可能構文における可能形式の「過剰」の誤用は、可能構文の成立条件を満たしていない文で起こる場合と、満たしている文で起こる場合がある。また、成立条件に関わらず、認識のモダリティを表そうとする文脈における誤用が多く見られる。これらの可能形式の「過剰」の誤用は主に、学習言語への不十分な理解、あるいは、母語の負の転移に起因していると考えられる。

次に、「欠如」の誤用をまとめると、次の〈表 6－19〉の通りである。

〈表 6－19〉可能形式の「欠如」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.2.2.1	学習者の母語で可能形式を使わない場合がある、または、可能形式を使わない場合	●「おじさんの最後の言葉を（聞かなくて→聞けなくて）、以下略」のような、学習者の母語で結果補語が付く例 ●「容易に意味を（覚える→覚えられる）」のような連用修飾語が付く例 ●「当地の人々にとって、一生の（忘れない→忘れられない）日」のような、述語動詞が「忘れる」の例	●母語の負の転移
6.2.2.2	認識のモダリティに関わる場合	●「将来はお金持ちに（なる→なれる）かもしれません」、「友情を（もらわない→もらえない）だろう」、「いろいろな努力を（尽くす→尽くせる）はずだ」のような、認識のモダリティを表そうとする文脈において可能形式が欠如している例	●学習言語への不十分な理解
6.2.2.3	特定の文法表現と組み合わせる場合	●「社会人に（なる→なれる）ように、以下略」のような、「よう（に）」との組み合わせにおける誤用	●学習言語への不十分な理解
6.2.2.4	その他の誤用	●「その機会に、この町の美しさを（発見する→発見することができた）」のような、「状況可能」を表す可能構文の使用欠如の例	●学習言語への不十分な理解

このように、可能構文の可能形式の「欠如」の誤用は、主に、学習者の母語の負の転移に起因しており、学習言語への不十分な理解による誤用も見られる。また、「過剰」のパターンと類似した、認識のモダリティを表そうとする文脈における可能形式の誤用が見られる。どのような場合に、認識のモダリティを表そうとする文脈で可能形式を使っていいかが学習者にとって難しいと考えられる。

次に、「混同」の誤用をまとめると、次の〈表 6－20〉の通りである。

〈表 6－20〉可能形式の「混同」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.2.3.1	可能と受身を混同している場合	●「問題点が（解消できる→解消されていく）」のような、文脈において、それぞれの構文で生じる行為者のニュアンスを理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	可能と使役を混同している場合	●「自分の理想のために努力することは、自分の人生を（充実できる→充実させる）」のような、動詞の自他を混同している例、「知識と技術を（応用でき→させ）たい」のような、それぞれの構文の機能や役割を理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	可能と授受を混同している場合	●「女の子たちにプレゼントを（贈れる→贈ってくれた）ことは何度も日本人の優しい心を感じた」のような、文脈において、可能構文が適切ではない例	●学習言語への不十分な理解
6.2.3.2	可能動詞と助動詞「（ラ）レル」を混同している場合	●「席を譲る若者もよく（見える→見られる）」のような、「見える」と「見られる」を混同している例	●学習言語への不十分な理解
	可能動詞と可能動詞を混同している場合	●「祖父の声が（聞ける→聞こえる）」のような、「聞ける」と「聞こえる」を混同している例	●学習言語への不十分な理解
	可能動詞と「ことができる」を混同している場合	●「ドラマで、ひねくれた奴を（みえる→見ることができる）」のような、「見える」の使用範囲を理解していない例	●学習言語への不十分な理解

このように、可能形式の「混同」の誤用には、ヴォイスの間の混同だけではなく、可能形式間の混同も見られる。量的には、可能形式間の混同がヴォイスの間の混同より多く見られる。このような誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

最後に、「その他」の誤用をまとめると、次の〈表 6－21〉の通りである。

〈表 6－21〉可能形式の「その他」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.2.4	元の動詞の誤り	●「出られない→出せない」のような動詞の自他を混同している例、「実現できる→見出せる」のような動詞の選択ができていない例	●学習言語への不十分な理解
	述部の形態の誤り	●「努力られる→努力できる」、「読みられる→読める」のような述語動詞の形態を間違えている例	●学習言語への不十分な理解
	品詞の誤り	●「幸せできる→幸せでいる」のような形容動詞などで可能構文を作る例	●学習言語への不十分な理解

このように、「その他」の誤用は、「過剰」、「欠如」、「混同」のようなヴォイスの有無や混同に関わる誤用とは違い、可能構文における述部の形そのものが適切ではない誤用であり、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

以上のように、本節では、従来の先行研究で明らかにされてきた誤用のパターンを踏まえ、大規模な作文データを材料として、可能構文における可能形式の誤用のパターンを再整理した。また、可能構文の意味と可能形式の誤用との関係についても見てきた。さらに、誤用のパターンを提示しただけではなく、それぞれさらに下位分類したパターンごとに詳しく分析し、誤用の原因を明らかにした（〈表 6－18〉、〈表 6－19〉、〈表 6－20〉、〈表 6－21〉）。

「過剰」の誤用に関しては、可能構文の成立条件を満たしているかどうかに着目し、典型的な誤用例を挙げながら、詳細な分析を行い、それぞれのパターンごとに誤用の原因を明らかにした。「欠如」の誤用に関しては、母語の負の転移に関わる誤用が多くあることが明らかになった。特に、「過剰」と「欠如」の節では、今までの研究であまり提示されていない母語の負の転移による誤用をパターンごとに詳しく分析し、学習者の母語では、可能構文のマーカーがモダリティの形式としても使えることの影響や、学習者の母語では可能の要素が使われない場合があることの影響により、「過剰」と「欠如」の誤用を起こしていることが明らかになった。さらに、今までの研究であまり詳しく論じられていない「混同」、「その他」の誤用に関しても、原因まで詳しく分析し、主に学習言語（日本語）への不十分な理解に起因することが明らかになった。

6.3　格助詞の誤用

本節では、可能構文において格助詞「ヲ」「ニ」が関わる誤用の分析を行う。

まず、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用調査の結果、作文コーパスにおける可能構文の「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用、いわゆる他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケースおよび、他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）のパターンは、次の〈表 6－22〉のようになる。

〈表 6－22〉誤用のパターン（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用のパターン			定義	誤用例[45]
ア.格助詞の選択や使用のミス	a. ヴォイスによる誤用		可能形式（可能動詞・「(ラ)レル」・「ことができる」）にあわせた格助詞の選択ができていない。	著者の研究によって、主人公のイメージと内容を分析して、耽美主義〈ヲ→ガ〉理解できる。（卒論）
	b. 述部における格助詞の過剰使用		漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用。	日常生活、勉強、仕事において、至る所にすべて他人を尊重〈ヲ→〇〉することができます。（作文）
	c. 動詞による誤用		元の動詞にあわせた格助詞の選択ができていない。	その中の大原郡の阿用郷の目一つの鬼は日本〈ニ→デ〉確認できる最古の鬼である。（卒論）
イ.格助詞と述部の二重の誤り	a. ヴォイスが影響した誤用＋述部の誤用	a1. ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用	可能形式にあわせた格助詞の選択ができておらず、述部の可能形式も間違っている。	人民元数元で何日分もの林檎〈ヲ→ガ〉〈買えられる→買える〉。（感想文）
		a2. ヴォイスの誤用の添削に伴った格助詞の訂正	可能形式の選択が誤りとされ、またその添削に伴って格助詞の訂正もなされている。	どうすれば災害〈ヲ→ガ〉〈防ぐ→防げる〉のか。（感想文）
	b. 述部における格助詞の過剰使用＋述部の誤用		漢語サ変動詞における格助詞の過剰使用に加え、可能形式も間違っている。	この法律の登場により、主婦は辞職以外に、選択〈ヲ→〇〉する〈〇→ことができる〉。（卒論）
	c. 動詞による誤用＋述部の誤用		元の動詞にあわせた格助詞の選択ができておらず、可能形式も正しく使われていない。	だれもがこんな環境の中〈ニ→デ〉〈暮らしたら→暮らせたら〉幸せな感じが出てくるんです。（感想文）

〈表 6－22〉のうち、ア a、ア b、ア c は「格助詞の誤用」で、イ a、イ b、イ c は「格助詞の誤用＋述部の誤用」である。

ア c、イ c は可能構文に現れてはいるものの、「日本〈ニ→デ〉確認できる最古の鬼である」のように、場所を表す意味格としてのニ格とデ格の混用であり、能動文でも起こり得るため、可能表現が直接的に関係した誤用とは考えにくい。

また、ア b、イ b も「他人を尊重〈ヲ→〇〉することができます」のように、漢語サ変動詞の語幹「尊重」を名詞と捉えることによって生じた誤用であり、直接ヴォイスが原因となった誤用かどうかが明らかではない。

さらに、イ a2 は「どうすれば災害〈ヲ→ガ〉〈防ぐ→防げる〉のか」のように、可能形式の「欠如」が誤りと判断され、かつ、添削者の可能形式の付加に伴って格助詞「ヲ」が「ガ」

[45] 格助詞と述部の誤用箇所に付与されている研究タグは省略し、格助詞の誤用タグと正用タグはカタカナで表記している。

に訂正されたものであるため、学習者自身の誤用とは認められない場合がある。

以上のことから、ここでは、真にヴォイスに関わる格の交替を原因とした誤用は、〈表6－22〉のパターンのうち、ア a、イ a1 であると考える。以下では、これらのパターンに限定して分析を進める。

なお、可能構文において、述語動詞が他動詞の場合、「ガ，ガ」構文と「ガ，ヲ」構文のどちらでもよい可能性がある。また、もともと可能構文の対象格標示としての「ヲ」と「ガ」の選好性には個人差もあるので、母語話者の判断でもゆれることがある。そのため、「ヲ→ガ」の誤用例の中には、真の誤用とは言えない例が存在する可能性があるが、ここではすでに作文に付与されている正誤タグに従って誤用例として扱うことにする。

可能構文における「ヲ→Ｙ」「ニ→Ｙ」型誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）の全体像として、作文コーパスから得られた可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用タグの総数としての「誤用」数と、ここでヴォイスに関わると考える誤用の数をあわせて示すと、次の〈表6－23〉のようになる。

〈表6－23〉誤用の全体像（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）

誤用の種類	「ヲ→Ｙ」型	「ニ→Ｙ」型	計
総数	118 例	66 例	184 例
ヴォイスに関わる誤用	61 例（51.69%）	9 例（13.64%）	70 例（38.04%）

ここから、「ヲ→Ｙ」型誤用には、ヴォイスに関わる誤用が約5割あるのに対し、「ニ→Ｙ」型誤用では、約1割にとどまることが明らかになった。

以下では、ヴォイスに関わる誤用に焦点を当て、可能構文における「ヲ」「ニ」の誤用の具体例を示し、その実態と原因を考察していく。

まずは、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用」（〈表6－22〉の「ア a」）を分析していく。

6.3.1 「ヲ→Ｙ」型誤用

可能構文における格助詞「ヲ」の誤用（66 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンをＹの表現別に示すと、次の〈表6－24〉の通りである。

〈表6－24〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（ア）

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ヲ→ガ（43）、ヲ→ハ（3）	46

ア a の誤用では、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用が一番多く見られる（43 例／46 例）。

まず、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文でのヲ格の使用が多数見られる（19 例／43 例）。このような誤用は6.1.2.2 節で見た市川（1997）でも指摘されているが、誤用の原因は詳しく論じられていない。

(91) 感想文（0167）／学習歴4年／ア a：
つまり、同じ金額の貨幣でより多くのもの〈ヲ→ガ〉買えるようになるのです。

例（91）のような可能構文では、一般的には、述語動詞が他動詞の場合、主語と対象格の格パターンは「ガ，ガ」と「ガ，ヲ」のどちらでもよい可能性がある。(91）も、誤用かどうかの判断がゆれると思われる例であるが、市川（1991:12）は、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文の場合、対象格標示として「ガ」が「ヲ」よりあらわれやすい、と指摘している。学習者の「ヲ→ガ」の誤用は、格の交替の必要性に対する理解が不十分であることが誤用の一つの原因だと考えられる。すなわち、学習者は、「ヲ」の使用によって、特定の事柄を叙述しているという印象を与えてしまうことを意識していないと考えられる。

次に、「できる」にヲ格を使っている誤用例が見られる（10 例／43 例)。

(92)　卒論（0087）／学習歴 3 年半／ア a：
　　読者は、これを詳しく読んだとき、その美しい画面から無限の想像〈ヲ→ガ〉できた。

例（92）のように「できる」の前に対象を表す名詞句がくる場合、格は「ガ」で表されるのが標準的であるが、学習者がこのようなことを理解していないため、誤用を起こしていると考えられる。また、学習者は「できる」に対応する能動文の動詞である「する」が取るヲ格をそのまま用いたとも考えられる。

さらに、「見える」、「聞こえる」のような語彙的な可能動詞にヲ格を使っている誤用例も見られる（9 例／43 例)。

(93)　作文（0115）／学習歴 1 年／ア a：
　　山頂から、ずばらしい景色〈ヲ→ガ〉見えます。
(94)　感想文（006）／学習歴 2 年半／ア a：
　　子供が唐詩を朗読する声〈ヲ→ガ〉聞こえた。

例（93)、(94）では、述語動詞が「見える」、「聞こえる」のような語彙的な可能動詞であり、このような場合にはヲ格ではなく、ガ格を取るべきである。このことに対する学習者の理解が不十分であることにより生じている誤用だと考えられる。

6.3.2 「ニ→Y」型誤用

可能構文における格助詞「ニ」の誤用（47 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるア a のパターンの誤用は、次の〈表 6－25〉の通りである。

〈表 6－25〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（ア）

誤用のパターン			誤用例数
ア	a	ニ→ガ（2)、ニ→○（2)、ニ→ノ（2)	6

ア a の誤用では、まず、「ニ→ガ」パターンの誤用が、少数だが観察された。これは、6.1.1.3 節で提示したような「ニ，ガ」構文と「ガ，ヲ」構文の混同だと考えられる。

(95)　作文（0659）／学習歴 2 年／ア a：

ここで、皆さん〈ニ→ガ〉自分の幸せを見つけられることを祈ります。

(96)　作文（0049）／学習歴 1 年半／ア a：
先生〈ニ→ガ〉晩御飯を食べられない。

他動詞の可能構文の主語はニ格を取る場合があるが、この場合は目的語はガ格を取らなければならず、例えば、「太郎に英語の本が読める」のように、主語「太郎」がニ格を取ると同時に、目的語「英語の本」はガ格を取る。このことへの理解が不十分であるのが例(95)、(96) のような誤用の原因だと考えられる。なお、このような例は「ヲ」の誤用とも解釈できるが、ここは「ニ」が訂正されている。

次に、「ニ→○」、「ニ→ノ」パターンの誤用も同数、観察された。

(97)　作文（116）／学習歴 2 年半／ア a：
こんな苦痛に強い恐怖を持っている私〈ニ→○〉は、どうやって成長できるか。

(98)　作文（062）／学習歴 1 年半／ア a：
そのまま放っておければ、地球は人間〈ニ→ノ〉住めないところになる恐れがある。

例（97）と例（98）はいずれも自動詞の可能構文で、主語には「ハ／ガ」（例（98）の正用「ノ」は「ガ」相当）を取るべきであるが、ニ格への過剰な交替が起こっている。一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないということへの不十分な理解が誤用の原因だと考えられる。

6.3.3　可能構文における「格助詞の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」）を中心に分析し、以下のことを明らかにした。

まず、可能構文における「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用で一番目立つ「ヲ→ガ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 6－26〉の通りである。

〈表 6－26〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.3.1	「ヲ→ガ」	●「同じ金額の貨幣でより多くのもの（ヲ→ガ）買える」のような、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文の例、「無限の想像（ヲ→ガ）できた」のような述部が「できる」の例、「子供が唐詩を朗読する声（ヲ→ガ）聞こえた」のような、述部が語彙的な可能動詞の例	●学習言語への不十分な理解（主語が不特定な場合など、総称的で不特定な事柄を叙述する可能構文の場合、ヲ格からガ格への交替の必要性に対する不十分な理解など）

このように、学習者は可能構文において、ガ格を使うべきところで、ヲ格を使う傾向がある。このような誤用は、主に主語が不特定な場合など、総称的で不特定な事柄を叙述する可能構文の場合、ヲ格からガ格への交替の必要性などに対する不十分な理解により生じていると考えられる。

次に、可能構文における「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる誤用の割合は比較的に低いが、「ニ→ガ」、「ニ→〇」、「ニ→ノ」の誤用をまとめると、次の〈表 4－32〉の通りである。

〈表 6－27〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.3.2	「ニ→〇」、「ニ→ノ」	●「強い恐怖を持っている私（ニ→〇）は、どうやって成長できるか」のような、自動詞の可能構文におけるニ格への過剰な交替の例	●学習言語への不十分な理解（一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないことへの不十分な理解）
	「ニ→ガ」	●「先生（ニ→ガ）晩御飯を食べられない」のような、「ニ，ガ」構文と「ガ，ヲ」構文を混同している例	●学習言語への不十分な理解（他動詞の可能構文の主語はニ格を取る場合に、目的語はガ格を取らなければならないことを十分に理解できていない）

このように、「ニ→ガ」、「ニ→〇」、「ニ→ノ」パターンの誤用は、ニ格主語の過剰生成であり、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

以上のように、本節では、可能構文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用」）をパターン化し、ヴォイスに関わる誤用を中心に分析を行った。また、Yの表現別にパターン化し、可能構文における「ヲ→ガ」パターンの誤用が多い、「ニ→ガ」、「ニ→〇」、「ニ→ノ」パターンの誤用も少数見られたことを明らかにした。さらに語彙的な可能動詞や主語が不特定な場合など、総称的で不特定な事柄を叙述する他動詞の可能構文の場合の格表示や、自動詞の可能構文の主語の表し方などに注目し、誤用の原因を詳しく分析した。その結果、このような誤用の原因は主に学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

6.4　格助詞の誤用＋述部の誤用

次に、格助詞「ヲ」「ニ」の順に、「格助詞の誤用＋述部の誤用」（〈表 6－22〉の「イ a1」）を分析していく。

6.4.1 「ヲ→Ｙ」型誤用＋述部の誤用

可能構文における格助詞「ヲ」の誤用（52 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンは、次の〈表 6－28〉の通りである。

〈表 6－28〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ヲ→ガ（12）、ヲ→ニ（1）、ヲ→ハ（1）、ヲ→モ（1）	15

イ a1 の誤用では、特に「ヲ→ガ」パターンの誤用が一番多く見られる（12 例／15 例）。

まず、6.3.1 節で示した例と同様の「見える」、「分かる」のような語彙的な可能動詞にヲ格を使っている誤用例が見られる。（6 例／12 例）

（99） 作文（0080）／学習歴 1 年半／イ a1：
ワンピースを通じて、日本人が憧れていること〈ヲ→ガ〉良く〈分かれる→分かる〉。

（100） 作文（0014）／学習歴 1 年／イ a1：
図書館の窓から、山の景色〈ヲ→ガ〉〈見えれます→見えます〉、すばらしいです！

これも、語彙的な可能動詞がガ格を取ることに対する理解が不十分であることにより生じている誤用だと考えられる。また、述部の「分かる」、「見える」はすでに可能の意味が既に語彙的に組み込まれた動詞であるため、可能の助動詞「（ラ）レル」が「過剰」と判定されている。このような誤用の原因として、学習者が可能動詞を十分に習得していない可能性があると考えられる。

次に、これも 6.3.1 節で示した例と同じく、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文でのヲ格の使用が見られる（3 例／12 例）。

（101）感想文（0200）／学習歴 4 年／イ a1：
人民元数元で何日分もの林檎〈ヲ→ガ〉〈買えられる→買える〉。

主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文の場合、格の交替（ヲ格からガ格への交替）の必要性に対する不十分な理解が誤用の一つの原因だと考えられる。また、述部の「買えられる」には「可能動詞＋助動詞（ラ）レル」という、6.2.1.2 節で見たものと同様の可能形式の重複による「過剰」の誤用が現れており、学習者が可能動詞を十分に習得していない可能性があると考えられる。

6.4.2 「ニ→Ｙ」型誤用＋述部の誤用

可能構文における格助詞「ニ」の誤用（19 例）のうち、ヴォイスに関わる誤用であるイ a1 のパターンは、次の〈表 6－29〉の通りである。

〈表 6－29〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用（イ）

誤用のパターン				誤用例数
イ	a	a1	ニ→ハ（2）、ニ→ガ（1）	3

イ a1 の誤用では、「ニ→ハ」、「ニ→ガ」パターンの誤用が少数だが、観察された。

（102）　8 級試験（0079）／φ／イ a1：
学生たちは純粋で、私の生活〈ニ→ハ〉楽しく〈なれる→なる〉と思う。

まず、6.3.2 節で分析したように、例（102）は自動詞の可能構文であるため、主語には「ハ／ガ」を取るべきであるが、ニ格への過剰な交替が起こっている。一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないということへの理解が不十分であることが誤用の原因だと考えられる。また、述部では、6.2.1.3 節で分析したと同様の、認識のモダリティを表そうとする文脈に可能形式が過剰に現れている誤用が起こっている。これは母語の負の転移によるものと考えられる。

6.4.3　可能構文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」のまとめ

以上、本節では、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用＋述部の誤用」）を中心に分析し、以下のことを明らかにした。

まず、可能構文における「ヲ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる「ヲ→ガ」パターンの誤用をまとめると、次の〈表 6－30〉の通りである。

〈表 6－30〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ヲ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.4.1	「ヲ→ガ」	●「図書館の窓から、山の景色（ヲ→ガ）（見えれます→見えます）」、「人民元数元で何日分もの林檎（ヲ→ガ）（買えられる→買える）」のような、述部が語彙的な可能動詞、あるいは、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文における格助詞と述部の両方を間違えている例	●学習言語への不十分な理解（語彙的な可能動詞にはガ格を取ることに対する不十分な理解など、可能動詞を十分に習得していない）

このように、述部が語彙的な可能動詞などの場合において、学習者が格助詞と述部の両方を間違えている例は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

次に、可能構文における「ニ」の誤用のうち、ヴォイスに関わる「ニ→ハ」パターンの誤用は少数であるが、まとめると、次の〈表 6－31〉の通りである。

〈表 6－31〉可能構文におけるヴォイスに関わる「ニ」の誤用

節	誤用のパターン	典型的な誤用例	誤用の原因
6.4.2	「ニ→ハ」	●「私の生活（ニ→ハ）楽しく（なれる→なる）と思う」のような、自動詞の可能構文におけるニ格への過剰な交替、かつ述部も誤っている例	●学習言語への不十分な理解（一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないことへの不十分な理解） ●母語の負の転移

このように、格助詞側の誤用は主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。一方、述部の誤用は母語の影響も見られる誤用であると言える。

以上のように、本節では、可能構文における「ヲ→Y」「ニ→Y」型誤用（「格助詞の誤用＋述部の誤用」）をパターン化し、ヴォイスに関わる誤用を中心に分析を行った。従来の研究であまり注目されていなかった、可能構文における「格助詞の誤用＋述部の誤用」は、格助詞側と動詞側の連動で起こり、格助詞側では、6.3 節で分析した「格助詞の誤用」と同様の誤用が多い。さらに、述部では可能形式の「過剰」などが起こっている。このような誤用の原因は主に、学習言語（日本語）への不十分な理解にあることが明らかになった。

6.5　可能構文における誤用の分析のまとめ

以上、本章では、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における可能形式（可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」）の誤用（「述部の誤用」）、格助詞「ヲ」、「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）を分析し、以下のことを明らかにした。

Ⅰ.「述部の誤用」:

中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における「述部の誤用」には、「欠如」、「過剰」、「混同」、「その他」という四つのパターンがある。「欠如」、「過剰」、「混同」は可能形式の有無や混同に関わる誤用で、「その他」は可能構文における述部の形そのものが適切ではない誤用である。

まず、誤用例の数から見ると、可能形式の誤用は、「過剰」、「欠如」のパターンで起こりやすい。また、可能構文における可能形式の種類から見ると、可能動詞の誤用が多い。さらに、可能構文の意味分類で見た場合、「状況可能」の意味を表す可能構文の誤用が多い。

さらに、パターン別の誤用の原因などをまとめると、次の〈表 6－32〉のようになる。

〈表 6－32〉可能構文における可能形式の誤用

誤用のパターン		典型的な誤用例	誤用の原因
過剰 （6.2.1節）	可能構文の成立条件を満たしていない場合	●非情物主語を取る構文の例 ●有情物主語の無意志動詞構文の例 ●「実現可能」の過剰使用の例 ●有対自動詞の可能形式の過剰使用の例	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移
	可能構文の成立条件を満たしている場合	●「実現可能」の過剰使用の例 ●特定の文法表現との組み合わせにおける可能形式の過剰使用の例	●学習言語への不十分な理解
	可能構文の成立条件を満たしていない場合と満たしている場合の両方で見られる誤用	●認識のモダリティを表そうとする文脈にける可能形式の過剰使用の例	●母語の負の転移
欠如 （6.2.2節）	学習者の母語で可能形式を使わない場合がある、または、可能形式を使わない場合	●学習者の母語で結果補語が付く例、連用修飾語が付く例、述語動詞が「忘れる」の例	●母語の負の転移
	認識のモダリティに関わる場合	●認識のモダリティを表そうとする文脈において可能形式が欠如している例	●学習言語への不十分な理解
	特定の文法表現と組み合わせる場合	●「よう（に）」との組み合わせにおける誤用	●学習言語への不十分な理解
	その他の誤用	●「状況可能」を表す可能構文の使用欠如の例	●学習言語への不十分な理解
混同 （6.2.3節）	可能と受身を混同している場合	●文脈にいて、それぞれの構文で生じる行為者のニュアンスを理解していない例	●学習言語への不十分な理解
	可能と使役を混同している場合	●動詞の自他を混同している例、それぞれの構文の機能や役割を理解していない例	
	可能と授受を混同している場合	●文脈において、可能構文が適切ではない例	
	可能動詞と助動詞「（ラ）レル」を混同している場合	●「見える」と「見られる」を混同している例	
	可能動詞と可能動詞を混同している場合	●「聞ける」と「聞こえる」を混同している例	
	可能動詞と「ことができる」を混同している場合	●「見える」の使用範囲を理解していない例	
その他 （6.2.4節）	元の動詞の誤り	●動詞の自他を混同している例、動詞の選択ができていない例	●学習言語への不十分な理解
	述部の形態の誤り	●述語動詞の形態を間違えている例	
	品詞の誤り	●形容動詞などで可能構文を作る例	

〈表 6－32〉のように、可能構文における「述部の誤用」（可能動詞・「（ラ）レル」・「ことができる」の誤用）は様々なパターンで起こっており、「過剰」と「欠如」の誤用は、学習言語への不十分な理解か母語の負の転移により生じていると考えられる。それに対して、「混同」と「その他」の誤用は、主に学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

6.1.2.1 節で概観した先行研究において、可能構文における可能形式の誤用に関して、誤用のパターンや原因はある程度明らかにされていたが（〈表 6－1〉参照）、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、可能構文における可能形式の誤用のパターンの再整理を〈表 6－32〉のような形で行った。

誤用の原因を大きく分けると、学習言語（日本語）への不十分な理解と、学習者の母語（中国語）の負の転移となっており、先行研究と一致した結果である。本研究では、さらに可能構文の成立条件を満たしているかどうかに着目しながら、「過剰」の誤用を分析した。また、「過剰」と「欠如」の誤用では、今までの研究であまり提示されていない母語の負の転移による誤用もパターンごとに詳しく分析した。「混同」、「その他」の誤用に関しても、原因まで詳しく分析した。

以上のように、本研究では、従来の研究で詳しく論じられてこなかった、学習者の日本語の可能構文の学習困難点と母語の負の転移のパターンのより詳しい分析を行ったと言える。

Ⅱ．「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」：

中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）のうち、「ヲ」の誤用では、ヴォイスに関わる誤用の割合が「ニ」より高い（6.3 節〈表 6－23〉参照）。

可能構文におけるヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用の原因などをまとめると、次の〈表 6－33〉のようになる。

〈表 6－33〉可能構文におけるヴォイスに関わる格助詞「ヲ」「ニ」の誤用

<table>
<tr><th>ヲ／ニ</th><th colspan="2">誤用のパターン</th><th>典型的な誤用例</th><th>誤用の原因</th></tr>
<tr><td rowspan="2">「ヲ」の誤用</td><td>「ヲ→Y」型誤用
（6.3.1 節）</td><td rowspan="2">「ヲ→ガ」</td><td>●主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文の例、述部が「できる」の例、述部が語彙的な可能動詞の例</td><td rowspan="2">●学習言語への不十分な理解（主語が不特定な場合など、総称的で不特定な事柄を叙述する可能構文の場合、ヲ格からガ格への交替の必要性に対する不十分な理解など）</td></tr>
<tr><td>「ヲ→Y」型誤用＋述部の誤用
（6.4.1 節）</td><td>●述部が語彙的な可能動詞、あるいは、主語が不特定な場合など、一般的な事柄を叙述する可能構文における格助詞と述部の両方を間違えている例</td></tr>
<tr><td rowspan="2">「ニ」の誤用</td><td>「ニ→Y」型誤用
（6.3.2 節）</td><td>「ニ→〇」、「ニ→ノ」、「ニ→ガ」</td><td>●自動詞の可能構文におけるニ格への過剰な交替の例、「ニ，ガ」構文と「ガ，ヲ」構文を混同している例</td><td rowspan="2">●学習言語への不十分な理解（一般的には、自動詞の可能構文の主語はニ格を取らないことへの不十分な理解など）</td></tr>
<tr><td>「ニ→Y」型誤用＋述部の誤用
（6.4.2 節）</td><td>「ニ→ハ」</td><td>●自動詞の可能構文におけるニ格への過剰な交替、かつ述部も誤っている例</td></tr>
</table>

〈表 6－33〉のように、学習者は、可能構文において、格パターンだけではなく述部も誤っている複合的な誤用も生じさせている。このような「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」では、述部の誤用がある例は母語の影響が関わるものもあるが、格助詞側の誤用は主に、学習言語への不十分な理解により生じていると考えられる。

6.1.2.2 節で概観した先行研究において、可能構文における格助詞の誤用についての議論は非常に少なく、「ヲ→ガ」パターンの誤用しか提示されていない（〈表 6－2〉参照）。また、可能構文における誤用を可能形式の誤用と格助詞の誤用の両面から誤用を捉えていないため、「格助詞の誤用」と「格助詞の誤用＋述部の誤用」に分けて議論されていなかった。

これに対し、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用を中心に、それらをパターン化し分析を行った。また、誤用の原因についてもより詳しい分析を行うことで、中国語を母語とする日本語学習者は、学習言語への不十分な理解によって可能構文の格パターンをよく間違えていることが明らかになった。これは、学習者の日本語の可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の未習得の部分をより特定することができたものと言える。

以上のように、本章では、中国語を母語とする日本語学習者の可能構文における可能形式（可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」）の誤用、格助詞「ヲ」「ニ」の誤用のデータから、誤用の全体像、パターン、およびその原因を明らかにした。

ここで明らかにしたことは、学習者は可能構文のどのような規則を習得していないか、どのような文脈において可能形式を過剰使用するか、あるいは使用しないかという傾向を示すものであり、また、どのような可能構文において学習者の母語を意識した指導が必要であるか、どのような可能構文のどのような格の交替が学習上困難点となりうるかといった、誤用を防ぐ解決策に示唆を与えるものであると考えられる。

第７章　ヴォイス諸表現における誤用の分析

本章では、ここまでの章で行ってきた受身文（第４章）、使役文（第５章）、可能構文（第６章）のそれぞれの構文における誤用の分析を踏まえて、これらの構文における誤用のパターン、誤用の原因などの共通性と個別性を検討する（7.1 節）。また、これらの分析を通じて、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用への対応に貢献できる点を示す（7.2 節）。

7.1　誤用の共通性と個別性

まず、次の〈表 7－1〉（第３章の〈表 3－5〉を再掲）、誤用を量的にみた場合、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のいずれにおいても、受身文における誤用例が一番多く、その次が可能構文、使役文の順になっている。

〈表 7－1〉誤用の全体像

	Ⅰ.述部の誤用	Ⅱ.格助詞の誤用（「ヲ→Y」型、「ニ→Y」型）	Ⅲ.格助詞の誤用＋述部の誤用	合計
受身文	816	204	162	1,182
使役文	209	45	38	292
可能構文	686	113	71	870
合計	1,711	362	271	2,344

このように、受身文、使役文、可能構文における誤用のパターン、誤用の原因は、すべての構文に見られる共通性、それぞれの構文に独自の個別性を持っている。

本節では、「述部の誤用」の共通性と個別性（7.1.1 節）、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の共通性と個別性（7.1.2 節）の順に、検討していく。

7.1.1 「述部の誤用」の共通性と個別性

本節では、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」の共通性と個別性を探っていく。

7.1.1.1 誤用のパターンにおける共通性と個別性

まず、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」のパターンは次の〈表 7－2〉のようになる。

〈表 7－2〉受身・使役・可能における「述部の誤用」のパターン

文型＼誤用のパターン	欠如	過剰	混同	その他
受身文	○	○	○	○
使役文	○	○	○	×
可能構文	○	○	○	○

〈表 7－2〉のように、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」のパターンの共通性としては、いずれも「欠如」、「過剰」、「混同」という 3 つのパターンで誤用が起こるという点が指摘できる。つまり、ヴォイス形式の有無や混同に関わる誤用が、どの文型でも観察されている。

また、誤用の数からみると、次の〈表 7－3〉のように、どのケースでも「欠如」、「過剰」のパターンが多い。すなわち、ヴォイス形式の有無に関わる誤用の割合が比較的に高い。

〈表 7－3〉受身・使役・可能における「述部の誤用」のパターン別の例数

文型	誤用のパターン	誤用例数	
受身文	欠如	379（46.45%）	816（100%）
	過剰	381（46.69%）	
	混同	48（5.88%）	
	その他	8（0.98%）	
使役文	欠如	96（45.93%）	209（100%）
	過剰	79（37.80%）	
	混同	34（16.27%）	
可能構文	欠如	269（39.21%）	686（100%）
	過剰	274（39.94%）	
	混同	66（9.62%）	
	その他	77（11.22%）	

例えば、自動詞・他動詞の受身文や可能構文における「過剰」、「欠如」（4.2.1 節、4.2.2 節、6.2.1 節、6.2.2 節）、自動詞・他動詞の使役文における「欠如」、「過剰」（5.2.1 節、5.2.2 節）が挙げられる。こういった学習者の誤用によって生じる形式は、「言われる」、「重視させる」、「読める」のような日本語のヴォイスに存在する形式と、「感動される」、「～は作った」、「～を充実する」、「困れる」、「容易に覚える」のような日本語のヴォイスに存在

しない形式に分けられる。

このような誤用を見るかぎり、学習者はヴォイスの諸表現の形と意味・機能のむすびつきをうまく習得していない疑いがあり、どういう時にヴォイス表現を使用すべきか、どういう時に使用してはいけないかということへの理解が不十分であると考えられる。

さらに、「混同」のパターンにおいて、次の〈表 7－4〉で示しているヴォイスの間の混同が共通して見られる。

〈表 7－4〉受身・使役・可能における「混同」の誤用

「混同」のパターン		典型例
受身文と使役文の混同	「(ラ) レル」→「(サ) セル」	「～を（両立される→両立させる)」
	「(サ) セル」→「(ラ) レル」	「～に（誤解させる→誤解される)」
受身文・使役文と可能構文（可能動詞・「(ラ) レル」・「ことができる」）の間の混同	「(ラ) レル」→可能構文	「～が（読み取られた→読み取れる」
	可能構文→「(ラ) レル」	「～が（解消できる→解消される)」
	「(サ) セル」→可能構文	「～は、（完成させました→完成できました)」
	可能構文→「(サ) セル」	「～を（充実できる→充実させる)」
受身文・使役文・可能構文と授受文（「テ｛アゲル／クレル／モラウ」｝」）の混同	「(ラ) レル」→授受文、 授受文→「(ラ) レル」	「～は～に（教えられた→教えてくれた)」、 「～は～に（説明してくれた→説明された)」
	授受文→「(サ) セル」	「～に～を（譲れてもらう→譲らせてしまう)」
	可能構文→授受文	「～に～を（贈れる→贈ってくれた)」
受身文・使役文と使役受身文の混同	「(ラ) レル」→「(サ) セラレル」、 「(サ) セラレル」→「(ラ) レル」	「すごく（感動されています→感動させられています)」、 「～によって（書かされた→書かれた)」
	「(サ) セル」→「(サ) セラレル」	「～を（飲ませた→飲まされた)」

このように、受身文と使役文、受身文・使役文と可能構文、受身文・使役文・可能構文と授受文、あるいは、受身文・使役文と使役受身文の間で混同が見られる。具体的には、使役文を使うべきところで受身文を使っている場合などのように、ヴォイスの諸表現を正しく使えていない。

一方、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」のパターンの個別性としては、「その他」というパターンは受身文と可能構文にはあるが、使役文にはないという点が挙げられる。特に、可能構文において、「その他」の誤用が多数見られる（〈表 6－5〉参照)。

この「その他」は述部の形そのものが適切ではない誤用であり、ヴォイス表現は作れて

いるが、動詞の選択を間違えている「元の動詞の誤り」と、述部で使われている元の動詞に問題はないが、ヴォイス形式の形態を間違えている「述部の形態の誤り」、動詞ではない語でヴォイス形式を作っている「品詞の誤り」のような誤用に分けられる。受身文と使役文の動詞の形態的なタイプには、助動詞「(ラ) レル」、「(サ) セル」しかないのに対して、日本語の可能構文における可能形式には、可能動詞、助動詞「(ラ) レル」、「動詞連体形＋ことができる」のように、さまざまなタイプがあるからこそ、このような述部の形そのものが適切ではない誤用が多発するのだと考えられる。さらに、可能構文における「述部の誤用」のうち、「混同」パターンで可能形式の間の混同が見られるのも、これが原因だと考えられる。

7.1.1.2　意味から見た誤用例の分布における共通性と個別性

本研究では、ヴォイスの諸表現における誤用の起こり方を検討するために、受身文、使役文、可能構文の分類をそれぞれ行った。またこの意味分類に従い、それぞれの文型における「述部の誤用」の分析を進めてきた。

その結果、ヴォイスの諸表現の表している意味から見た誤用例の分布における共通性としては、受身文、使役文、可能構文のいずれにおいても、誤用の割合が高い特定の意味用法があることが挙げられる。

次の〈表 7－5〉に、受身・使役・可能それぞれの誤用の割合が一番高い意味用法を示す。

〈表 7－5〉受身・使役・可能の意味から見た誤用例の分布

文型	意味分類	誤用例数
受身文	状態・属性描写	816 例中 279 例、34.19%
使役文	因果関係	209 例中 170 例、81.34%
可能構文	状況可能	686 例中 654 例、95.34%

〈表 7－5〉のように、受身文における「述部の誤用」では、「状態・属性描写」を表す非情物主語の受身文の割合が高い。使役文における「述部の誤用」では、「因果関係」を表す使役文の割合が高い。また、「状況可能」を表す可能構文の割合が高い（〈表 4－8〉、〈表 5－8〉、〈表 6－7〉参照)。つまり、こういった意味のヴォイス表現の「過剰」、「欠如」などの誤用が多発していることになる。

従来の日本語教育、特に教科書では、「不利益・被害」を表す受身文や、「強制」を表す使役文、「能力可能」を表す可能構文のような意味用法が典型例として取り上げられている。しかし、学習者は実際にはこのような典型的な意味用法ではなく、〈表 7－5〉で挙げている非典型的な意味用法をよく間違えており、うまく習得できていないと考えられる。

7.1.1.3　誤用の原因における共通性と個別性

本研究では、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」をそれぞれパターン別に分析した。誤用の原因の共通性を見ると、受身文、使役文、可能構文における誤用は、「過剰」「欠如」「混同」「その他」のいずれのパターンにおいても、①学習言語（日本語）への理解の不十分さ、②母語（中国語）の負の転移により起こっていることが分かる。

まず、①では、特に、ヴォイスの諸表現と自他動詞構文の混用や自他動詞の混同により生じる誤用が多く見られる。具体的には次の〈表 7－6〉のようになる（該当する項目がな

い場合は、「――」で示している)。

〈表 7－6〉受身・使役・可能と自他動詞の混同

自他 文型	自動詞	他動詞	自他動詞の混同
受身文	他動詞の受身文／自動詞文	――	あり
使役文	自動詞の使役文／自動詞文	他動詞の使役文／他動詞文	あり
可能構文	自動詞の可能構文／自動詞文	――	あり

〈表 7－6〉のように、受身文においては、他動詞の直接受身文と自動詞文の選択誤りによる誤用と、自他動詞の混同による誤用が見られる。また、使役文においては、自他動詞の使役文と自他動詞構文の選択誤りによる誤用と、再帰性を表す使役文における自他動詞の混同による誤用が見られる。さらに、可能構文においては、可能構文と自動詞文との選択誤りによる誤用が見られる。こういった点が学習者の習得の難点だと考えられる。

ヴォイスの諸表現と自他動詞構文の混用の原因としては、両者の文法的機能の近さが考えられる。

まず、他動性の増減をするためには、受身文、使役文のようなヴォイスの表現を使う構文的手段と、自動詞／他動詞のような語彙的手段がある。例えば、特定する必要のない動作主を背景化する他動詞の直接受身文と自動詞文は、項が 1 つしかないという点で形が類似している。また、使役主体が加わる自動詞・他動詞の使役文と他動詞文とは、項が 2 つあるという点で形が類似している。このため、学習者は項の増減と他動性の増減に関わるヴォイス表現と自他動詞構文のどちらを使うべきかで混乱しているのだと考えられる。

また、可能の意味を表すためには、可能の意味を含む自動詞という語彙的手段も存在するということが理解できていないため、そのような自動詞に可能形式を付加してしまう誤用が起こる。

「混同」も学習言語への不十分な理解により生じる誤用である。具体的には、次の〈表 7－7〉のようになる。

〈表 7－7〉受身・使役・可能における「混同」の誤用の原因

「混同」のパターン	誤用の原因
受身文と使役文の混同	助動詞「(ラ) レル」と「(サ) セル」のそれぞれの機能や役割を理解していない
受身文・使役文と可能構文の間の混同	文脈において受身文、使役文、可能構文のどちらかが不適切であることを理解していない
受身文・使役文・可能構文と授受文の混同	視点の切り替え、使役文と授受文のそれぞれの焦点を理解していない
受身文・使役文と使役受身文の混同	受身文と使役受身文との構文間の区別、あるいは、使役受身文の意味特徴を十分に理解していない

このように、学習者はそれぞれのヴォイス表現の機能、使い方や、構文間の区別をうまく習得できていないため、「混同」の誤用を起こしていると考えられる。

さらに、「その他」も学習言語への不十分な理解により生じる誤用である。このような誤用は受身文と可能構文で起こり、主に、動詞の自他の混同、述語動詞の形態の不十分な習得などにより生じていると考えられる。

次に、②の母語の負の転移では、中国語と日本語の異なる構文特徴が原因で生じる誤用が多数見られる。受身文（4.2 節）、使役文（5.2 節）、可能構文（6.2 節）の「述部の誤用」の分析をまとめると、主な対照関係は次の〈表 7－8〉のようになる。

〈表 7－8〉ヴォイス諸表現における中国語と日本語の異なる構文特徴

言語 文型	中国語	日本語
受身文	日本語の自動詞文に受身文が対応する場合がある。	（自動詞文）
	（他動詞文）	同じ事柄を二つの異なった視点から述べる際、中国語の他動詞文に他動詞の受身文が対応する場合がある。
使役文	（他動詞文）	中国語と同形同義・類形同義の関係にある漢語サ変動詞を使うとき、中国語の他動詞文に使役文が対応する場合がある。
	心理系の動詞の場合、日本語の自動詞文に使役文が対応する場合がある。	（自動詞文）
可能構文	日本語の可能の意味がすでに含まれている自動詞文に可能構文が対応する場合がある。	（自動詞文）
	助動詞“会”は可能と認識のモダリティの両方を表すことができる。	可能形式は可能を表示する働きしか持たない。
	（自他動詞文）	中国語で結果補語、あるいは連用修飾語が付く場合、述語動詞が「忘れる」の場合、中国語の自他動詞文に可能構文が対応する場合がある。

〈表 7－8〉のように、例えば、学習者の母語である中国語では他動詞の受身文を使うが、日本語においては自動詞文を使うという場合のような、中国語では認められるが日本語では認められない、あるいは、日本語では認められるが中国語では認められないような、中国語のヴォイス表現と日本語のヴォイス表現のずれ、または相違点により生じる誤用が、どのヴォイスの構文にも見られる。なお、中国語と日本語のヴォイス表現の相違点には、〈表 7－8〉で示していない、すなわち本研究で扱ったデータには見られなかった現象もあると思われるが、その検討は今後の課題となる。

一方、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」のパターンのうち、①に属す

る誤用で、それぞれの構文に特有の現象が見られる。

例えば、同じく「過剰」の誤用でも、受身文における「(ラ) レル」の「過剰」では、項と項の関係がうまく把握できないことや直接受身文において格の交替が必須であることが理解できていないことにより生じる、文のタイプと動詞の形態的なタイプとがねじれている誤用が多数見られる。受身文は、項と項の交替、格の交替が起きる文型であるため、このような誤用が受身文で起こりやすいと考えられる。それに対して、可能構文における可能形式の「過剰」の誤用は、日本語の可能構文の成立条件への不十分な理解が大きく関わっている。これは、受身文や使役文にはない可能構文の固有のルールであるため、特徴的な現象だと言える。

また、同じく「欠如」の誤用でも、可能構文では、使役文と受身文と異なり、認識のモダリティを表そうとする文脈における可能形式の欠如が特徴的だと考えられる。このような誤用が可能構文でしか起こらない原因は、可能形式と、可能性・必然性の判断を表すモダリティ形式との関連にあると考えられる。さらに、語彙的な可能動詞「見える」、「聞こえる」の誤用を扱った可能構文においては、「混同」の誤用として、「見える／見られる」、「聞こえる／聞ける」のそれぞれの違いや使い方を習得していないことにより生じた可能形式間の混同も見られる。

7.1.2 「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の共通性と個別性

本節では、受身文、使役文、可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用（「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」）の共通性と個別性を探っていく。

7.1.2.1 誤用のパターンにおける共通性と個別性

まず、受身文、使役文、可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のパターンは次の〈表 7－9〉のようになる。

〈表 7－9〉受身・使役・可能における「格助詞の誤用」「格助詞の誤用＋述部の誤用」のパターン

誤用のパターン／文型	「格助詞の誤用」			「格助詞の誤用＋述部の誤用」			
	ア a	ア b	ア c	イ a		イ b	イ c
				イ a1	イ a2		
受身文	○	○	○	○	○	○	○
使役文	○	○	○	○	○	○	○
可能構文	○	○	○	○	○	○	○

〈表 7－9〉のように、受身文、使役文、可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のパターンの共通性としては、いずれも真にヴォイスに関わる格の交替を原因とした、ヴォイス関連の誤用（ア a、イ a1）と、漢語サ変動詞や和語動詞における格助詞の過剰使用、あるいは意味格に関わる誤用、訂正に伴う誤用のような、ヴォイス

非関連の誤用（ア b、ア c、イ a2、イ b、イ c）が起こるという点が指摘できる（詳細は〈表 4－27〉、〈表 5－19〉、〈表 6－22〉参照）。

また、誤用の数からみると、次の〈表 7－10〉（第 3 章の〈表 3－5〉を再掲）のように、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のどちらにおいても、受身文における誤用例数が一番多く、その次が可能構文、使役文の順になっている。

〈表 7－10〉誤用の全体像

	Ⅰ. 述部の誤用	Ⅱ. 格助詞の誤用（「ヲ→Y」型、「ニ→Y」型）	Ⅲ. 格助詞の誤用＋述部の誤用	合計
受身文	816	204	162	1,182
使役文	209	45	38	292
可能構文	686	113	71	870
合計	1,711	362	271	2,344

一方、ヴォイスに関わる誤用の割合は、次の〈表 7－11〉のようになる。

〈表 7－11〉受身・使役・可能における「ヲ」「ニ」の誤用の例数

文型	誤用の種類	「ヲ→Y」型	「ニ→Y」型	計
受身文	総数	223 例	143 例	366 例
	ヴォイスに関わる誤用	105 例（47.09%）	33 例（23.08%）	138 例（37.70%）
使役文	総数	32 例	51 例	83 例
	ヴォイスに関わる誤用	13 例（40.63%）	30 例（58.82%）	43 例（51.81%）
可能構文	総数	118 例	66 例	184 例
	ヴォイスに関わる誤用	61 例（51.69%）	9 例（13.64%）	70 例（38.04%）

このように、ヴォイスに関わる誤用の割合は使役文が一番高く、その次が可能構文、受身文の順になっている。さらに、受身文と可能構文においては、格助詞「ヲ」の誤用が「ニ」より多く、かつ、ヴォイスに関わる誤用「ヲ」の誤用の割合は「ニ」より高い。

一方、受身文、使役文、可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のパターンの個別性としては、ヴォイスに関わる誤用のうち、それぞれ、正用の助詞別に様々なパターンがあることが指摘できる。具体的には、次の〈表 7－12〉のようになる。

〈表 7－12〉正用の表現別の誤用のパターン

文型	誤用のパターン	
	「ヲ」の誤用	「ニ」の誤用
受身文	「ヲ→ガ」	「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」
使役文	「ヲ→ニ」	「ニ→ヲ」
可能構文	「ヲ→ガ」	「ニ→〇」、「ニ→ノ」、「ニ→ガ」、「ニ→ハ」

〈表 7－12〉のように、受身文は、「ガ，ニ」構文、「ガ，ニヨッテ」構文、「ガ，カラ」構文、「ガ，デ」構文、「ガ，ニ，ヲ」構文のような文型をとるため、学習者の使用例では、受身文でよく現れる「ガ」、「ニ」、「ヲ」、「ニヨッテ」、「カラ」、「デ」といった格の誤用が起こる。また、使役文は、「ガ，ヲ」構文、「ガ，ニ」という二種類の構文をとるため、学習者の使用例では、使役文でよく現れる「ヲ」、「ニ」の誤用が起こる。さらに、可能構文は、「ニ，ガ」構文、「ガ，ヲ」構文、「ガ，ガ」構文のような文型をとるため、可能構文でよく現れる「ガ」、「ニ」、「ヲ」といった格の誤用が起こる。

このように、本研究では、学習者の日本語の受身文、使役文、可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の未習得の部分を特定することができた。また、このような誤用は、学習者がそれぞれのヴォイス表現における格の交替をうまく習得できていないことを反映していると考えられる。

7.1.2.2　誤用の原因における共通性と個別性

本研究では、受身文、使役文、可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の各パターンにおいて、ヴォイスに関わる誤用を、その原因まで分析した。誤用の原因の共通性を見ると、述部の誤用は母語の影響に関わる例もあるが、受身文、使役文、可能構文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用は、学習言語（日本語）への理解の不十分さにより起こっていることが分かる。

一方、学習者は学習言語への不十分な理解によって、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」を起こしているが、受身文、使役文、可能構文のそれぞれの構文に特有な原因が見られる。例えば、同じくヴォイスによる誤用（〈表 7－9〉の「ア a」、「イ a1」）でも、受身文においては、直接受身文で格の交替が必須であることへの不十分な理解や、直接受身文における、ニ格以外による動作主の表し方を学習者が習得しにくいことにより生じている誤用が多数見られる。それに対して、使役文においては、自動詞／他動詞文における動作主体マーカーのルールへの不十分な理解により生じている誤用が見られる。また、可能構文においては、ヲ格よりガ格への交替が求められる場合ことへの不十分な理解やニ格主語の過剰生成などにより生じている誤用が見られる。

このように、学習者は、それぞれのヴォイス表現における格の交替の規則をうまく習得できていないため、さまざまな格の誤用を起こしていると考えられる。

7.2　誤用に対する対応（日本語教育への示唆）

以上でまとめてきた受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の共通性と個別性の分析を通じて、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用への対応に貢献できる点を考える。本研究が日本語教育へ示唆する点として、教育上の工夫が必要な点をまとめると、次のようになる。

①日本語教育であまり詳しく扱われていない意味用法への注目
②ヴォイス表現と自他動詞構文に関する指導
③ヴォイス表現の間の混同を防ぐための指導
④日中両言語におけるヴォイス表現の相違点に関する指導
⑤ヴォイス表現における格と述部の形態をはっきり示した指導
⑥ヴォイス表現のそれぞれのルールの指導

以下では、それぞれについて検討していく。

①日本語教育であまり詳しく扱われていない意味用法への注目

まず、①に関しては、本研究で明らかになった「述部の誤用」の割合が高い意味用法の受身文、使役文や可能構文への注目が必要である。

7.1.1.2 節の〈表 7－5〉で挙げたような意味を表す受身文、使役文や可能構文、例えば、「日本語は漢字と仮名で構成されている」のような「状態・属性描写」を表す受身文、「A 社は来年度までにこの橋を完成させる予定である」のような「因果関係」を表す使役文、「今日は多忙で行けない」のような「状況可能」を表す可能構文は、従来の教科書では説明不足の場合が多いため、日本語教師が教科書だけを頼ってはいけない。教科書でカバーできないような用法は、学習者の実例のインプットを増やすために、無料公開のコーパスやオンライン用例の検索によって補足資料を作る必要がある。一方、本研究で明らかになったように、「不利益・被害」を表す受身文や、「強制」を表す使役文、「能力可能」を表す可能構文といったような典型的な意味用法の誤用例数は比較的に少ない。したがって、このような典型的な意味用法の導入だけではなく、学習者の誤用の多さを考慮した教科書の改善も望ましい。例えば、学習者の誤用が多く見られる意味用法に属する例文の教材での使用頻度を高めたり、文法項目として明確的に分かりやすく紹介したりする方法が考えられる。

②ヴォイス表現と自他動詞構文に関する指導

次に、②に関しては、学習者の「述部の誤用」では、ヴォイス表現と自他動詞構文の混用や自他動詞の混同により生じる誤用が多く見られるため、ヴォイス表現（受身文、使役文、可能構文）と自他動詞構文に関する指導への工夫が必要となる。つまり、どの現象とどの現象を関連付けて教えるのかを考える必要がある。

例えば、他動詞と他動詞が関係するヴォイス表現に関して、まず、１）「書く」という他動詞からなる他動詞文を学習者に教える。その次に、２）項の数（一般的には２項、省略あるいは背景化されている場合もある）、項と項の間の関係（事態の参与者間の関係）、視点（どの参与者の視点から事態を叙述する）、動詞の意味タイプなどを踏まえて、他動詞の

使役文（「書かせる」）、他動詞の受身文（「書かれる」）、他動詞の可能構文（「書ける／書くことができる」）を学習者に教える。さらに、３）それぞれのヴォイス表現の異同、動詞の自他の弁別、他動詞の受身文と自動詞文の異同、他動詞文と自動詞の使役文の異同を学習者に教えていく、といった方法が考えられる。

③ヴォイス表現の間の混同を防ぐための指導

③に関して、ヴォイス表現の間の混同を防ぐためには、それぞれのヴォイス表現の異同についての指導への工夫も必要である。

例えば、受身文と使役文のそれぞれの文型の指導をするだけで終わるのではなく、「私は商学院で会社の人に（面接させました／面接されました）」のような文脈では、助動詞「（ラ）レル」と「（サ）セル」のどちらを使うべきか、それぞれの機能や役割の区別は何かなどについても普段の授業で学習者に教える必要がある。宿題でこのような選択問題を設け、学習者に練習させたほうが良いと考えられる。

④日中両言語におけるヴォイス表現の相違点に関する指導

④に関しては、学習者の母語（中国語）と目標言語（日本語）におけるヴォイス表現（受身文、使役文、可能構文）の相違点に関する指導への工夫が必要となる。

第 4 章～第 6 章の分析からも分かるように、学習者は目標言語である日本語を産出する際、〈表 7－8〉でまとめたような日中両言語の異なる構文特徴の影響を受け、母語の規則をそのまま利用する傾向があり、母語の負の転移による誤用を多数引き起こす。

それゆえ、ヴォイスの表現において、教師は、日中両言語の対訳にとどまるだけではなく、中国語と日本語の異なる構文特徴を踏まえながら、中国語のどの規則は学習に利用してもよく、どの規則は利用できないといった指導をしたほうが良い。例えば、中国語で成立する「～を充実する」のような他動詞文の構文特徴、それに対応する日本語の自動詞の使役文の構文特徴、両言語の相違点などをきちんと学習者に説明し、その上、このような母語の規則は日本語の産出では利用できないことを指導することが望ましい。

また、本研究では、動詞の意味タイプに注目して、母語の負の転移が起こりやすい誤用の分析を行ったところがある（4.2.1 節、4.2.2 節、5.2.1.1 節、5.2.2.2 節、6.2.2.1 節）。例えば、どのようなタイプの動詞で受身の「（ラ）レル」が欠如を起こしやすいかが分かれば、学習者が母語の影響を受けやすい動詞を判断材料とした指導への工夫も可能になる。

⑤ヴォイス表現における格と述部の形態をはっきり示した指導

⑤に関しては、学習者は、日本語のヴォイス表現は述語と格助詞が連動する現象であること、つまり、格と動詞の形態タイプの統一が必要であるということへの理解が不十分だと考えられるため、受身文、使役文、可能構文のそれぞれにおける格パターンと動詞側の形態をはっきり示した指導が必要である。

例えば、まず、１）「友達が弟をたたいた」のような能動文の格パターン（ガ，ヲ）と述部の形態（他動詞の能動形）を学習者に教える。次に、２）被動作主が動作主の行為によって直接的に心理的／物理的影響を受けることを表している場合に能動文を受身文にすることが求められるため、能動文を受身文にする必要があり、これに伴う、格の交替（「ガ，ヲ」パターンから「ガ，ニ」パターンへ交替）、述部の形態の変形（「たたく」に「（ラ）レ

ル」を付加し、「たたかれる」になる）を学習者に教える。さらに、３）受身文における格パターンの種類を学習者に教えていく、といった方法が考えられる。

⑥ヴォイス表現のそれぞれのルールの指導

さらに、⑥に関しては、学習者の「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」では、日本語のヴォイス表現（受身文、使役文、可能構文）のそれぞれのルールをうまく理解できていないことにより生じている誤用が広く見られるため、ヴォイス表現のそれぞれのルールを日々の指導で繰り返す必要があると考えられる。

例えば、主語の有生性と動詞の意志性に関わる可能構文の成立条件、「見える／見られる」のような異なる可能形式の使い方、受身文における被動作主と動作主の格、使役文における動作主体（被使役者）の格、可能構文における主語、対象の格のような、学習者の習得ではまだ定着していない、受身文、使役文、可能構文のそれぞれの規則を授業中の指導、宿題などで繰り返して訓練する必要がある。

以上のように、日本語教育への示唆として、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用へ対応するためには、本研究で明らかになった学習者の誤用の実態を踏まえたうえで、それぞれの誤用に対応する、日本語教師の指導法への工夫や教科書の改善などの方法が考えられる。特に、学習者の誤用を考慮した日本語教師の指導法の確立が重要だと考えられる。

第８章　結論と今後の課題

本章では、本研究の結論と今後の課題を示す。
まず、ここまでの分析を踏まえ、本研究の結論を提示する（8.1 節）。次に、今後の課題について述べる（8.2 節）。

8.1　本研究の結論

本研究では、于康(2015)『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5 を用いて、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの諸表現（受身文、使役文、可能構文）における動詞の形態的なタイプの誤用と、格助詞の「ヲ→Ｙ」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ヲ」を使用したケース）および「ニ→Ｙ」型誤用（他の助詞を使うべきところで「ニ」を使用したケース）を調査・分析し、以下のことを明らかにした。

①誤用の分類
②誤用例数の分布
③誤用のパターンおよび原因
④日本語教育への示唆

以下では、それぞれについてまとめていく。

①誤用の分類

本研究では、ヴォイス表現における動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞の誤用の両面から誤用を捉え、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における誤用はいずれも、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の３種類に分類できることを示した。

②誤用例数の分布

中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における誤用の全体像を誤用例数とともに示すと、次の〈表８－1〉のようになる。

〈表 8－1〉受身文、使役文、可能構文における誤用例数の分布

	Ⅰ.述部の誤用	Ⅱ.格助詞の誤用		Ⅲ.格助詞の誤用＋述部の誤用		合計
		「ヲ」	「ニ」	「ヲ」	「ニ」	
受身文	816	113（96）[46]	91（23）	110（9）	52（10）	1,182
使役文	209	13（7）	32（27）	19（6）	19（3）	292
可能構文	686	66（46）	47（6）	52（15）	19（3）	870
合計	1,711	362（205）		271（46）		2,344

〈表 8－1〉のように、誤用の数からみると、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のいずれにおいても受身文における誤用例数が一番多く、その次が可能構文、使役文の順になっている。一方、「述部の誤用」、「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の三者のうち、どのヴォイス表現でも「述部の誤用」が一番多く、その次が「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」の順になっている。

また、格助詞「ヲ」「ニ」の別を見ると、受身文、可能構文における格助詞「ヲ」の誤用（それぞれ 223 例、118 例）は「ニ」の誤用（143 例、66 例）より多く、ヴォイスに関わる「ヲ」の誤用（223 例中 105 例、47.09％；118 例中 61 例、51.69％）の割合も「ニ」の誤用（143 例中 33 例、23.08％；66 例中 9 例、38.04％）より高い。一方、使役文においては、格助詞「ニ」の誤用およびヴォイスに関わる「ニ」の誤用（51 例中 30 例、58.82％）は「ヲ」の誤用（32 例中 13 例、40.63％）より多い。

さらに、格助詞「ヲ」「ニ」を合わせた誤用例数を見ると、使役文における格助詞「ヲ」「ニ」の誤用例数が一番少ないが、使役文におけるヴォイスに関わる「ヲ」「ニ」の誤用の割合（83 例中 43 例、51.81％）が一番高く、その次が可能構文（184 例中 70 例、38.04％）、受身文（366 例中 138 例、37.70％）の順になっている。

③誤用のパターンおよび原因

中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における誤用のパターンおよび原因をまとめて示すと、それぞれ次の〈表 8－2〉、〈表 8－3〉、〈表 8－4〉のようになる。

[46] 括弧内は、ヴォイスに関わる誤用の例数を示す。

〈表 8－2〉受身文における誤用

誤用の分類	誤用のパターン		誤用の原因
述部の誤用	過剰 （4.2.1 節）	「（ラ）レル」を他動詞文に過剰使用している場合	●学習言語への不十分な理解
		「（ラ）レル」を自動詞文に過剰使用している場合	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移
	欠如 （4.2.2 節）	「（ラ）レル」の「欠如」で他動詞文になっている場合	●母語の負の転移 ●学習言語への不十分な理解
		「（ラ）レル」の「欠如」で自動詞文になっている場合	●学習言語への不十分な理解
	混同 （4.2.3 節）	受身と使役を混同している場合	●学習言語への不十分な理解
		受身と可能を混同している場合	
		受身と授受を混同している場合	
		受身と使役受身を混同している場合	
	その他 （4.2.4 節）	元の動詞の誤り	●学習言語への不十分な理解
		述部の形態の誤り	
		品詞の誤り	
格助詞の誤用	ヴォイスによる誤用 （4.3 節）	「ヲ→ガ」	●学習言語への不十分な理解
		「ニ→ニヨッテ」、「ニ→デ」、「ニ→カラ」	
格助詞の誤用＋述部の誤用	ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用 （4.4 節）	「ヲ→ガ」＋述部の誤用	●学習言語への不十分な理解
		「ニ→ニヨッテ／カラ／ヲ」＋述部の誤用	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移

〈表 8−3〉使役文における誤用

誤用の分類	誤用のパターン		誤用の原因
述部の誤用	欠如 （5.2.1 節）	漢語サ変動詞の誤用	●母語の負の転移
		再帰性を表す使役文の誤用	●学習言語への不十分な理解
		その他の誤用	●学習言語への不十分な理解
	過剰 （5.2.2 節）	事態把握に応じた構文選択の誤用	●学習言語への不十分な理解
		心理系の動詞の誤用	●母語の負の転移
		再帰性を表す使役文の誤用	●学習言語への不十分な理解
		その他の誤用	●学習言語への不十分な理解
	混同 （5.2.3 節）	使役と受身を混同している場合	●学習言語への不十分な理解
		使役と可能を混同している場合	
		使役と授受を混同している場合	
		使役と使役受身を混同している場合	
格助詞の誤用	ヴォイスによる誤用 （5.3 節）	「ヲ→ニ」	●学習言語への不十分な理解
		「ニ→ヲ」	
格助詞の誤用 ＋ 述部の誤用	ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用（5.4 節）	「ヲ→ニ」＋述部の誤用	●学習言語への不十分な理解
		「ニ→ヲ」＋述部の誤用	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移

〈表 8－4〉可能構文における誤用

誤用の分類	誤用のパターン		誤用の原因
述部の誤用	過剰 （6.2.1 節）	可能構文の成立条件を満たしていない場合	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移
		可能構文の成立条件を満たしている場合	●学習言語への不十分な理解
		可能構文の成立条件に関わらず両方で見られる誤用	●母語の負の転移
	欠如 （6.2.2 節）	学習者の母語で可能形式を使わない場合がある、または、可能形式を使わない場合	●母語の負の転移
		認識のモダリティに関わる場合	●学習言語への不十分な理解
		特定の文法表現と組み合わせる場合	●学習言語への不十分な理解
		その他の誤用	●学習言語への不十分な理解
	混同 （6.2.3 節）	可能と受身を混同している場合	●学習言語への不十分な理解
		可能と使役を混同している場合	
		可能と授受を混同している場合	
		可能動詞と助動詞を混同している場合	
		可能動詞間で混同している場合	
		可能動詞と「ことができる」を混同している場合	
	その他 （6.2.4 節）	元の動詞の誤り	●学習言語への不十分な理解
		述部の形態の誤り	
		品詞の誤り	
格助詞の誤用	ヴォイスによる誤用 （6.3 節）	「ヲ→ガ」	●学習言語への不十分な理解
		「ニ→○」、「ニ→ノ」、「ニ→ガ」	
格助詞の誤＋述部の誤用	ヴォイスに応じた格助詞選択の誤用＋述部の誤用(6.4 節)	「ヲ→ガ」＋述部の誤用	●学習言語への不十分な理解
		「ニ→ハ」＋述部の誤用	●学習言語への不十分な理解 ●母語の負の転移

以下では、１）誤用のパターン、２）誤用の原因の順にまとめていく。

1）誤用のパターン

本研究では、先行研究を踏まえ、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」のパターンの再整理を〈表 8－2〉、〈表 8－3〉、〈表 8－4〉のように行った。

これらのヴォイス表現における「述部の誤用」のパターンは共通しており、ヴォイス形式の有無や混同に関わる「欠如」、「過剰」、「混同」というパターンで誤用が起こる。そのうち、同じ「欠如」、「過剰」でも、受身文、使役文、可能構文においては、それぞれ特有のパターンの誤用が見られる。また、「混同」のパターンでは、受身文と使役文の混同、受身文・使役文と可能構文の混同、受身文・使役文・可能構文と授受文の混同、受身文・使役文と使役受身文の混同が見られる。一方、述部の形そのものが適切ではない「その他」の誤用は受身文と可能構文に見られる。

また、誤用の数からみると、次の〈表 8－5〉（7.1.1.1 節の〈表 7－2〉を再掲）のように、どのヴォイス表現でも「欠如」、「過剰」のパターンが多い。

〈表 8－5〉受身・使役・可能における「述部の誤用」のパターン別の例数

文型	誤用のパターン	誤用例数	
受身文	欠如	379（46.45%）	816（100%）
	過剰	381（46.69%）	
	混同	48（5.88%）	
	その他	8（0.98%）	
使役文	欠如	96（45.93%）	209（100%）
	過剰	79（37.80%）	
	混同	34（16.27%）	
可能構文	欠如	269（39.21%）	686（100%）
	過剰	274（39.94%）	
	混同	66（9.62%）	
	その他	77（11.22%）	

さらに、次の〈表 8－6〉（7.1.1.2 節の〈表 7－5〉を再掲）のように、ヴォイスの諸表現の表している意味から見た「述部の誤用」の分布には、共通して誤用の割合が高い意味用法が見られる。

〈表 8－6〉受身・使役・可能の意味から見た誤用例の分布

文型	意味分類	誤用例数
受身文	状態・属性描写	816 例中 279 例、34.19%
使役文	因果関係	209 例中 170 例、81.34%
可能構文	状況可能	686 例中 654 例、95.34%

〈表 8－6〉のように、受身文においては、「状態・属性描写」を表す非情物主語の受身文の割合が高い。使役文においては、「因果関係」を表す使役文の割合が高い。可能構文においては、「状況可能」を表す可能構文の割合が高い。すなわち、こういった意味のヴォイス表現の「過剰」、「欠如」などの誤用が多発していることになる。

従来の研究であまり詳しく論じられていない受身文、使役文、可能構文における「格助

詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」のパターンは共通して、〈表 8－2〉、〈表 8－3〉、〈表 8－4〉で示しているヴォイス関連の誤用と、意味格などに関わるヴォイス非関連の誤用がある。ヴォイスに関わる誤用のうち、受身文、使役文、可能構文においては、それぞれ正用の助詞別に、様々なパターンが見られる。

２）誤用の原因

次に、本研究では、誤用のパターンをさらに下位分類して、詳しく分析し、それぞれの誤用の原因を明らかにした。

誤用の原因をまとめると、受身文、使役文、可能構文における「述部の誤用」は、〈表 8－2〉、〈表 8－3〉、〈表 8－4〉で示しているように、学習言語（日本語）への不十分な理解、あるいは学習者の母語（中国語）の負の転移により生じていることが分かる。これは、先行研究と一致した結果であるが、本研究では、文や動詞の意味、構文の成立条件などに注目し、今までの研究で詳しく論じられてこなかった、学習者の日本語の受身文の「(ラ) レル」、使役文の「(サ) セル」、可能構文の可能形式の未習得の部分と母語の負の転移のパターンのより詳しい分析を行った。また、〈表 8－2〉、〈表 8－3〉、〈表 8－4〉のように、「欠如」、「過剰」の誤用の原因は、学習言語への不十分な理解と、中国語と日本語の異なる構文特徴により生じる母語の負の転移の両方が見られるが、「混同」、「その他」の誤用は主に、学習言語への不十分な理解に起因していることが明らかになっている。

従来の研究であまり詳しく論じられていない受身文、使役文、可能構文における「格助詞の誤用」、「格助詞の誤用＋述部の誤用」も、その原因まで分析した。その結果、このような誤用では、格助詞「ヲ」「ニ」の誤用は学習言語（日本語）への不十分な理解により起こっているが、述部の誤用を含む例には母語の影響に関わる例も見られることが明らかになった。

④日本語教育への示唆

ここまで明らかにした学習者の誤用の実態と、誤用を防ぐ示唆は、次の〈表 8－7〉のようにまとめられる。

〈表 8－7〉誤用の実態と日本語教育への示唆

誤用の実態	日本語教育における対応（例）
受身文、使役文、可能構文の述部に間違えやすい意味用法がある	教師の工夫（補足資料の準備）や教科書の改善によるインプットの増加、学習者自身の積極的な産出が必要である
ヴォイス表現と自他動詞構文の混用、自他動詞の混同の誤用	ヴォイス表現と自他動詞構文に関する指導を工夫する
ヴォイスの諸表現の間で混同している誤用	ヴォイス表現の間の混同を防ぐための指導を工夫する
日中両言語の異なる構文特徴の影響を受ける誤用	学習者の母語に配慮する指導をする
格と動詞の形態タイプが統一していない誤用	ヴォイス表現における格と述部の形態をはっきり示した指導をする
可能構文の成立条件；異なる可能形式間の混用；受身・使役・可能における格の交替を混乱しているなど	ヴォイス表現のルールを繰り返して訓練するような指導を行う

このように、本研究で明らかになった誤用の実態は、それを踏まえた指導への工夫につながると考えられる。

以上のように、本研究では、幅広い学習者の多様な作文データを材料として、中国語を母語とする日本語学習者の受身文、使役文、可能構文における誤用を調査・分析し、上記の①～④を明らかにした。

従来の研究でも、中国語を母語とする日本語学習者のヴォイスの誤用の実態はある程度明らかになっているが、本研究では、動詞の形態的なタイプの誤用と格助詞の誤用の両面からヴォイスの誤用を捉えた。また、ヴォイス表現の意味と誤用との関係についても見た。さらに、より多くの誤用例から、誤用のパターンを再整理し、今までの研究で詳しく議論されていない母語の負の転移のパターンおよび日本語の未習得の部分の特定をすることと、誤用のパターンと誤用の原因を対応させた分析ができたと言える。

8.2　今後の課題

今後の課題としては、次のような点が挙げられる。

まず、本研究で用いたコーパスは現在未公開のため、データ使用の制約上、学習者の正用例の確認ができなかった。学習者の誤用の実態をより詳しく分析するためには、学習者がすでに習得している部分、正用と誤用の比率などの調査・分析を行う必要がある。これは、コーパスの公開後の課題にしたい。

次に、本研究で用いたデータの制約上、誤用例の分析が誤用タグに基づく分析に限定された。迫田（2002:83）は、「第一言語と第二言語のある言語項目の構造や使い方に違いがある場合（中略）、第二言語を使用する際にその違いのある項目を使用しない現象」である、「回避」による言語項目の不使用を指摘しているが、このような「回避」の例は検討ができなかった。この点についても、今後の課題となる。

また、本研究で用いたコーパスは規模が比較的に大きいものであるが、ヴォイスに関わる現象の誤用例数は限られており、学習歴別に分けると誤用の傾向が見えなくなってしまうため、本研究では学習歴別の分析を行うことができなかった。今後、コーパスのバージョンアップに伴い、ヴォイスに関わる現象の誤用例数が増えていけば、学習歴別の分析ができるようになると考えられる。この点も今後の課題にしたい。

さらに、本研究の調査結果の一般化の検証のために、今後ほかの学習者コーパスの調査・分析も行っていきたいと考えている。

言語資料

①使用した言語資料

于康（2015)『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コーパス 2015』Ver.5
北京日本学研究センター（2003)『中日対訳コーパス第一版（CD－R1)』

②参照した言語資料

金澤裕之（2014)『日本語教育のためのタスク別書き言葉コーパス』、ひつじ書房
国立国語研究所（2009)「日本語学習者による，日本語・母語対照データベース」
(http://contr-db.ninjal.ac.jp/essay_01.html)
「自然言語処理の技術を利用したタグ付き学習者作文コーパスの開発」科研グループ
(2013)「日本語学習者作文コーパス」(http://sakubun.jpn.org/)
台湾東呉大学外語学院日本語文学系（ 2011)「學術活動－LARP at SCU」
(http://web-ch.scu.edu.tw/japanese/web_page/3936)
寺村秀夫（1990)『外国人学習者の日本語誤用例集』(大阪大学；PDF 版、国立国語研究所、2011 年 http://teramuradb.ninjal.ac.jp/db/)
東京外国語大学（2009)「日本語学習者言語コーパス」
(http://cblle.tufs.ac.jp/llc/ja/search.php?menulang=ja)
望月圭子（2009)「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析―中国語との対照から―」『東京外国語大学論集』78、pp.85-106、東京外国語大学

参考文献

赤地とも子（2004)「中国人日本語学習者の使役表現の習得について」『日本語教育論集』13、pp.25-33、姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育領域
猪崎保子（1994)「日本語学習者の作文にみられるヴォイス・テンス・アスペクト・ムードの習得:ケース・スタディ」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』20、pp.197-215、東京外国語大学留学生日本語教育センター
市川保子（1991)「可能動詞の助詞に関する一考察」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』6、pp.1-17、筑波大学留学生教育センター
市川保子（1997)『日本語誤用例文小辞典』、凡人社
市川保子（2010)『日本語誤用辞典』、スリーエーネットワーク
王其莉（2016)『判断のモダリティに関する日中対照研究』、ひつじ書房
大槻文彦（1891)『言海』、大槻文庫（1956 冨山房より新訂）
影山太郎（2006)「日本語受身文の統語構造―モジュール形態論からのアプローチ―」『レ

キシコンフォーラム No. 2』、pp. 179-231、ひつじ書房
金井保三（1901）『日本俗語文典』、宝永館
金俸呈（2012）「言語活動を伴う事柄を表す動詞の人主語受身文について―主語と補語との意味的な関連性という観点から―」『東京外国語大学日本研究教育年報』16、pp. 45-58、東京外国語大学日本課程
小泉保・船城道雄・本田晶治・仁田義雄・塚本秀樹（1989）『日本語基本動詞用法辞典』、大修館書店
顧海根・徐昌華（1980）「中国人学習者によく見られる誤用例―疑問詞用法と受身文を中心に―」『日本語教育』41、pp. 47-60、日本語教育学会
胡君平（2016）「台湾人学習者による日本語使役文の用法別の使用実態―LARP at SCU の分析結果から―」『日本語教育』163、pp. 95-103、日本語教育学会
迫田久美子（2002）『日本語教育に生かす第二言語習得研究』、アルク
佐治圭三（1992）『外国人が間違えやすい日本語の表現の研究』、ひつじ書房
佐藤里美（1986）「使役構造の文―人間の人間に対するはたらきかけを表現するばあい―」言語学研究会編『ことばの科学 1』、pp. 89-179、むぎ書房
佐藤里美（1990）「使役構造の文（2）―因果関係を表現するばあい―」言語学研究会編『ことばの科学 4』、pp. 103-157、むぎ書房
志波彩子（2015）『現代日本語の受身構文タイプとテクストジャンル』、和泉書院
渋谷勝己（1993）「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1、大阪大学
杉本武（1991）「ニ格をとる自動詞―準他動詞と受動詞―」、仁田義雄『日本語のヴォイスと他動性』、pp. 233-250、くろしお出版
曹娜（2011）「中国語を母語とする中上級日本語学習者の受身形の使用状況：書き言葉コーパスにおける誤用と回避に注目して」『学校教育学研究論集』23、pp. 55-65、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科
田中真理（1999）「OPI における日本語のヴォイスの習得状況：英語・韓国語・中国語話者の場合」カッケンブッシュ・寛子研究代表『第 2 言語としての日本語の習得に関する総合研究（平成 8 年度～平成 10 年度科学研究費補助金研究成果報告書）』、pp. 335-350
寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』、くろしお出版
中島悦子（2007）『日中対照研究ヴォイス―自・他の対応・受身・使役・可能・自発―』、おうふう
仁田義雄（1981）「態（ヴォイス）」、北原保雄・鈴木丹士郎・武田孝・増淵恒吉・山口佳紀『日本文法事典』、pp. 110-114、有精堂
日本語記述文法研究会（2009）『現代日本語文法 2―第 3 部 格と構文・第 4 部 ヴォイス―』、くろしお出版
早津恵美子（2000）「現代日本語のヴォイスをめぐって」『日本語学』19（5）、pp. 16-27、明治書院
馮富栄（1999）『日本語学習における母語の影響―中国人を対象として―』、風間書房
封小芹（2005）「可能の意味を含む有対自動詞の産出的能力の習得―中国語を母語とする学習者を対象にした調査に基づいて―」『ことばの科学』18、pp. 143-162、名古屋大学言語文化研究会
米麗英・米麗萍（2009）「日本語の受身を学習する際の落とし穴―中国語を母語とする人の場合―」、pp. 31-43、『徳島大学国語国文学』22、徳島大学国語国文学会
益岡隆志（1987）『命題の文法―日本語文法序説―』、くろしお出版
村木新次郎（1991）『日本語動詞の諸相』、ひつじ書房
望月圭子（2009）「中国語を母語とする上級日本語学習者によるヴォイスの誤用分析―中国

語との対照から―」『東京外国語大学論集』78、pp. 85-106、東京外国語大学
森田良行（2002）『日本語文法の発想』、ひつじ書房
山岡政紀（2003）「可能動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』13、pp. 1-36、創価大学日本語日本文学会
山口明穂・秋本守英（2001）『日本語文法大辞典』、明治書院
山田勇人（2014）「日本語における再帰構文の他動性に関する一考察―自他同形漢語動詞の分析を通して―」『言語と文化』8、pp. 77-85、京都外国語大学大学院外国語学研究科
林青樺（2009）『現代日本語におけるヴォイスの諸相―事象のあり方と関わりから―』、くろしお出版

王忻（2008）『中国日语学习者偏误分析（新版）』、外语教学与研究出版社

既発表論文、口頭発表との関係

第 1 章～第 3 章

新規執筆

第 4 章

王辰寧（2015）「中国語を母語とする日本語学習者の格助詞「ヲ」「ニ」の誤用について―受身文と使役文における誤用を中心に―」2015 年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム、2015 年 8 月 26 日、於北京第二外国語学院

王辰寧（2016b）「中国語を母語とする日本語学習者の格助詞「ヲ」「ニ」の誤用について―受身文と使役文における誤用の分析―」日语偏误与日语教学研究会编『日语偏误与日语教学研究』1、pp. 67-80、浙江工商大学出版社（王 2015 を論文化したもの）

王辰寧（2017a）「中国語を母語とする日本語学習者の受身文の誤用分析―作文コーパスをデータとして―」『熊本大学社会文化研究』15、pp. 105-121、熊本大学大学院社会文化科学研究科

第 5 章

王辰寧（2015）「中国語を母語とする日本語学習者の格助詞「ヲ」「ニ」の誤用について―受身文と使役文における誤用を中心に―」2015 年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム、2015 年 8 月 26 日、於北京第二外国語学院

王辰寧（2016a）「中国語を母語とする日本語学習者の使役文の誤用分析―作文コーパスをデータとして―」『熊本大学社会文化研究』14、pp. 77-91、熊本大学大学院社会文化科学研究科

王辰寧（2016b）「中国語を母語とする日本語学習者の格助詞「ヲ」「ニ」の誤用について―受身文と使役文における誤用の分析―」日语偏误与日语教学研究会编『日语偏误与日语教学研究』1、pp. 67-80、浙江工商大学出版社

第 6 章

王辰寧（2016）「中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用分析―作文コーパスをデータとして―」2016 年日本語の誤用及び第二言語習得研究国際シンポジウム、2016 年 8 月 7 日、於中国人民大学

王辰寧（2017b）「中国語を母語とする日本語学習者の可能構文の誤用分析―作文コーパスをデータとして―」『ありあけ　熊本大学言語学論集』16、pp. 67-90、熊本大学文学部言語学研究室（王 2016 を論文化したもの）

第 7 章～第 8 章

新規執筆